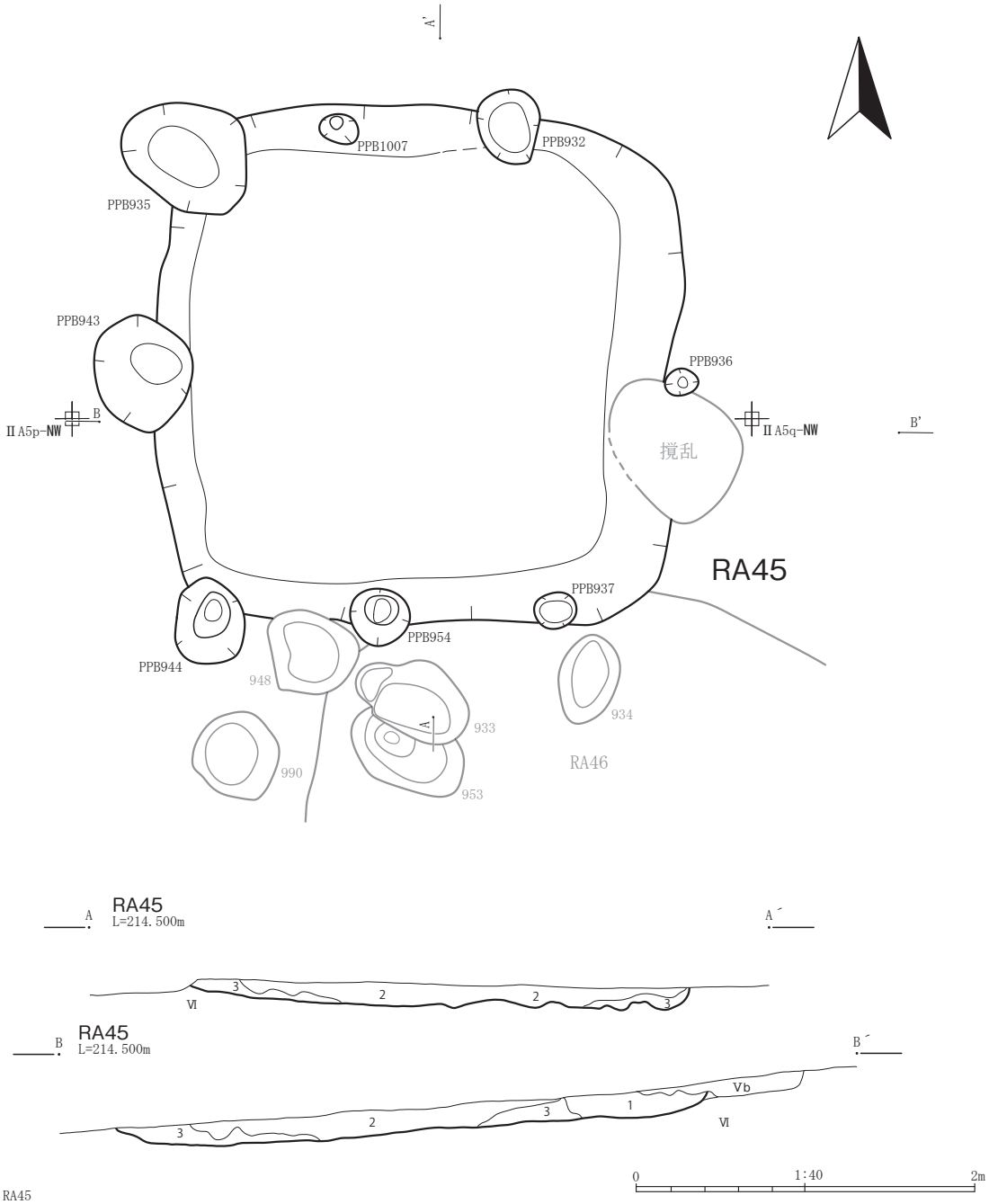
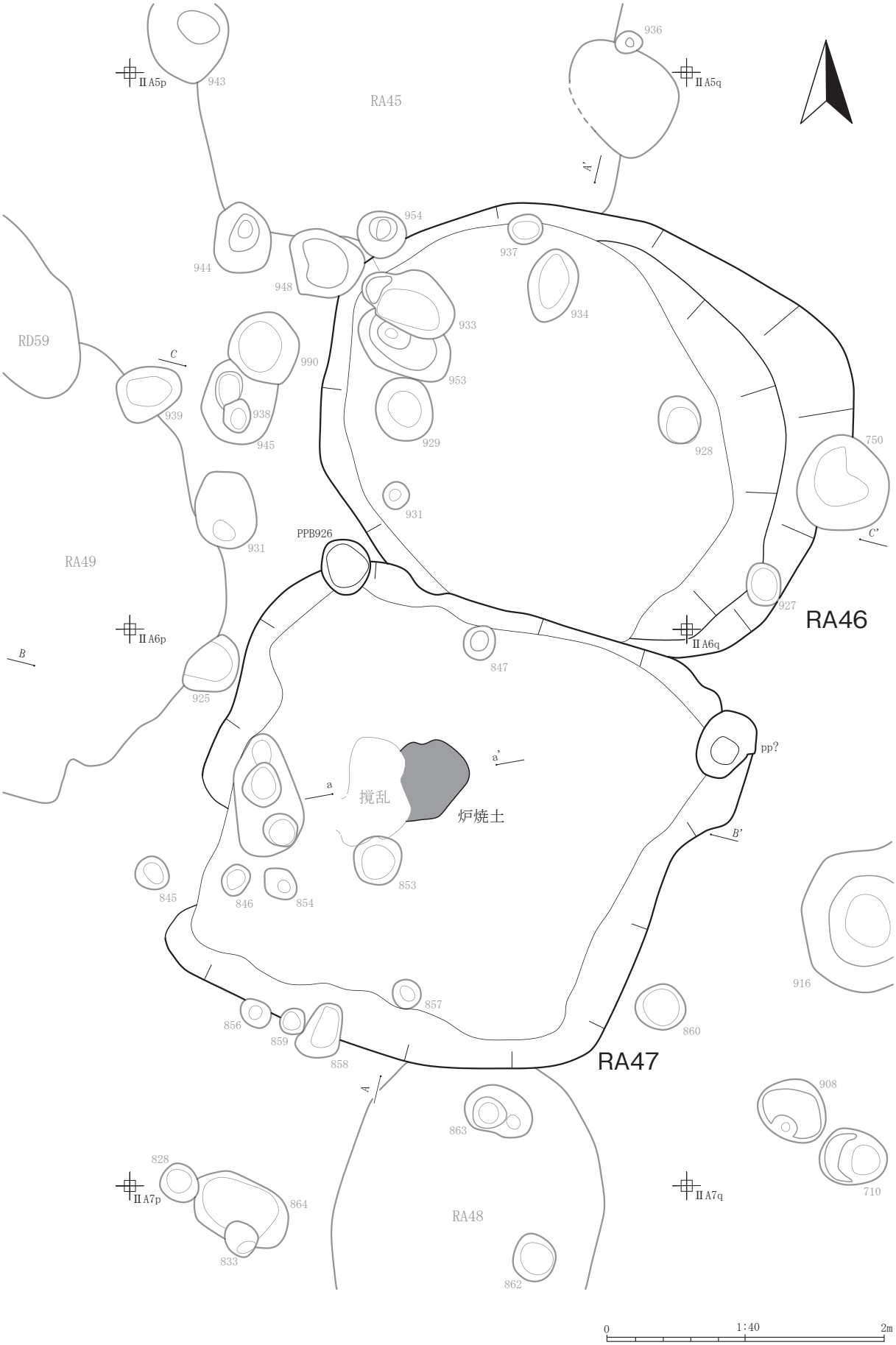
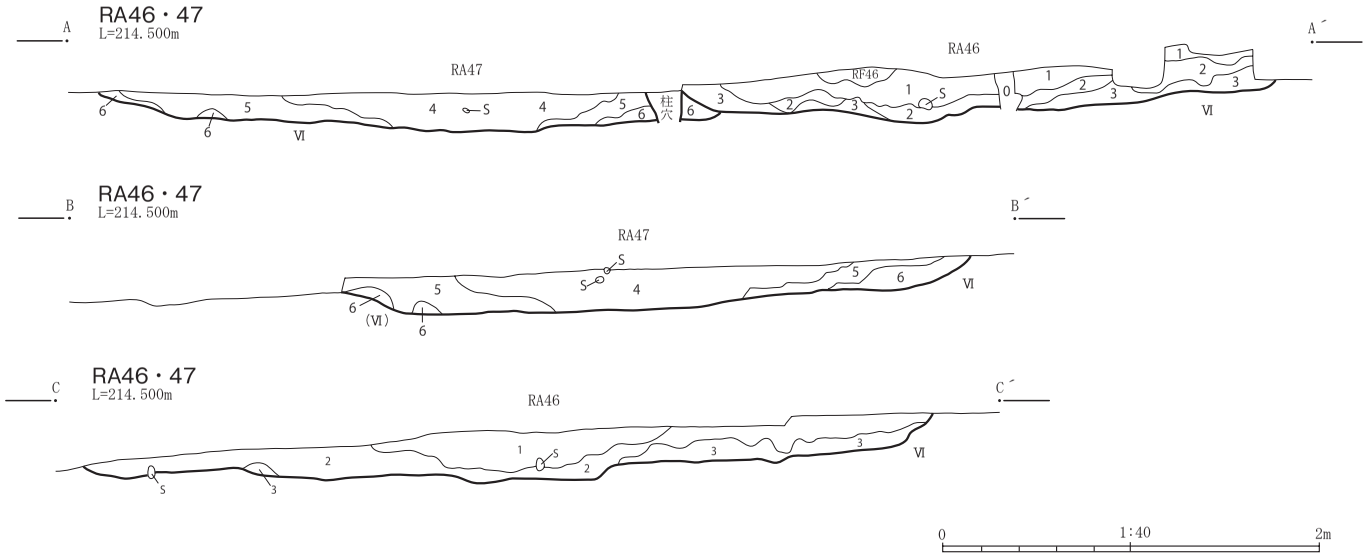


RA45
1．撹乱
2．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．Ⅵ層塊５～７%．Ⅴb 層主体．全体的にレンズ状に堆積し自然の可能性高い．
3．10YR4/6 褐色．シルト．粘性中．締まりやや密．Ⅵ層主体の地山流入土層（YP を多く含む）．Ⅴb 層小塊５～７%．地山と比べるとやわらかい．やや暗い．堆積土は時間をおくと暗くなる．この特徴はほかの早期住居にもみられる．

第84図　RA45


RA45
RA46
RA47
RA48
RA49
RD59
PPB926
pp?
撹乱
炉焼土
ⅡA5p
ⅡA5q
ⅡA6p
ⅡA6q
ⅡA7p
ⅡA7q
936
943
954
937
944
948
934
933
990
953
939
938
945
929
928
750
931
931
927
847
925
845
846
854
853
857
856
859
858
860
916
863
908
710
828
864
833
862
A
A'
B
B'
C
C'
a
a'
0
1:40
2m

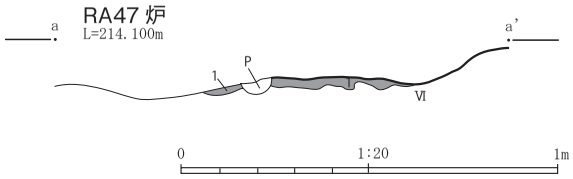
第85図　RA46・47



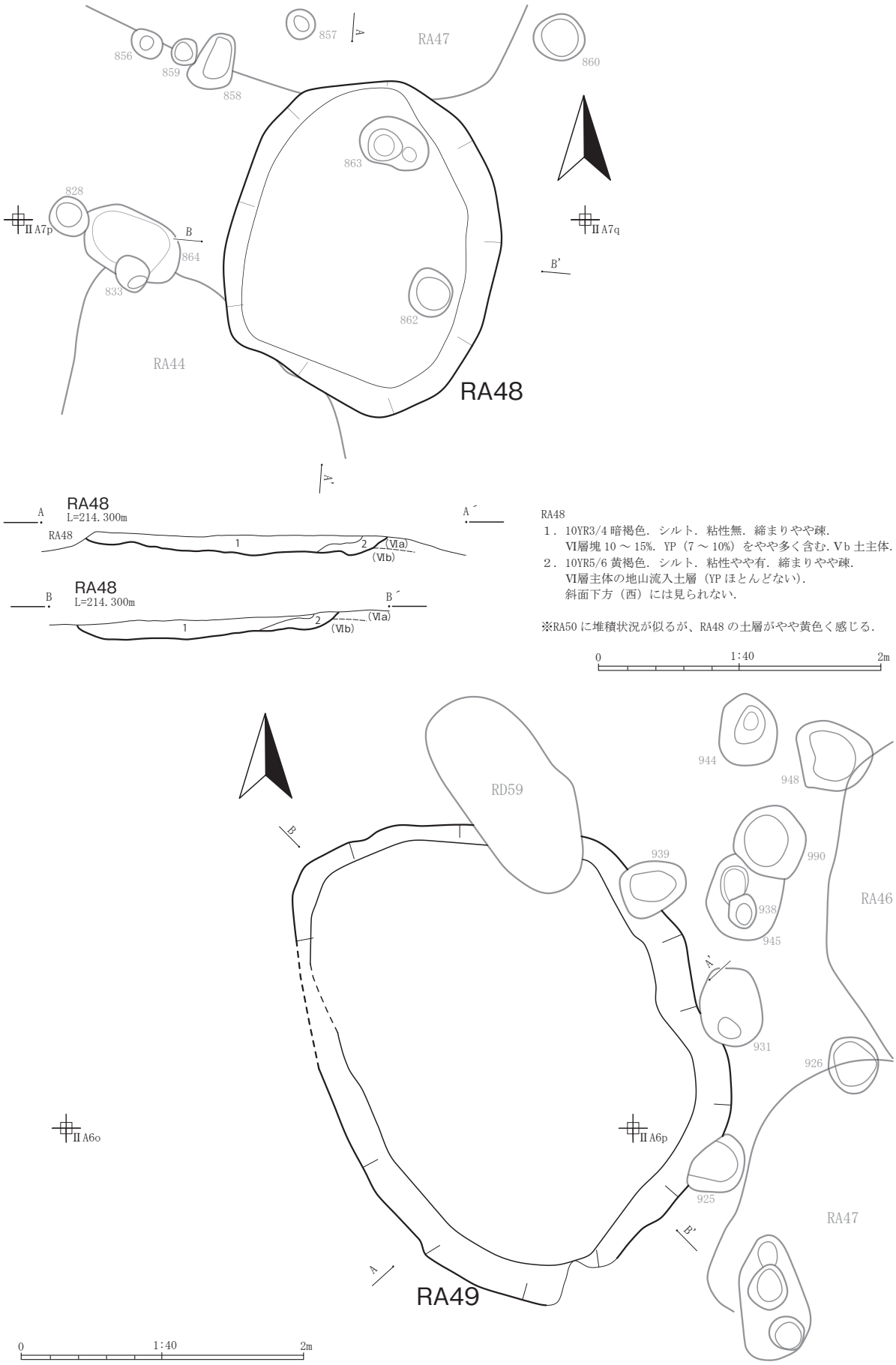
第86図　RA46・47断面

RA46・47
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．Ⅵ層塊７～10%（YP3%）．炭化物粒 1%．径２～３㎜の小礫２～3%（Ⅴb 層主体）．
２．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．１層よりは黄色味が強く明るい．Ⅴb 層塊 20～30%．YP１層よりは多い．Ⅵ層主体だが、Ⅴb 層が多く混入する．
３．10YR4/6-5/6 褐－黄褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Ⅵ層主体の初期流入土（地山流入土）．一瞬地山と思われる土壌で時間がたつと暗くなり掘れる土となる．YP3～5%．斜面上方（東）ほど厚くなる．
４．7.5 YR3/2 黒褐色．シルト．粘性やや無．締まりやや疎．黒味の強いⅤb 層主体．YP の混入は１～2%と少ない．炭化物粒 1%．主体的な堆積土で中央部では床面直上まで及ぶ．
５．7.5 YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．Ⅵ層塊 10～15%（YP3～5%）．南側では４に似るがⅥ層塊が多い．（Ⅴb 層主体）．
６．10YR5/8 黄褐色．シルト．粘性中．締まり密．Ⅵa 層主体の地山流入土層．掘削時の特徴は３層（RA46）と同じ．

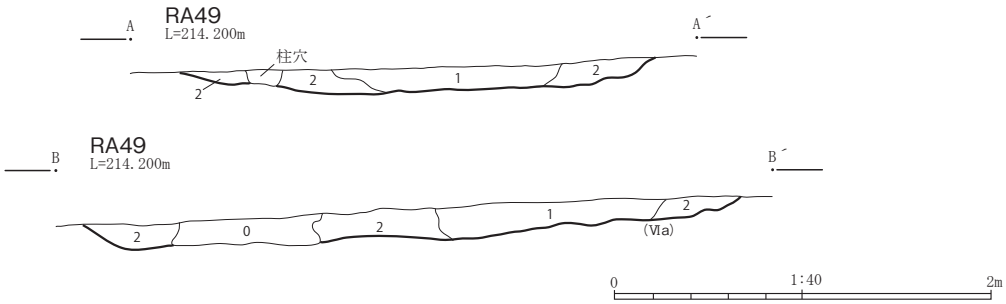
※１～３：RA46．４～６：RA47．



RA47 炉
１．5YR5/8 明赤褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．被熱層．（Ⅵ層被熱）．

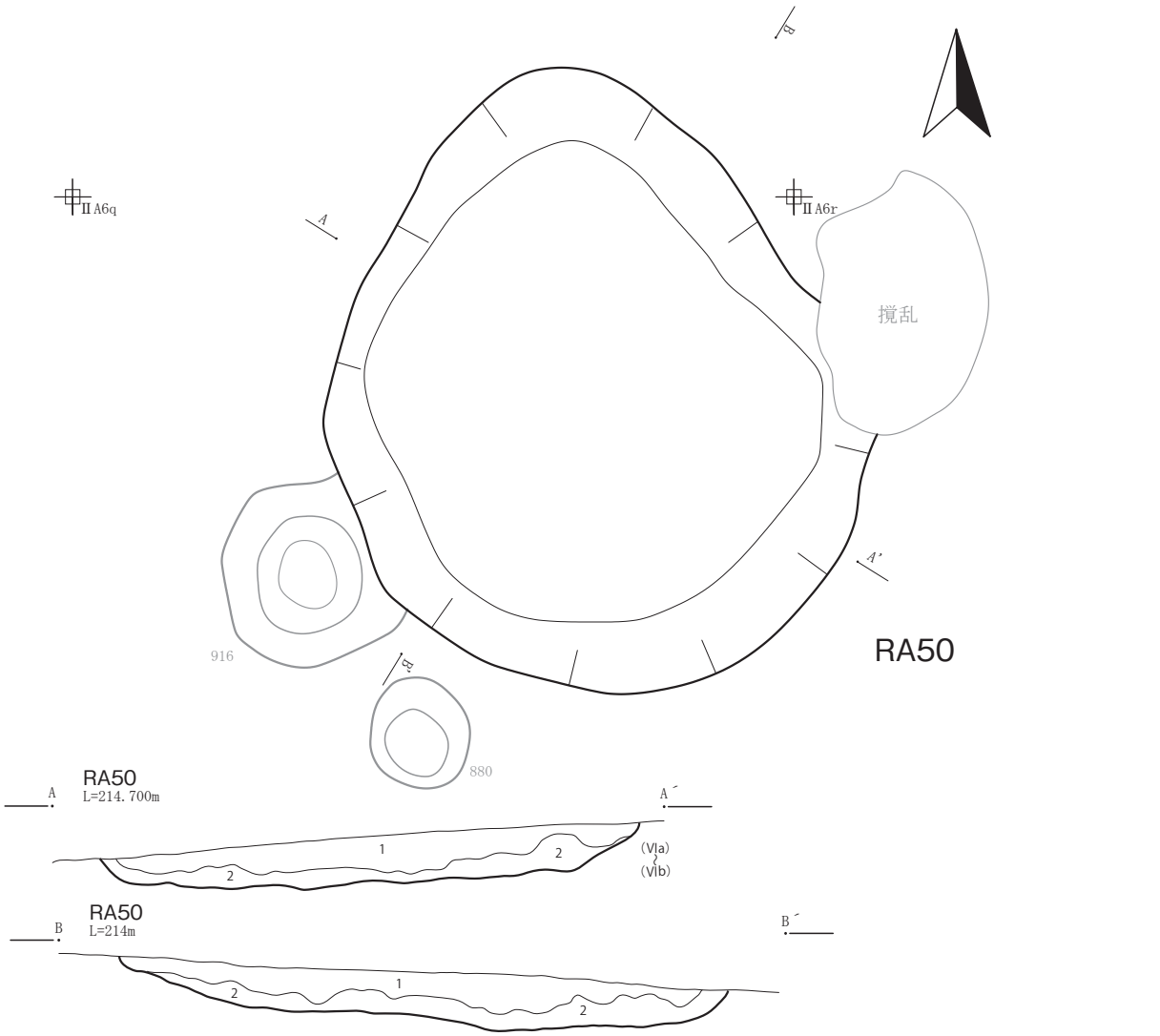


第87図　RA48、RA49平面



RA49
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．炭化物粒 1%．凝灰岩小粒 3 ～ 5%．黒褐色シルト塊 10%．YP 少量．
　Ⅴb 層主体．RD55 の 1 層に似るか．
２．10YR4/6 褐色．シルト．粘性無．締まりやや疎．Ⅵ層主体の地山流入土層．
　床面のⅥ層と比較すると YP が少なくやわらかい．また、少し時間をおくと暗くなる．黒褐色シルト塊 5 ～ 7%．

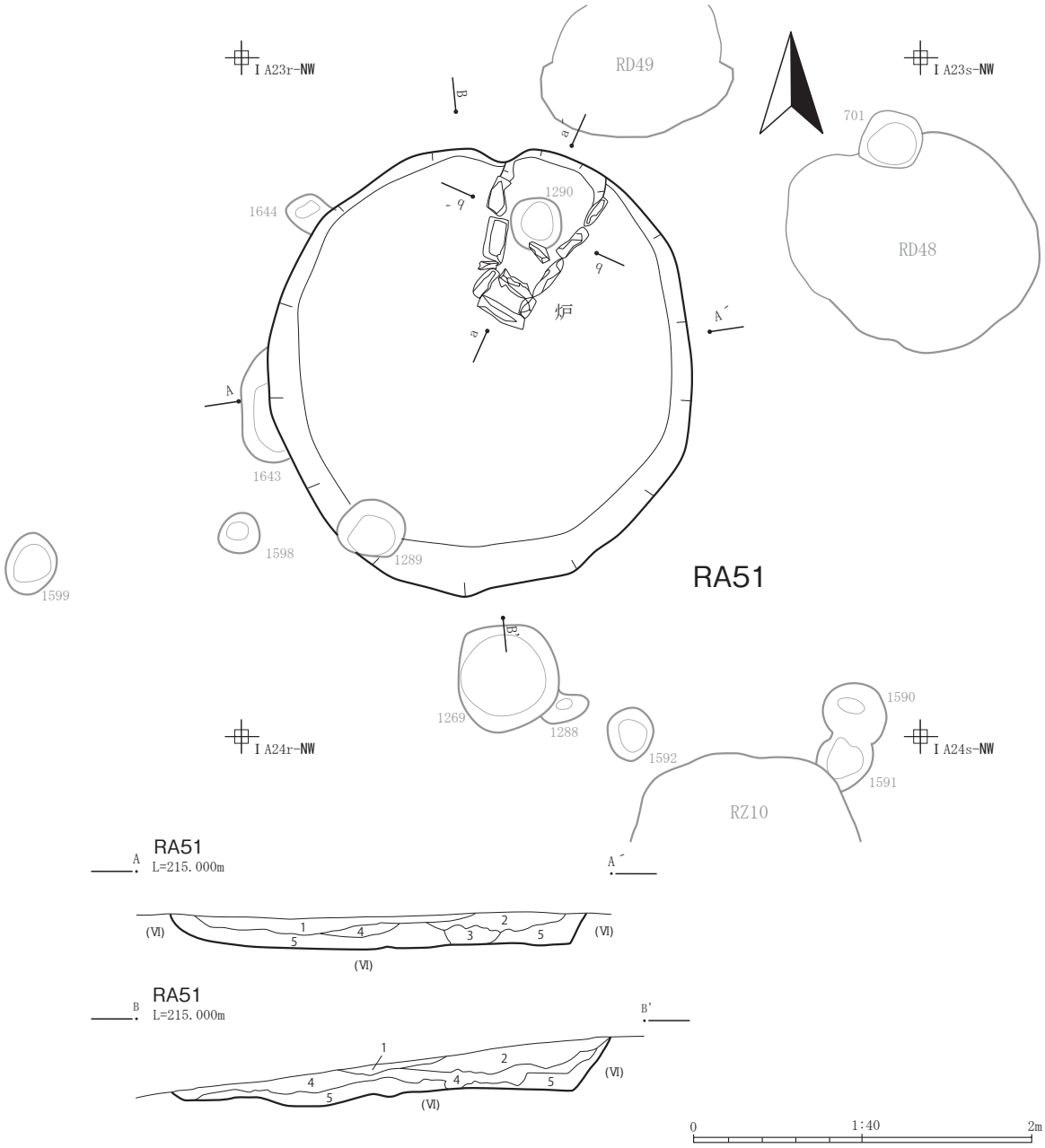
※全体としては褐～黄褐色シルトで埋没し、中央東側の浅く凹んだところにⅤb 層主体の暗褐色シルトが堆積．



RA50
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無．締まり疎．Ⅵ層塊 20%．Ⅴb 層主体．YP（7 ～ 10%）を多く含む．黒褐色シルト塊 7 ～ 10%．再堆積層か非常にモソモソしている．
２．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性無．締まりやや疎．Ⅵ(a ～ b）層の地山流入土層．YP1 ～ 2%．暗褐色シルト塊 7 ～ 10%．

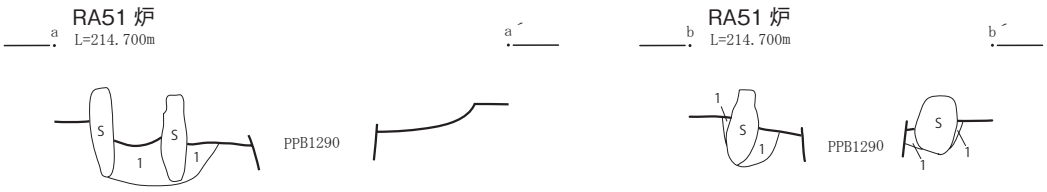
※床は部分的にソフトな場所があるが、壁はⅥ層で固くしまっておりしっかり立ち上がる．

第88図　RA49断面・RA50



RA51
1．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや弱．締まりやや密．乾きやすい．
2．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや弱．締まりやや密．１・４より明るい.Ⅳ層土又は濁ったⅥ層土か.
3．10YR3/4 暗褐色．シルト．２に似るが、より明るい．
4．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まり密.Ⅵ層土ブロックやや多.
5．10YR3/4 暗褐色．シルト．２に似る.Ⅵ層土ブロック層.

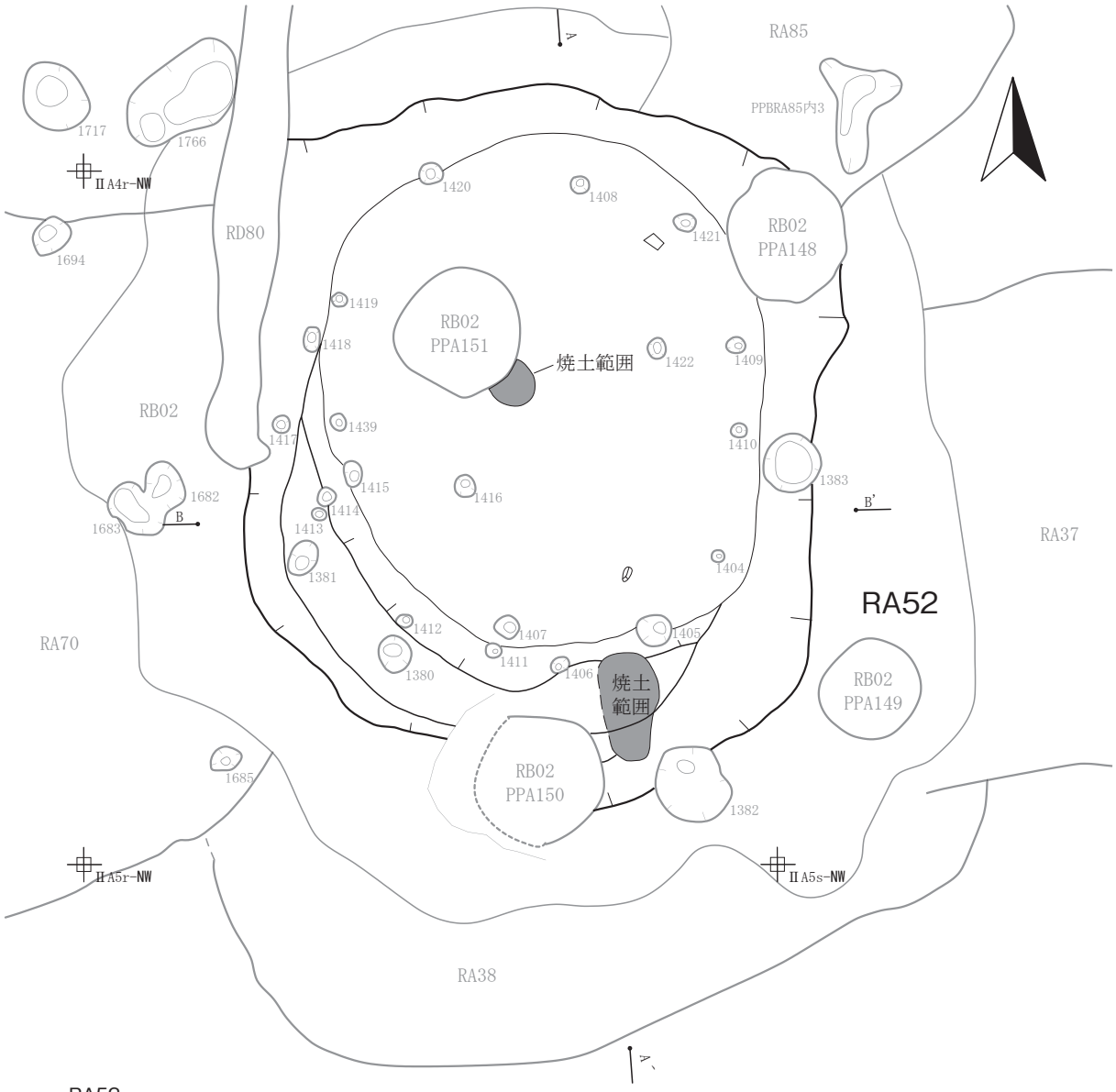
※斜面下方（北側）の壁は流失．南・東壁は外傾・直線的な立ち上がりのこす．北東部に壁に接する複式炉もつ．礫は被熱赤変．
平面形は略円形．床面は平坦だが中央部（炉付近）に凹部もつ．出土遺物は早期土器小片のみだが、埋土は中期末～後期初のそれに似る．
炉の形態・埋土主体土から帰属時期は中期末葉と推定．

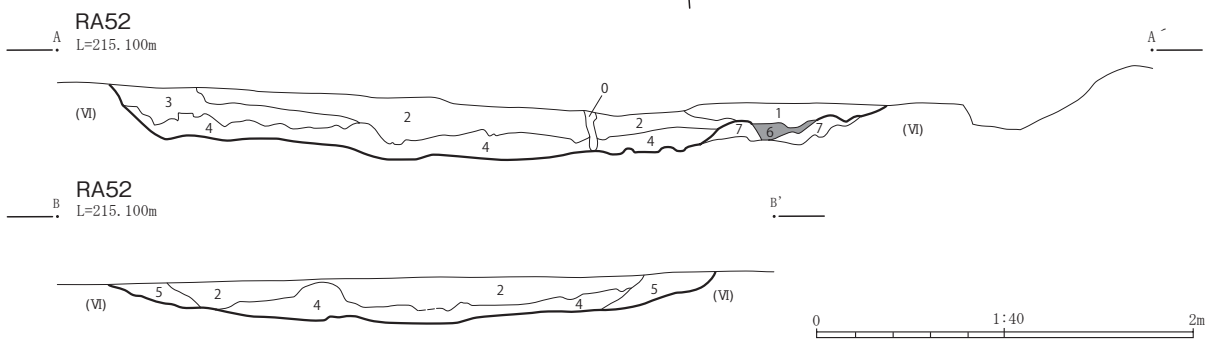


RA51 炉
1．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．礫掘方埋土.Ⅵ層土ブロック少.

0　1:20　1m

第89図　RA51

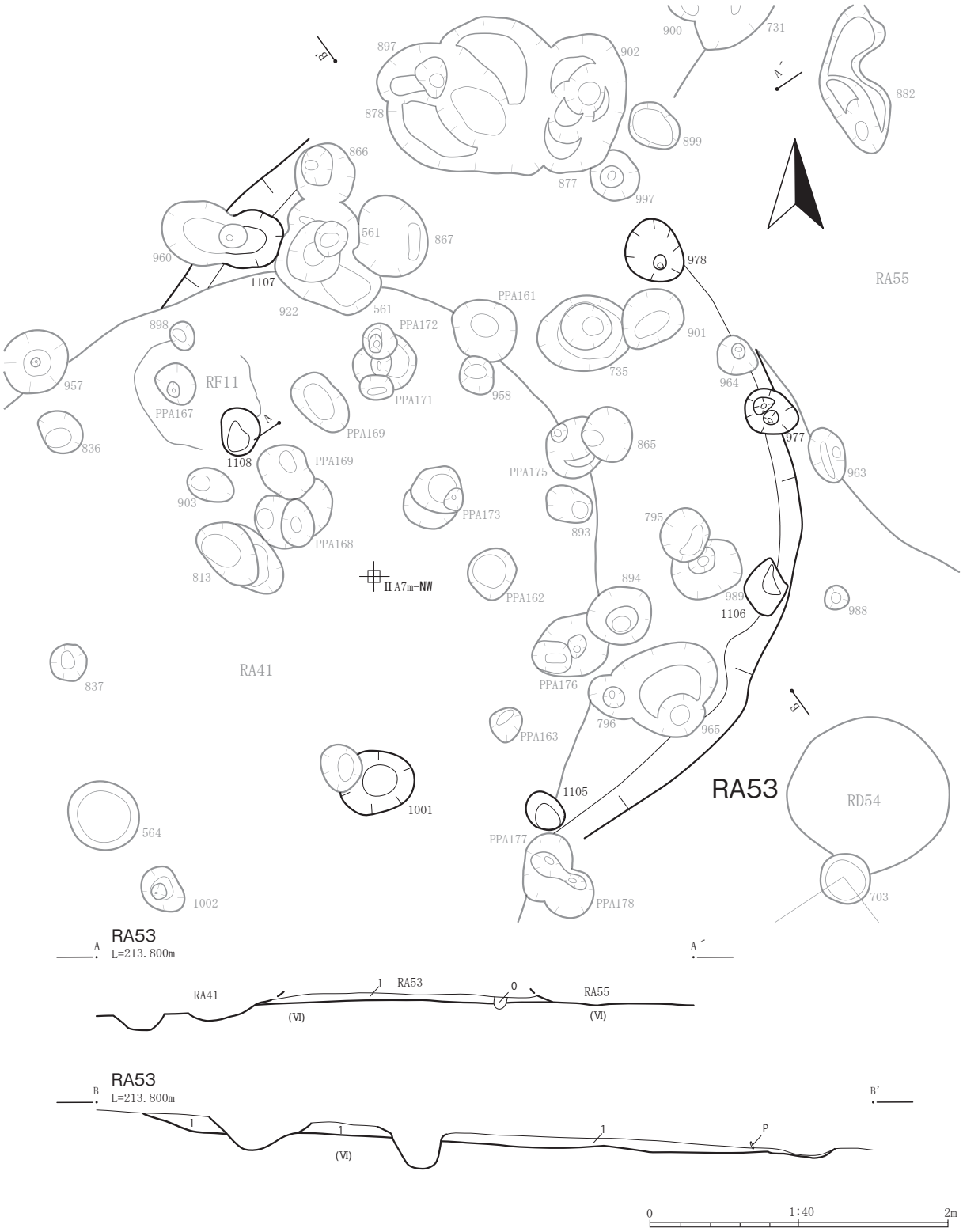




RA52
０．根攪乱
１．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．
２．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．YP 細片微量含む．４に似るが４より明るい．
３．10YR4/4 褐色．シルト．YP 細片極微．１に似る．
４．10YR3/3 暗褐色．シルト．YP 細片微量．埋土中で最も黒っぽい．底面直上に接する床面中央部（最低部）付近で黒味強．粘性やや有．締まり密．
５．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．YP 細片少量．粘性やや有．締まり密．
６．7.5YR4/4 褐色．シルト．７の被熱部．焼土は弱変．被熱度弱い？　粘性やや有．締まり密．
７．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．５によく似る．

※平面形は不整な隅丸方形．底面は中央部が深く、壁に向かって緩やかに高まり、外傾内湾して立ち上がる壁面に連続する．
北壁・東壁が比較的残りが良いが南壁・西壁は重複遺構があるために乱されている．完掘形状では南側壁に一段高い張り出し部をもつ．張り出し部の中央付近には焼土の生成が認められる．焼土は竪穴本体のプラン外（南側壁の肩）に位置する．７層上面に生成するが、７層自体が廃絶後の堆積層である可能性有．従って居住時点での生成ではなく、廃絶時、又はその後の段階の燃焼行為かもしれない．

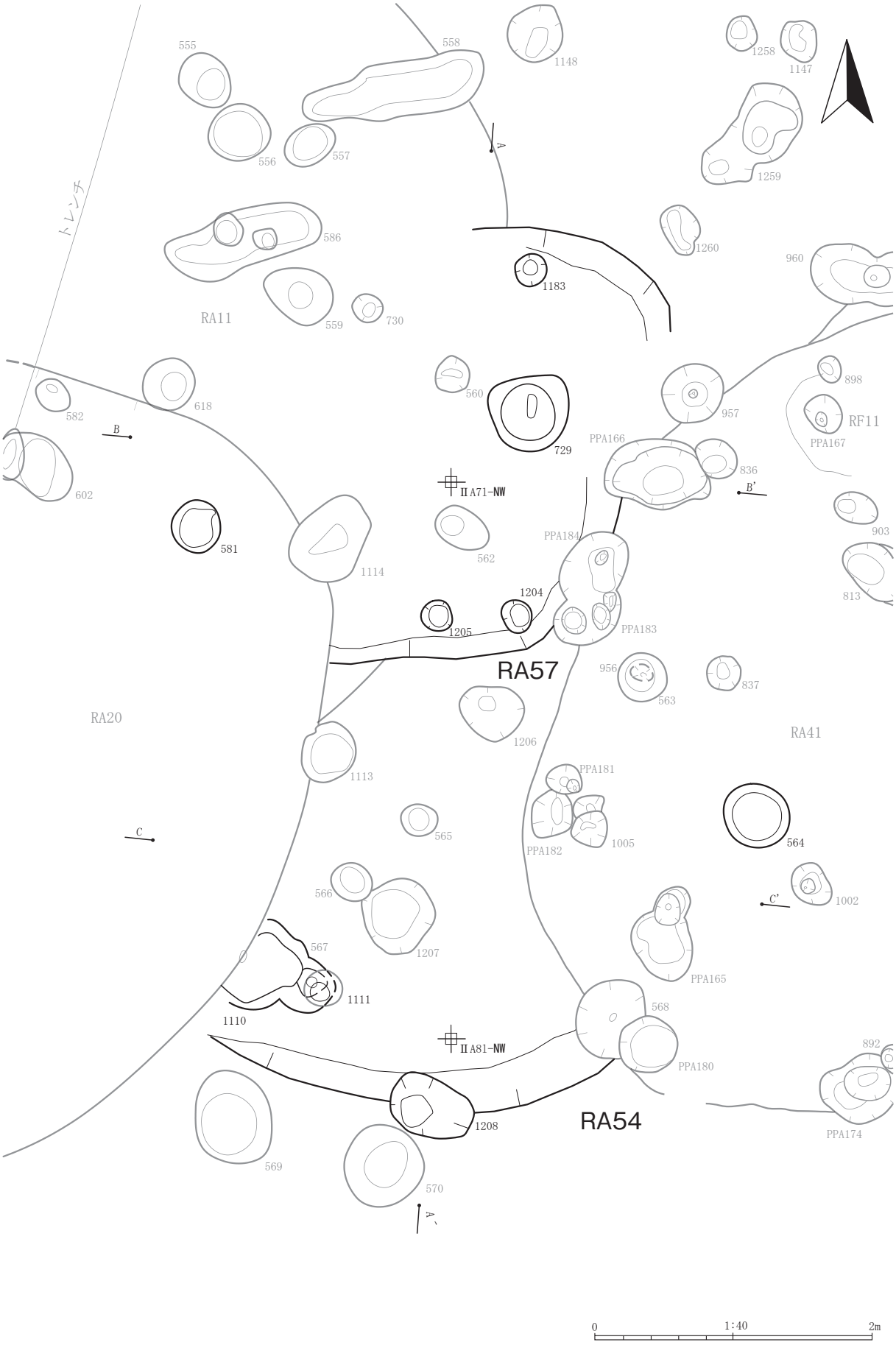
第90図　RA52



RA53
０．根攪乱．
１．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性弱．締まりやや密．YP 細片微量含む．

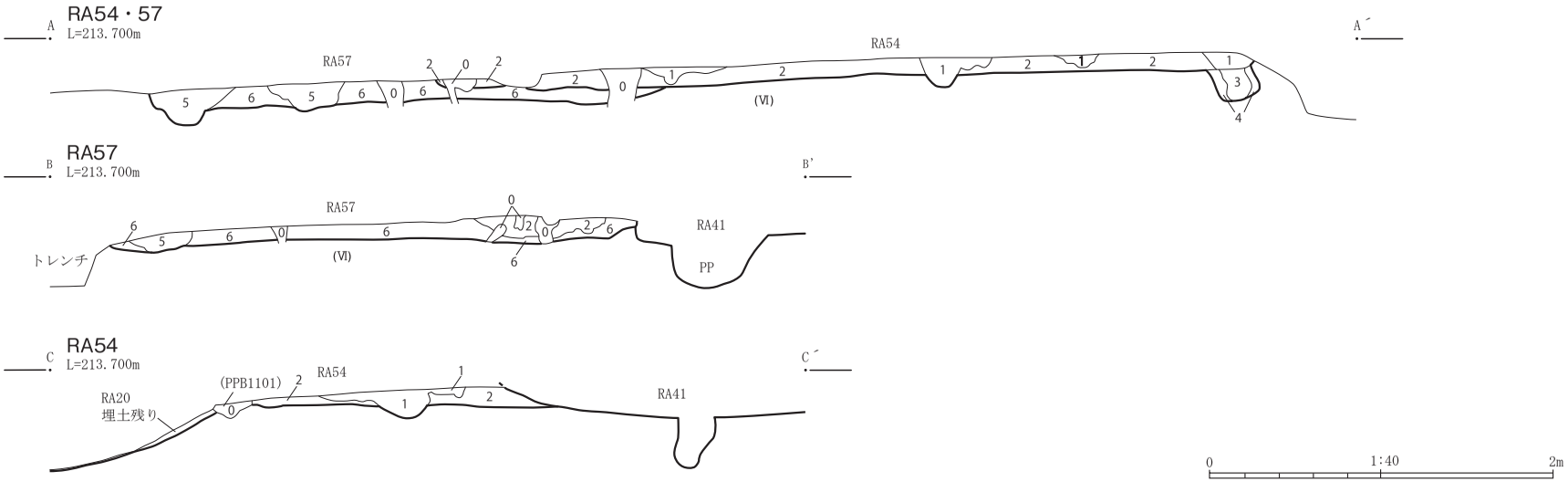
※H22 調査で精査の早期住居同士の間に位置する．Ⅵ層下部の YP 含む層が底面となる．埋土に含まれる YP 片はⅥ層下部のそれに比して細かく、少ない．B-B’右側（北側）で床面が低くなっているが、この付近（北壁際）には複数の PIT 状の落ち込みが重複しており、本来の床面が乱されているものとおもわれる．H22 年度に精査済みの PIT に加え、PPB1105 ～ 1108 等が壁柱穴として伴う可能性高い．

第91図　RA53



0　1:40　2m

第92図　RA54・57平面

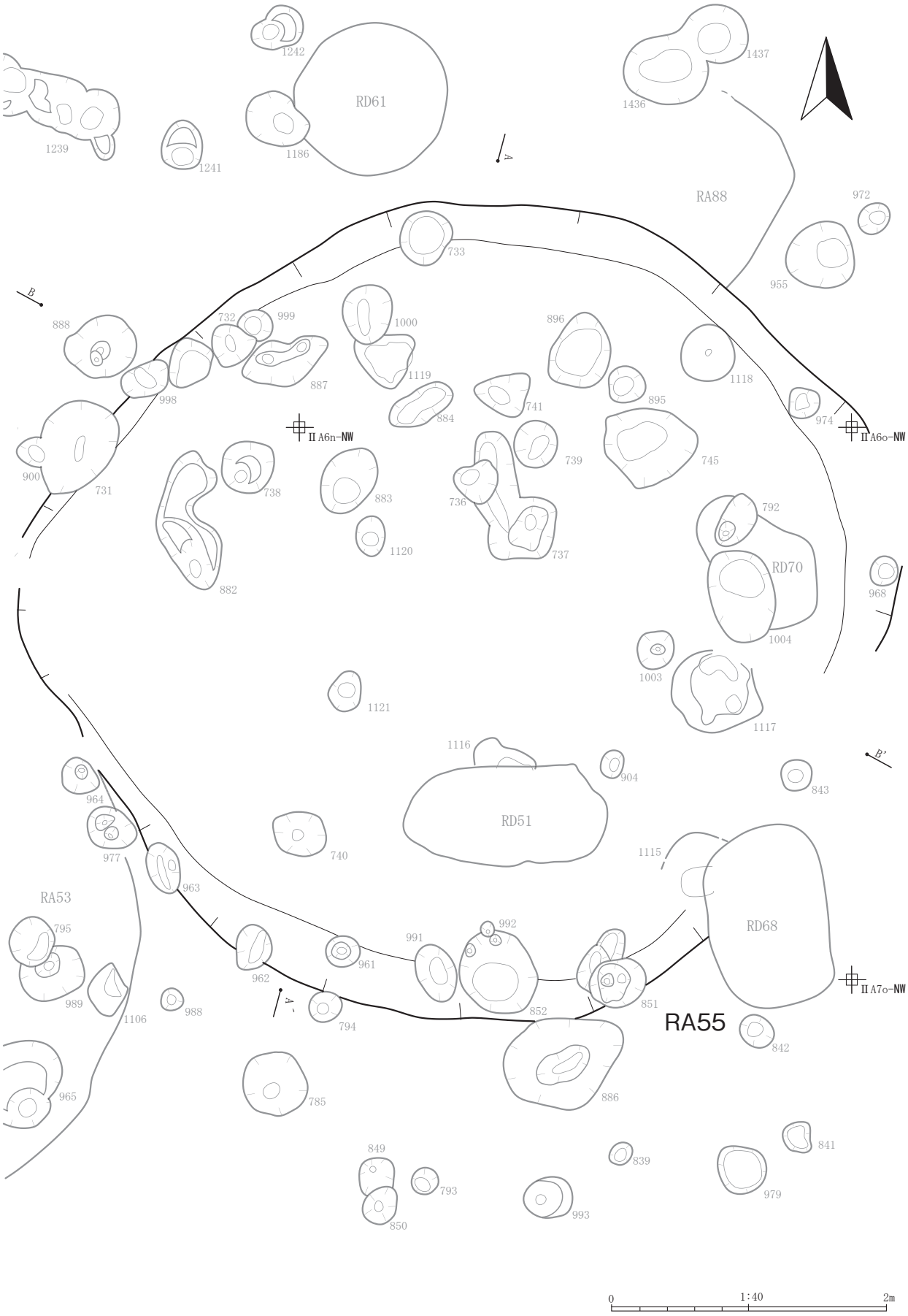


第93図　RA54・57断面

RA54・57
A-A'～C-C' 共通
1．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．Va 相当．
2．10YR4/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．YP 細片極微．Vb 類似．
3．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 小片微．柱痕？
4．10YR4/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．2 に似るが締まり密．柱穴掘方埋土？
5．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まり密．
6．10YR4/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．2 に比して明るい．Vb 相当か．
※RA20・RA41 の間に位置する．新旧関係は、(RA20・RA41)＞RA54＞RA57．1～4：RA54．5・6：RA57．3・4 は内傾する柱穴埋土か．

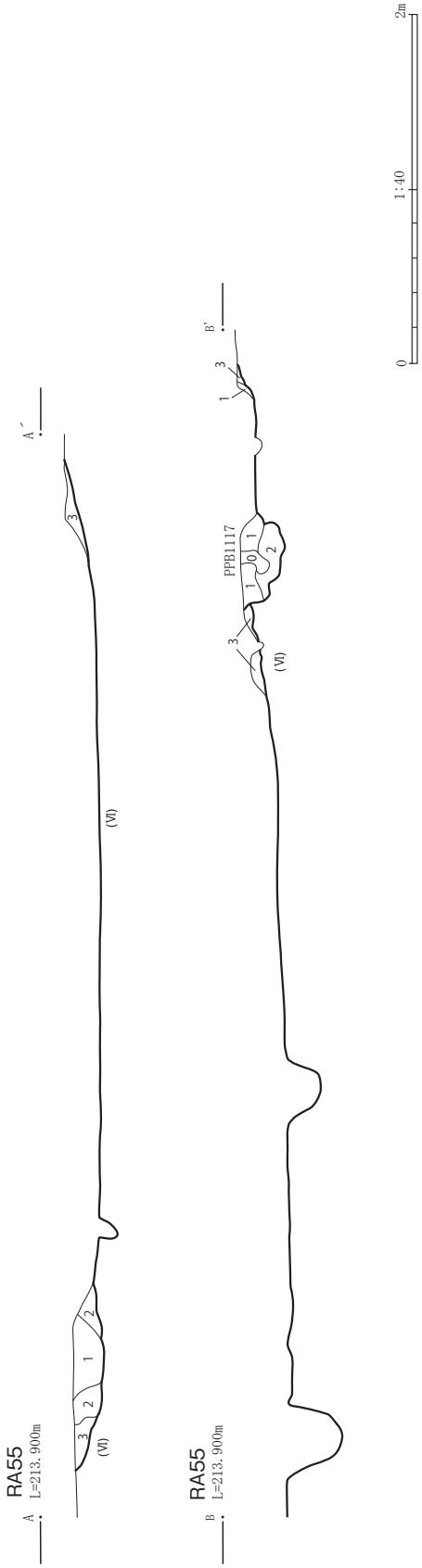
RA54
平面形は円～楕円か．西部は過年度調査により削平され失われている．
床面平坦、壁は内湾外傾（南側のみ残存．RA57 との重複部は認識できなかった）．
柱穴は PPB1110・1111・1208 及び H22 年度検出柱穴の一部が壁直下にめぐるものと見られる．

RA57
平面形は不整だが、柱穴配置等から方形基調の可能性高い．床面は概ね平坦に整う．
柱穴は壁際への集中が認められる．



0　1:40　2m

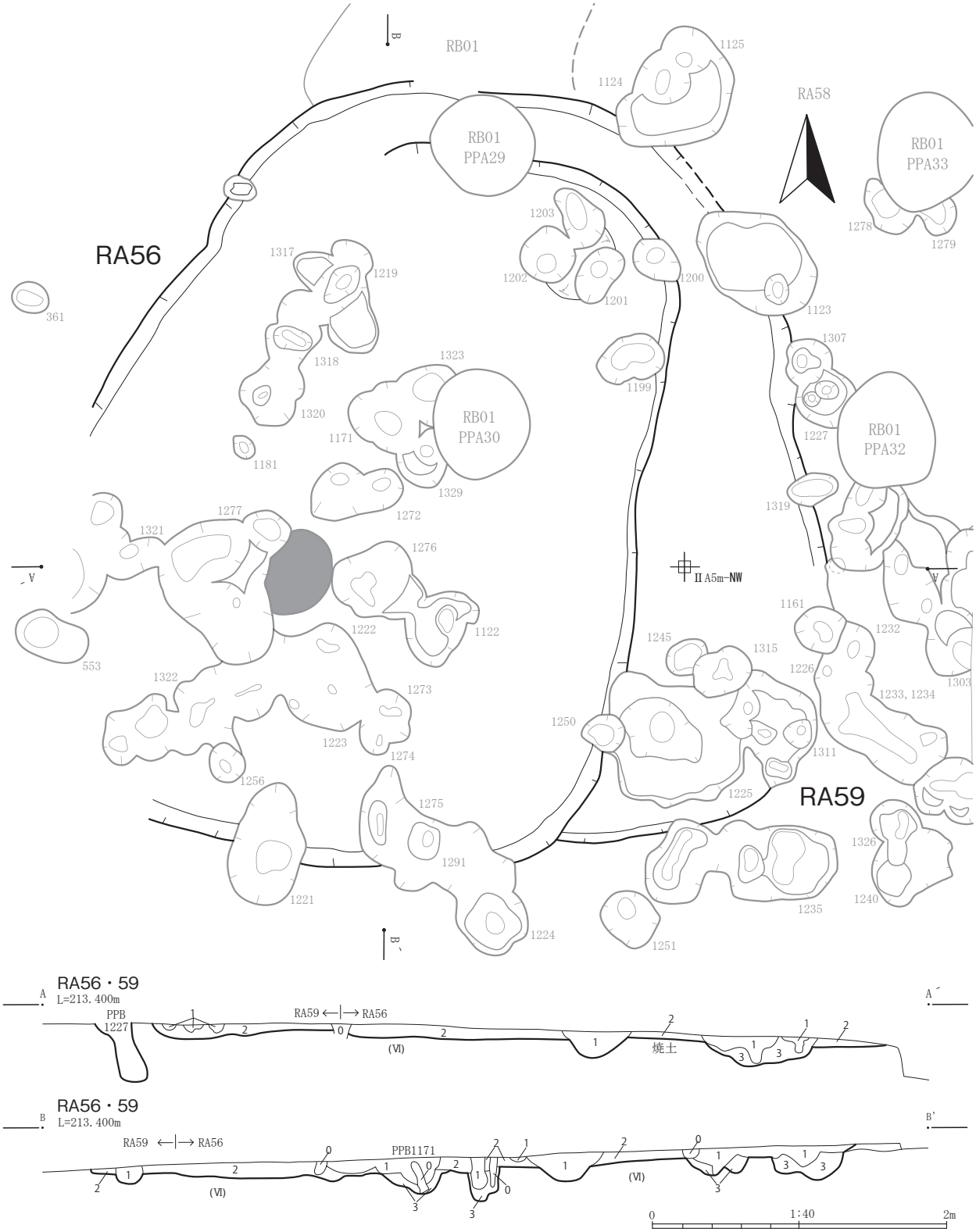
第94図　RA55平面



RA55
A-A'
1．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Pit状．
2．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．
3．10YR4/3-4/4 にぶい黄褐－褐色．シルト．壁際の埋土．Ⅵによく似るがやや暗い（汚れている）．
B-B'
0．根攪乱．
1．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．
2．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．1より暗い．
3．10YR4/3 にぶい黄褐．シルト．粘性やや有．締まり密．

※本住居跡は、H22年度調査で精査したRA42の東半部が拡張するような状態で検出された．
全体形状は単に過年度分の掘り残し部分に見えるが、B-B' 右半部（東部）には一段高い床面が認められ、複数重複の可能性がある．
また、幾筋かの環状の柱穴配置がずれた状態で重複しており、1棟か複数棟か、再検討する必要がある．

第95図　RA55断面



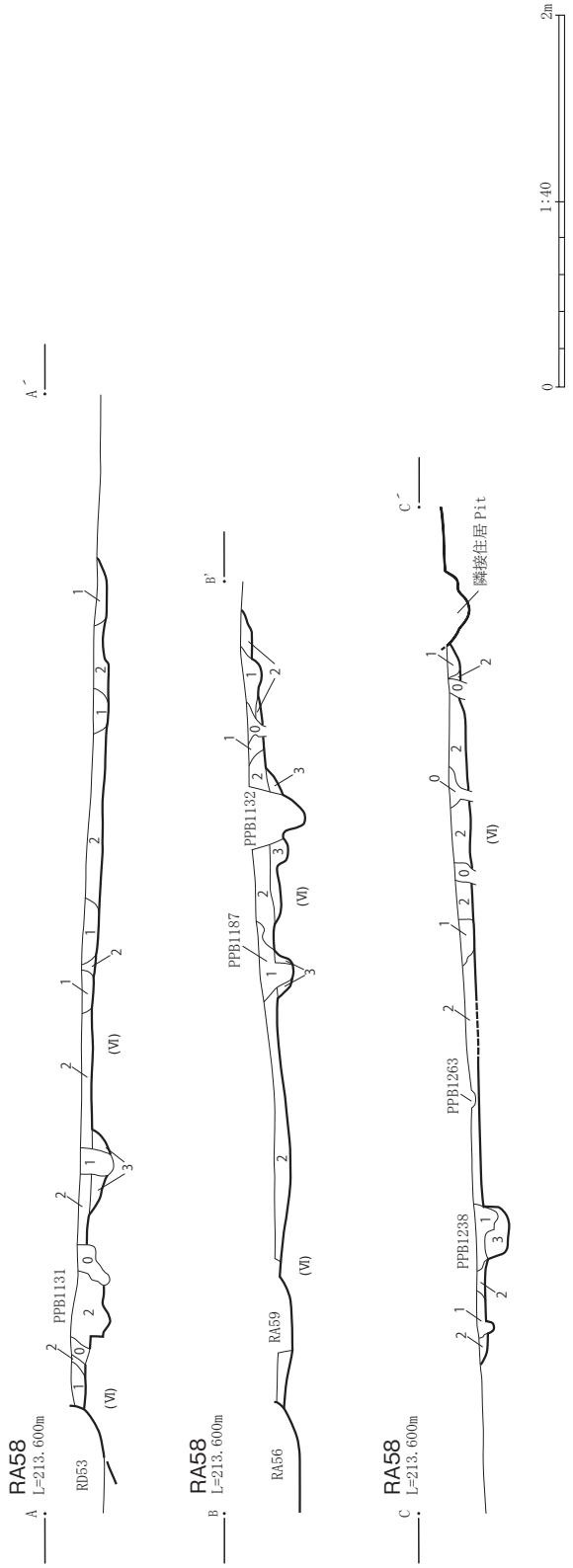
RA56・59
1．10YR3/3-2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まり密．黒っぽい．Pit 上部に集中する（柱痕又は抜き取りか）
2．10YR4/4-3/4 褐色－暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．住居全体に分布する．Ⅵ層土に明暗が斑状に入る．
3．10YR3/4 暗褐色．シルト．１にⅥ層土ブロックやや多．粘やや有．締まり密．Pit 掘り方埋土？

※２棟以上の重複部である．床面の段差及びPit の配置状況から、RA56･59 と命名．RA56 の東縁から張り出すように、一段高い床面を検出．これを RA59 とした．RA56 は概ね楕円形のプランを呈すると思われる．床面はほぼ平坦．壁は内弯外傾．中軸線上の南寄りに焼土生成（炉跡だろう）．Pit（RA59 に帰属する？）に上方から切られている．

第96図　RA56・59

RA62
1237
トレンチ
1249
1128
1236
1130
RA61
RB01
PPA34
1316
1136
1264
1137
1138
1140
1133
1126
1263
1238
1125
1124
1129
1134
RB01
PPA33
1278
1279
1312
1203
1202
1201
1200
1123
1132
1135
1270
1673
1307
1199
1131
1306
1672
1218
1227
RB01
PPA32
1162
1313
RA58
1305
1324
1314
RA56
RA59
1319
1674
1271
II A5m-NW
1671
1161
RD53
1254
1232
1245
1315
1253
1226
1303
1233, 1234
1438
1250
トレンチ
1311
1242
1225
1239
RD61
1186
0
1:40
2m

第97図　RA58平面



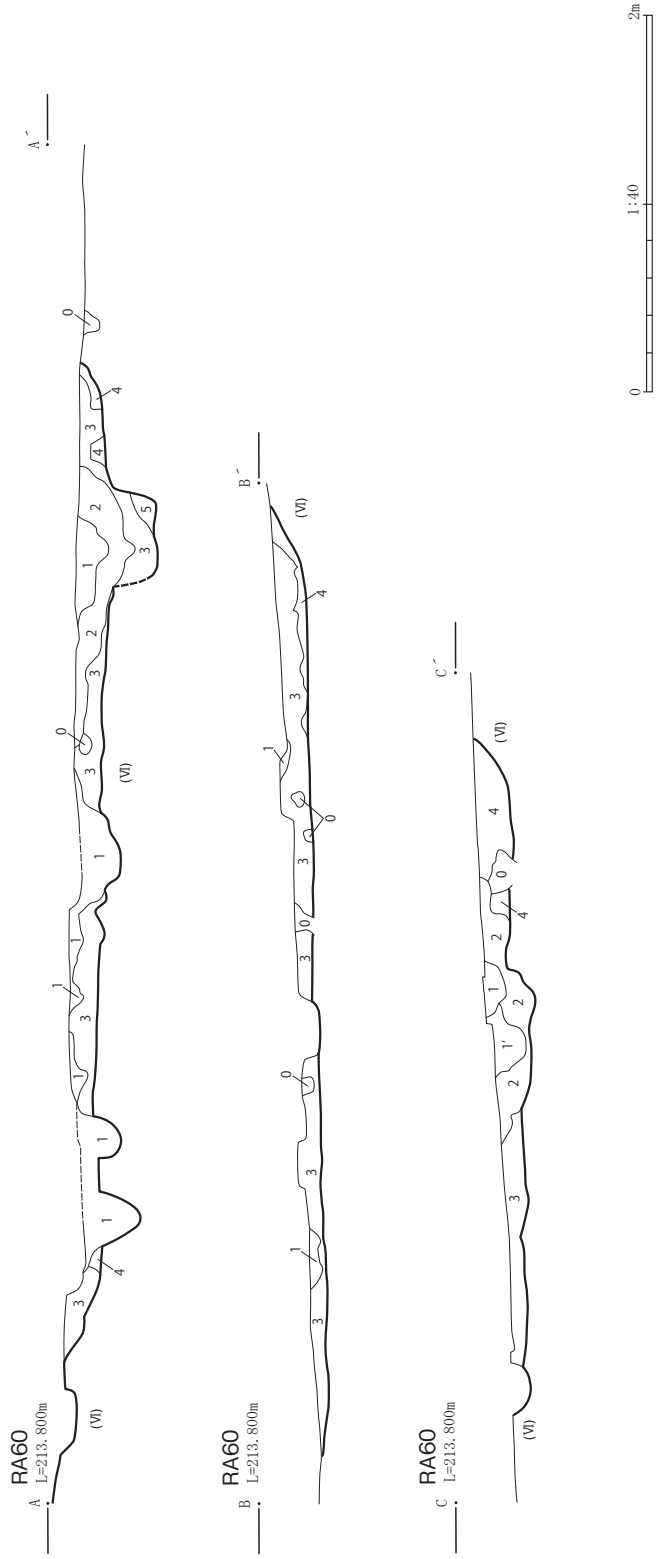
RA58
1．10YR3/3-3/4暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりややを密．黒味帯びる．
2．10YR4/4-3/4褐色－暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP細片極微含む．黄味強い．
3．10YR3/3-3/4暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP片やや多．

※平面形は概ね楕円形．ほぼ全周で他遺構（主に早期住居）と重複している．新旧はほとんど確認できない．
床面はほぼ平坦だが、自然傾斜に沿ってごく緩く傾き、上方と下方で約10センチの比高が生じている．
壁は内寄外傾．柱穴は壁際から約1m前後内側に環状に並ぶ配列が見られる．また一部で壁直下付近にピットが見られる．

第98図　RA58断面

RA61
RA67
RA58
RA60
1130
1141
1313
1150
1667
1362
1361
1359
1357
1356
1230
1358
1367
1139
1668
1336
1365
1354
1144
1645
1669
1352
1769
1770
1265
1138
1771
1355
1351
1140
1633
1625
1182
1151
1196
1197
1430
1145
1198
1149
1673
1672
1634
1665
1218
1435
1162
1646
1635
1210
1666
1670
1671
1674
1211
1152
1254
1253
1438
1255
951
949
1006
946
950
1437
1436
A
B
C
II A5o-NW
0
1:40
2m

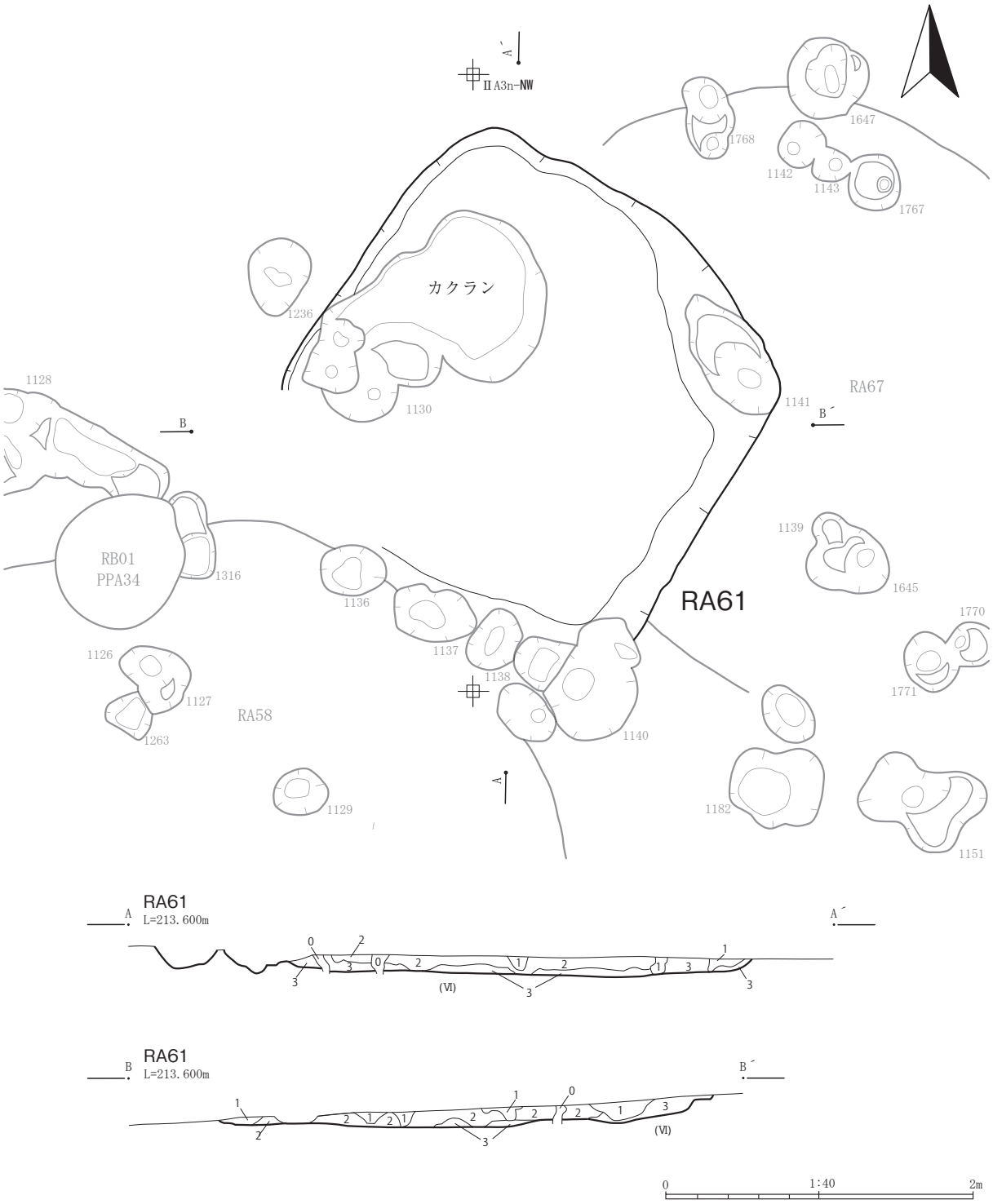
第99図　RA60平面



RA60
0．根撹乱.
1．10YR2/3-3/3 黒褐-暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密.
1'．1よりやや明るく、2より黒味強い.
2．10YR3/4-4/4 暗褐-褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 小片ごく微.
3．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．YP 小片微
4．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Ⅵ土再堆積（崩落土カ）.
5．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．Ⅵ土ブロック少.

※概ね楕円形の平面とみられるが、北西部の壁が判然としない．壁は内弯外傾．床面は全体的に平坦に整うが、中央部がわずかに低くなっている.
この低い範囲にPitの集中分布が見られる．壁直下にも柱穴状Pit持つ.
プラン内には土坑状の落ち込みがいくつか見られる．住居埋土を切っており、新規住居に伴うPitの可能性あるが炉跡状の掘り込みの可能性もある.

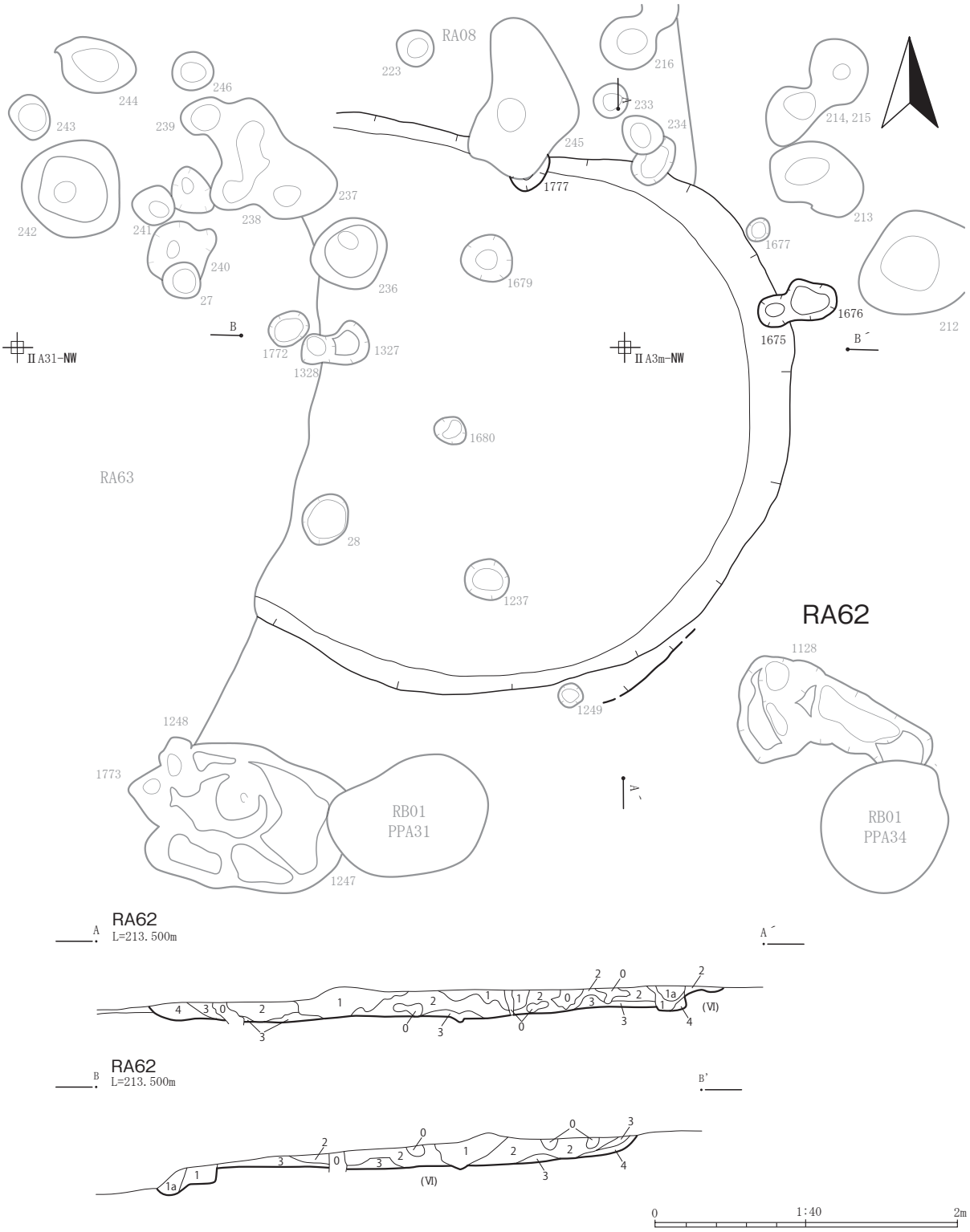
第100図　RA60断面



RA61
１．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．
２．10YR4/3-4/4 にぶい黄褐－褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．YP 細片微量．
３．10YR4/4-3/4 褐－暗褐色．シルト．壁際～床面に分布．

※平面形は隅丸方形．ベルトは対角線上を通っている．床面ほぼ平坦．炉は未検出．壁面は内弯外傾．北～東壁の一部にステップ状の段をもつ（壁崩落にともなうものか）．コーナー部に椀状のピット．南壁に連続する布掘状の Pit（柱穴だろう）．

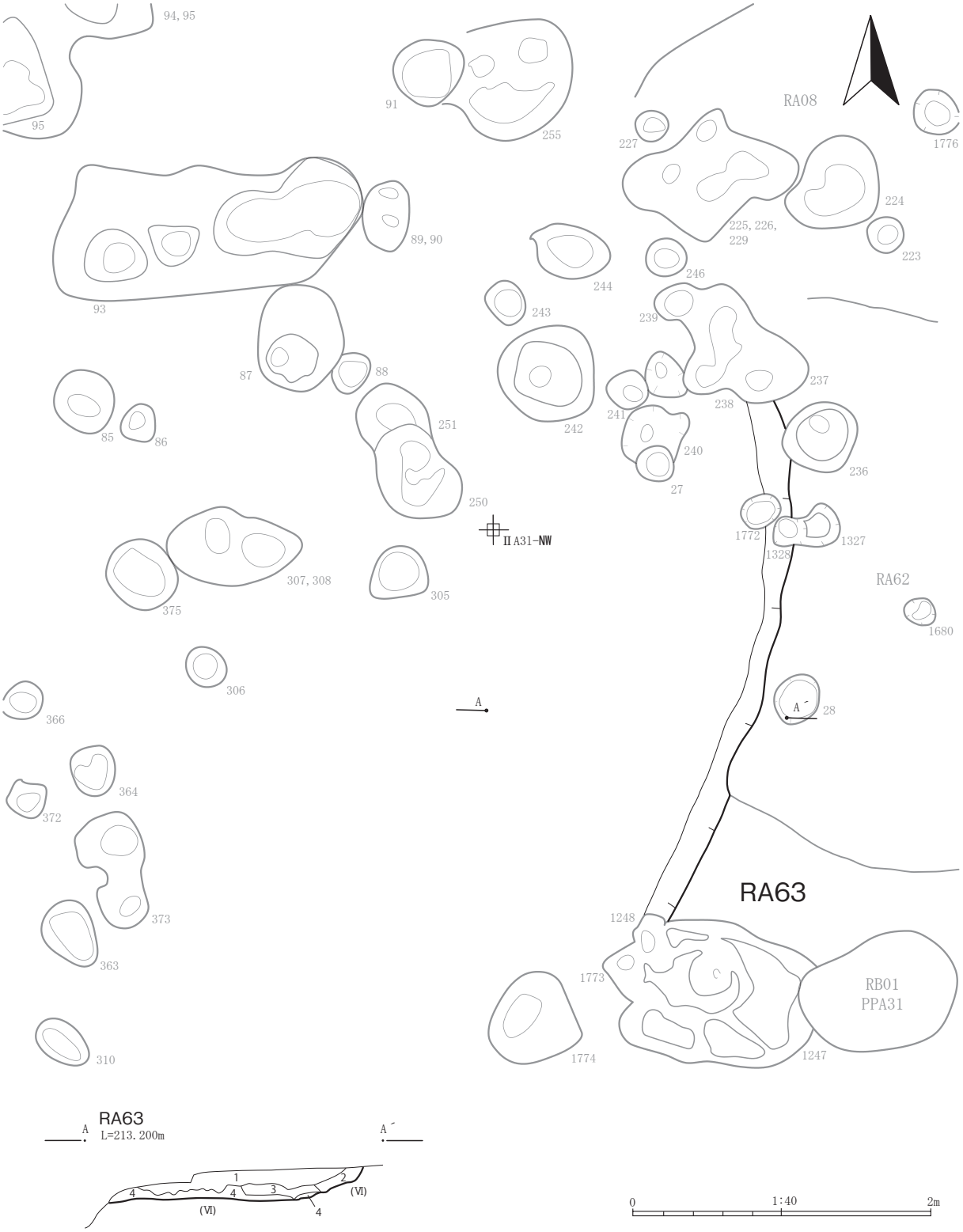
第101図　RA61



RA62
Ｏ．根撹乱
1a．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．
１．10YR4/4 褐色．シルト．粘性有．締まり密．
２．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 細片極微．黄味強い．
３．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．２に比して暗い床直土層．
４．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 片少量．壁崩落土．

※平面形は円～楕円か．壁は内弯外傾．床面平地．南西側壁流失．西部 RA63 に重複（新旧 RA63＞RA62）．

第102図　RA62

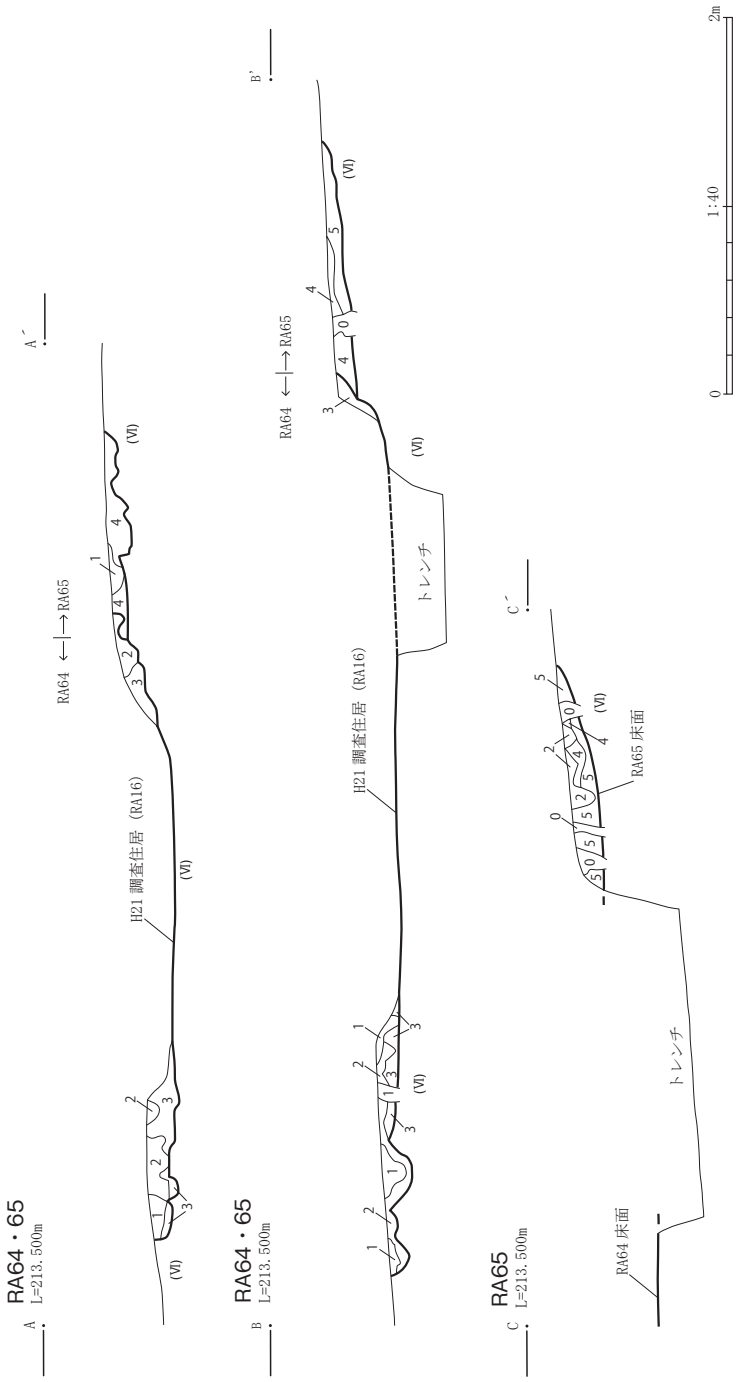


RA63
１．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵ上部によく似るが、10YR3/4 暗褐色シルトブロック少量含みわずかに暗い．
２．10YR4/3-4/4 にぶい黄褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．埋土のうち最も黒味強い．
３．10YR4/3-4/4 にぶい黄褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．２に似るが、YP 小片やや多．
４．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．１に似るが YP 細片微量含む．

※西半部は過年度トレンチ（Ⅵ層掘下げ）に切られ失われた（過年度は認識できなかった）．東半部が残存．東縁で RA62 を切る．
平面形は楕円形か．壁は内湾外傾．床面はほぼ平坦、YP 小片を多く含む面を床面としている．
南東部壁際の埋土上部に、土坑状のⅤa 層土の落ち込みが見られるが、本住居の埋土の一部と判断して同時に掘り下げた．
北東壁際に弧状に分布する柱穴（過年度精査済）が本住居に伴う可能性高い．

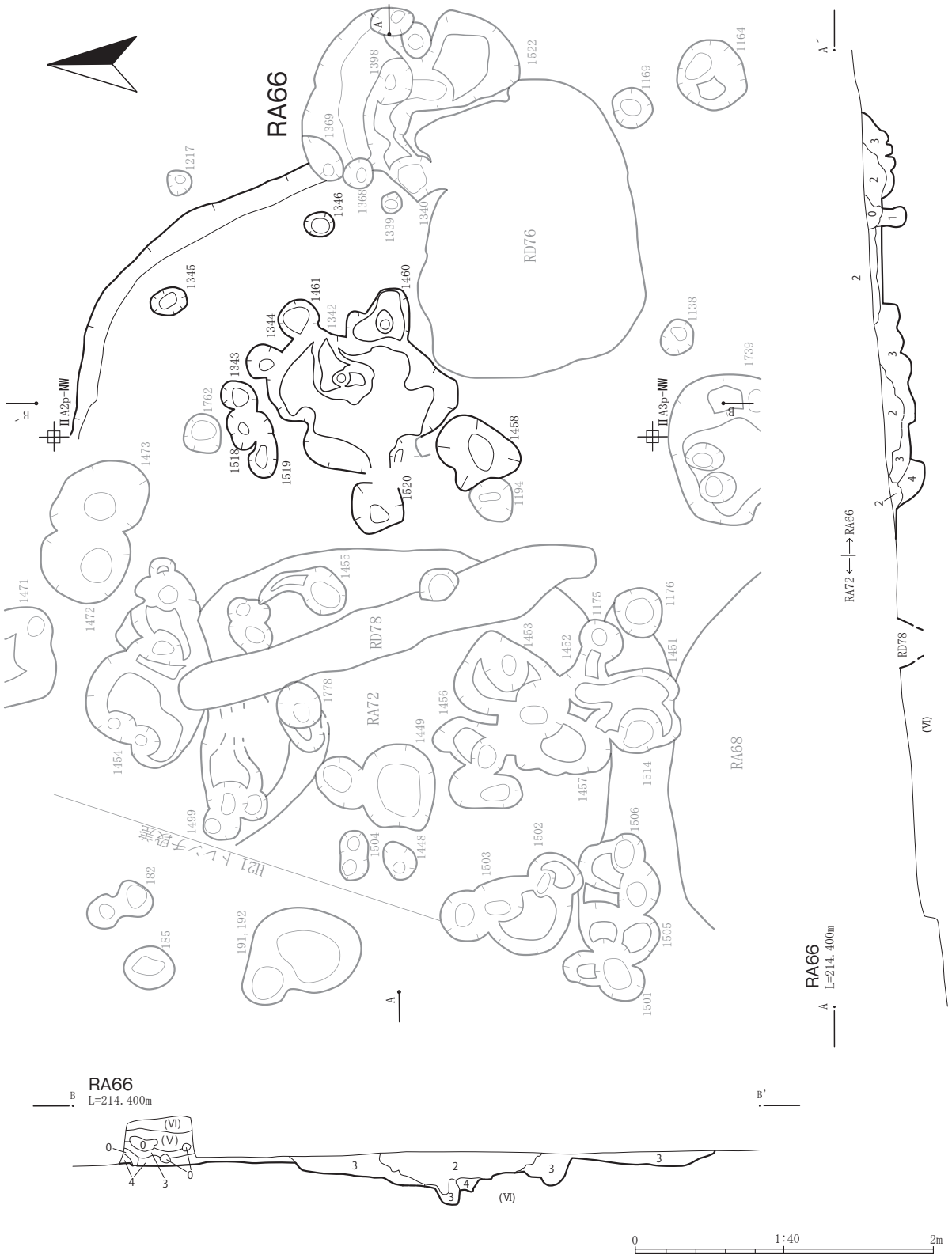
第103図　RA63

第104図　RA64・65平面



RA64・65
0．根攪乱．
1．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．
2．10YR4/3-4/4 にぶい黄褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．3 に比して暗い．
3．10YR4/4-4/6 褐色．シルト粘性やや有．締まり密．YP 片少量．
4．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．
5．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 細片微量．
※2-3：RA64．4-5：RA65．H21 年度調査の RA16 の周囲が掘り広がったものである（地山類似の埋土を掘り残していた）．
RA64 と RA65 の 2 棟が重複したもの．新旧関係．は RA64＞RA65．
RA64 は北東－南西方向に長軸をもつ楕円形～長方形か．壁は内弯外傾、床面は平坦に整う．南西壁直下に焼土伴う浅い落ち込み．炉か．
RA65 は円～楕円形．壁は内弯外傾．西側は流失．床面平坦．中央部は RA64 及びトレンチによって壊されている．炉の有無不明．

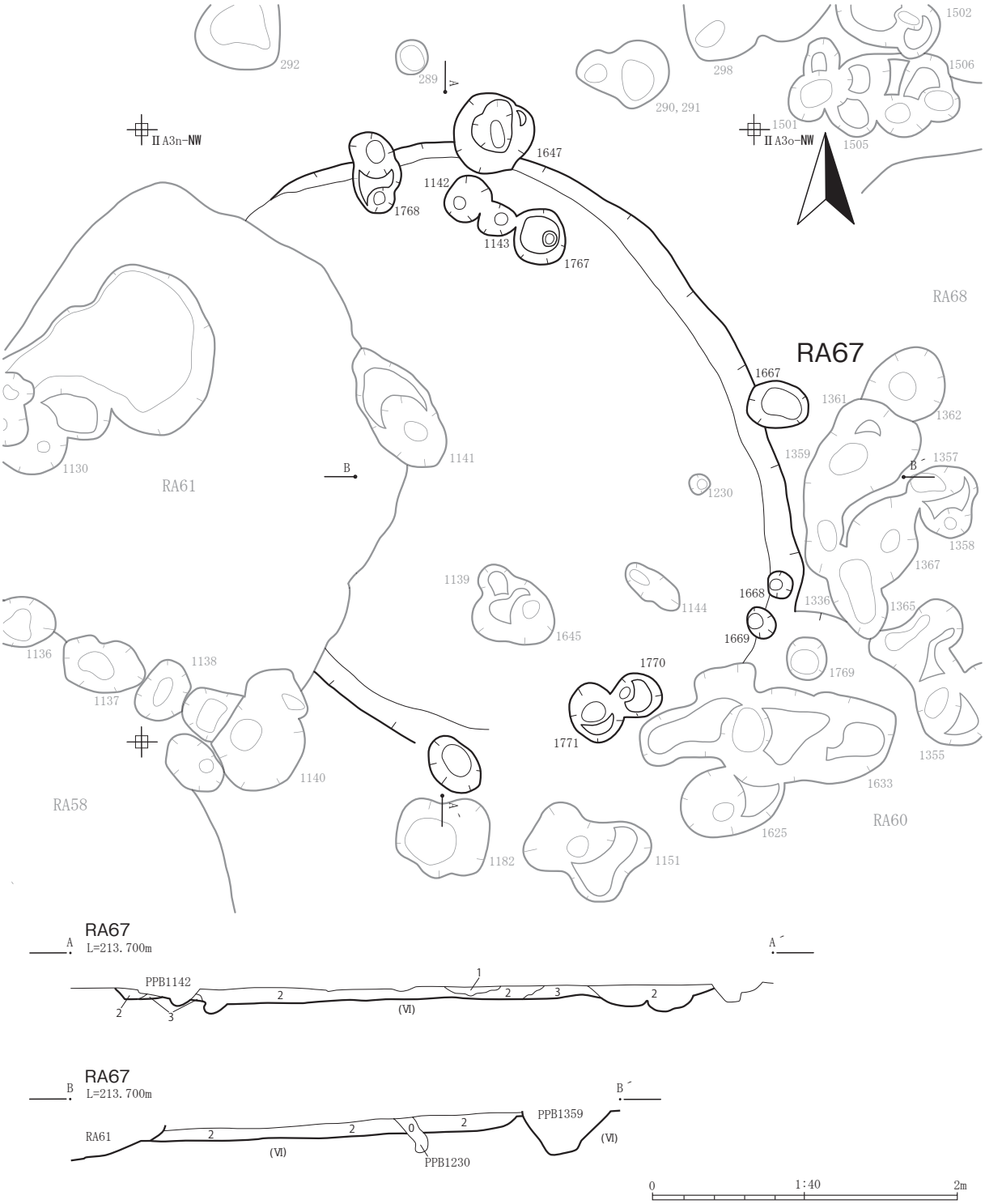
第105図　RA64・65断面



RA66
０．根攪乱.
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．(PPB1339 埋土)
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 細片微量含む．全体黒っぽい.
３．10YR4/3-3/4 にぶい黄褐－暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 細片極微.
４．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 小片少量．地山（Ⅵ層）土の再堆積層.

※平面形は楕円．西壁が流失．RA72 と重複すると見られるが、新旧不明．壁は内弯外傾．床面平坦で中央に土坑状の落ち込みをもつ.
落ち込み内部に杭穴状の小 Pit 複数．炉か．焼土は未確認．柱穴配置は検討要す.

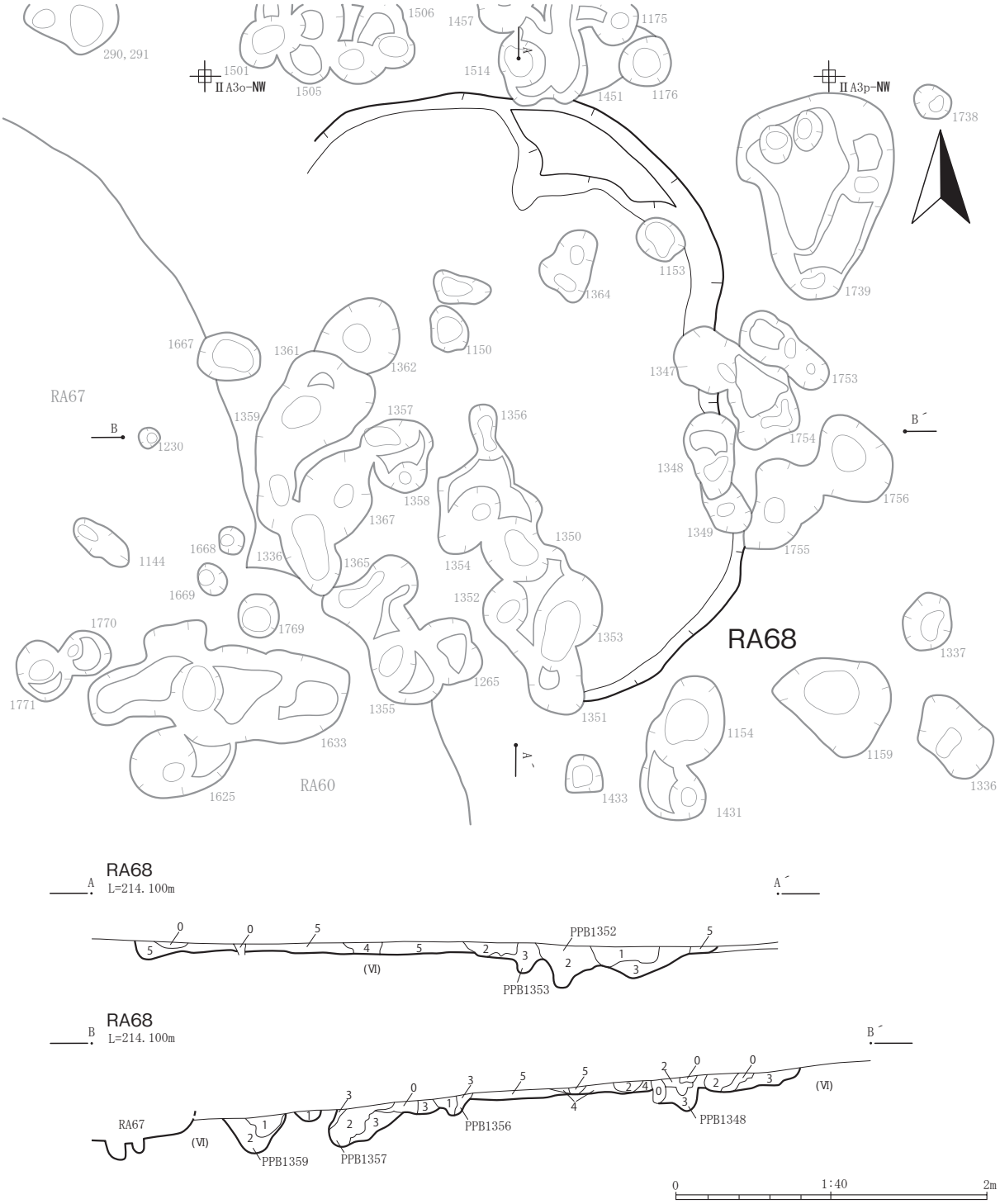
第106図　RA66



RA67
O．撹乱．
1．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．YP 細片ごく微．
2．10YR3/4-4/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 小片ごく微．
3．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 小片微．

※平面形は概ね楕円形．西部を RA61 に切られ、南東部に RA60 が重複（新旧不明）．壁は内弯外傾．底面は平坦に整う．炉は未確認．
柱穴は壁内側に沿って分布しそう．

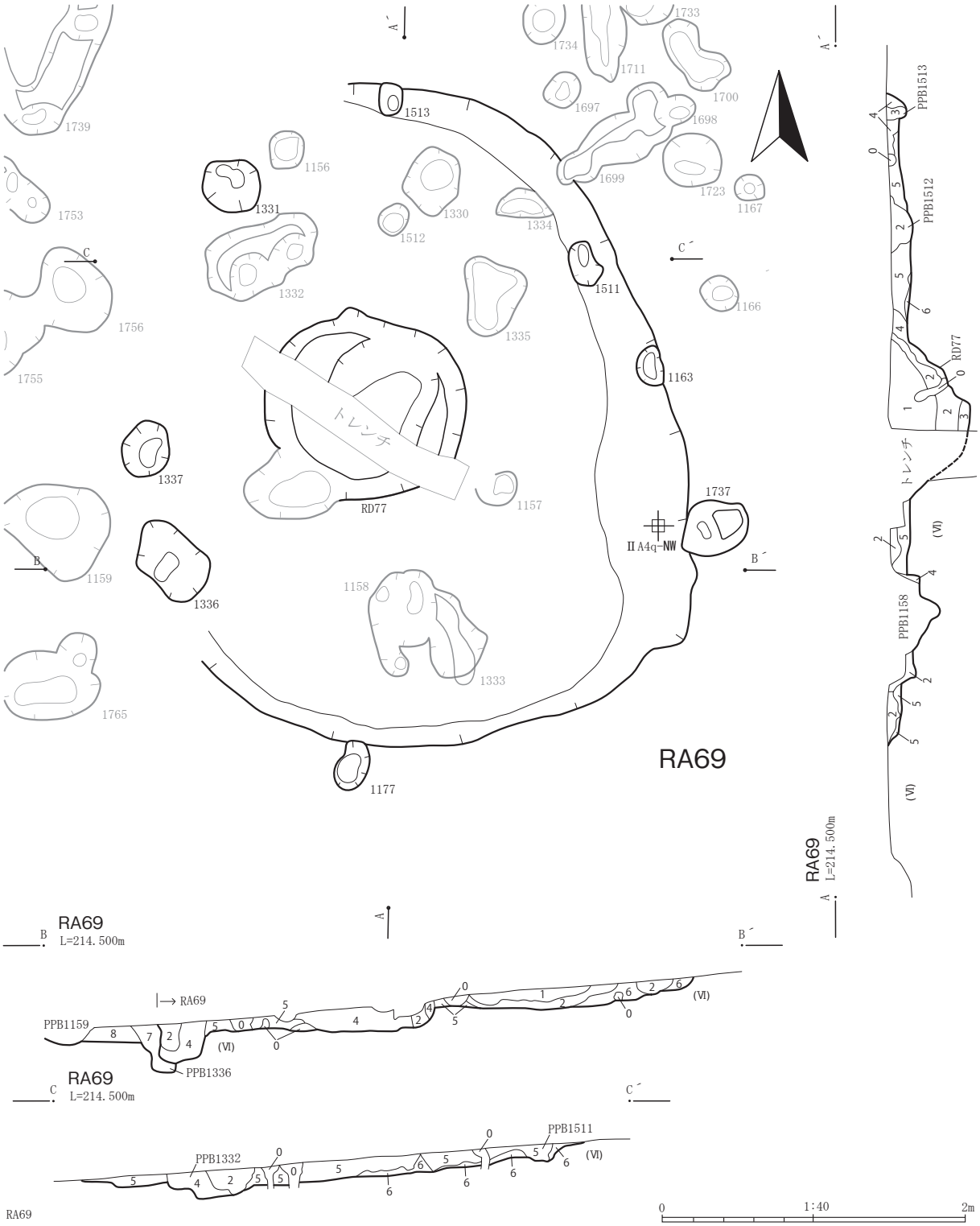
第107図　RA67



RA68
０．根撹乱．
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．Ⅴa に良く似る柱痕状．
２．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 片微量含む．
３．10YR3/4-4/4 暗褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Ⅵ土ブロック多含み黄味強．Pit 掘り方埋土．
４．10YR2/3-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．RA68 の主たる埋土．
５．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．RA68 の主たる埋土．

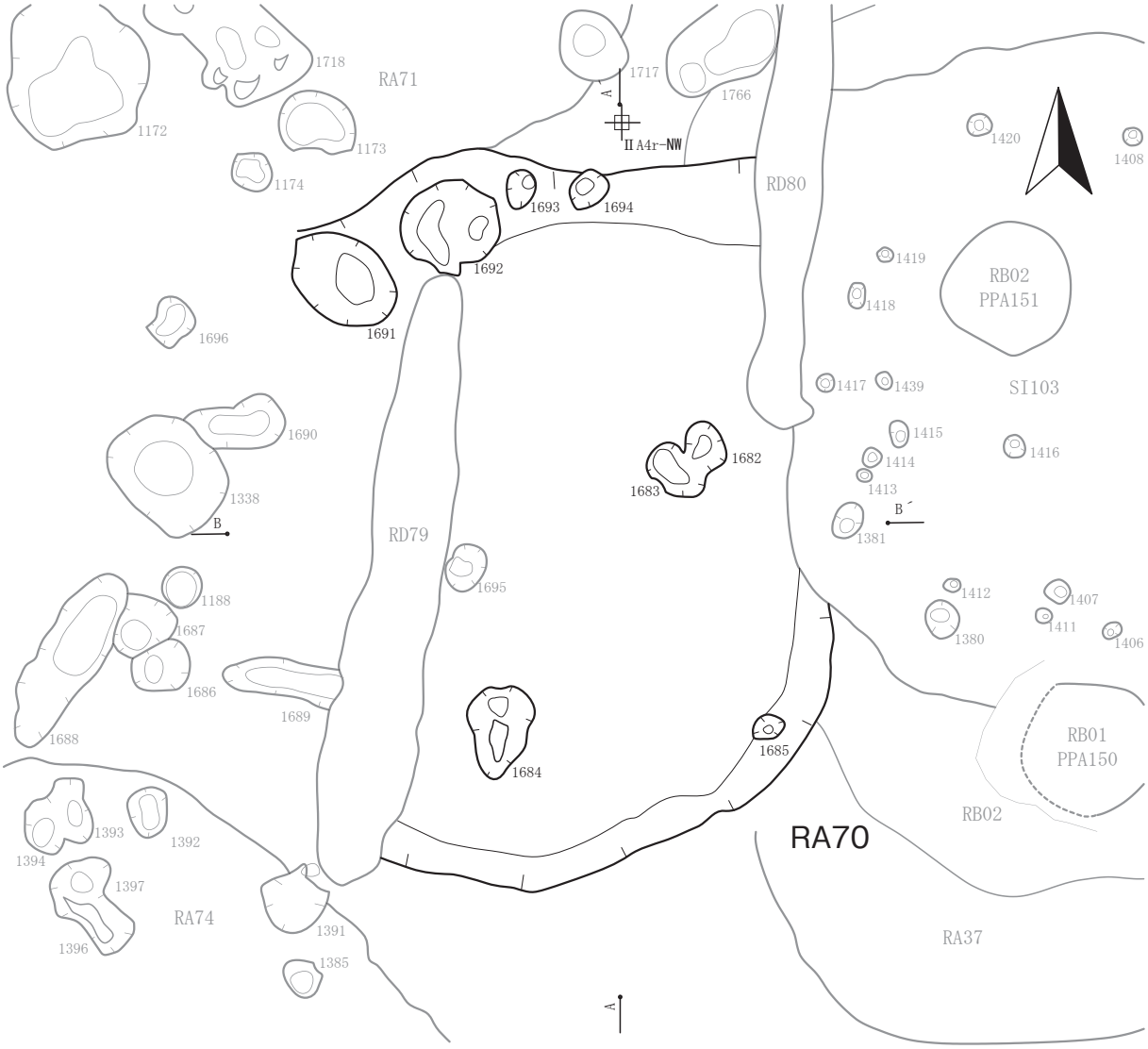
※１～３：住居切る列状 Pit．４・５：RA68 の主たる埋土．平面形は概ね楕円形を呈するが、全体的に重複著しく判然としない．西半部は流失、又は削平（新規遺構）により失われている．壁の立ち上がりはわずかながら、北～東壁で残っている．内弯外傾．床面は平坦に整うものの南西部及び東壁側が連続する Pit に切られ壊されている．柱穴は壁直下に点在するものの、一部が帰属の可能性（峻別は困難）．断面 A-A’の右端、B-B’の左右両部でⅤ層土主体の Pit 群に切られている．これらの Pit は方形基調の住居に伴う例あり、L 字状に連なる場合が多い．

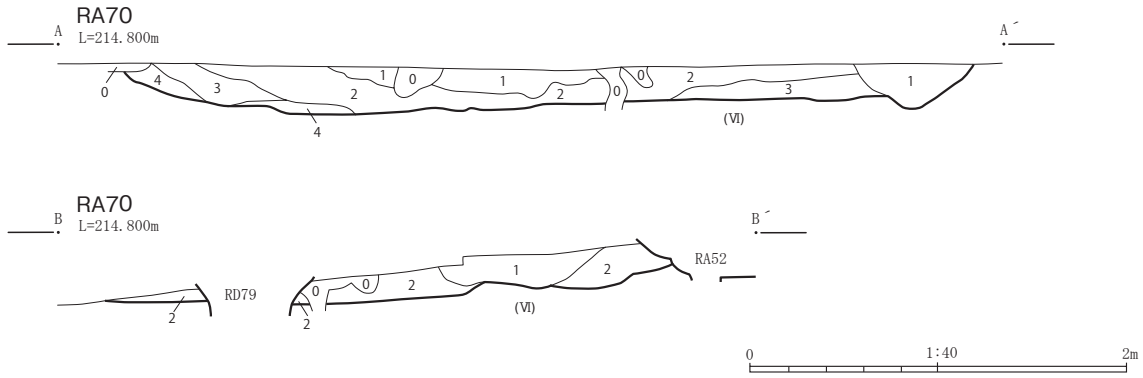
第108図　RA68



RA69
０．根撹乱.
１．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.Ⅵ土に良く似る.
２．10YR2/3-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．黒っぽい（強い）土層．焼土をわずかに含む.
３．7.5YR2/3-3/3 極暗褐－暗褐色．シルト．２に良く似るが、赤味を持つ．被熱によるものだろう.
４．10YR3/4-4/4 暗褐色－褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 片微量（目立つ）.
５．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 片少.Ⅵ層土の崩落土か.
６．10YR4/4 褐色．シルト．５に似るがやや暗い.
７．10YR3/3-3/4 暗褐色－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Pit 埋土.
８．10YR4/4 褐色．シルト．５に似るが暗い.
※楕円形だろう．北西部の壁が消失（重複住のため、又は流失）．壁は内弯外傾．中央に土坑状の掘り込み RD77 を持つ．住居本体の床直埋土を上から切っているが、他例にも見られる堆積状況であり、住居中央に位置する点からも、本住居に伴う可能性を排除出来ない．（堆積過程の復元とその意味を検討しなければ・・・）土坑状掘り込みの内壁はごく弱く赤変がみられる．これを埋める黒色土２・３層に焼土が含まれ赤味を持つ．このことから炉跡状の施設である可能性を考えなくてはならない．
柱穴配置は概ね壁内側に沿った分布がみられる．壁直下のものは椀形で浅く、土坑状掘り込みを囲むものは不整形な Pit.
床面は東半部で整っているが、西半部は Pit との重複が多く乱れており、東半部に比して低くなっている.

第109図　RA69・RD77

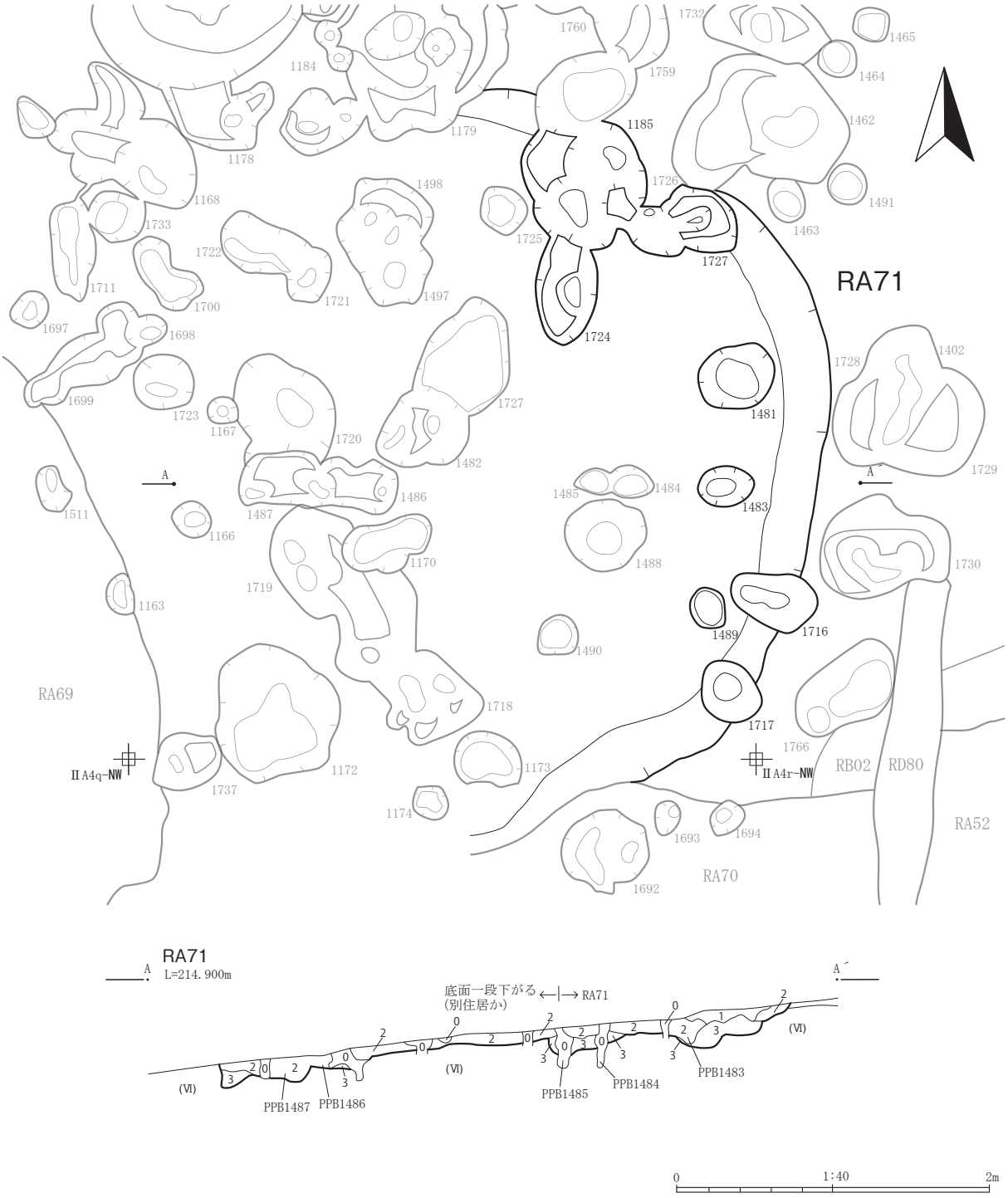




RA70
０．根撹乱.
１．10YR3/4-4/4 暗褐色－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.
２．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 小片微.
３．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．１より明るく、２より暗い.
４．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．YP 小片少量（目立つ）.Ⅵの崩落再堆積層.

※検出当初は１層土の分布範囲がほぼ方形を呈していたことから、方形住居と考えていたが、精査を進めたところ壁が外側に広がることが分かり、隅丸または楕円形の可能性が出てきた．壁は内弯外傾するが、他の楕円形住居に比して、壁の立ち上がり方は急である．床面は中央部に向かって緩やかに深く（低く）なる．東に接する RA52 に似ている．柱穴・炉は不詳.

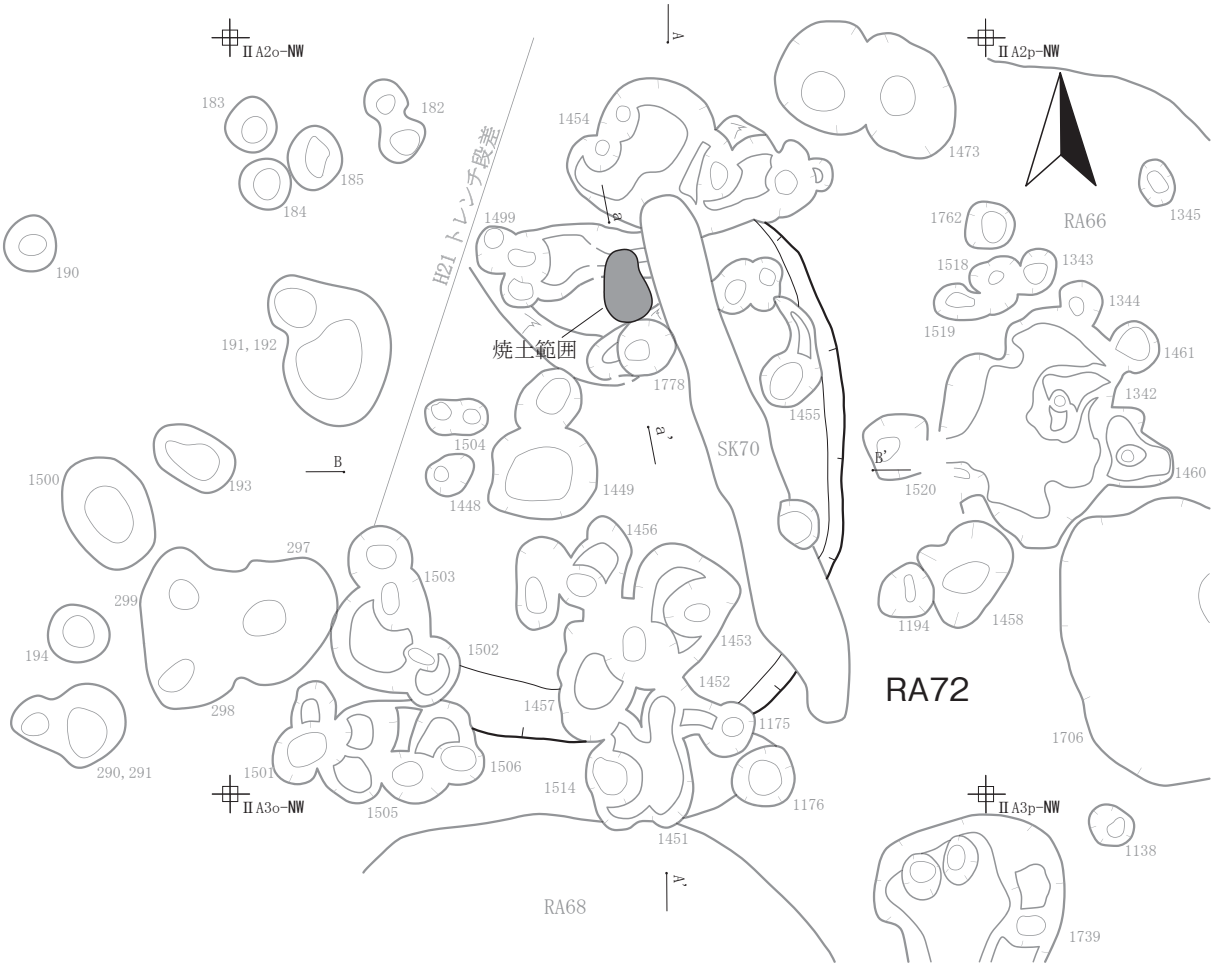
第110図　RA70

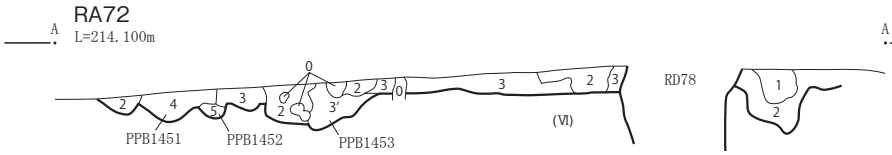


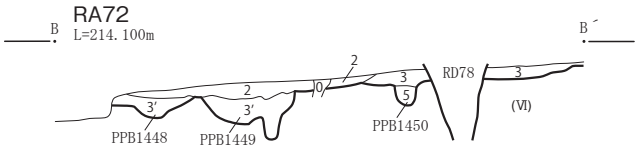
RA71
０．根撹乱.
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎.
２．10YR3/4-4/4 暗褐色－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．YP 片ごく微.Ⅵ層土少量含み黄味帯びる.
３．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．YP 片微.Ⅵ層の再堆積（Pit 掘り方埋土か）.

※平面形は概ね円形．西部は流失．東半部に残存の壁は内弯外傾．柱穴状 Pit は壁内側に並ぶ傾向．床面は概ね平坦だが、壁際（柱穴状 Pit の分布範囲）がわずかに下がる（低くなる）．土層断面では、はっきりしないが、西半部床面がわずかに低くなることから、西半部に別の住居が重複している可能性有．炉、焼土は未確認.

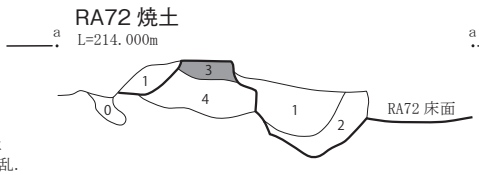
第111図　RA71

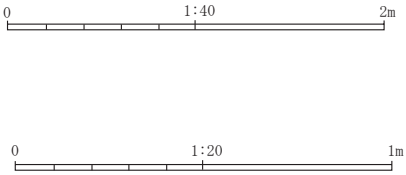






RA72
０．根撹乱.
１．10YR2/2～2/3　シルト．粘性有．締まりやや密．黒味強い.
２．10YR3/3～3/4　シルト．粘性有．締まりやや密.
３．10YR3/4～4/4　シルト．粘性やや有．締まり密.Ⅵ層土やや多く含み黄味強い.
3'．10YR4/4　シルト．３に似るがⅥ土ブロック多く、黄味より強い（Pit 掘り方埋土）.
４．3'に良く似る.
５．10YR4/6　シルト．粘性やや有．締まりやや密.Ⅵの再堆積土（Pit 埋土）.
※東・南に直線的な壁を持つことから方形基調と推定．北壁際に床より高い焼土持つ．東側に重複の RA66 を切っていると認められる（検出状況から）.
柱穴は壁際に並ぶものが伴うとみられるが、重複する他の住居の存在も考慮して検討を要す.

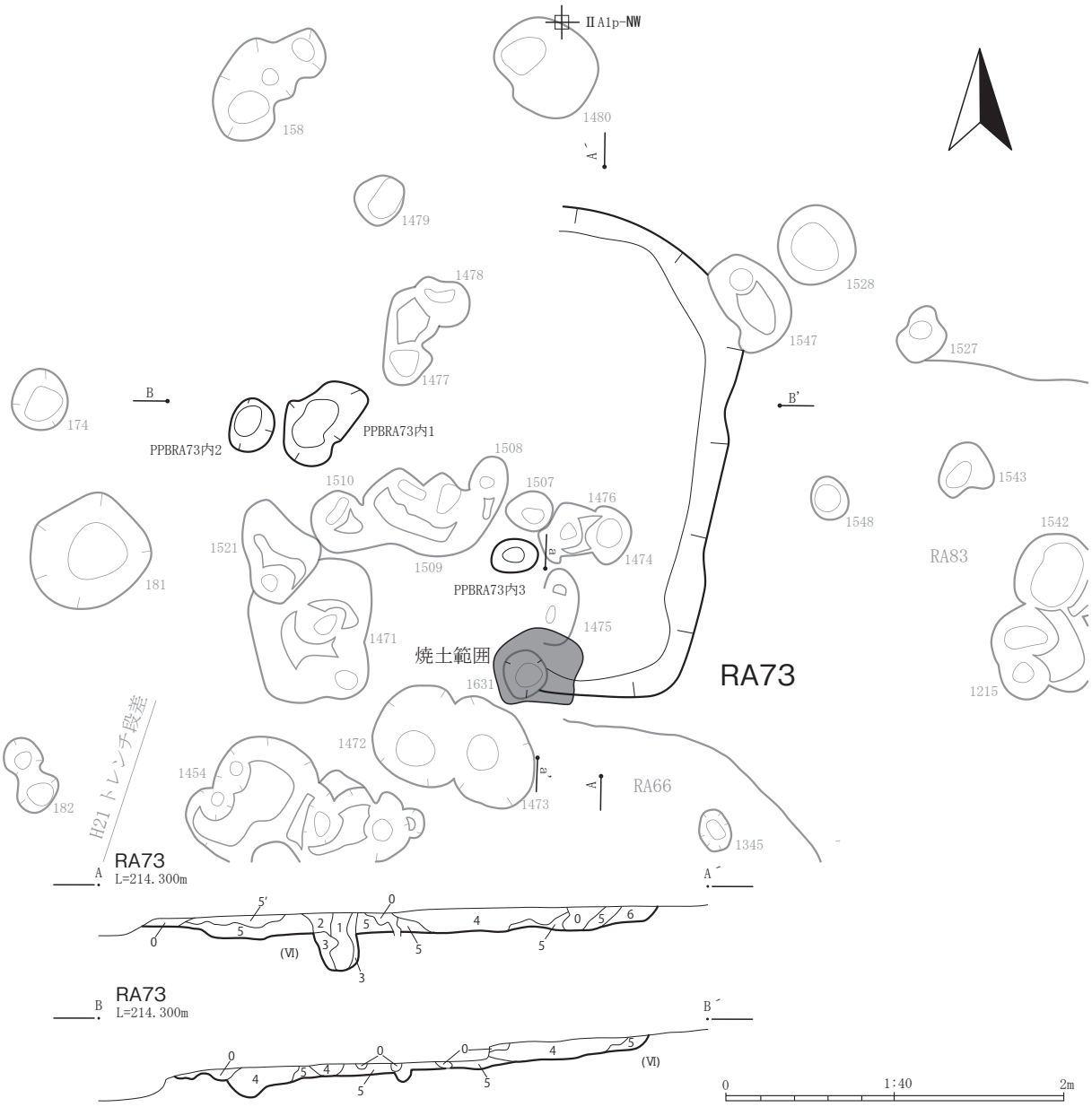




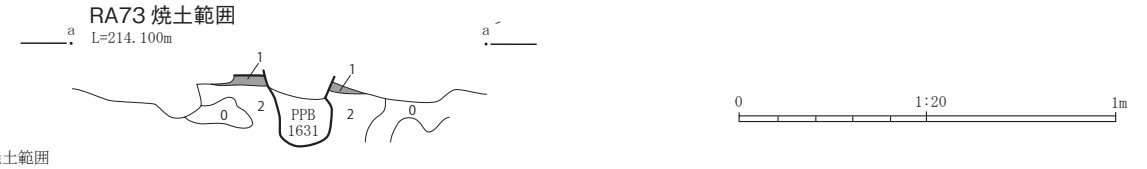
RA72 焼土
０．根撹乱.
１．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密.
２．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.
３．7.5YR4/4-3/4 褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．焼土.
４．10YR3/4-4/4 暗褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.

※RA72 の北壁際に生成の焼土．周囲を、同住居を切る Pit 群に切られて平面形は不明だが、焼土の確認される範囲はほぼ円形を呈する．焼土の生成面は周囲の床面より高くなっており、マウンド状又はテラス状になっているものと思われるが、撹乱著しく原形をとどめない．焼土の焼成は鈍く、発色は良くない.

第112図　RA72

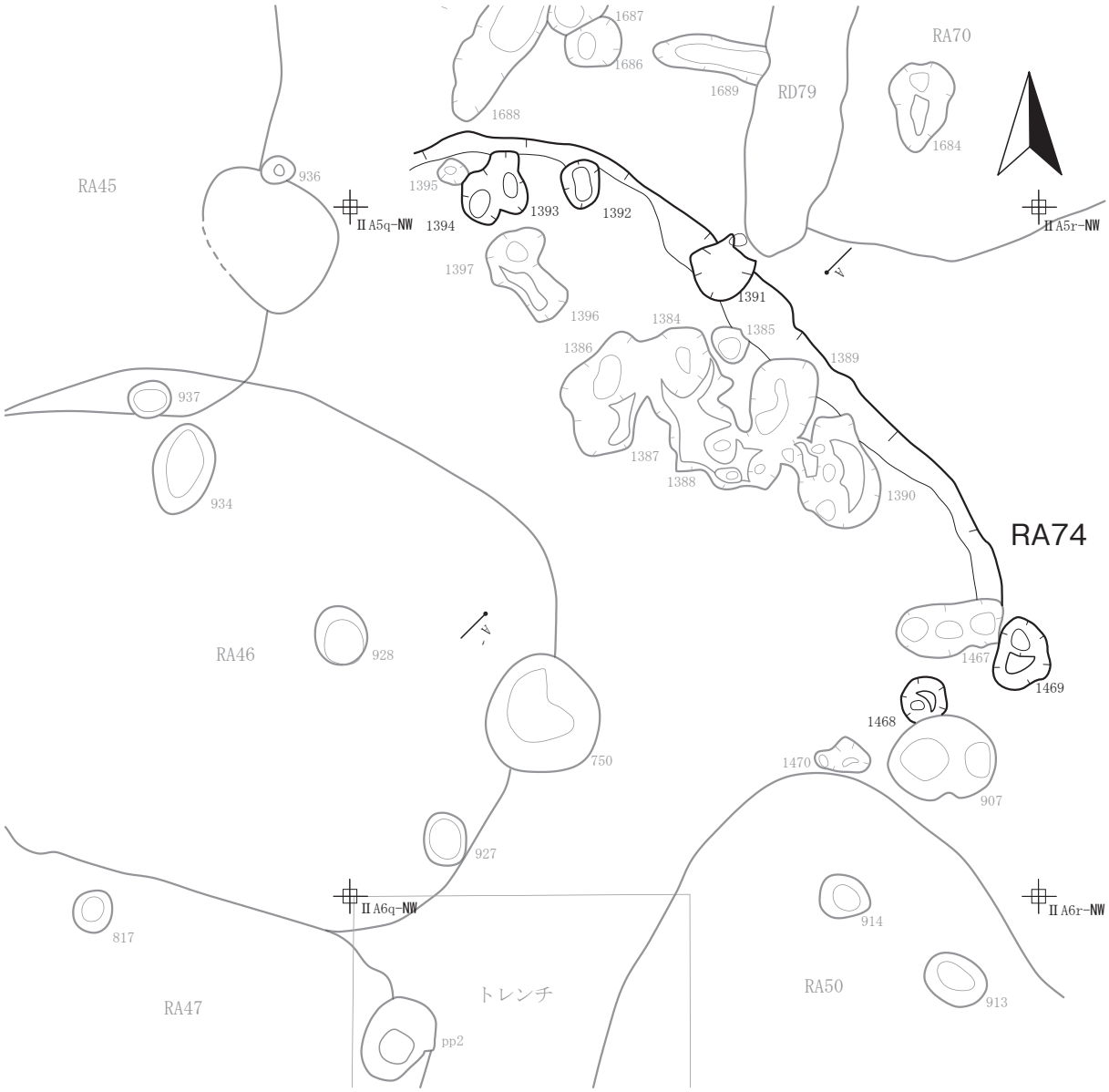


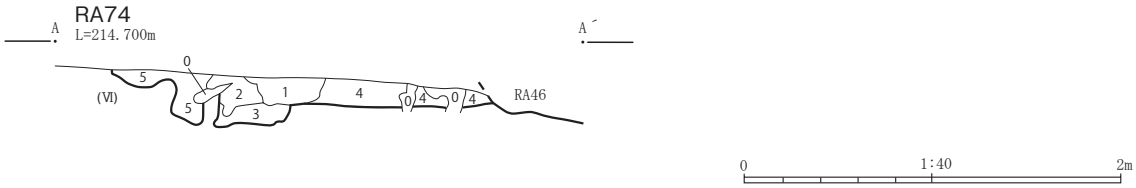
RA73
０．根撹乱．
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．柱痕（住居埋土切る）．
２．10YR3/2-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まり密．Pit 掘り方埋土．
３．10YR3/4-4/4 暗褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.Ⅵブロック少．Pit 掘り方埋土．
４．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．５層類似土ブロック少．
５．10YR4/4 褐色．シルト.Ⅵ層土の再堆積か．粘性・締まり共やや有．
5'．7.5YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．４に良く似るが、焼土含むため（又は焼土そのものか）赤味帯びる．５上面に生成の焼土か．
６．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．４に似て５より黒っぽい．
※平面形は方形基調と推定（北西部をトレンチで失っている）．東壁及び南北壁東端が残存．内弯外傾．床面平坦．南壁東寄りに焼土もつ．生成面は５層上面か．他の方形住に同例複数有（壁のすぐ内側に生成し床面より高い位置にある生成面の土は地山に類似する再堆積土、又は地山そのもの．廃絶後のものか、テラス状につくりつけた施設か、判断つかない）．



RA73 焼土範囲
０．根撹乱．
１．7.5YR4/6 褐色．シルト．焼土．粘性有．締まりやや密．鈍い発色（周辺が広く根等で撹乱受けている）．
２．10YR4/6 褐色．シルト.Ⅵ層土だがわずかに暗い．粘性やや有．締まり密．
※RA73 南壁東寄りに検出の焼土（炉？）である．ほぼ円形の平面形と推測されるが、中央を PPB1631、周辺を根撹乱に壊されている．焼土上面はほぼ生成面を残していると思われる．生成面は床面より高く古代カマド状のマウンド状またはテラス状に盛り上がっている．地山の削り出しによると思われるが、焼土下部のⅥ層土はやや濁りがあり、不明．他例と比較検討を要する．

第113図　RA73

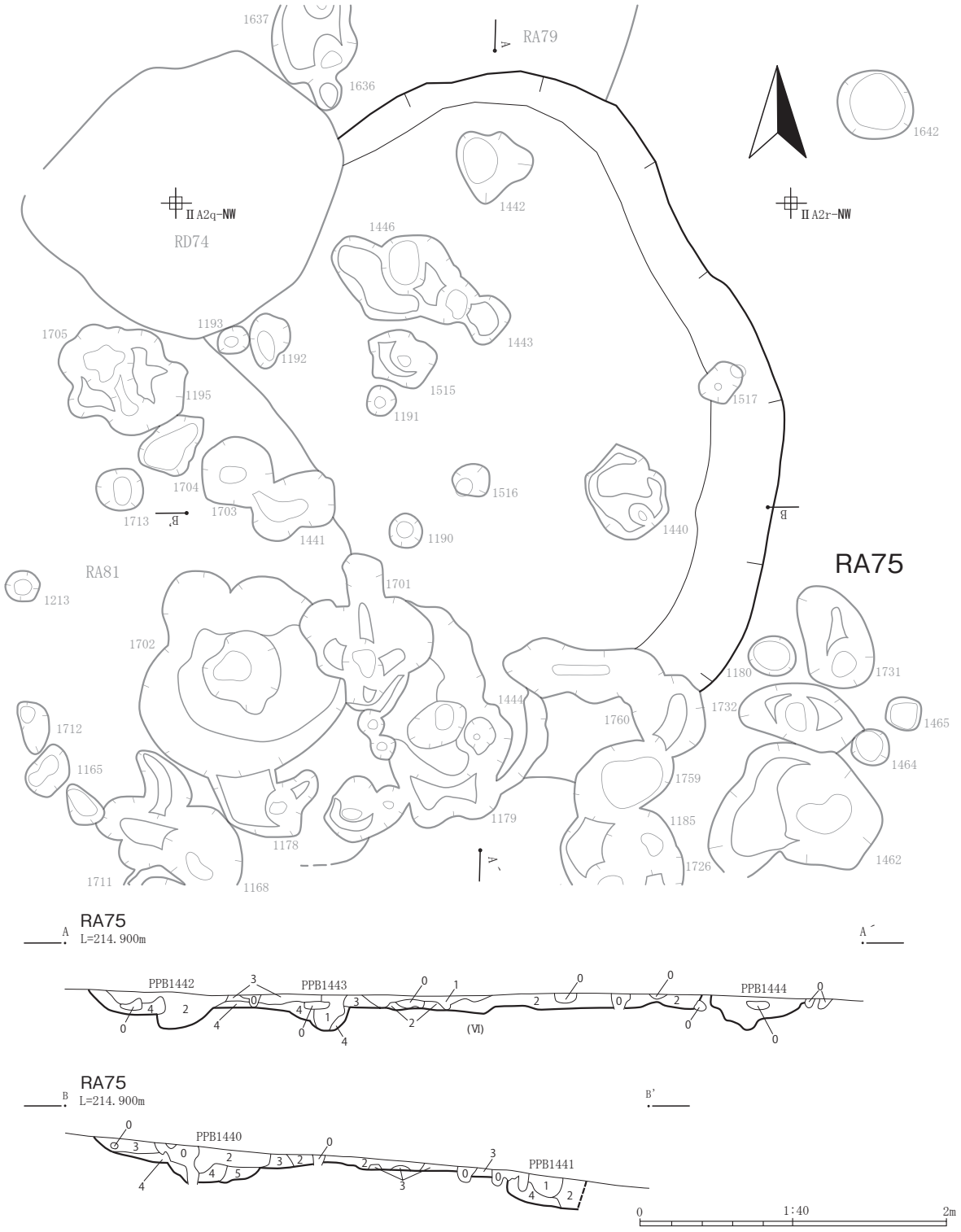




RA74
０．根攪乱.
１．10YR3/2-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．
２．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．YP 細片極微含む.
３．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.Ⅵ層土の再堆積層.
４．10YR3/4-4/4 暗褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．床面覆う主たる埋土.
５．10YR4/4/-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．壁際に堆積するⅥ層の濁った層.Ⅵの再堆積層か.

※南東・南西・北西に重複する住居（RA45）に切られている．平面形は円～楕円形か．壁は内弯外傾．床面平坦.

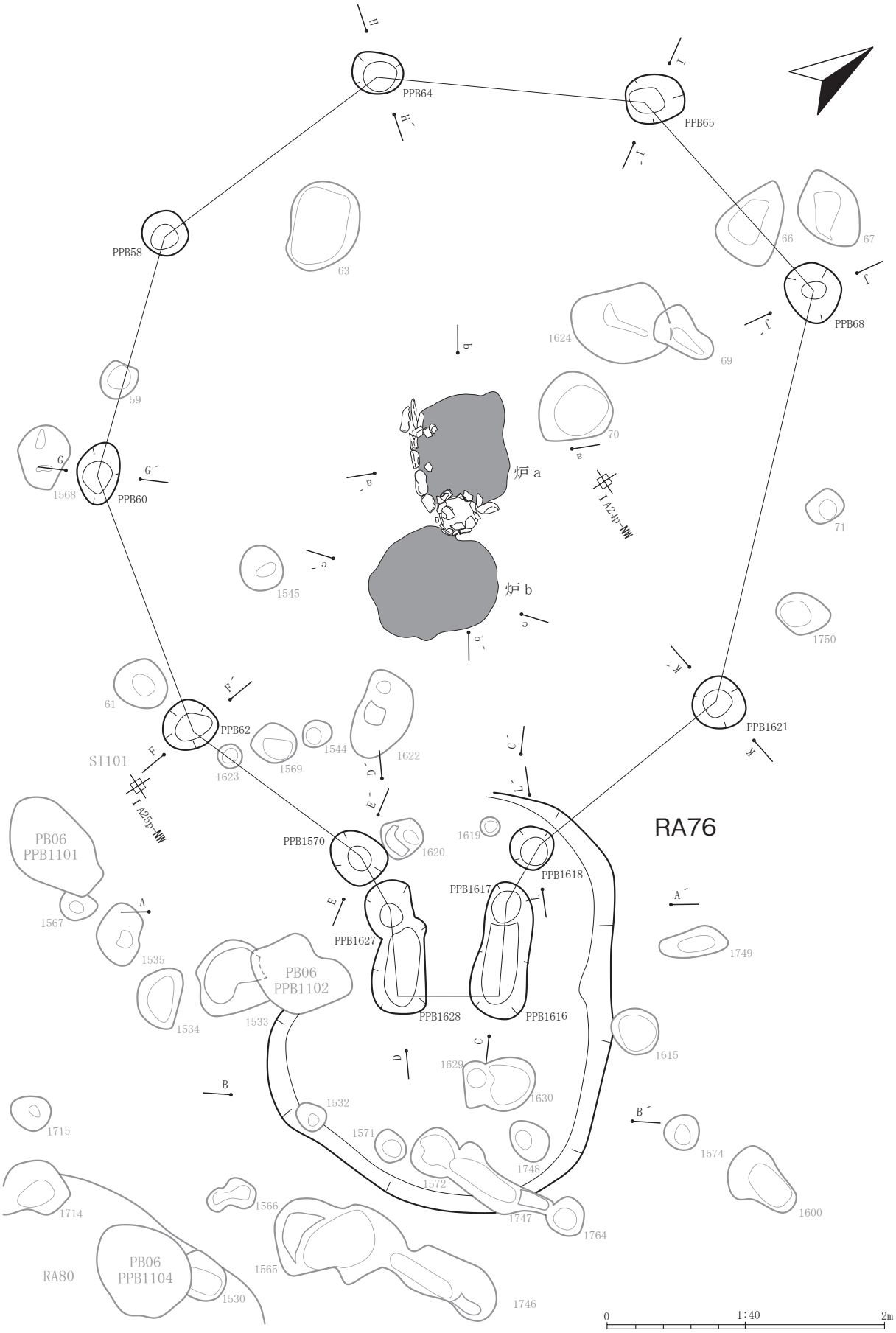
第114図　RA74



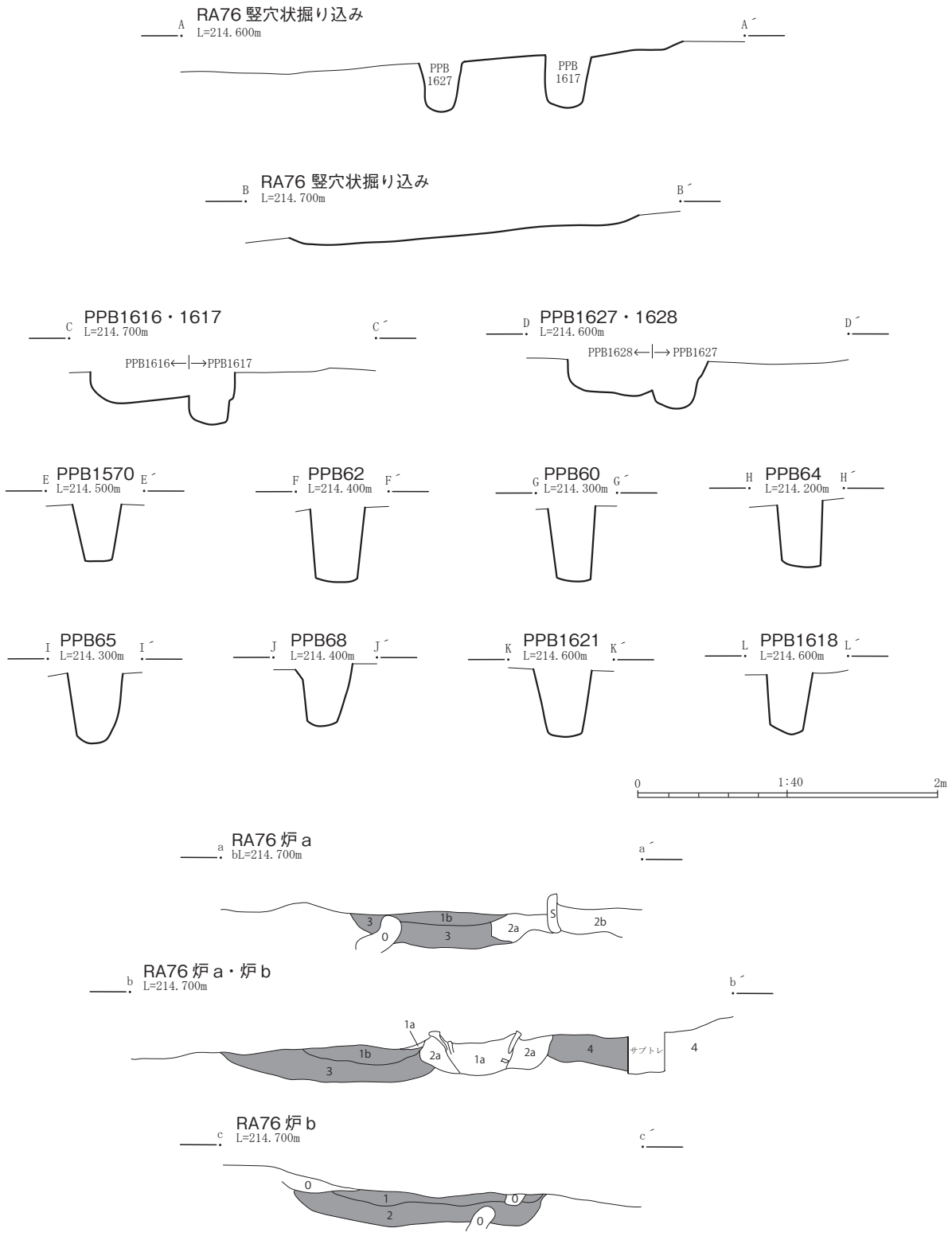
RA75
０．根攪乱.
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．黒味強い土層．新しいか.
２．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.
３．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．３にⅥ層土含む．全体に黄味.
４．10YR4/4-4/6 褐色．シルト.Ⅵ層土ブロック多量.Ⅵの再堆積層（Pit 掘り方埋土等か）.
５．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．２によく似るがやや明るい.

※現状では平面形は不整形．直線的な壁が一部に認められるので、方形基調の住居に加え複数の住居が重複している可能性あり.
壁は内弯外傾．床面は概ね平坦だが、重複する Pit やテラス状に見える部分（重複によるか）があり起伏を持っている.

第115図　RA75



第116図　RA76平面



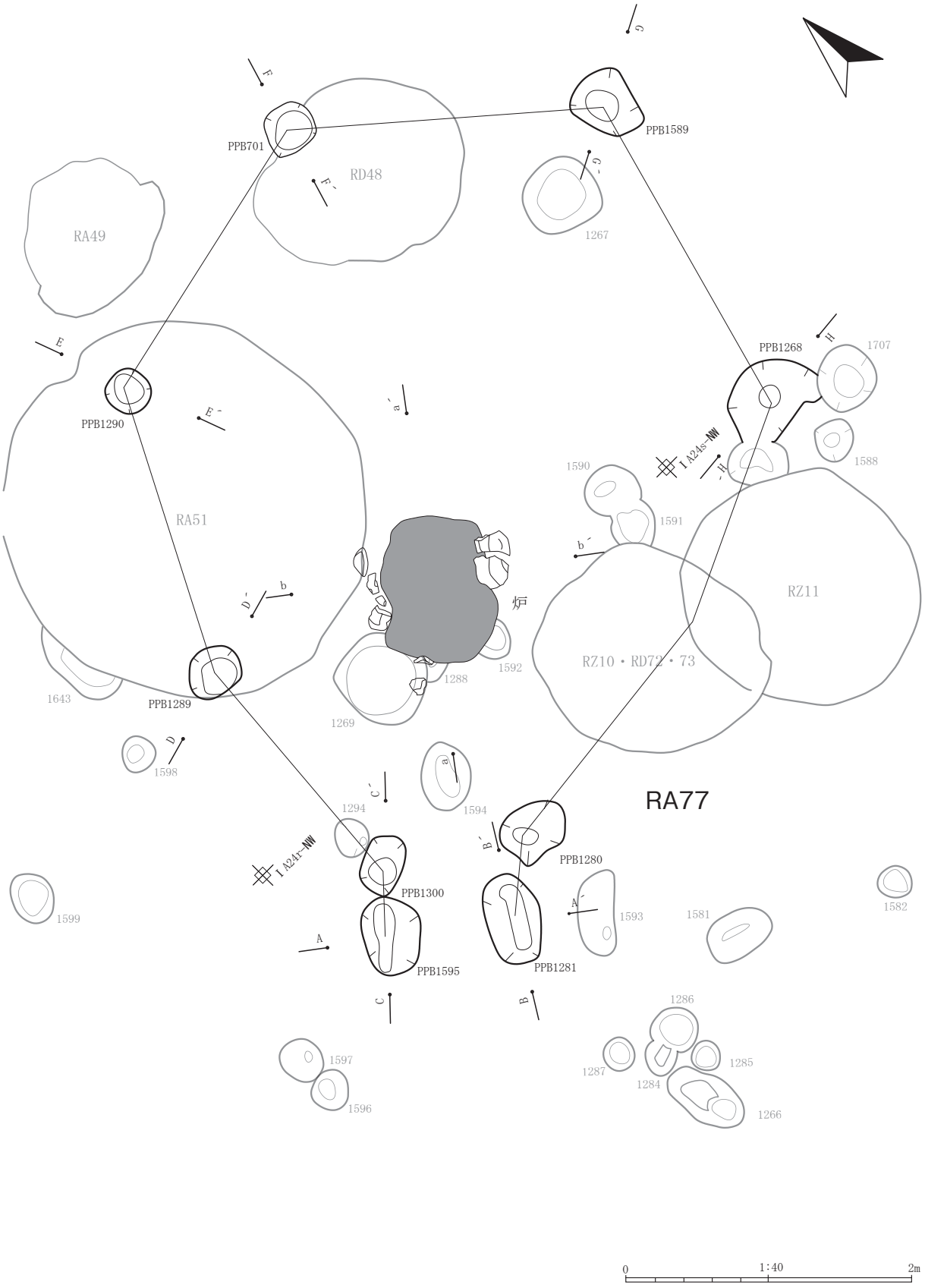
RA76 炉（a-a’・b-b’）
０．根撹乱.
1a．7.5YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．焼土粒（φ5㎜）極微量.
1b．7.5YR5/6 明褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまりやや密.
2a．7.5YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．焼土粒（φ5㎜）極微量.
2b．10YR3/4 暗褐色．シルト.
３．5YR5/8-4/8 明赤褐 - 赤褐色．シルト．強変焼土．上面が燃焼面か.
４．炉 b 焼土.

※石囲炉．東端に土器埋設．礫の残存は南辺のみ．土器埋設部掘方が重複する炉 b の焼土を切っている.

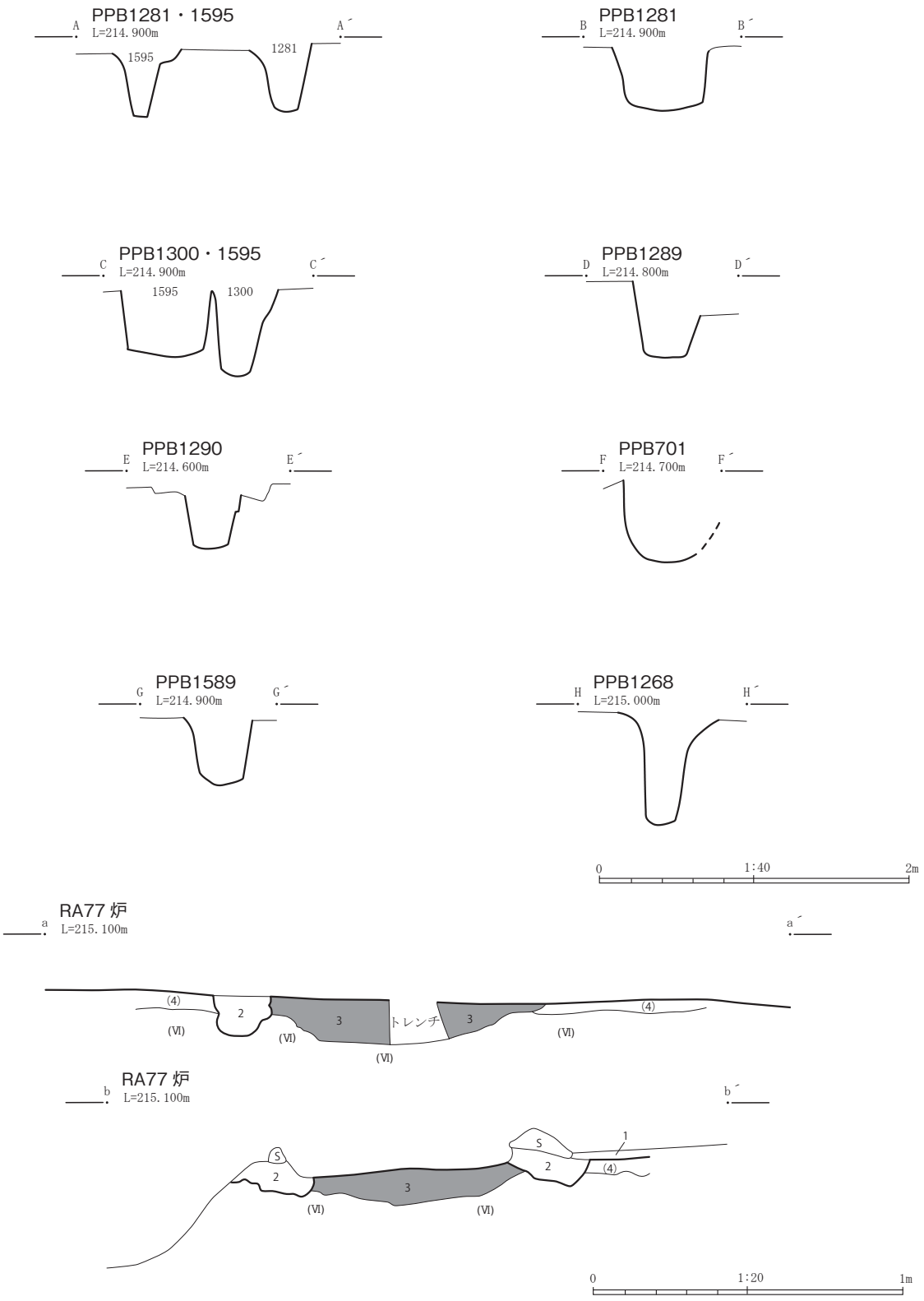
RA76 炉（c-c’）
０．根撹乱.
１．5YR5/8 明赤褐色．シルト．ガリガリの焼土ヒビがあってブロック状．上面が燃焼面か？
２．5YR5/8-4/8 明赤褐 - 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまり密.

0　1:20　1m

第117図　RA76張出部・柱穴・炉断面



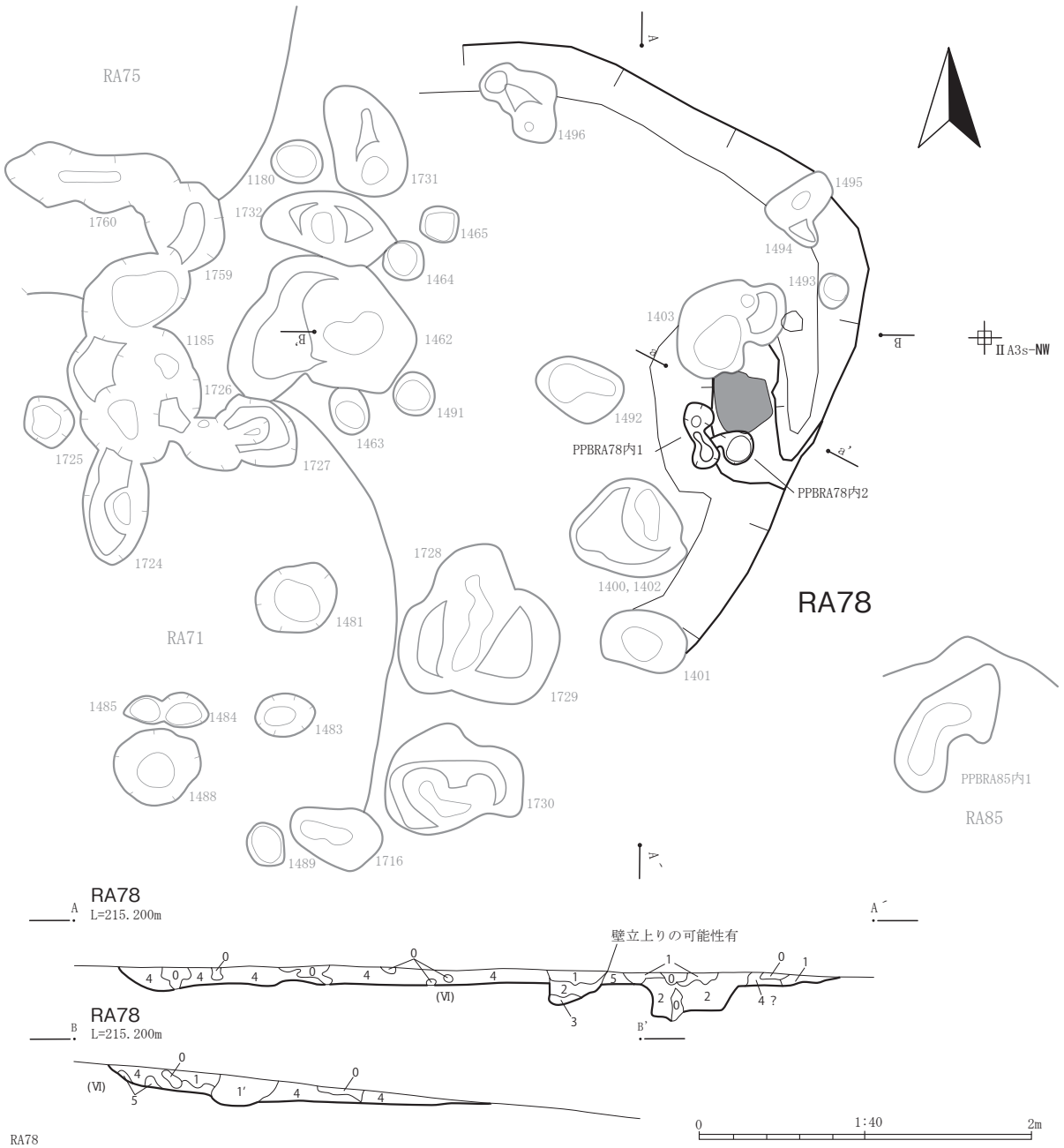
第118図　RA77平面



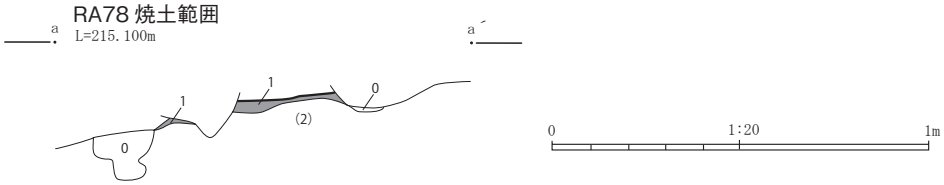
RA77 炉
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．炉を直に覆う層.Ⅳ～Ⅴ層相当.
２．10YR2/3 黒褐色．シルト．１に良く似る（わずかに明るい）.
３．5YR4/8 赤褐色．シルト．焼土．粘性有．締まりやや密．下部まで一律に赤変．硬化面なし.
(4)．10YR3/4 暗褐色．シルト.Ⅴb 相当.

※⌀15 ～ 25 ㎝の礫による石囲炉？（北側に礫残存しない）．礫は被熱赤変．焼土は厚さ 15 ㎝ほどの赤変認められる．内部はごく緩い浅皿状．硬化面は見られない.

第119図　RA77柱穴・炉断面

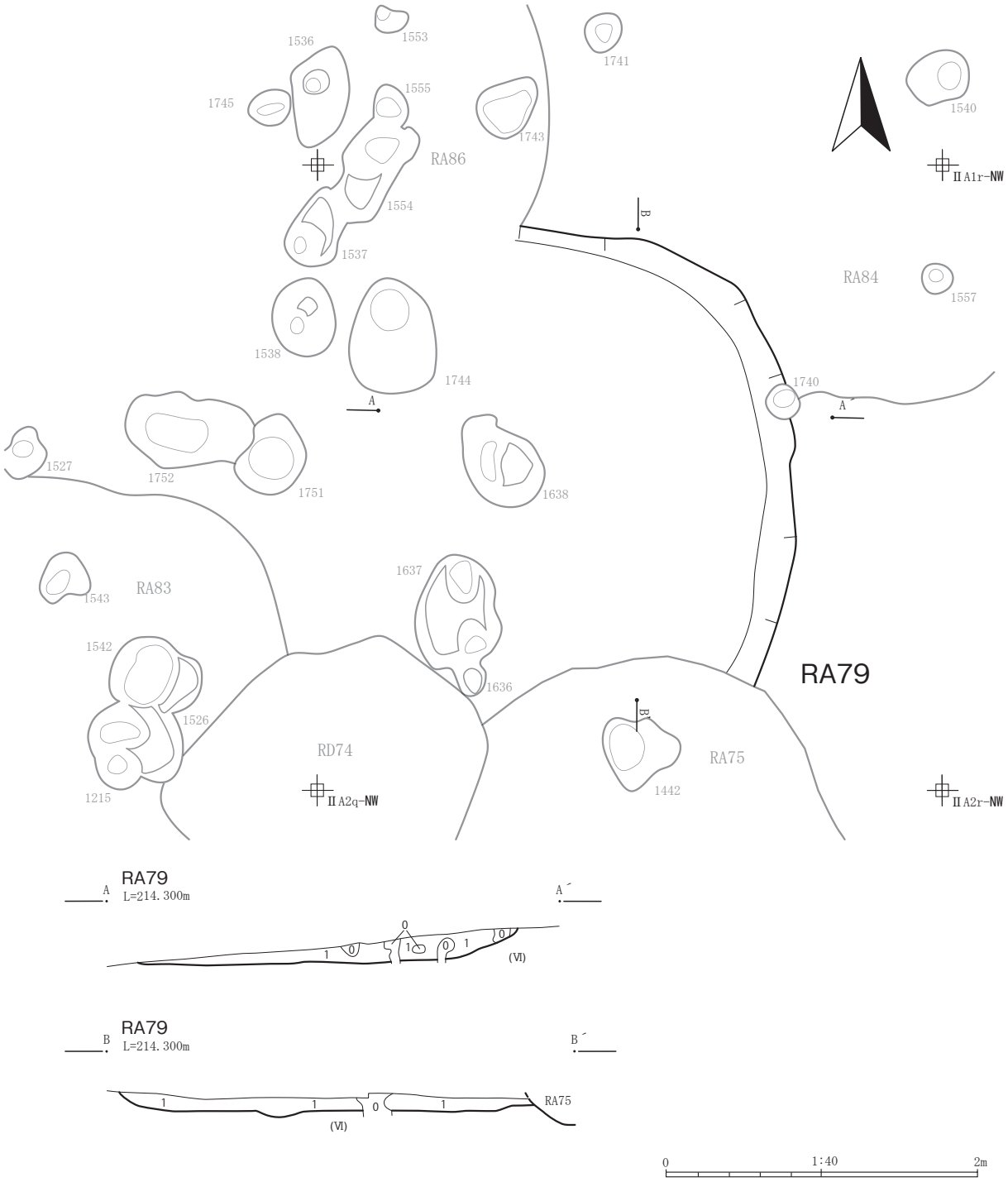


RA78
0．根攪乱.
1'．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．黒っぽい．Va・Vb の混土か.
1．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まり密.
2．10YR3/4-4/4 暗褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.
3．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.
4．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵ層に似るがやや暗く締まり欠く.
5．10YR4/4 褐色．シルト．YP 小片微量含む．Ⅵ層の崩落層か.
※北東部にコーナー持つことから方形基調の平面形と推定．北東コーナー付近は壁が残存．西半部流失．南部は不明瞭．壁の立ち上がりは内弯外傾．床面平坦．壁直下に不整な凹凸．東壁際に焼土持つ．検出面から見えている．埋土中間か、床面か不明．南西部に RA71 近接．新旧不明.



RA78 焼土範囲
0．根攪乱.
1．7.5YR4/6 褐色．シルト．焼土．発色鈍い.
(2)．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．Ⅵ層土だがわずかに暗い.
※RA78 東壁面に生成の焼土（炉？）．根攪乱、少ピットに壊されて原形不明だが、焼土の広がりは概ね円形を呈する．生成面は床面よりも高くて、マウンド状（テラス状）を呈する.

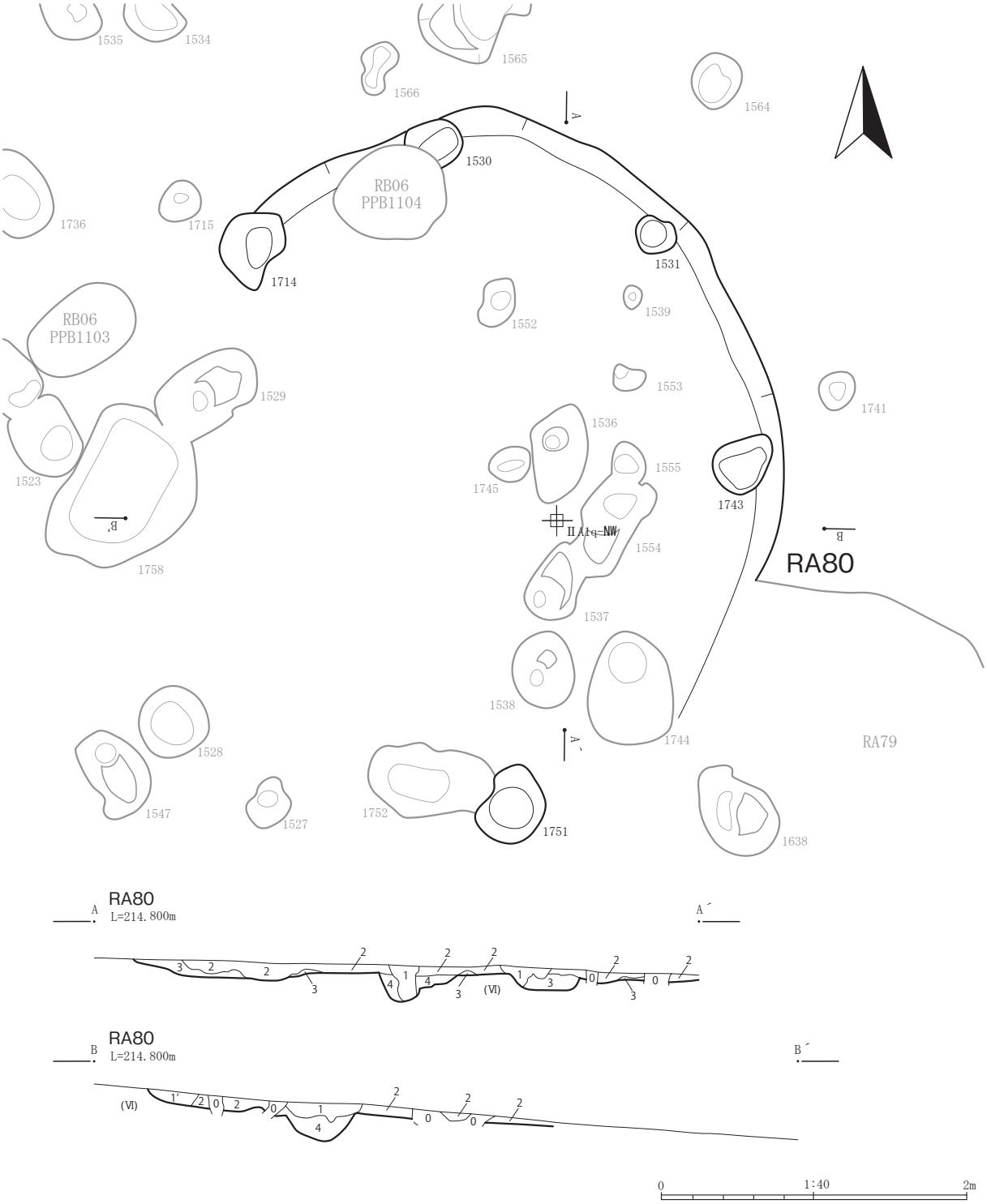
第120図　RA78



RA79
１．10YR3/4-4/4 暗褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．

※平面形は隅丸方形～楕円と推定．南部は RA75 と重複．西部は流出で全体形状不詳．RA75 との新旧は不明（精査の順序は RA75 が先だが、断面ではわからない）．壁の残存は北東部のみ、内弯外傾．床は平坦だが壁沿いが不整凹凸．

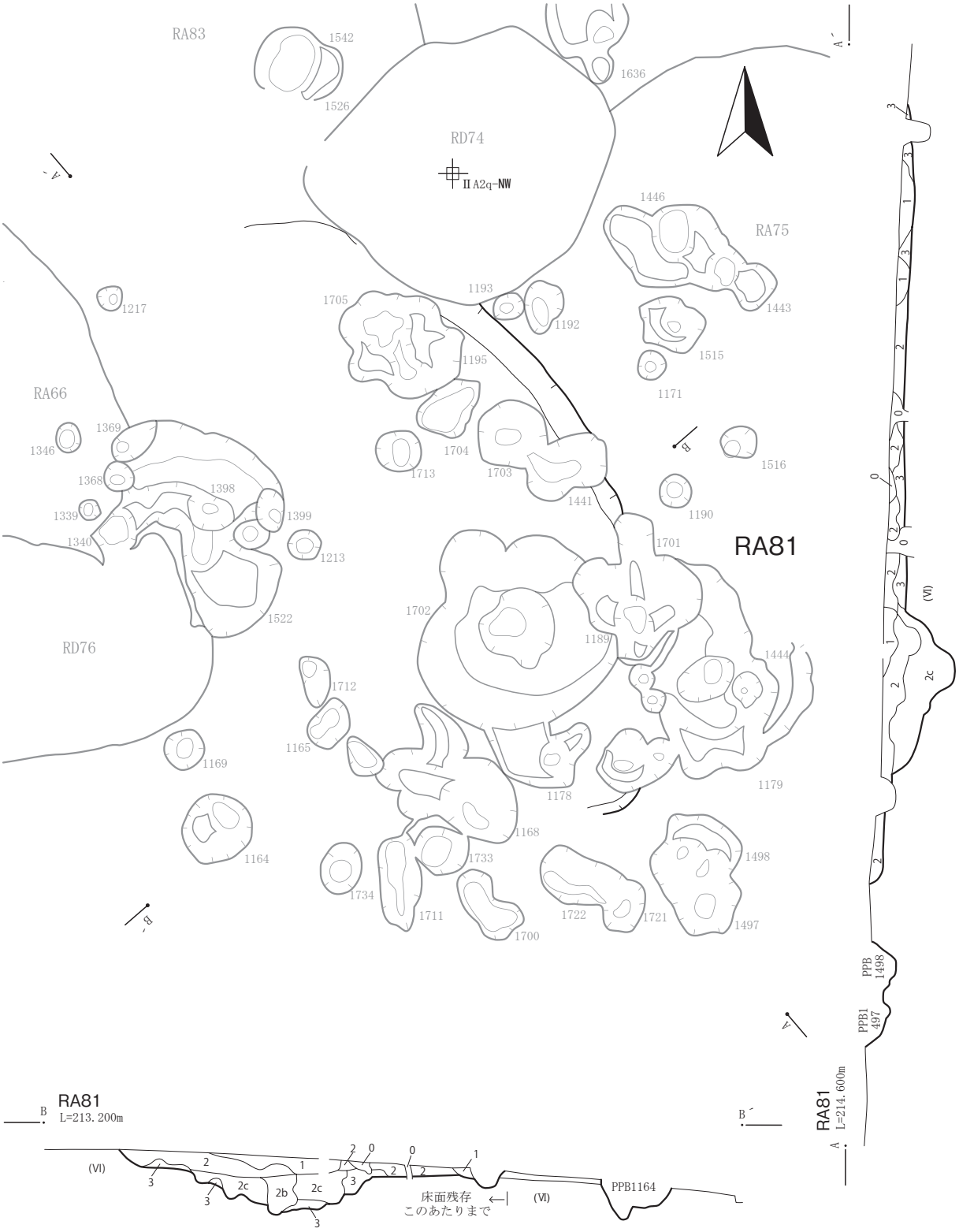
第121図　RA79



RA80
０．根撹乱.
１．10YR2/3-3/4 黒褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まり密．黒っぽい.
1'．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.
２．10YR3/4-4/4 暗褐－褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.
３．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．ＹＰ小片多．Ⅵ再堆積土.
４．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Pit 掘り方埋土.

※楕円～隅丸方形か．南東部にRA79重複．西半部流出で、壁の残存は北東部のみ．壁は内弯外傾．床はほぼ平坦．斜面下方側の傾斜は流失によるとみられるが、土層断面では埋土の西限を見いだせない（B-B' 右）北東壁際に根撹乱状の小Pit が集中.

第122図　RA80

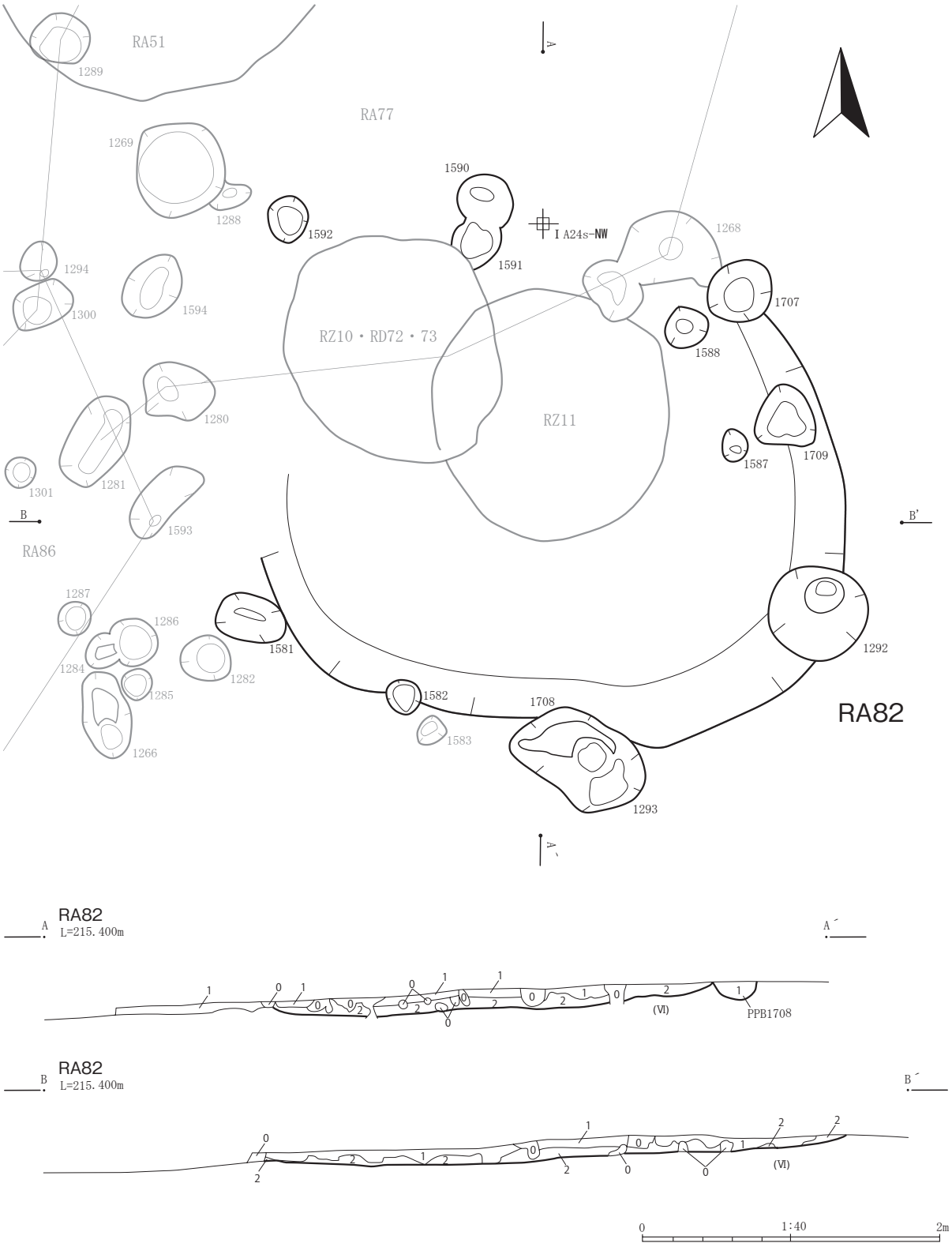


RA81
０．根撹乱．
１．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．
２．10YR4/4 褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．
2b．２にⅥ土ブロックごく微（2C より混入少ない）．２・2c よりやや暗い．柱痕のように見える．
2c．２にⅥ土ブロック多．全体黄味（柱穴掘り方のように人為埋土）．
３．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵ土再堆積．

※北東側のみ壁残存．南西部流出．北東部壁は弧状を呈するので、楕円の可能性あるが、方形基調かもしれない．柱穴は北東壁直下に並んでいる．楕円形に並ぶのでは･･･？壁は内弯外傾．床面は平坦．南東部に寄った位置に一段深い掘り込み持つ(焼土なし．柱穴状の断面呈す．L 字状の柱穴列に切られているのかも．要検討)．

0　1:40　2m

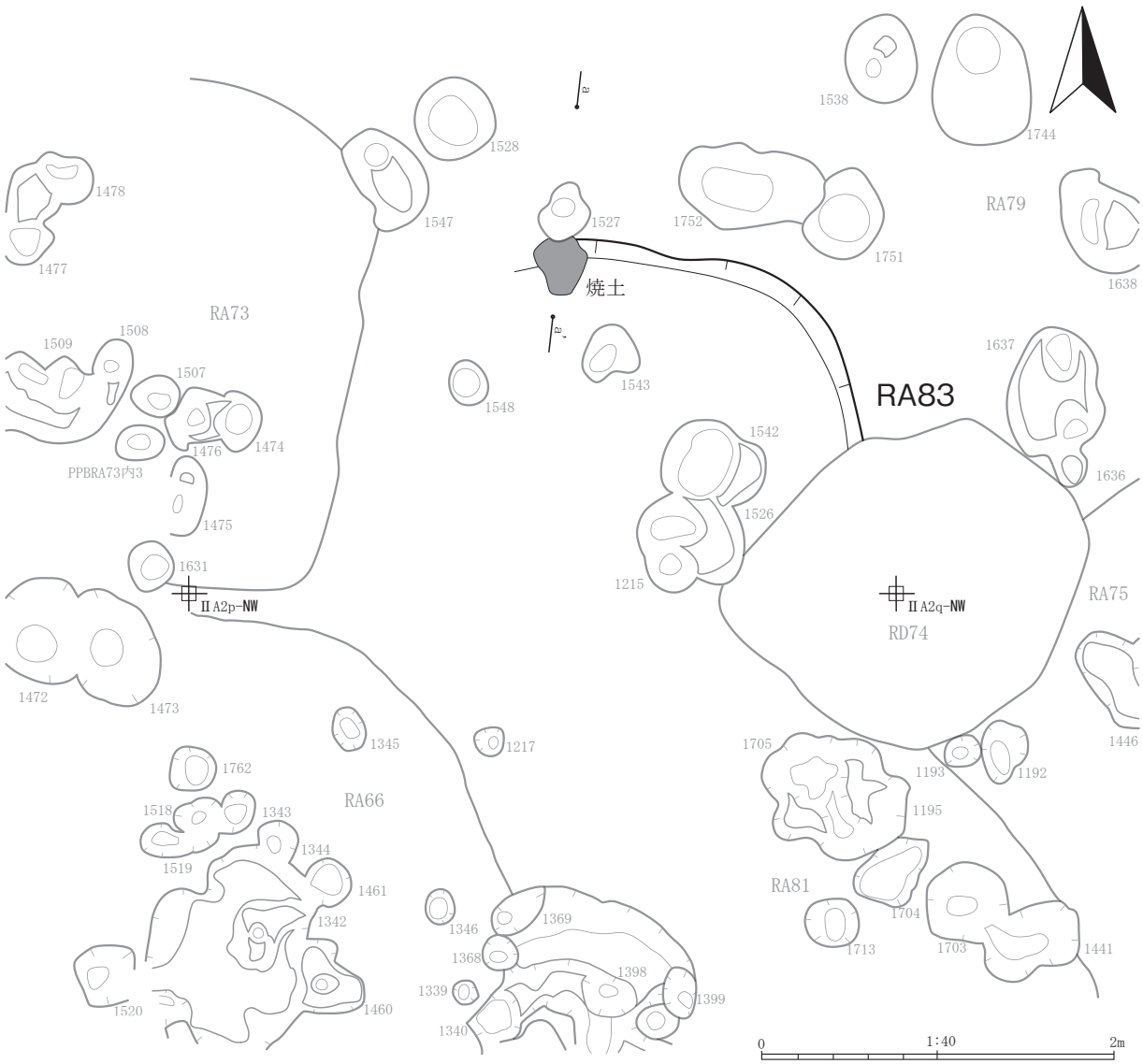
第123図　RA81

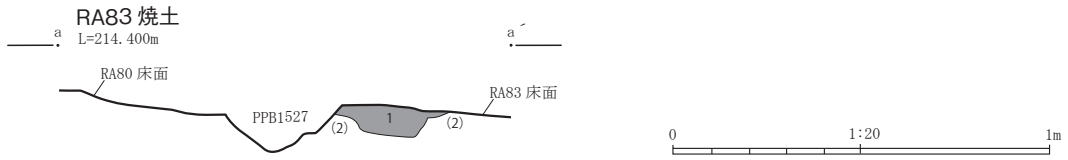


RA82
０．根撹乱．
１．10YR3/4-4/4 暗褐－褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．
２．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵに良く似るが、わずかに暗く締まり欠く．

※平面形、楕円．壁、内弯外傾．床面、平坦．柱穴は壁面又は直上・直下．北部頂上に位置．

第124図　RA82

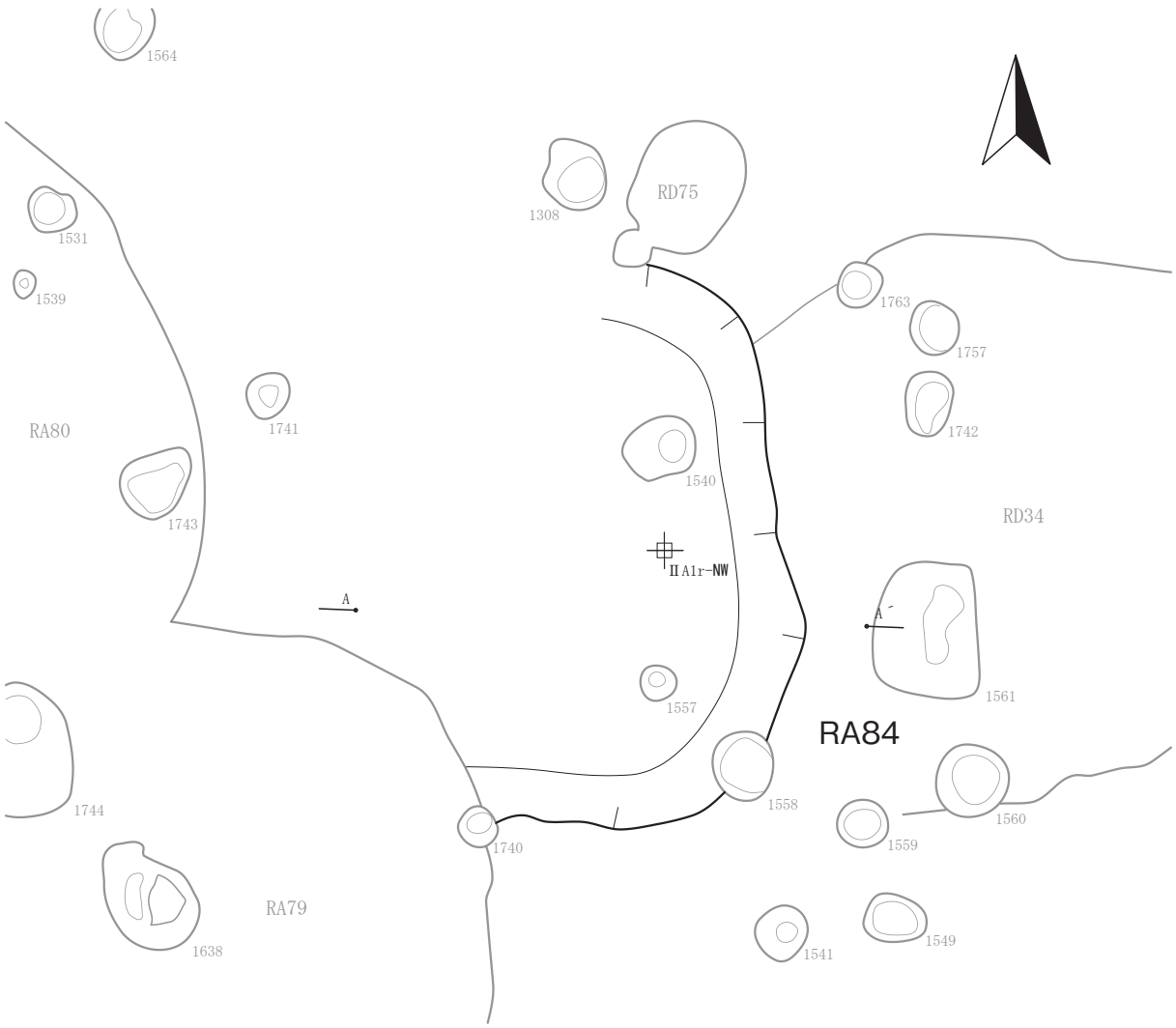




RA83 焼土
1．7.5YR4/6 褐色．シルト．焼土．粘性やや有．締まりやや密．
(2)．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．やや濁ったⅥ層土．住居床面を成す土層．

※RA83 の北壁に生成の焼土である．他例は床面より一段高く生成するが、本例は床面と同レベル．検出（確認）時点での明度が高かったことから、焼成面を掘り下げてしまった可能性もある（本来は一段高かったのかも・・・）．
北側で RA80 と重複しており、これに帰属の可能性有る PPB1527 に焼土の北辺を壊されているようだが、住居同士の新旧は不明である．本焼土のほうが新しいかもしれない・・・．

第125図　RA83

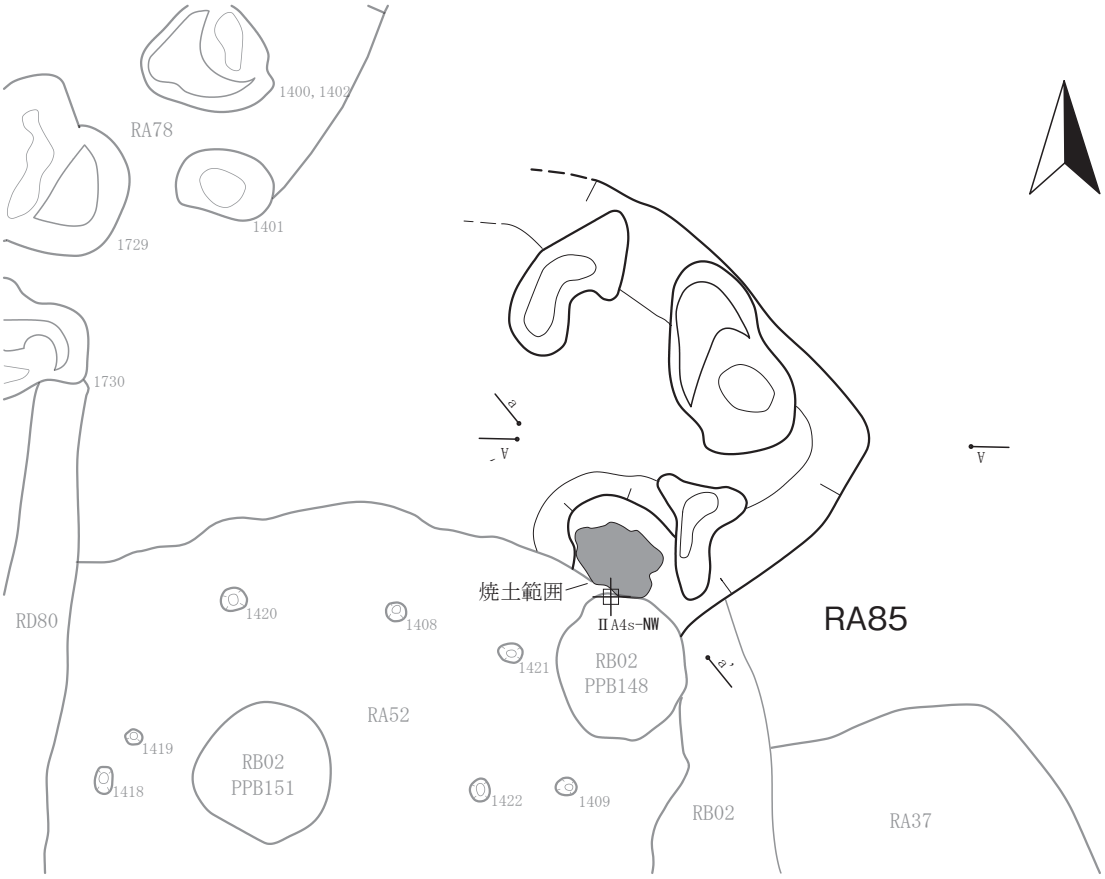


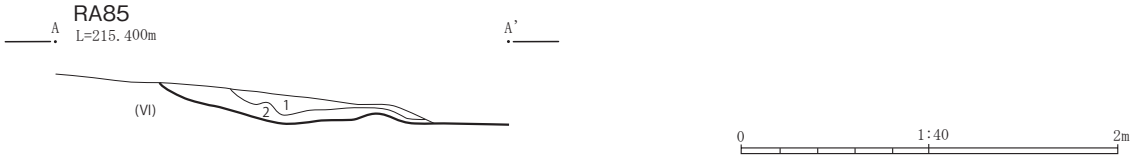
RA84
０．根撹乱.
１．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎.
２．10YR4/6 褐色．シルト．YP 片少.Ⅵ層再堆積.

0　1:40　2m

※平面形は方形．西半部、根撹乱により乱され床面に小凹凸．北西部トレンチで破壊．西壁流失.

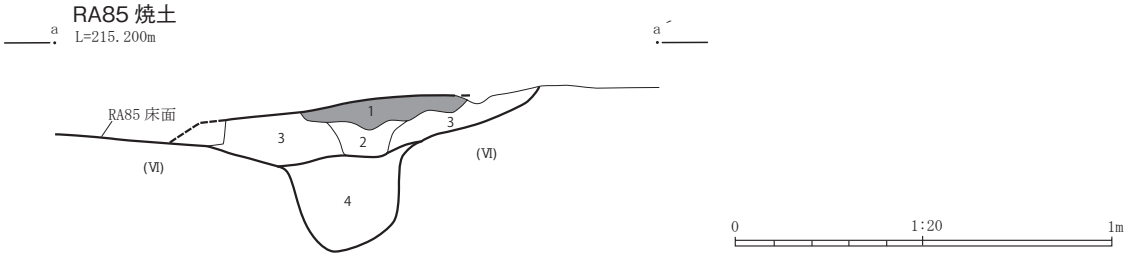
第126図　RA84





RA85
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．
２．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．

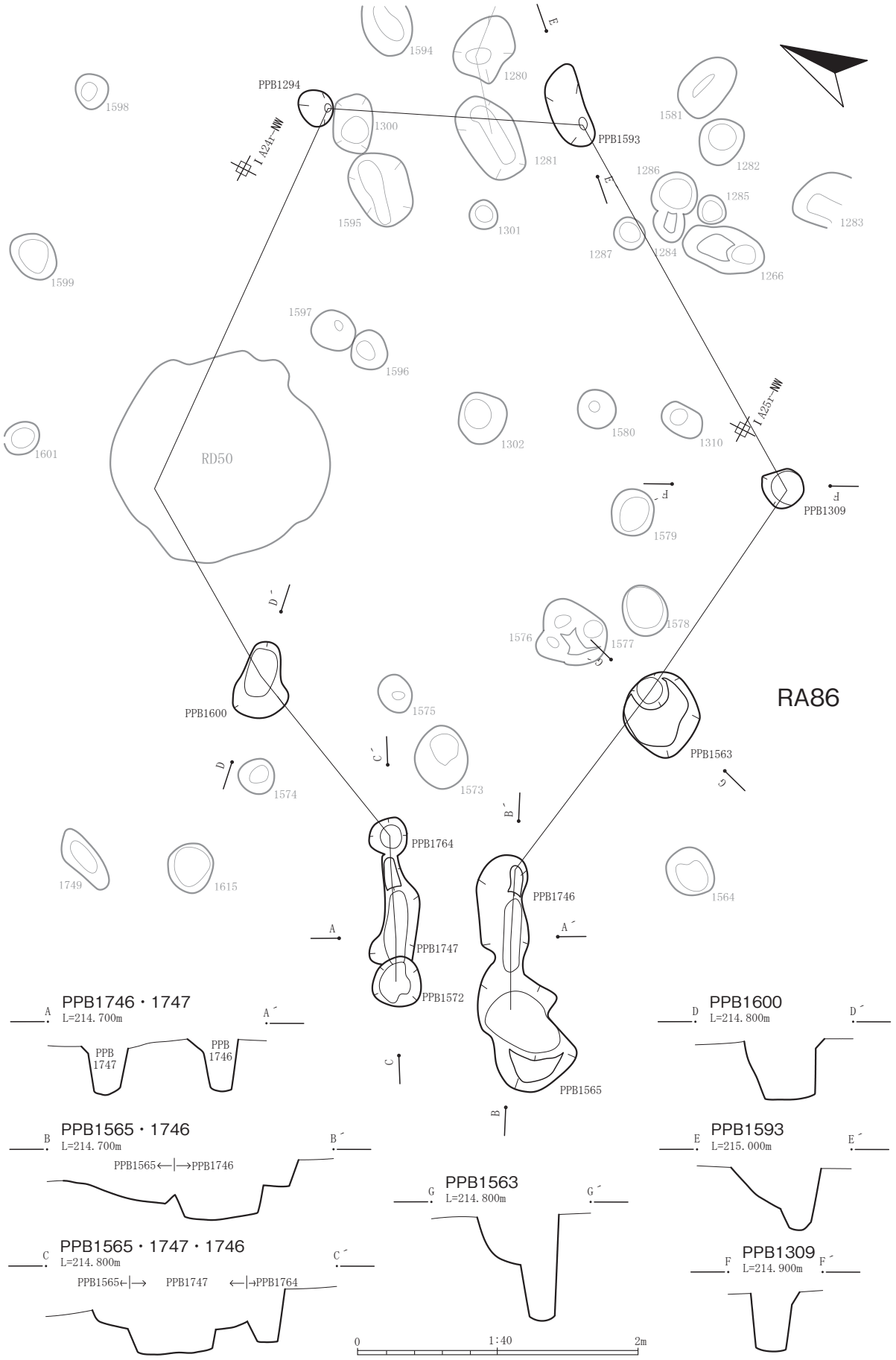
※東側コーナー付近のみ壁が残存する住居．コーナーの形状から方形を呈するものと見られる．床面は特に壁際で凹凸が著しい．南東側を向く壁面に焼土生成．柱穴配置は不明．



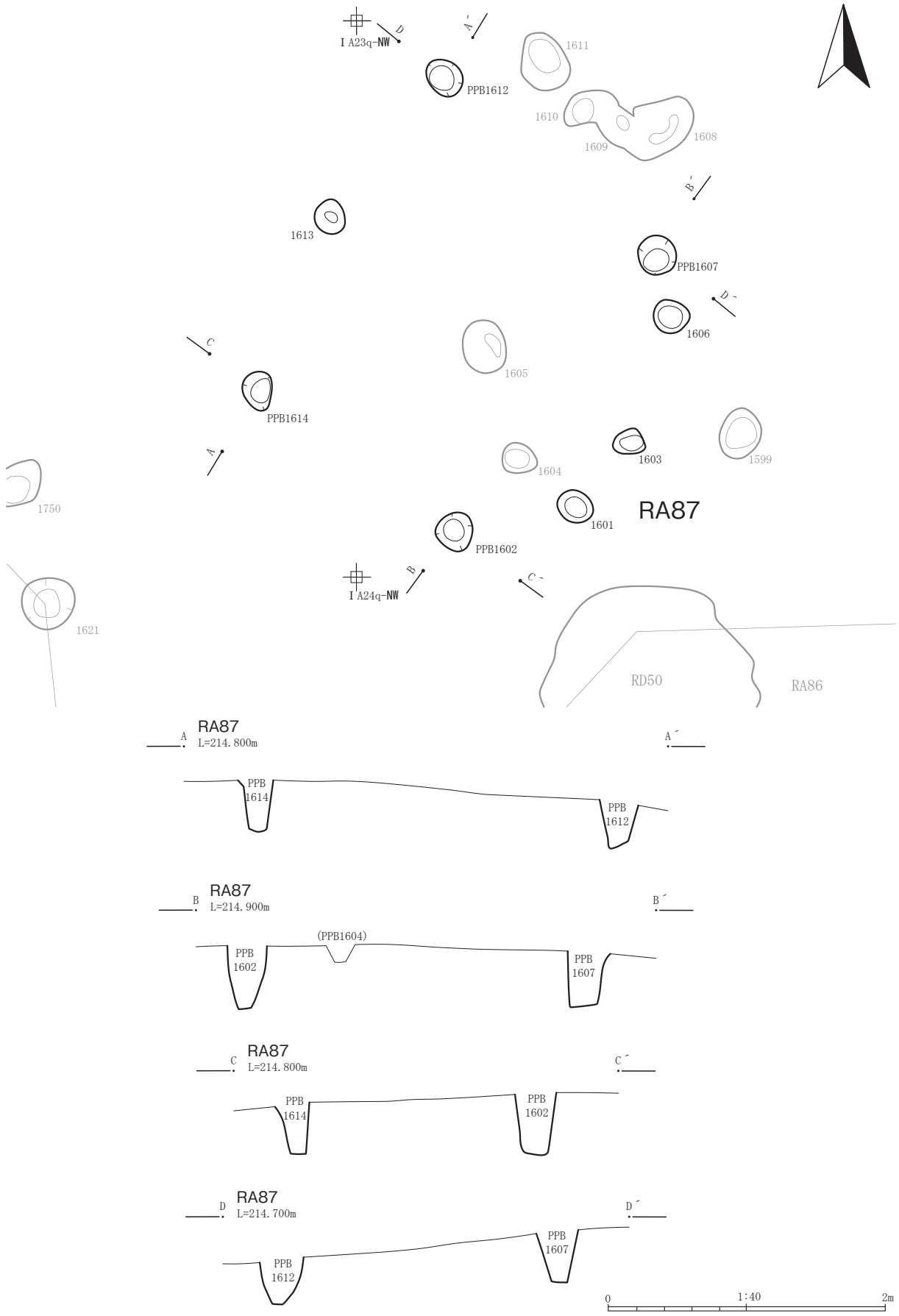
RA85 焼土
１．7.5YR4/6 褐色．シルト．焼土．粘性やや有．締まりやや密．３の上面に生成の焼土．
２．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．３より黒っぽい．
３．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Ⅵ土ブロックやや多．
４．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．ボソボソ．

※RA85 の南東に向く壁際に検出の焼土である．本住居は壁際にやや大きな起伏（凹凸）が有り、３層はこれらの凹凸を埋めて均した掘り方埋土の可能性がある．したがって、１層の焼土は、住居床面と同時の面に生成されたものとみなすことができる．他例と同様に床面より一段高い位置に生成するものである．４層は３層に覆われる Pit であり、帰属は不明．

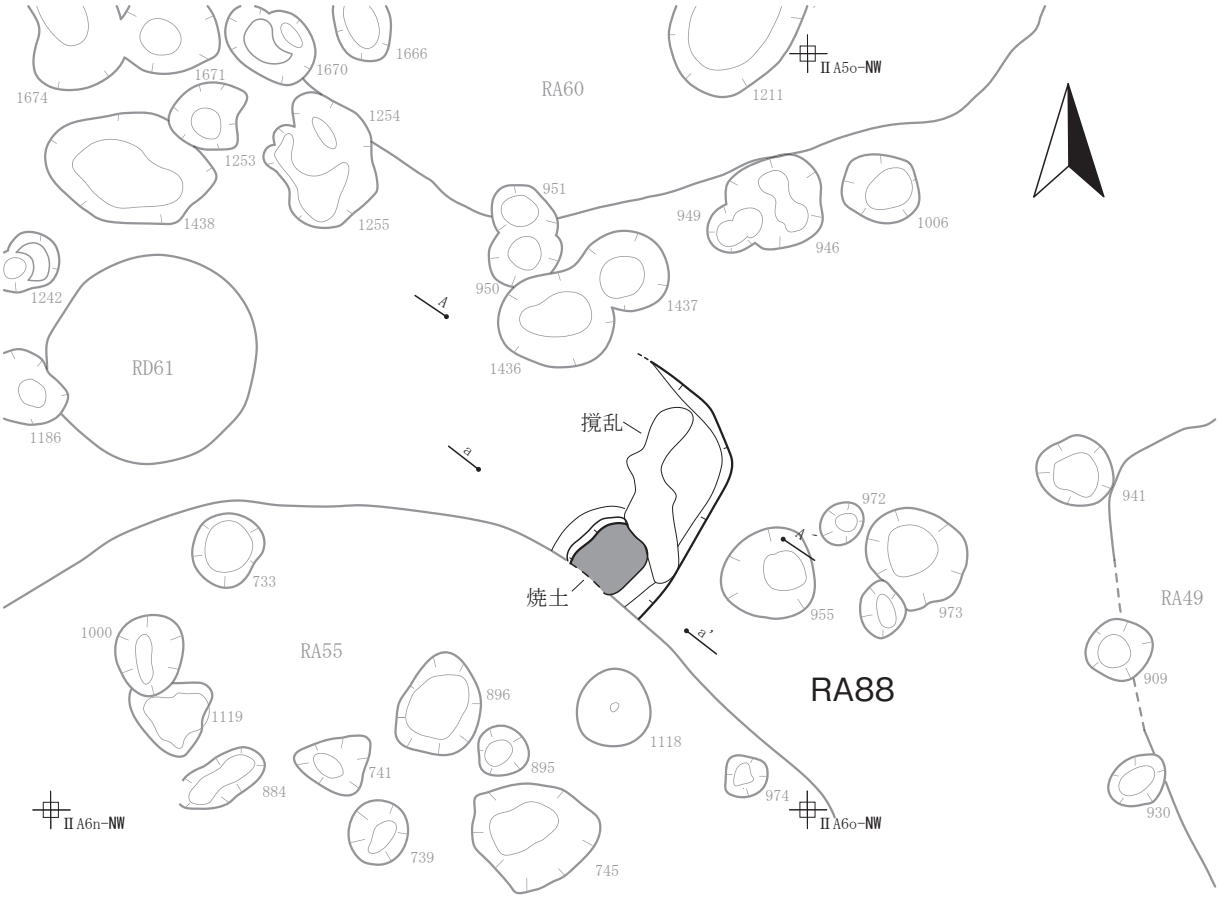
第127図　RA85

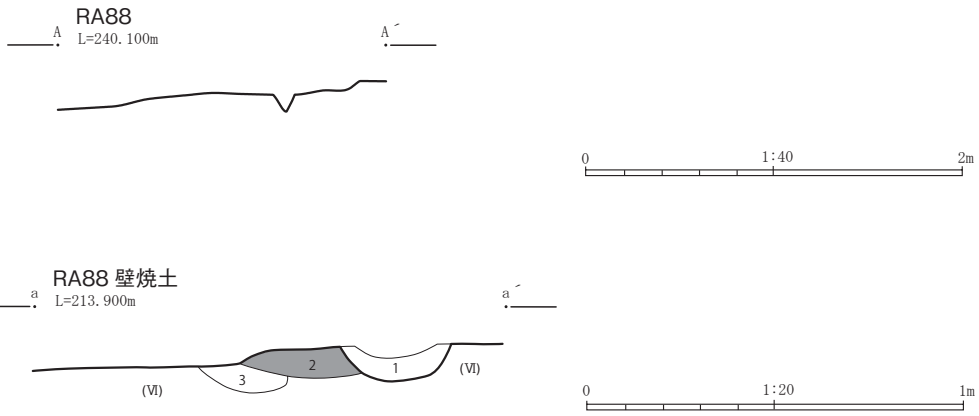

RA86
RD50
PPB1294
PPB1593
PPB1309
PPB1600
PPB1563
PPB1764
PPB1747
PPB1572
PPB1746
PPB1565
1.424r-NW
1.425r-NW
PPB1746・1747
L=214.700m
PPB1747
PPB1746
PPB1565・1746
L=214.700m
PPB1565←|→PPB1746
PPB1565・1747・1746
L=214.800m
PPB1565←|→ PPB1747 ←|→PPB1764
PPB1600
L=214.800m
PPB1563
L=214.800m
PPB1593
L=215.000m
PPB1309
L=214.900m
0
1:40
2m

第128図　RA86


I A23q-NW
D
A´
1611
PPB1612
1610
1609
1608
B´
1613
PPB1607
D´
1606
C
1605
PPB1614
A
1604
1603
1599
1750
1601
RA87
PPB1602
B
C´
I A24q-NW
1621
RD50
RA86
RA87
L=214.800m
A
A´
PPB 1614
PPB 1612
RA87
L=214.900m
B
B´
(PPB1604)
PPB 1602
PPB 1607
RA87
L=214.800m
C
C´
PPB 1614
PPB 1602
RA87
L=214.700m
D
D´
PPB 1607
PPB 1612
0
1:40
2m

第129図　RA87





RA88 壁焼土
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．壁際に沿って焼土を切っている．
２．7.5YR4/6 褐色．シルト．焼土．粘性有．締まりやや密．発色良いが根撹乱で乱されている．
３．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Ⅵと同じく火を受けている．掘り方埋土か？

※RA88 南東向き壁際の焼土．生成面はマウンド状（テラス状）に床面より高い．

第130図　RA88

（２）　方 形 柱 穴 列

ＲＢ01配石・敷土を伴う方形柱穴列（第131 ～ 133図、写真図版94 ～ 97）

〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡＡ４ｍグリッド付近に位置する。Ⅳ層上面（Ⅲ層下面）において、２つの近接した焼土とその周囲に広がる明瞭な黄褐色土範囲として検出された。黄褐色土範囲の周縁には部分的に列状に並ぶ礫も確認された。さらに精査の過程において黄褐色土範囲全体を面的に掘り下げたところ、黄褐色土が６箇所の円形範囲に収斂し、これらが長方形に配列することが判明した。

〔柱穴列〕長方形（南－北２間・東－西１間）に並ぶ６個の大形柱穴で構成される（PPA29 ～ 34）。柱穴列の外端長は、東辺・西辺が480㎝、北辺400㎝、南辺340㎝である。南東隅のPPA32のみが若干内側（西側）に寄っているため、北辺に比して南辺がやや短い。主軸方位はＮ－１°－Ｅで、RA13と同様、意識的に南北方向に揃えられたものと考えられる。柱穴はいずれも径80㎝前後、深さは約120㎝、柱配置から推定される柱間寸法は、南北（桁行）が210㎝前後、東西（梁行）が300㎝前後である。柱穴の底面には径15 ～ 20㎝ほどの柱当たりが認められることから、柱材の設置が行われたことは明らかであり、PPA29・同31の断面には、掘方埋土と柱痕跡様の土層の立ち上がりが観察されている。ただし、いずれの柱穴においても埋土は総じて締まりを欠き、開口部が掘り広げられていること等も考慮すれば、後に柱材の抜き取りが行われたものと判断される。断面に観察される柱痕様の土層は、抜き取りよって生じた空隙に掘方埋土の崩壊土や地表からの流入土が二次的に堆積したものと思われ、また、壁面に沿って所々に観察された掘方埋土も、痕跡的に残存した部分と考えられる。柱材の抜き取り後は上記のようにして埋没が進み、開口部付近は擂鉢状の凹みとなったらしい。この凹みはその後黄褐色土に被覆され埋没を終えている。黄褐色土の敷き均し行為については以下に詳述する。

〔敷土範囲〕黄褐色土範囲は570×540㎝の不整隅丸方形を呈する。Ⅵ層の掘削によって得られた黄褐色土を、意図した範囲に敷き均したものと思われる。

上記柱穴に柱材が設置されたままの状態で黄褐色土の敷き均しが行われたとすれば、その後の柱材の腐朽や抜去に伴い空隙に黄褐色土が崩落・流入するはずだが、そのような痕跡は認められない。断面図及び写真にも明らかなように、開口部付近にのみ沈み込んだように堆積する黄褐色土は、そのままプラン全体に広がる敷土と断絶なく連続している。したがって、敷土行為が開始された時点においては、すでに柱材はなく、柱穴はそれぞれ半埋没の凹地状となっていて、全体への敷土行為と同時に埋め均されたものとみられる。

プラン全体においては、敷土層下面はごく浅い凹地状を呈しており、厚さ10㎝程度に埋め均された黄褐色土層は、周縁に向かって緩やかに層厚を減じている（A-A'・B-B'：３層）。下位層との層界（下面）は不明瞭で不規則な凹凸を持ち、縁部に壁らしい立ち上がりは認められない。掘方を充填したというより敷土範囲が沈み込んだかのようにも思われる。

このように、敷土層の下面は不安定であり、黄褐色土の堆積（敷き均し）以前に、住居床面のような用いられ方をしたとは考えにくい。また、敷土層は上面・下面ともに自然地形に沿って西側に傾斜しており、東縁部と西縁部の比高は20㎝程となっている。東縁部だけでなく斜面下方の西縁部でも礫やその痕跡が遺っており、遺構上面は相当程度本来の面を遺していると判断されることから、遺構上面が傾斜するのもまた本来の姿であると考えられる。

本遺構の構築面はⅣ層中に相当し、黄褐色土層（Ⅵ層）までの間には分厚い暗褐色～黒色土層（Ⅴａ層等）が存在するが、敷き均された黄褐色土には黒ボク土の混入が全く見られず、また黄褐色土自

体もブロック状を呈する部分がほとんど認められない。黄褐色土は他の地点で確保・精選され、「敷土材」としてここに用いられたと考えられる。なお、この黄褐色土は、敷土範囲の周縁に配置された石列の掘方にも連続して入れられている。石列（配石）については下記のとおりである。

〔配石〕黄褐色土範囲の東辺に沿って直線的に並べられた石列が確認されている。長さ30 ～ 50cm程度の角礫が長軸を連ねるように並べられている。列をなして残存するのは東辺のみだが、南辺及び西辺にも点々と礫がのこり、これらに連なるように礫の抜けた痕跡（Ⅲ層土の入る凹み）も認められることから、本来は敷土範囲の縁部全周に礫が配置されていた可能性が高いと考えられる。礫の掘方は小穴状・溝状で、その底面に並べ置かれた後に周囲を黄褐色土で埋められ、上半部が地上に露出するように据えられたらしい。礫の掘方は敷土範囲の周縁に沿って分布し、東辺と南辺、西辺南半ではごく浅い溝状を呈している。西辺には小穴状の掘方も南北方向に並んでいる。礫掘方の黄褐色土と敷土範囲全体のそれとの間に先後関係は認められず、黄褐色土の敷き均しと礫配置は同時に行われたものと考えられる。

〔焼土〕敷土範囲の中央部において、主軸上に２基並ぶ焼土遺構が検出された。生成面は敷土層上面である。いずれも南北にやや長い楕円形で、北側の焼土ａは132×98cm、南側の焼土ｂは116×88cmと大きく、厚さも15cm前後に及び、強い火熱の痕跡であることを窺わせる。燃焼面は斜面下方の西側がやや削られている。

〔構築～廃絶後の経過〕上記の所見から、本遺構のたどった経過は次のように理解される。

①６つの大形柱穴の掘削。

②柱材設置、掘方の埋め戻し。

③柱材の撤去、空隙への堆積。

④礫配置のための溝状・小穴状の掘方、黄褐色土敷き均し範囲全体のごく浅い掘方の掘削。

⑤礫配置及び黄褐色土敷き均し。

⑥敷土範囲中央上面での燃焼行為。

柱穴列（掘立柱建物？）としての段階（①～③）と、その「跡地」が黄褐色土と配石で可視化された段階（④～⑥）に大別される。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭と思われる。

〔出土遺物〕土器（368 ～ 374）〈第219図、写真図版169〉。

円盤状土製品（1189）。石匙（2009）、箆状石器（2104・2105）、敲磨器類（2391）。

ＲＢ02敷土を伴う方形柱穴列（第134 ～ 136図、写真図版98・99）

〔位置･検出状況〕中央東部、ⅡＡ４ｒグリッド付近に位置する。Ⅳ～Ｖａ層上面（Ⅲ層下面）において、焼土遺構とその周囲に広がる明瞭な黄褐色土範囲として検出された。さらに精査の過程において黄褐色土範囲全体を面的に掘り下げたところ、黄褐色土が４箇所に収斂しこれらが概ね方形に配列することが判明した。

〔柱穴列〕方形に並ぶ４個の大形柱穴で構成される（PPA148 ～ 151）。柱穴列の外端長は、330×270cm、長軸方位はＮ－13°－Ｗ（短軸Ｎ－77°－Ｅ）である。柱穴は径60 ～ 80cm程、深さは約130cm、柱配置から推定される柱間寸法は270×210cm程である。これらの柱穴は皿状の掘り込み（1-4層下面）の内部に配置されている。この掘り込みは、平面形が520×500cmの円形～隅丸方形に近い不整形で、検出面からの深さは20 ～ 30cmである。底面は凹凸が目立ち、縁部の立ち上がりも判然としない。また、

掘り込みの埋土と底面の境界は不明瞭で、地表面からの流入土層も見られず、住居跡の掘方埋土（貼床）に似た、掘削土をそのまま均したような様相である。よって掘り込み埋土の下面が住居の床面のような用いられ方をしたとは考えにくく、柱穴掘削とほぼ同時に掘削され、柱材基部の埋設に伴い、柱穴と共に埋め戻されたものである可能性が高い。D-D'断面右側のPPA150付近の堆積状況を見ると、柱材設置の際の堆積土とみられる1-5層に続いて、これに酷似する1-4層が堆積し、その後、柱穴の上部が掘り広げられ柱材が抜き取られた様子（1-2・1-3層）が見て取れる。柱穴の埋土はいずれもボソボソとして締まりを欠いている。柱材の抜き取り後は崩落土等によって埋没し、最終的に開口部付近は擂鉢状の凹みとなったらしい。この凹みはその後黄褐色土（1-2層）に被覆され埋没を終えている。黄褐色土の敷き均し行為については下記。

〔敷土範囲〕残存する敷土範囲は径約480cmの略円形を呈する。敷土層の厚さは5 ～ 10cm。部分的に削平を受けており、本来は南東側にさらに広がっていたものとみられる。Ⅵ層の掘削によって得られた黄褐色土を、意図した範囲に敷き均したものと思われる（1-2層）。敷土には旧表土（黒色系の土壌）が混入しないことから、精選された黄褐色土が「敷土材」として用いられたと考えられる。敷土層と下位層との層界は不明瞭で不規則な凹凸を持ち、縁部に明瞭な立ち上がりも認められない。また上面・下面ともに自然地形に沿って西側に傾斜し、東縁と西縁の比高は20cm程となっている。このように敷土層の下面は不安定であり、黄褐色土の敷き均し前に内部が住居床面のような用いられ方をしたとは考えにくい。なお、柱材の抜き取りが行われた後の柱穴は、この時点でそれぞれ半埋没の凹地となったいたと思われる。これらは全体への敷土行為と同時に埋め均されている。

〔焼土〕遺構の中央付近において、敷土層上面を生成面とする焼土が検出された。126×94cmの楕円形、厚さ10cmで、規模の大きなものである。赤変は顕著だが、本来の燃焼面は若干の削平（流失）を受けている可能性が高く、硬化部は認められなかった。

〔構築～廃絶後の経過〕上記の所見から、本遺構のたどった経過は次のように理解される。

①４つの大形柱穴及び柱穴列構築範囲の掘り込み掘削。

②柱材設置、柱穴列構築範囲の掘り込みの埋め戻し。

③柱材の撤去、空隙への再堆積。

④敷土範囲の掘り込み掘削（？）。

⑤黄褐色土敷き均し。

⑥敷土範囲中央上面での燃焼行為。

柱穴列（掘立柱建物？）としての段階（①～③）と、「跡地」が敷土によって可視化された段階（④～⑤）に大別される。

〔重複〕RA37・RA38を切り、RG04・RD80に切られる。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭と思われる。

〔出土遺物〕土器（375・376）〈第219図、写真図版169〉。

鐸形土製品(1168)。石鏃(1565 ～ 1571・1733・1963)、石匙(1990・2003)、敲磨器類(2726)、自然礫(2832)。

ＲＢ03敷土を伴う方形柱穴列（第137・138図、写真図版100・101）

〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ２ｓグリッド付近に位置する。Ⅳ～Ｖａ層上面（Ⅲ層下面）において、焼土遺構とその周囲に広がる明瞭な黄褐色土範囲として検出された。さらに精査の過程において黄褐色土範囲全体を面的に掘り下げたところ、黄褐色土が４箇所に収斂しこれらが概ね方形に配列することが判明した。

〔柱穴列〕長方形に並ぶ４個の大形柱穴で構成される（PPA152～155）。柱穴列の外端長は、300×240cm、長軸方位はＮ－９°－Ｗ（短軸Ｎ－86°－Ｅ）である。柱穴は径70～80cm、深さは100～130cm、柱配置から推定される柱間寸法は約210×180cmである。これらの柱穴は、皿状の掘り込み（1-4層下面）の内部に配置されている。平面形は430×420cmの円形～隅丸方形で、検出面からの深さは20cm前後。底面は概ね滑らかだが、自然傾斜に沿って西向きに緩やかに下っている。斜面下方の西半部では流失により立ち上がりが判然としないが、東半部では内弯しながらごく緩やかに立ち上がる壁面が認められる。この掘り込みの埋土はⅥ層土ブロックを含む暗褐色土を主体としており、自然の流入土層等を挟在せずに、上部までを一様に埋めている。住居跡の掘方埋土（貼床）によく似た、掘削土をそのまま均したような様相である。掘り込みの下面が住居床面のように用いられた痕跡は一切なく、柱穴掘削と同時的に掘削され柱材基部の埋設に伴って柱穴と共に埋め戻されたものと考えられる。さて土層断面に見られるように、４つの柱穴はこの掘り込みの埋土を上方から切っている。いずれの柱穴でも開口部が後に掘り広げられており、埋土は締まりを欠いている。これらを考慮すれば、同種の他遺構と同様に、柱材の抜き取りが行われたと考えられる。抜き取り後の空隙は崩落土等によって埋没し、最終的に開口部付近は擂鉢状の凹みとなったらしい。この凹みはその後黄褐色土（1-2層）に被覆され埋没を終えている。黄褐色土の敷き均し行為については下記。

〔敷土範囲〕柱穴が配置された掘り込みの埋土の上位を被覆している。全体的に削平を受けており、特に縁部ほど境界が不明瞭となっているが、径約440cm程度の不整形範囲に残存している。層厚は厚いところで約10cm程度。用いられた黄褐色土はⅥ層の掘削によって得られたとみられ、これを意図した範囲に敷き均したと考えられる（A-A'･B-B'：３層）。敷土には旧表土（黒色系の土壌）が混入しない。精選された黄褐色土が「敷土材」として用いられたと思われる。敷土層の下面は不規則な凹凸を持ち下位との層界も不明瞭ある。よって黄褐色土が敷き均される前段階に、内部が住居床面のような用いられ方をしたとは考えにくい。なお、柱材の抜き取りが行われた後の柱穴は、それぞれ半埋没の凹地となったいたと考えられる。これらは全体への敷土行為と同時に埋め均されている。

〔焼土〕遺構の中央付近において、敷土層上面を生成面とする焼土が検出された。径98cmの略円形、最大16cmと、規模の大きなものである。赤変は顕著だが、本来の燃焼面は若干の削平（流失）を受けている可能性が高く、硬化部は認められなかった。

〔構築～廃絶後の経過〕上記の所見から、本遺構のたどった経過は次のように理解される。

①４つの大形柱穴及び柱穴列構築範囲の掘り込み掘削。

②柱材設置、柱穴列構築範囲の掘り込みの埋め戻し。

③柱材の撤去、空隙への再堆積。

④敷土範囲の掘り込み掘削（？）。

⑤黄褐色土敷き均し。

⑥敷土範囲中央上面での燃焼行為。

柱穴列（掘立柱建物？）としての段階（①～③）と、「跡地」が敷土によって可視化された段階（④～⑤）に大別される。

〔重複〕RA36を切る。また南縁部に重複するRD63は、本遺構の精査後に検出されたものであるが、埋土上部には本遺構から連続する黄褐色土が堆積している。構築時期の先後関係は明らかでないが、本遺構における敷土行為の直前段階にはRD63は半埋没の凹地状となっており、本遺構への敷土行為に伴い同時に埋め均されたと考えられる。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭と思われる。

〔出土遺物〕土器（377・378）〈第219図、写真図版169〉。
敲磨器類（2603）、自然礫（2833・2834）。

ＲＢ04敷土を伴う方形柱穴列（第139・140図、写真図版102）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ25ｓグリッド付近に位置する。RA33の床面においてⅥ層土類似の黄褐色土を埋土とするピットを確認。黄褐色土の敷き均しを伴う方形柱穴列の可能性があると判断して周囲を検索し同様のピットを検出した。
〔柱穴列〕長方形に並ぶ４個の柱穴で構成される（PPA156・157・159・160）。柱穴列の外端長は280×250㎝、長軸方位はＮ－27°－Ｗ（短軸Ｎ－63°－Ｅ）である。柱配置から推定される柱間寸法は約180×180㎝。柱穴は開口部が径80～110㎝だが、下部で狭まり底面径は20㎝強となっている。開口部が広がるのは、後に柱材の抜き取りが行われたためと考えられる。抜き取り後の空隙は流入土等によって堆積が進み、開口部付近は擂鉢状の凹みとなったらしい。この凹みはその後、遺構範囲に敷き均された黄褐色土に被覆され埋没を終えている（敷土行為については後述）。柱穴は上部をRA33・RA34の下面に切られ、また、全体的に後世の削平を受けており、残存深度は60～70㎝ほどとなっている。なお、他の類似遺構において確認されている、柱穴配置範囲全体の掘り込みは、同様の理由により面的には確認できなかった。ただし遺構範囲の北部では検出面にⅥ層土ブロックを含む人為堆積層の広がりが認められ、土層断面にも遺構範囲の縁部が掘り下げられている痕跡が確認された（A-A'：２層）。詳細は不明であるが、本遺構においても、柱穴掘削時と共に範囲全体の掘り下げが行われた可能性がある。
〔敷土範囲〕本遺構は一部をRA33等に切られ、また全体が後世の削平を受けているため、類似する他遺構のように、敷土範囲は面的には残存しない。しかしながら、柱穴の埋土上部には精選された黄褐色土が充填されていることから、類似する他遺構と同様、本来は敷土が施されていた可能性が高い。
〔焼土〕柱穴列の南部、PPA160に近接した位置から、焼土ブロックを多く含むピット（PPA158）が検出され、精査の結果、燃焼面の中央がやや凹んだ焼土遺構であることが判明した。径65㎝の円形で、焼土の厚さは８㎝である。周縁には部分的に礫が残存し、礫の掘方と思われる痕跡も認められることから、本来は石囲炉だったとみられる。上述のとおり、本遺構は上部をRA33等によって削平されており、検出面はRA33の底面にあたることから、この炉跡が本遺構に伴う可能性は低い。ただし、RA33に伴う炉跡は別に確認されており、敷土がなされる以前に本遺構内部に構築されていた炉である可能性は否定できない。
〔構築～廃絶後の経過〕上記の所見から、本遺構のたどった経過は次のように理解される。
①４つの柱穴及び構築範囲の掘り込み掘削（？）。
②柱材設置、柱穴列構築範囲の掘り込みの埋め戻し（この時点で石囲炉伴うか）。
③柱材の撤去、空隙への再堆積。
④敷土範囲の掘り込み掘削（？）。
⑤黄褐色土敷き均し（敷土上面での焼土生成の有無は不明）。
⑥RA33・RA34が上位に構築される。
⑦全体的に削平・流失を受ける。
柱穴列（掘立柱建物？）としての段階（①～③）、「跡地」が敷土により可視化された段階（④～⑤）、遺構上部が失われた段階に（⑥～⑦）に大別される。
〔重複〕RA36を切り、RA33・RA34に切られる。

〔遺構の時期〕縄文時代後期初頭と思われる。
〔出土遺物〕石匙（2004）、石錐（2087）、敲磨器類（2653）。

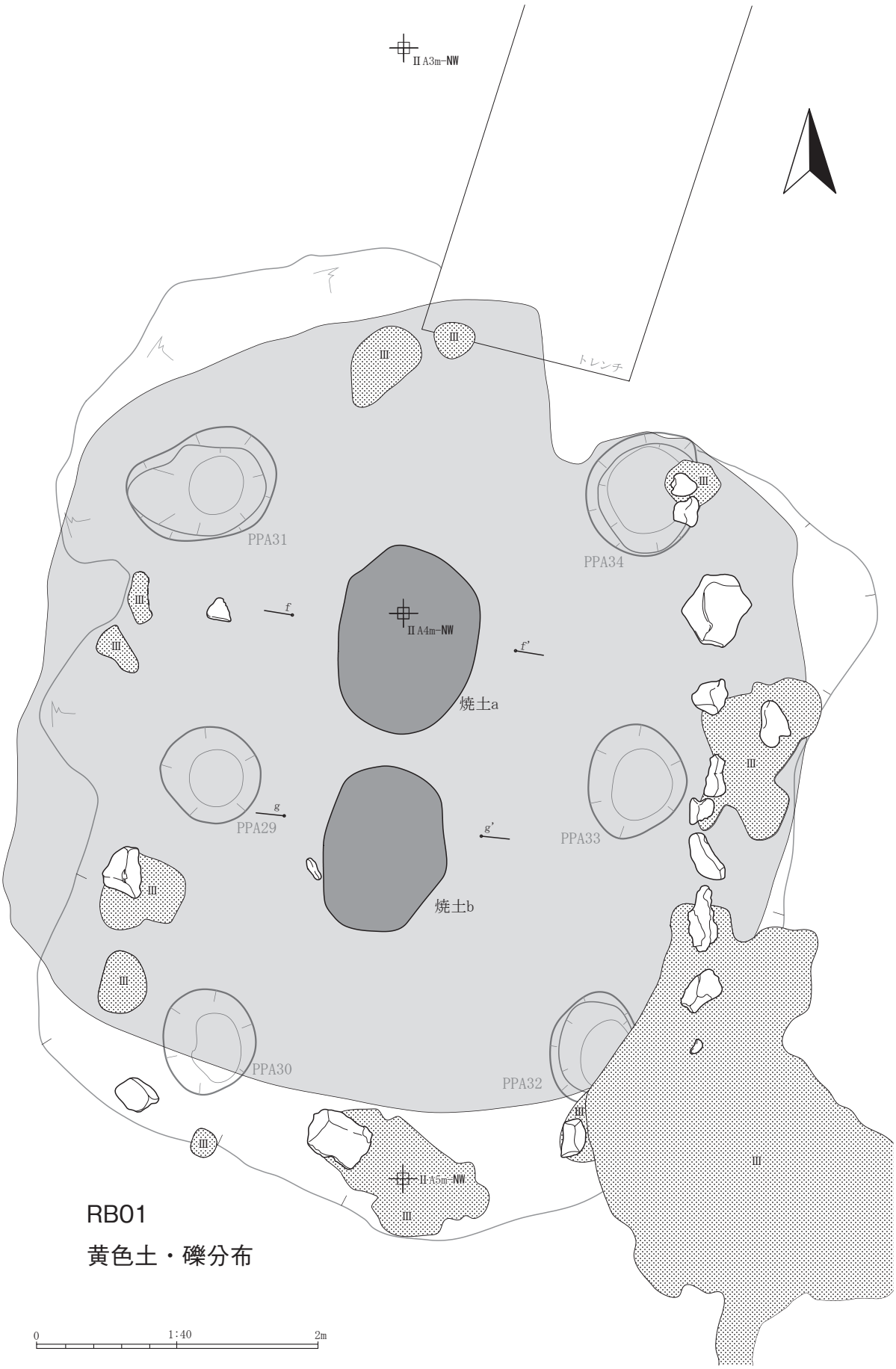
ＲＢ05方形柱穴列（第141図）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ８ｍグリッド付近に位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において検出された柱穴である。それぞれの柱穴は個別に精査をすすめ、記録後に配置の検討を加えた結果、方形柱穴列を構成すると認めるに至ったものである。
〔柱穴列〕ほぼ方形に並ぶ４個の柱穴で構成される（PPB512・519・702・703）。柱穴列の外端長は340×320㎝、長軸方位はＮ－54°－Ｅ（短軸Ｎ－36°－Ｗ）である。柱配置から推定される柱間寸法は約270×260㎝。柱穴は開口部が径36～58㎝、検出面からの残存深度は52～70㎝である。埋土はＶａ層相当の黒褐色土とⅣ層類似の暗褐色土を主体とする。
〔重複〕東隅のPPB702がRD56を切る。また、北隅のPPB703がRD54を切る。
〔遺構の時期〕出土した土器の年代観と埋土の様相から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。
〔出土遺物〕縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての土器小片（不掲載）が出土している。

ＲＢ06方形柱穴列（第142図、写真図版103）
〔位置・検出状況〕北東部、ⅠＡ25ｐグリッド付近に位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において検出された。柱穴と思われる４つの略円形範囲が方形に配列していることから、方形柱穴列の可能性があるものと判断し精査着手した。
〔柱穴列〕ほぼ方形に並ぶ４個の柱穴で構成される（PPB1101～1104）。柱穴列の外端長は296×290㎝、長軸方位はＮ－29°－Ｗ（短軸Ｎ－61～69°－Ｅ）である。柱配置から推定される柱間寸法は、PPB102-104間で240㎝、その他は210㎝である。北東側の一辺がやや広くなっている。柱穴は、開口部が径80×50㎝ほどの楕円形､下部が窄まって底面径は20㎝前後となっている。残存深度は30～40㎝。全体に擂鉢形を呈しており、柱材の抜き取りが行われたものとみられる。南西に下る自然地形に沿って、柱穴の底面標高にも差違が生じており、北端のPPB1102と南端のPPB1103の比高は約20㎝となっている。埋土はＶａ層相当の黒褐色土とⅣ層類似の暗褐色土を主体とする。
〔重複〕北隅のPPB1102はRA76張出部の掘方埋土を切っている。このほか周辺には多数の柱穴が存在するが、これらと本遺構との先後関係は確認できていない。
〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

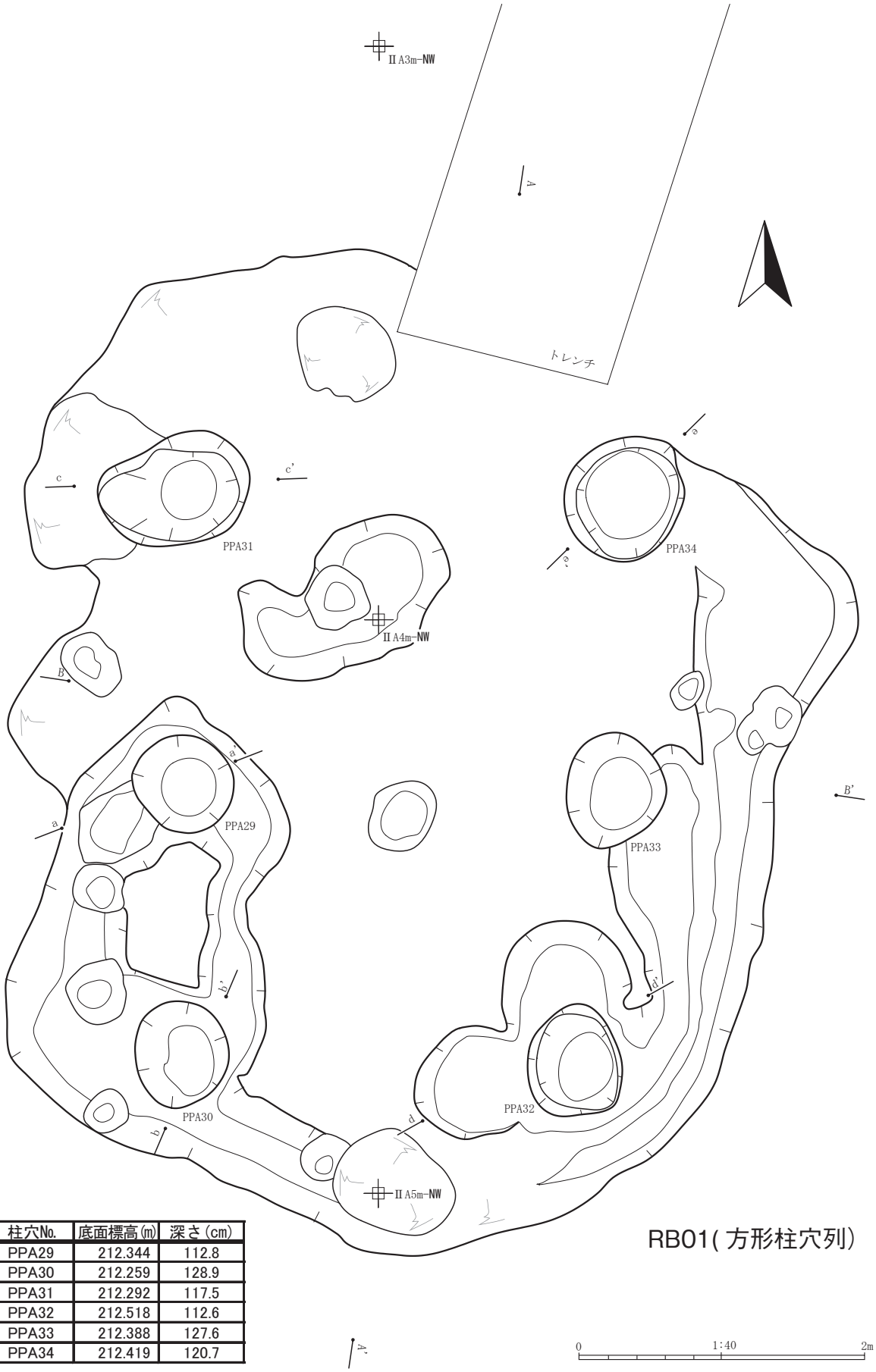
ＲＢ07方形柱穴列（第143図）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ９ｎグリッド付近に位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において検出された柱穴である。それぞれの柱穴は個別に精査をすすめ、記録後に配置の検討を加えた結果、規模及び配列から方形柱穴列を構成すると認めるに至ったものである。
〔柱穴列〕概ね長方形に並ぶ４個の柱穴で構成される（PPB466・469・480・481）。柱穴列の外端長は335×272㎝、長軸方位はＮ－43°－Ｗ（短軸Ｎ－47°－Ｅ）である。柱配置から推定される柱間寸法は、長軸方向270㎝、短軸方向200㎝である。柱穴は、開口部が径80×70㎝ほどの楕円形、底面径は30㎝前後となっている。残存深度は100～110㎝、底面レベルは４個ともほぼ共通する。南西側の２個は上半部の壁が広がっていることから、柱材の抜き取りが行われた可能性がある。埋土はＶａ層相当

の黒褐色土とⅣ層類似の暗褐色土を主体とする。
〔重複〕RA31・40を切っている。
〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。
〔その他の所見〕柱穴規模や柱間寸法は敷土を伴うRB02・03・04によく似るが、Ｖａ層下面付近まで掘り下げてから検出したものであるため、敷土の存否は確認できなかった。
〔出土遺物〕土器（379・380）〈第219図、写真図版169〉。

ＲＢ08方形柱穴列（第144図）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ８１グリッド付近に位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において検出された柱穴である。それぞれの柱穴は個別に精査をすすめ、記録後に配置の検討を加えた結果、規模及び配列から方形柱穴列を構成すると認めるに至ったものである。
〔柱穴列〕概ね長方形に並ぶ４個の柱穴で構成される（PPB522・568・570・572）。柱穴列の外端長は275×265cm、長軸方位はＮ－21°－Ｗ（短軸Ｎ－69°－Ｅ）である。柱配置から推定される柱間寸法は、210×210cmである。柱穴は、開口部が径48～60cmの略円形で、底面径は35cm前後、残存深度は60～70cmである。底面標高は、北側の二つ（PPB568・570）がおよそ揃っているのに対し、南東隅のPPB522は、これらに比して約35cm高い。同様に南西隅のPPB572も15cmほど高くなっている。柱穴底面の標高差は、遺構周辺の自然傾斜（構築面の傾き）と同調していることことから、底面標高を同一にすることよりも、各柱穴の構築面からの深さを揃えることに注意が払われた結果とも考えられる。柱穴の埋土は、Ｖａ層相当の黒褐色土とⅣ層類似の暗褐色土が主体であった。
〔重複〕RA32・41を切っている。
〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。
〔その他の所見〕柱穴規模や柱間寸法は敷土を伴うRB02・03・04によく似るが、Ｖａ層下面付近まで掘り下げてから検出したものであるため、敷土の存否は確認できなかった。
〔出土遺物〕土器（381～383）〈第219図、写真図版169〉。



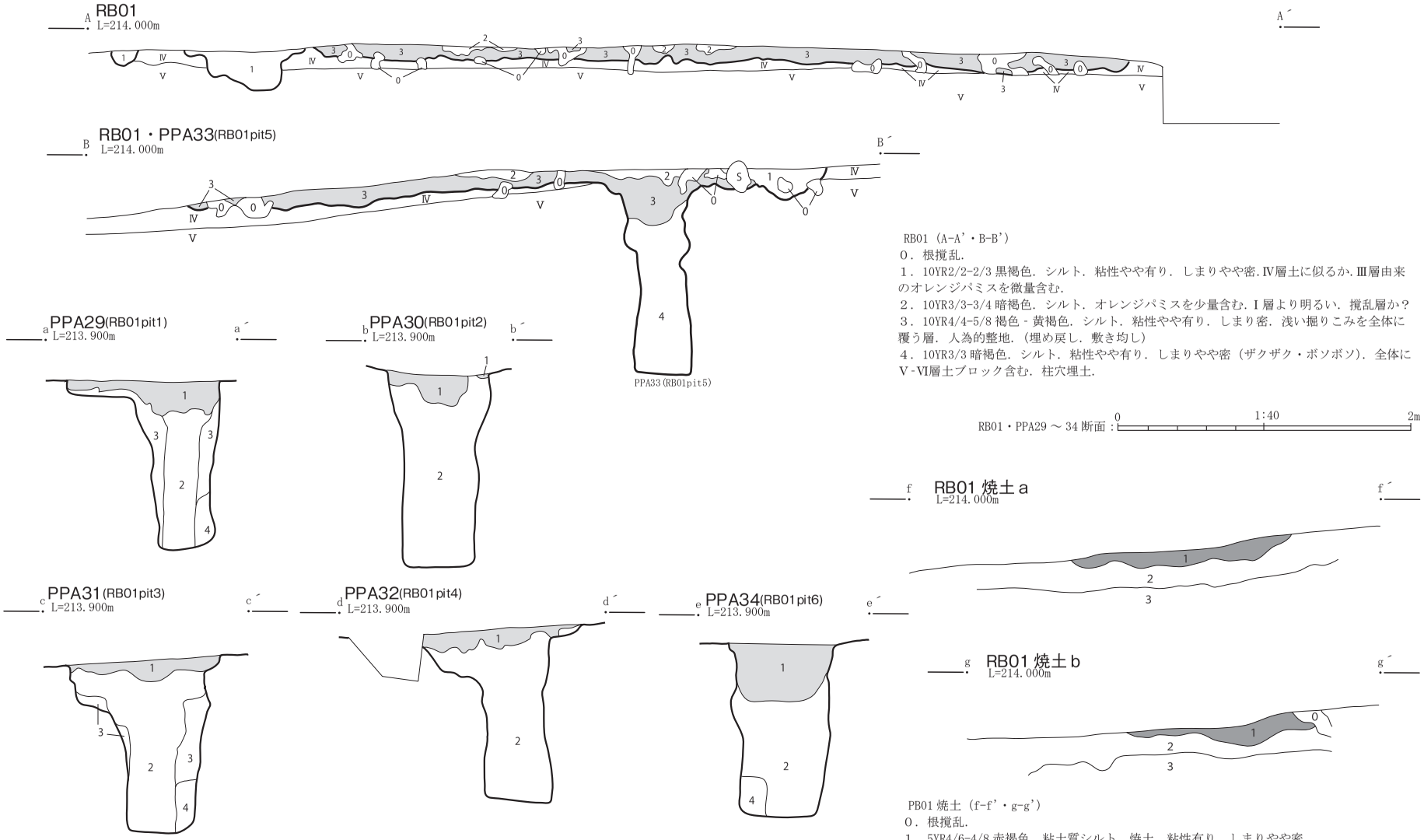
第131図　RB01平面（礫・黄色土・焼土分布）



RB01(方形柱穴列)

柱穴No.	底面標高(m)	深さ(cm)
PPA29	212.344	112.8
PPA30	212.259	128.9
PPA31	212.292	117.5
PPA32	212.518	112.6
PPA33	212.388	127.6
PPA34	212.419	120.7

第132図　RB01平面（掘方完掘）



RB01（A-A'・B-B'）
0．根撹乱．
1．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．Ⅳ層土に似るか．Ⅲ層由来のオレンジパミスを微量含む．
2．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．オレンジパミスを少量含む．Ⅰ層より明るい．撹乱層か？
3．10YR4/4-5/8 褐色 - 黄褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．浅い掘りこみを全体に覆う層．人為的整地．（埋め戻し．敷き均し）
4．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密（ザクザク・ボソボソ）．全体にⅤ-Ⅵ層土ブロック含む．柱穴埋土．

RB01・PPA29 ～ 34 断面：0　1:40　2m

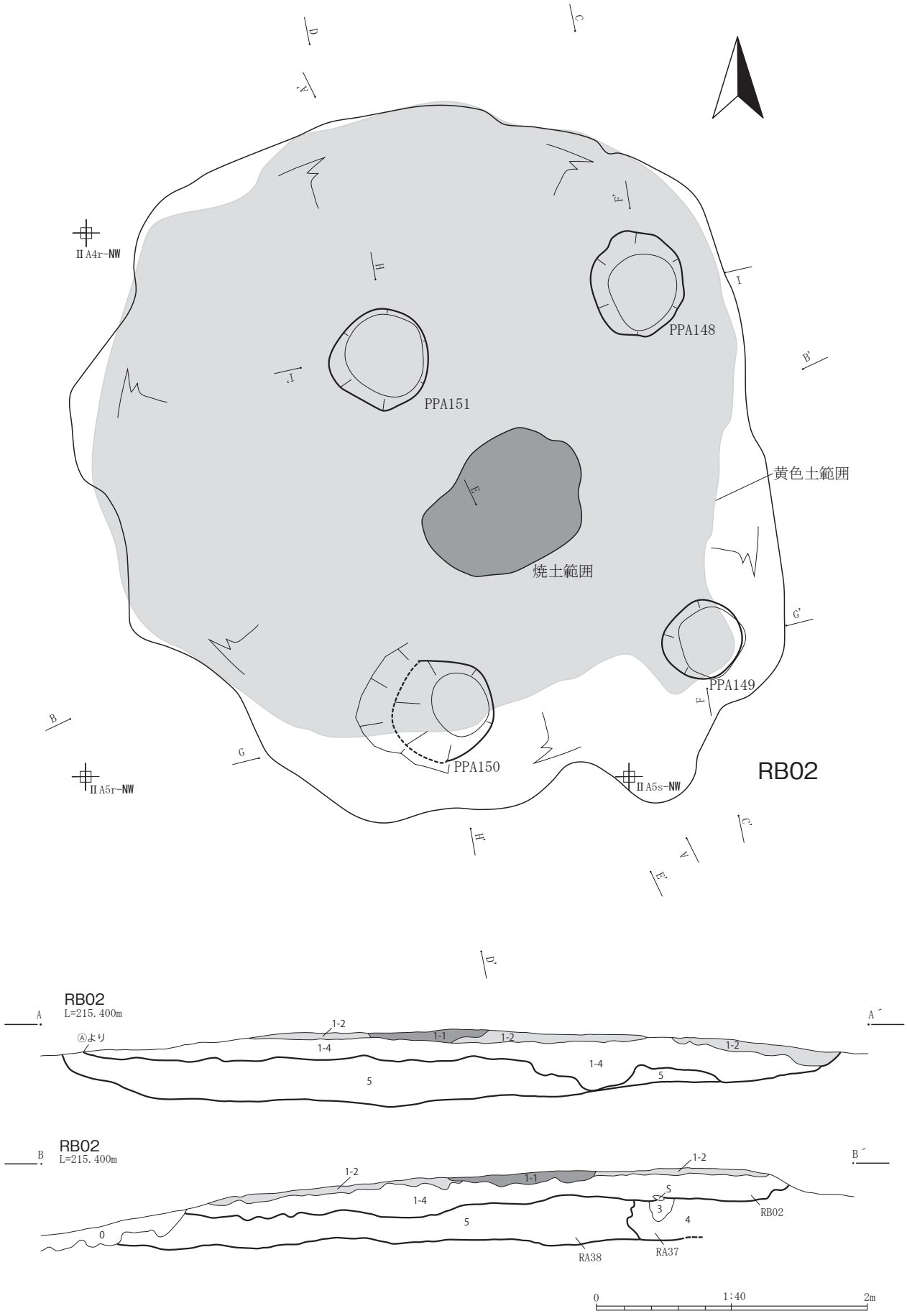
PB01 焼土（f-f'・g-g'）
0．根撹乱．
1．5YR4/6-4/8 赤褐色．粘土質シルト．焼土．粘性有り．しまりやや密．
2．10YR3/4 暗褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまり密．住居プランに広がる土．貼床様の土．
3．10YR2/1 黒色．シルト．Ⅴ層土．

※西に向かって傾斜しており西部上部が削平されている．

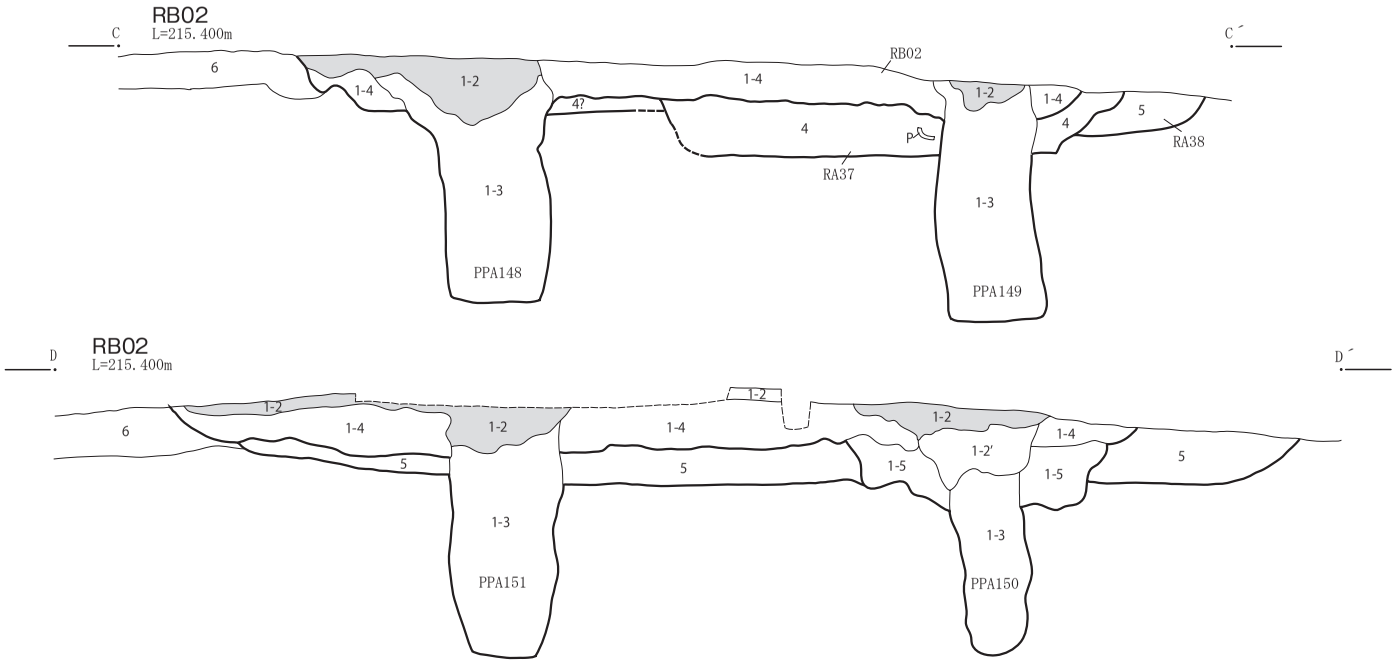
RB01 焼土 a・b 断面：0　1:20　1m

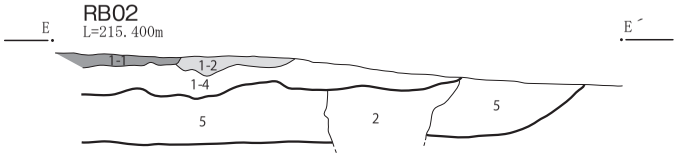
PPA29 ～ 32・34（RB01Pit1 ～ 4・6）（a-a' ～ e-e'）
1．10YR4/4-5/8 褐色 - 黄褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．浅い掘りこみを全体に覆う層．人為的整地．（埋め戻し．敷き均し）
2．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性弱．しまり疎．火山灰 1%でⅢ層より明らかに少量．（柱痕跡）
3．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密（ザクザク・ボソボソ）．全体にⅤ-Ⅵ層土ブロックを含む．柱穴埋土．10YR3/2 黒褐色土．粘性弱．しまり疎．Ⅵ層起源の火山灰 2%．（柱穴掘り方の堆積土）
4．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性弱．しまりやや密．（Ⅵ層を利用して根固めしていると考えられる）

第133図　RB01断面


PPA148
PPA151
PPA149
PPA150
黄色土範囲
焼土範囲
RB02
ⅡA4r-NW
ⅡA5r-NW
ⅡA5s-NW
RB02
L=215.400m
Ⓐより
1-2
1-1
1-4
5
RB02
L=215.400m
1-2
1-1
1-4
5
0
S
3
4
RA38
RA37
RB02
0
1:40
2m

第134図　RB02





RB02

０．10YR3/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎.Ⅳに似るが新しい攪乱層（耕作土）かも.

1-1．7.5YR4/6 褐色．シルト．焼土．粘性やや有．締まりやや密．上面に微細炭化粒．1-2 層上面の被熱赤変部．

1-2．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．RB02 上部に敷き均された黄色土．柱穴跡には周囲より深く入る．

1-2'．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．褐色土全体に含み黄味帯びる．

1-3．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎.Ⅳ～Ⅵ層土の混ブロック層．柱穴埋土．掘り方いっぱいに入る締まりのない層．
　断面に柱痕跡は見えない．柱材抜き去り後に入った土か.

1-4．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.Ⅵ層土ブロック微．褐色土ブロック少．10YR2/3 シルトブロック少．RB02 の掘り方埋土.

1-5.10YR3/4暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．５にⅥ層土ブロック含む.PPA150の掘り方埋土．５層(早期住居埋土)を切り、1-4(RB02掘り方)に覆われる.

２．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．５に似るがやや暗い．5 を切り 1-4 に覆われる Pit 埋土.

３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎.

４．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．５層（早期住居）を切り、1-4 層（RB02）に切られる住居埋土.

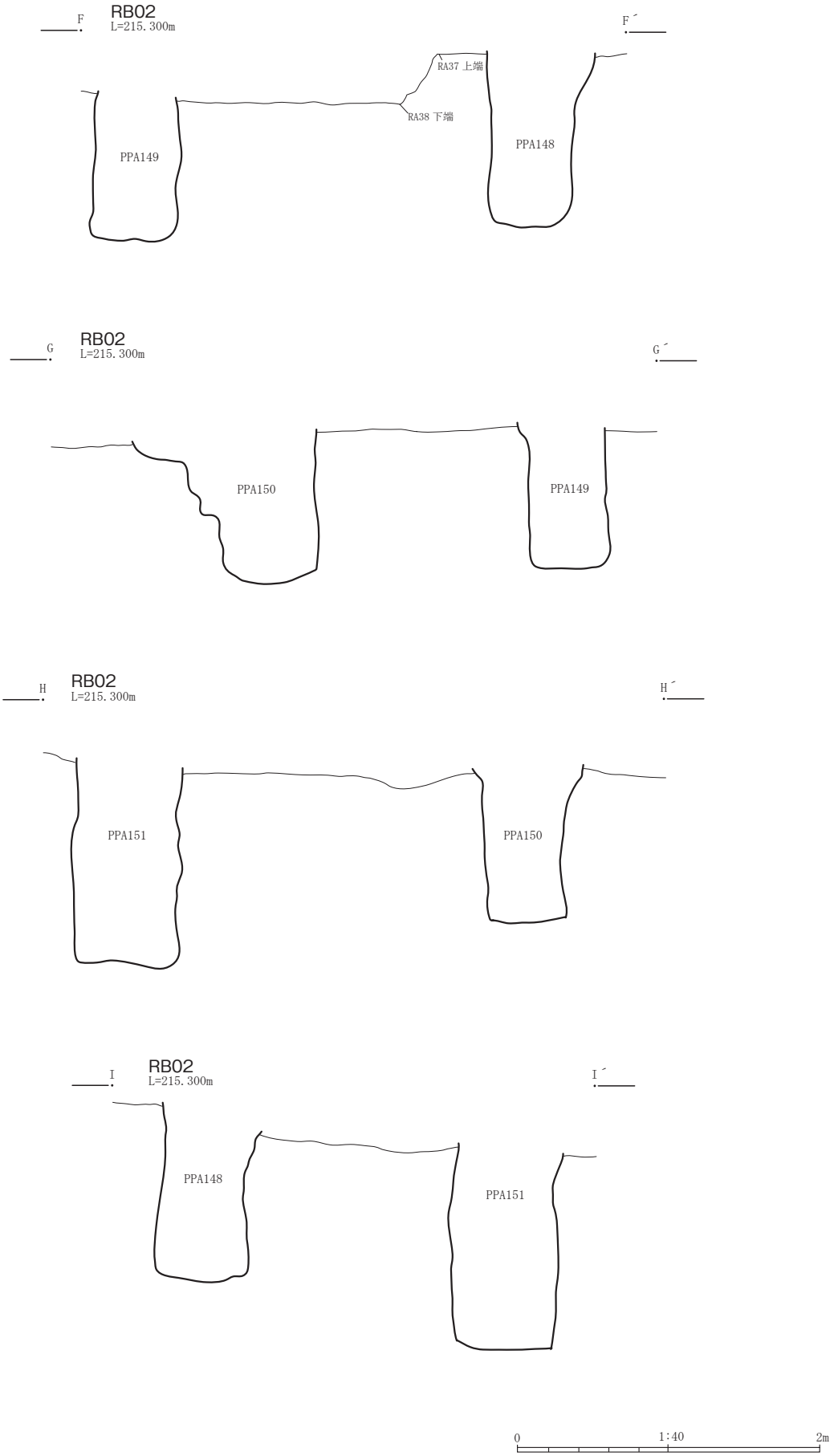
５．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．早期住居埋土.

６．10YR3/3-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.Ⅳ層に似る．別遺構埋土？

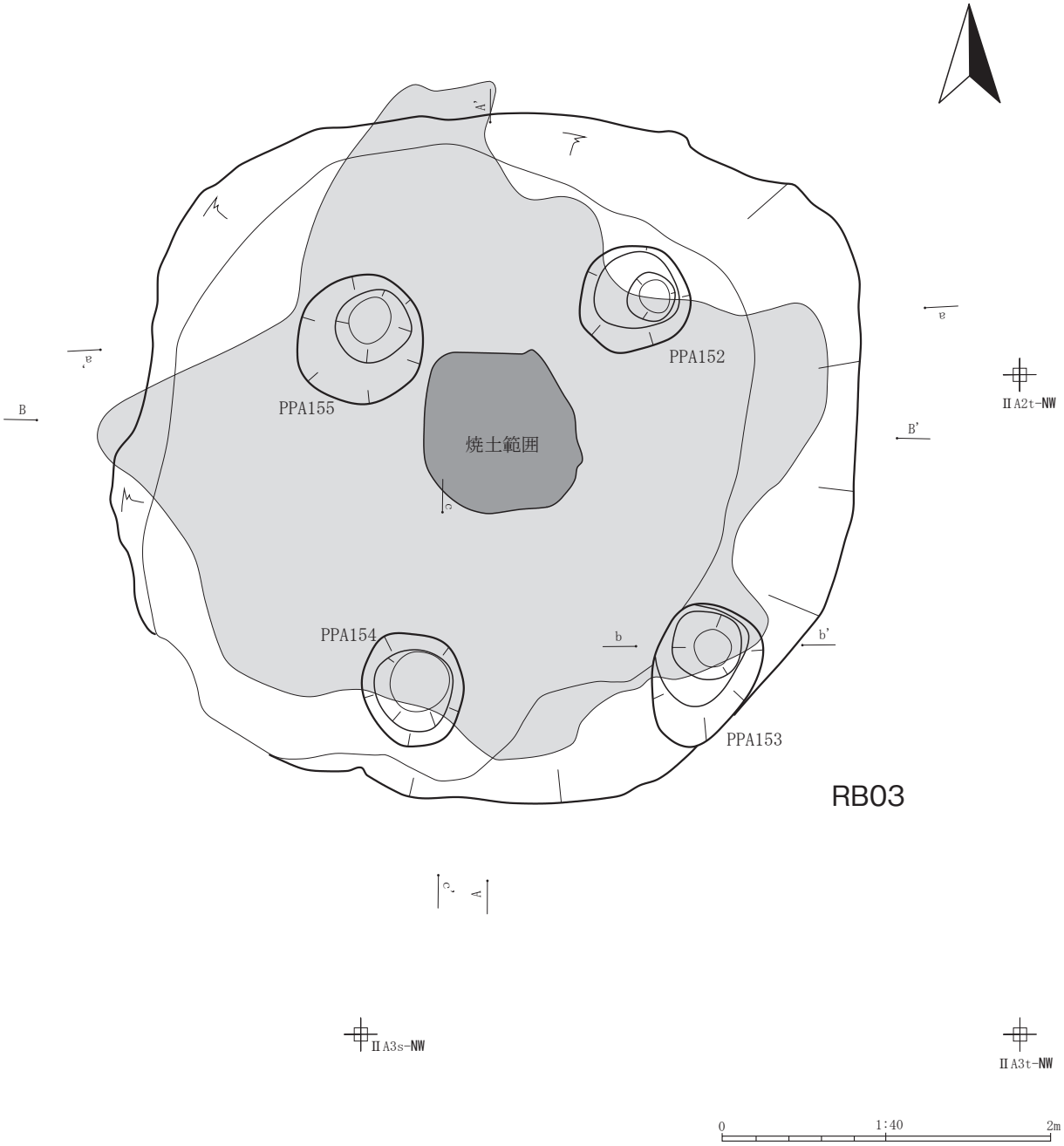
※1-1 ～ 1-5：RB02（後期初）、４：RA37（早期～前期？）、５：RA38（早期）。

0　1:40　2m

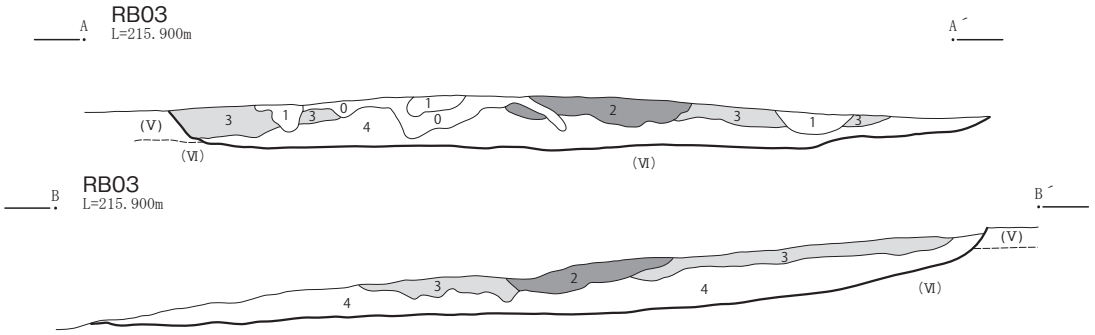
第135図　RB02断面（1）



第136図　RB02断面（2）

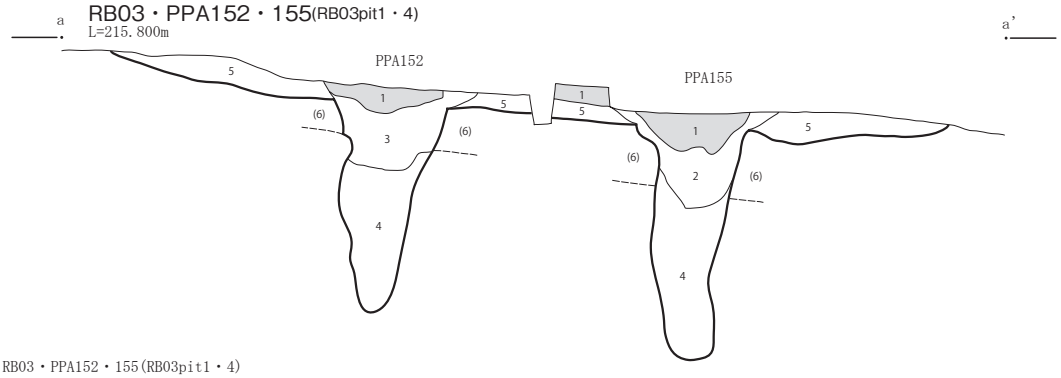


第137図　RB03平面

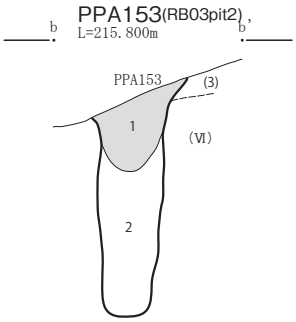


RB03
０．根攪乱
１．10YR3/3-2/3 暗褐－黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．橙色粒子極微.Ⅲ層に類似.
２．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有．締まりやや密.Ⅲ層上面が被熱し生成したもの.
３．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．敷き均された黄色土.
４．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．褐色土ブロック含みやや黄味.

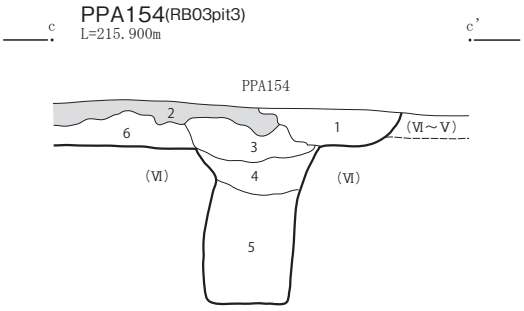
※竪穴状の掘り込みをもつ４本柱遺構．柱材設置時点底面が、４層下面（掘り方底面）か、上面か、判然としないが…以下参照.
掘り方の底面は周囲の地形と同方向に下る傾向有り．床面らしい硬化部はなく､埋土との境界は不明瞭．上面に遺物･炭化物等の面的な分布出土もない.
底面に炉なし．柱穴上部に４層（の崩落土？）の流入がみられることから、柱材抜去の直前段階にはすでに４層は堆積していた（埋められていた）と考えられる．これらから、４層下面（掘り方底面）を床面とした構造物とは考えづらい.
３層の黄色土は、柱材抜去後、その痕跡が埋まりきらないうちに、遺構範囲全面に敷きならされている．焼土は３層上面の燃焼行為によって生成したものである.



RB03・PPA152・155(RB03pit1・4)
１．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．遺構範囲に敷き均された黄色土.
２．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．しまりやや密.Ⅵ層土を全体に含みやや黄味帯びる.
３．10YR3/4暗褐色.シルト.粘性やや有.しまりやや密.Ⅵ層土ブロック（径20～30㎜）･本断面６層土ブロック少量含む.隣接層に比して全体に黒味強.
４．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．しまりやや疎.
５．10YR3/3-2/3 暗褐－黒褐色．シルト．粘性やや有．しまりやや密．地点によりⅥ層土ブロック含む.
(6)．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．下位の早期住居跡埋土.



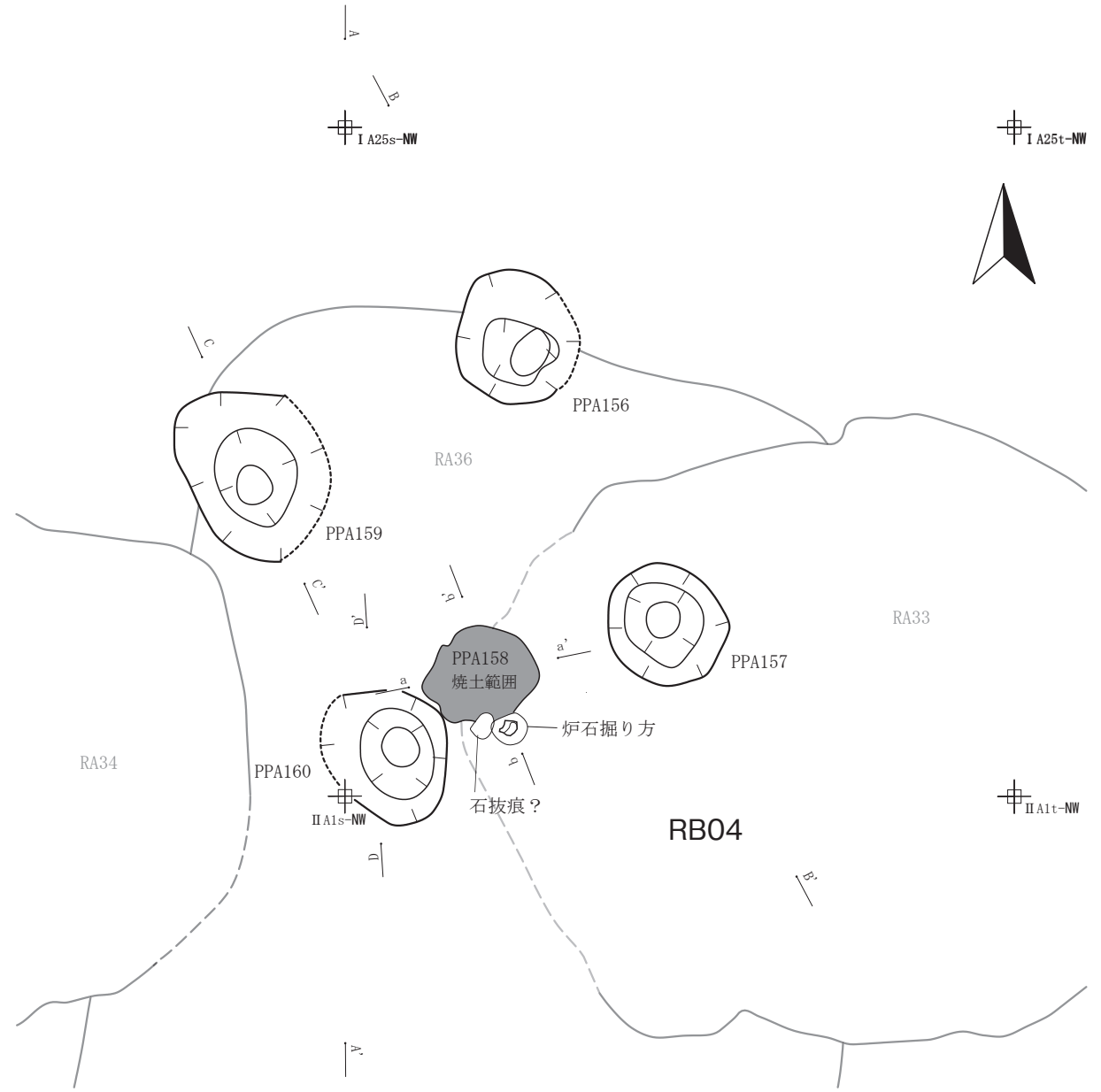
PPA153(RB03pit2)
１．a-a'の１層に同じ.
２．a-a'の４層に同じ.
３．a-a'の(6)層に同じ.

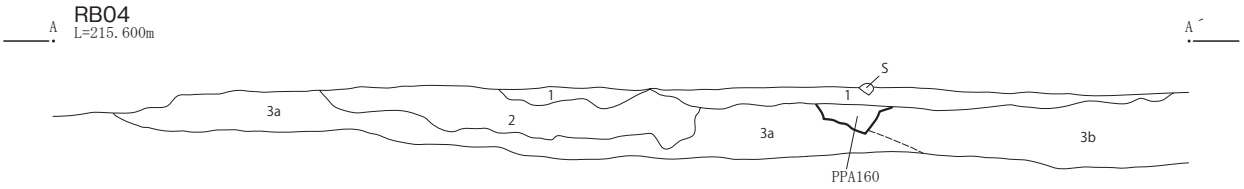


PPA154(RB03pit3)
１．10YR3/3-2/3 暗褐－黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎.Ⅲ層土類似．石抜痕？
２．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．黄色土.
３．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．しまりやや密.Ⅵ層土ブロック少量含み、全体やや黄味.
４．10YR4/4 褐色．シルト．３よりⅥ層土ブロック多く、黄味強い.
５．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.
６．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト.Ⅵ層土ブロック少量.

0　1:40　2m

第138図　RB03断面



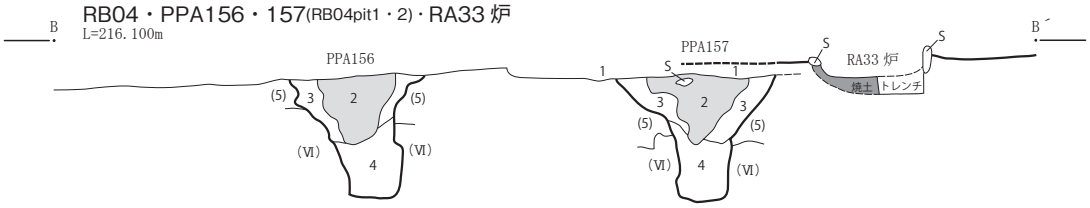


RB04
１．D-D’の１層に同じ．
２．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．黄褐色土ブロック（径 10 ～ 50 ㎜）やや多．粘性やや有．締まり密．（RB04 の掘り方か）
3a．10YR2/3 黒褐色．シルト．3b に似るがやや明るい．Ⅴb 層？
3b．10YR2/2 黒褐色．シルト．Ⅴa に似る．

※後の精査で、3a・3b は早期住居跡 RA36 埋土と判明。

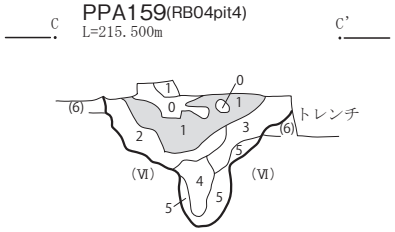
0　1:40　2m

第139図　RB04

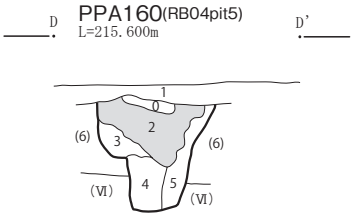


RB04・PPA156・157(RB04pit1・2)
1．10YR2/3-3/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．RA33 の床面を構成する層（掘り方埋土？）．
　本層が RB04 の柱穴上部に入る黄褐色土を被覆していることから、RB04 は RA33 より古いといえる．柱穴は上部を削平されている．
2．10YR5/6-4/6 黄褐－褐色．シルト．粘性有．締まり密．柱穴上部を埋めている黄褐色土．
3．10YR3/3-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．黄褐色土ブロック少量含む．
4．10YR3/3-3/4 暗褐色．粘土質シルト．粘性やや有．締まり密．2 が濁ったような土．
(5)．10YR3/3-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．

※RB04 は 4 本柱遺構。上部を RA33・RA34 等の暗褐色埋土に切られている。本来は他例と同様プラン内に黄色土の敷き均しが施されていた可能性が高い。
　柱穴は上半部が漏斗状にひらき、いずれも同様の堆積状況を示している。

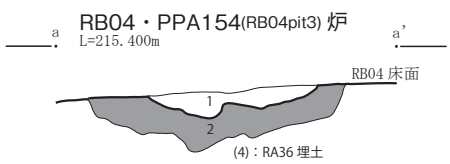


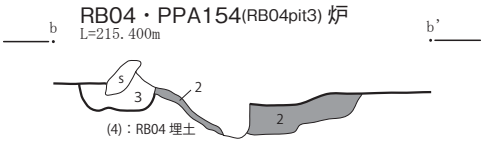
PPA159(RB04pit4)
0．根攪乱
1．B-B'の２層に同じ．
2．10YR3/3-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Ⅵ層土ブロック少量含む．
3．2 に似るが 2 よりⅥ層土ブロック多量．
4．10YR4/6 褐色．シルト．1 に似るがやや暗い．
5．B-B'の４層に同じ．本遺構の４層より暗い．
(6)．B-B'の５層に同じ．



PPA160(RB04pit5)
0．根攪乱．
1．10YR2/3-3/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．しまりやや密．RA34 の埋土から連続する暗褐色土．
　２を被覆（本 pit を切っている）
2．B-B'の２層に同じ．
3．B-B'の３層に同じ．
4．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．しまりやや密．Ⅵ層小ブロック微量（柱痕跡？）
5．４に似るが、４よりⅥ層土ブロック多．
(6)．B-B'の５層に同じ．

0　1:40　2m

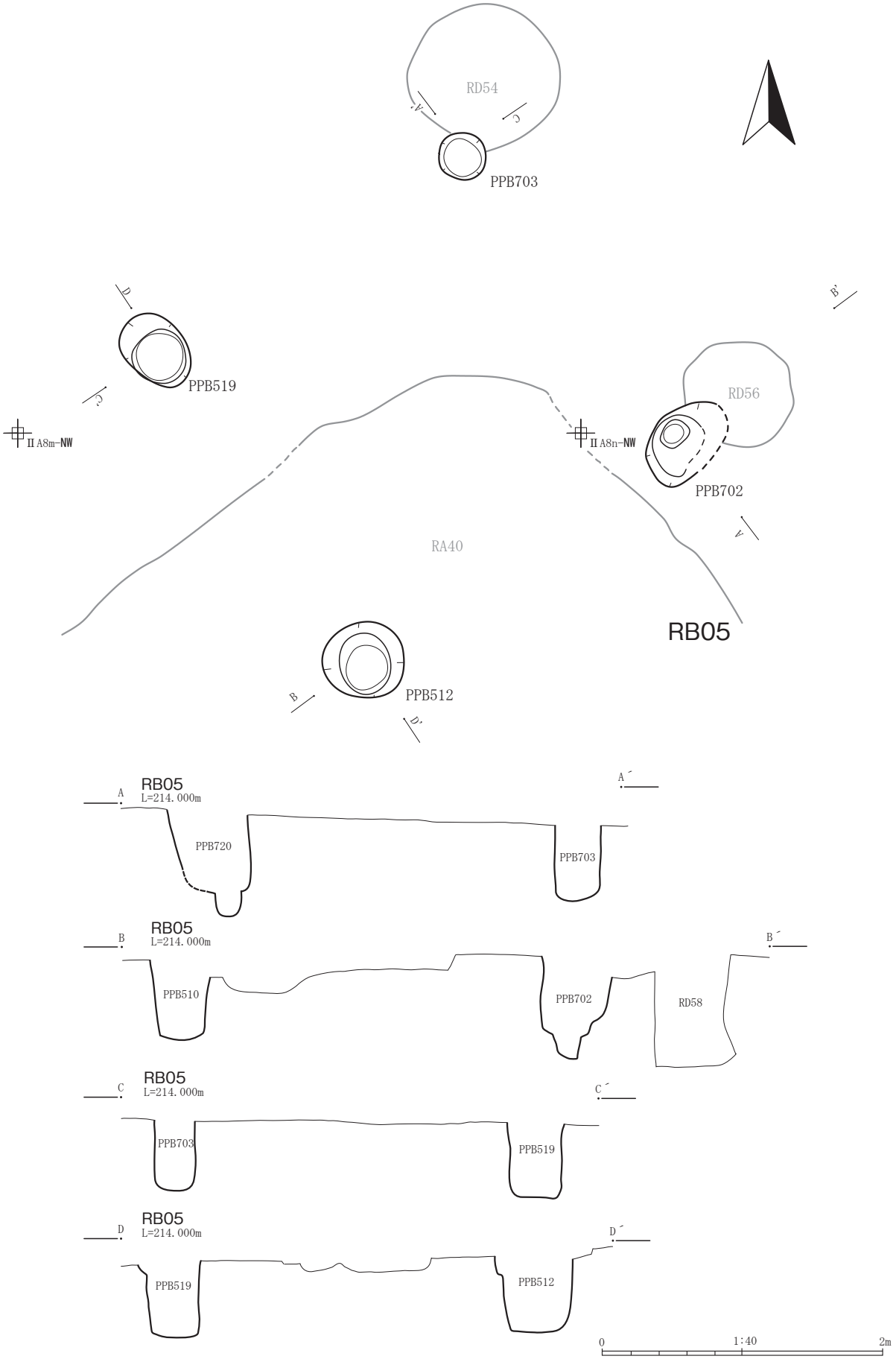




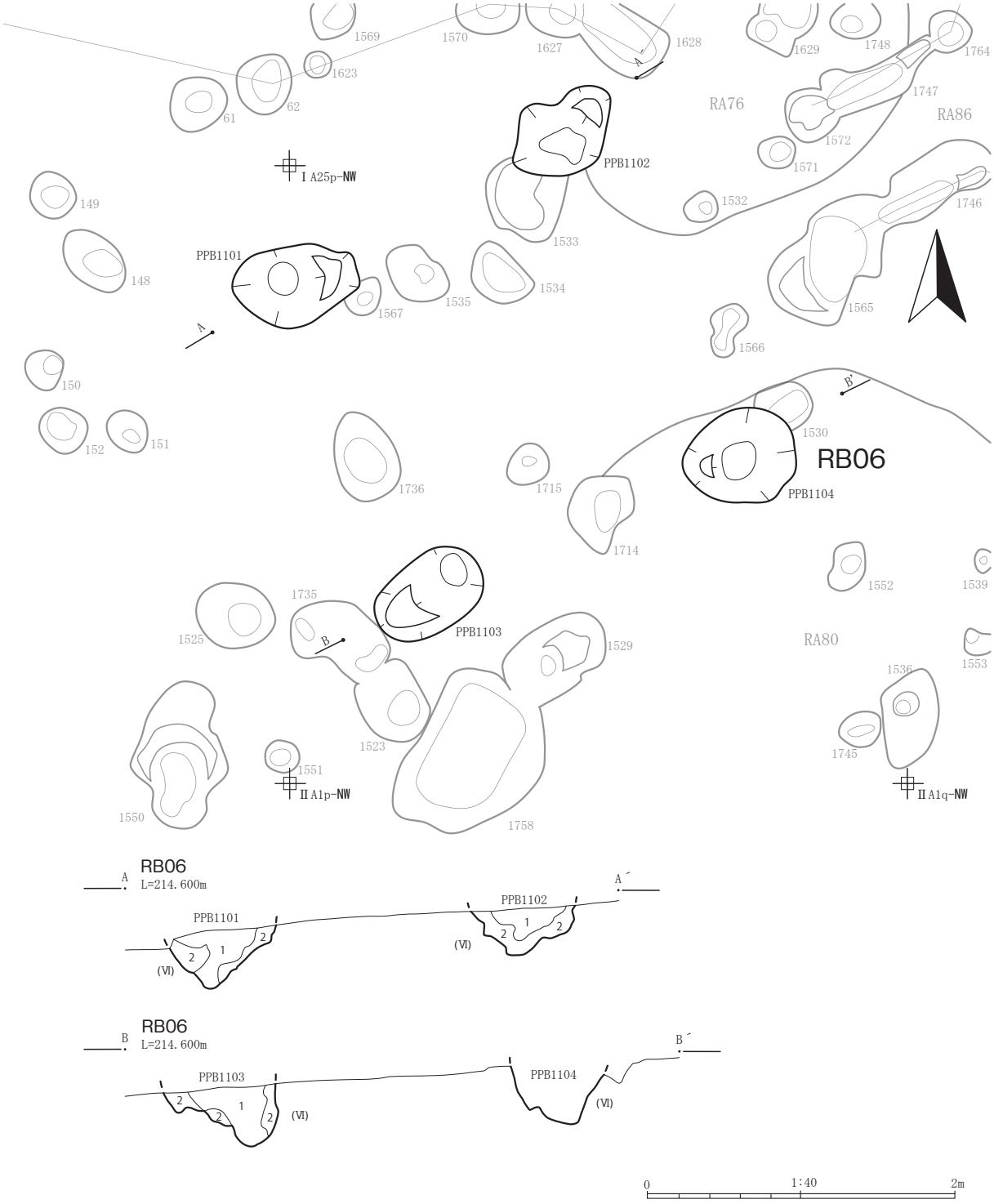
RB04・PPA154(RB04pit3) 炉
1．7.5YR4/4 褐色　シルト．粘性中～やや無．締まりやや密．くぼんだ被熱層に堆積した土壌．
　断面にはないが細かい（1 ～ 2 ㎝程）土器片が 3 ～ 5% 含む．炭化物粒 2%．
2．5YR4/6 赤褐色　シルト．粘性無．締まり密．被熱層．
3．7.5 YR3/2 黒褐色　シルト．粘性無．締まり密．被熱層に切られる炉石の掘方埋土．
(4)．7.5YR2/1 黒色　シルト．粘性中～ややあり．締まりやや密．(RA36 埋土)．

0　1:20　1m

第140図　RB04断面


RD54
PPB703
PPB519
ⅡA8m-NW
ⅡA8n-NW
RD56
PPB702
RA40
RB05
PPB512
RB05
L=214.000m
PPB720
PPB703
RB05
L=214.000m
PPB510
PPB702
RD58
RB05
L=214.000m
PPB703
PPB519
RB05
L=214.000m
PPB519
PPB512
0
1:40
2m

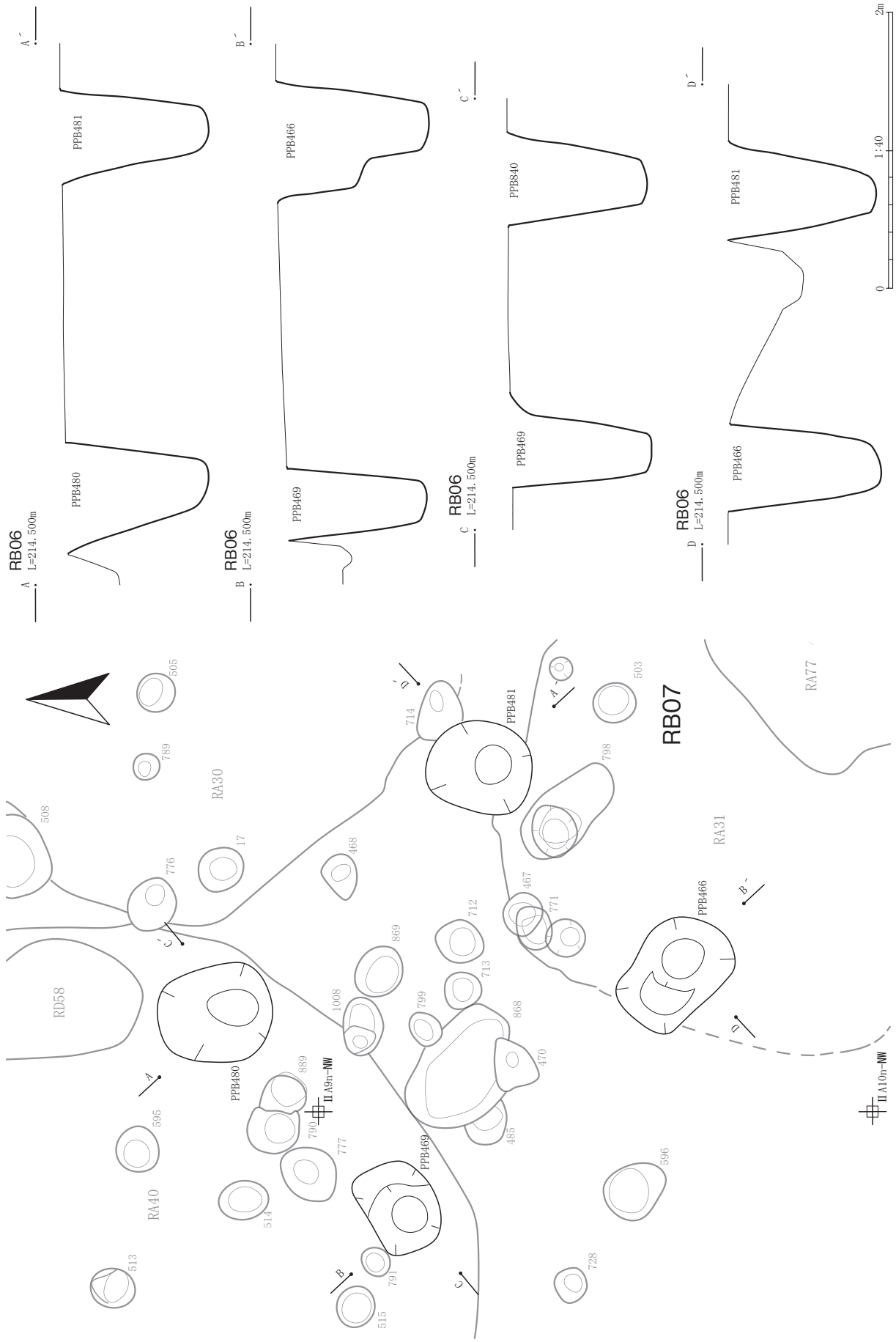
第141図　RB05



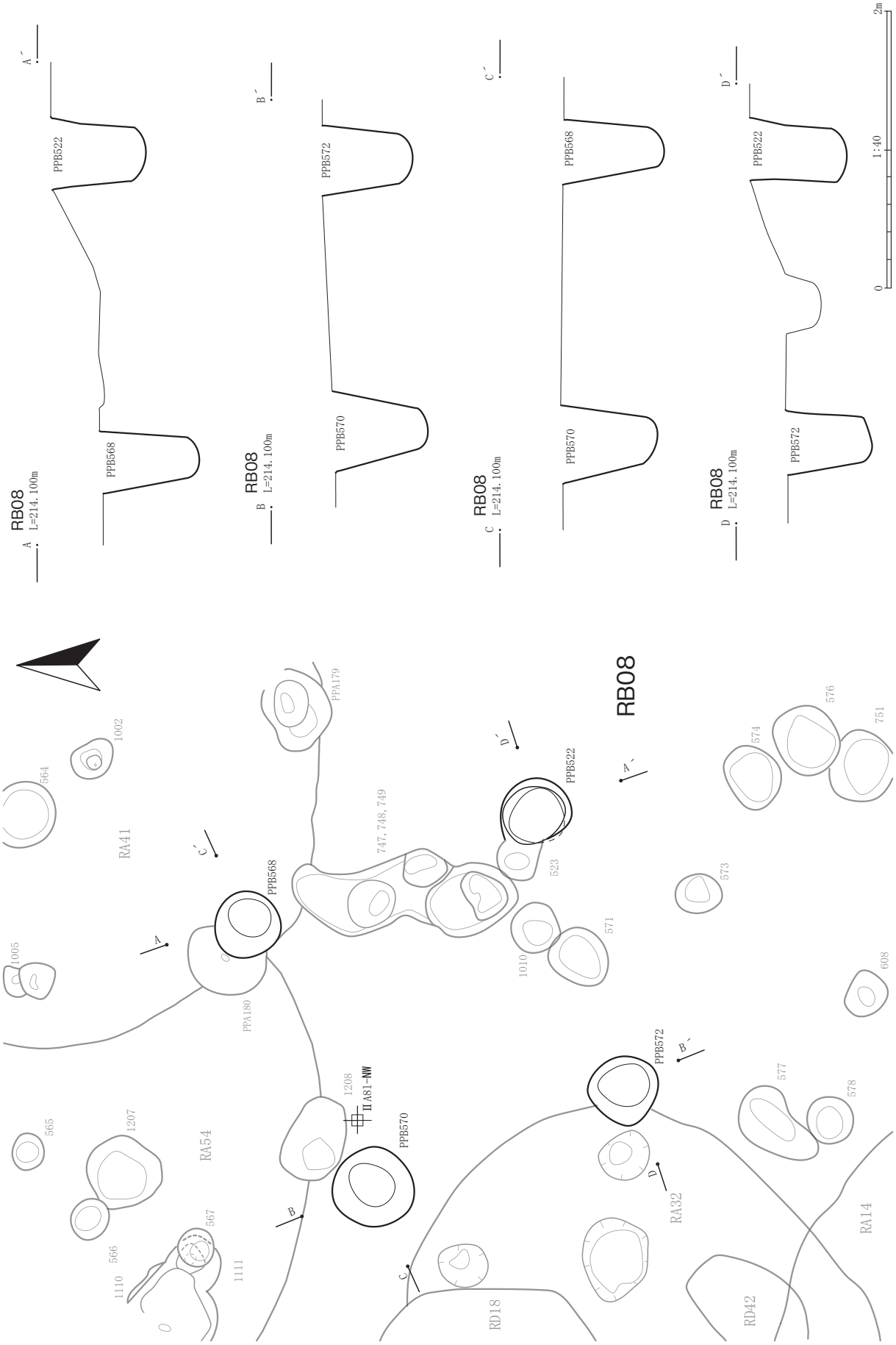
RB06　4 本柱遺構
1．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅳ～Ⅴa 層相当か．
2．10YR2/2 黒褐色．シルト．Ⅵ層土ブロックやや多．粘性有．締まりやや有．

※PPB1101 ～ 1104 で構成される 4 本柱遺構．いずれのピットも上端が広がる擂り鉢状の形状を呈する．柱材が抜き取られた結果と見られる．自然傾斜に合わせて、ピットの底面に高低差がある．（斜面上部で高く、下部で低い）．

第142図　RB06


RB06
A L=214.500m
PPB480
PPB481
A´
RB06
B L=214.500m
PPB469
PPB466
B´
RB06
C L=214.500m
PPB469
PPB840
C´
RB06
D L=214.500m
PPB466
PPB481
D´
0
1:40
2m
RB07
RD58
RA30
RA40
RA31
RA77
PPB480
PPB469
PPB481
PPB466
Ⅱ A9n-NW
Ⅱ A10n-NW
A
A´
B
B´
C
C´
D
D´
508
505
789
776
17
468
714
503
798
467
771
712
713
869
1008
799
868
470
485
889
790
777
595
514
513
515
791
728
596

第143図　RB07


RB08
L=214.100m
A
A´
PPB568
PPB522
B
B´
PPB570
PPB572
C
C´
PPB570
PPB568
D
D´
PPB572
PPB522
0
1:40
2m
RB08
RA41
RA54
RD18
RA32
RD42
RA14
PPA179
PPA180
747, 748, 749
564
1002
1005
565
1207
566
567
1110
1111
1208
II A81-NW
523
571
1010
573
574
576
751
608
577
578

第144図　RB08

（3） 土　　坑

ＲＤ01土坑（第145図、写真図版104）
〔位置・検出状況〕北西部、ＩＡ21ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は122×114cmの略円形、底面までの残存深度は70cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのは崩落土とみられるⅥ層土ブロック層で、その上位にＶａ～Ⅳ層類似の黒褐色土、Ⅲ層類似の黒色土が堆積している。Ⅲ層土については、全体がⅢ層土主体の根攪乱に著しく侵されおり本来の堆積土であるか判断が難しい。埋土は全体的に混塊土層の様相を呈することから、人為的に埋め戻された可能性が高い。
〔重複遺構〕なし。RD02・RD04に隣接している。
〔遺構の時期〕埋土の様相および出土土器の年代観から、縄文時代中期末～後期が想定される。
〔出土遺物〕
　土器（384）〈第220図、写真図版169〉。
　石鏃（1577）。
　敲磨器類（2730）。

ＲＤ02土坑（第145図、写真図版104）
〔位置・検出状況〕北西部、ＩＡ22ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は100×92cmの略円形、底面までの残存深度は40cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ～Ⅳ層類似の黒褐色土、Ⅲ層類似の黒色土が堆積している。Ⅲ層土については、全体がⅢ層土主体の根攪乱に著しく侵されおり本来の堆積土であるか判断が難しい。埋土は全体的に混塊土層の様相を呈することから、人為的に埋め戻された可能性が高い。
〔重複遺構〕なし。RD01・RD04に隣接している。
〔遺構の時期〕埋土の様相および出土土器の年代観から、縄文時代中期末～後期が想定される。
〔出土遺物〕
　土器（385）〈第220図、写真図版169〉。
　円盤状土製品（1254）。

ＲＤ03土坑（第145図、写真図版104）
〔位置・検出状況〕北西部、ＩＡ22ｍグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒色土の不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は104×80cmの不整楕円形、底面までの残存深度は26cmである。底面・壁面ともに、木根による攪乱で大きく乱されている。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土層が主体で、これをＩ層相当の根攪乱が上方から切っている。新旧の根攪乱が重複したものかもしれない。
〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代早期中葉～中期末葉が想定される。
〔出土遺物〕土器（386）〈第220図、写真図版169〉。

ＲＤ04土坑（第145図、写真図版105）
〔位置・検出状況〕北西部、ＩＡ21ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は106×100cmの略円形、底面までの残存深度は28cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土が主体。根攪乱によりⅣ層類似の褐色土がブロック状に混入する。堆積要因について、人為・自然の判別は困難である。
〔重複遺構〕なし。RD01・RD02に近接している。
〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代早期中葉～中期末葉が想定される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ05土坑（第145図、写真図版105）
〔位置・検出状況〕南端斜面部、ⅡＡ11ｉグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒色土の不整形な広がりとして検出された。
〔規模・形状〕開口部は180×100cm程度の不整な楕円形、底面までの残存深度は15cmである。全体に根攪乱で乱され、壁の立ち上がりは不明瞭、底面は斜面方向に沿って傾斜している。
〔埋土と堆積状況〕Ⅲ層類似の黒色土を主体とする。埋土の上部中央には焼土の集中が認められる。この焼土はブロック状を呈するが、埋没の途中段階で土坑内部に生成したものが、後に木根等の攪乱で乱された可能性が高い。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代後期以降と考えられる。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ06土坑（第146図、写真図版105）
〔位置・検出状況〕南端斜面部、ⅡＡ11ｉグリッドに位置する。風倒木痕の壁面（Ⅵ層）において黒褐色土の略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面は大きく内傾して断面が三角形を呈する。底面から約80cmのところで最も狭くなっている。これより上位は本来漏斗状に開くと思われるが後世の風倒木痕によって開口部周辺は失われ、狭窄部より下部のみ残存している。狭窄部径は70cm前後、底面径は170cm前後、底面までの残存深度は106cmである。底面の中央に径26cm、深さ３cmの浅い小穴が検出されている。柱材の埋置・固定は無理であろう。圧痕様の凹みに泥質土が堆積していたものである。
〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのは崩落土とみられるⅥ層土ブロック層で、その後主体土であるＶａ層土とⅥ層土ブロック層が交互に堆積し狭窄部付近までを埋めている。この時点で本土坑は半埋没の凹地となり、そこに深鉢・壺等の土器の大形破片が投げ入れられている。その後はこの上位にⅣ層類似暗褐色土も堆積が進み埋没を終えている。
〔重複遺構〕なし。上部を風倒木痕に切られている。

〔遺構の時期〕堆積状況および出土遺物から、縄文時代中期末～後期初頭のものと考えられる。
〔出土遺物〕
　土器（387 ～ 392）〈第220図、写真図版169・170〉。
　円盤状土製品（1255 ～ 1258）。
　敲磨器類（2731）。

ＲＤ07土坑（第147図、写真図版106）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ10ｉグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面はやや内傾して直線的に立ち上がる。底面から80cmほどのところでくびれて外傾に転じ、開口部は漏斗状に開く。開口部径は約130cm、狭窄部径は約90cm、底面径は約130cm、底面までの残存深度は138cmである。
〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのはＶａ層類似の黒色土（７層）である。上位に重なる黒褐色土（６層）とともに、開口部から流入したものとみられる。流入土は狭窄部を経て落下するため、底面の中央に集中しマウンド状を呈している。この上位を狭窄部付近まで一気に埋めているのは、地山土（Ⅵ層土）ブロック層の４・５層である。狭窄部より下部の壁面崩壊によるものとみられ、本来の壁面はより強く内傾していたものとみられる。
　最初に堆積したマウンド状の黒色土層と、壁崩落層の間からは横転して潰れた深鉢形土器が出土している。床面東縁にはこの土器の底部が正位にのこっており、これを支点に西側に向かって崩落層に押しつぶされた様子がうかがえた。壁の崩落以前は東側の壁際に正位に据え置かれていたものと考えられる。なお、この深鉢の胴部下半付近からは径12cmの礫が１点出土している。本遺跡で複数確認されている、内部に礫を伴う埋設土器に類似する事例といえる。
　壁崩落によって狭窄部以下の大半が埋没したのちは、本土坑は擂り鉢状の凹地となっている。この凹地には土器の大形破片やに加え割れた石皿が投棄されて（周囲からずり落ちて？）いる。その後は開口部からの土砂の流入が進んだらしい。埋土にⅢ層土は認められないので、本土坑の埋没はⅢ層堆積以前に完了したとみられる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕堆積状況および出土遺物から、縄文時代後期初頭のものと考えられる。
〔出土遺物〕
　土器（393 ～ 404）〈第220 ～ 222図、写真図版170・171〉。
　石鏃（1906）。
　石皿（2360a・2360b）。

ＲＤ08土坑（第146図、写真図版106）
〔位置・検出状況〕南端斜面部、ⅡＡ12ｉグリッドに位置する。Ⅵ層上面において褐色土と黒褐色土からなる明瞭な同心円状の略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は128×114cmの略円形、底面までの残存深度は36cmである。全体形は椀形を呈し、壁面及び底面にはやや凹凸がある。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はＶａ層土である。最下層は地山ブロック層。中間にＶａ層土が堆積し、その上を地山土（Ⅵ層土）類似の褐色土が覆う。全体にⅢ層土による根攪乱が広がっている。

〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代早期中葉～中期末葉が想定される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ09土坑（第147図、写真図版107）
〔位置・検出状況〕南端斜面部、ⅡＡ12ｊグリッドに位置する。Ⅵ層上面において土器片を含む暗褐色の不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は138×108cmの楕円形、底面までの残存深度は26cmである。底面は平坦に整い、壁はやや外傾して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はＶａ層及びＶｂ層類似土である。底面直上には埋土中最も黒味の強い黒褐色土が堆積し、その上をＶｂ層及びⅥ層土が混入した暗褐色土が覆っている。埋土と壁の識別は困難であり、緻密度の差違等を元に立ち上がりを把握したものである。
〔重複遺構〕精査・記録後、周囲からRA22住居跡が検出された。先後関係は本土坑がRA22を切っていることとなるが、本遺構が本来はRA22の埋土の一部であった可能性は大いにある。
〔遺構の時期〕埋土の様相及び出土遺物から、縄文時代早期中葉頃と考えられる。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ10土坑（第147図、写真図版107）
〔位置・検出状況〕南端斜面部、ⅡＡ11ｉグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は100×68cmの不整楕円形、底面までの残存深度は20cmである。全体的に根攪乱に侵されており、壁面及び底面には凹凸が目立つ。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はＶａ層類似の黒褐色土である。Ⅲ層土による根攪乱が全体に広がるが、本来の埋土にⅢ層土の混入は認められない。
〔重複遺構〕なし。RD06に近接している。
〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代早期中葉～中期末葉が想定される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ11土坑（第147図、写真図版107）
〔位置・検出状況〕北西部、ⅠＡ22ｋグリッドに位置する。平安時代の竪穴住居跡RA01の北壁際床面において明瞭な黒褐色土の円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は径130cmの円形、底面までの残存深度は36cmである。底面は平坦に整い、壁はわずかに外傾して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土はⅣ層またはＶａ層起源とみられる黒褐色土を主体とし、Ⅵ層土ブロックを多く含んでいる。１～３に分層したがⅥ層土ブロックの多寡によるものであり、全体が同時的に（おそらく人為的に）埋まったものである可能性が高い。上部を切って重複するRA01の土層断面を観察すると、RA01内の埋没開始時点において本土坑は開口していなかった事が理解され、本土坑埋土とRA01のそれとの関係性が不整合であることは明らかである。またRA01の構築～廃絶～埋没の各時点において当該地点にすでに堆積していたはずのⅢ層（縄文時代後期後半）が本土坑埋土に一切混入しない事実も、本土坑とRA01との間に時間的な隔たりがあることを示している。

よって本土坑は、RA01との位置関係からこれに付属する土坑であることが大いに疑われたが、上に掲げた検討結果を受け、RA01とは帰属時期が異なる（古い）遺構であると判断した。
〔重複遺構〕上記の通り、平安時代の竪穴住居跡RA01に切られる。
〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代後期中葉が想定される。付近の類似遺構（RD01・RD02等）の年代から縄文時代中期末～後期に帰属する可能性が高い。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ12土坑（第148図、写真図版107）
〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡＡ２ｎグリッドに位置する。Ｖａ層中において、Ⅵ層類似の黄褐色土とＶａ層類似の黒褐色土が同心円状に広がる円形範囲として認識された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面はやや内傾して直線的に立ち上がる。底面から120cmほどのところでくびれて外傾に転じ、開口部は漏斗状に開く。開口部径は約140cm、狭窄部径は約80cm、底面径は約150cm、底面までの残存深度は160cmである。
〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのはＶａ層相当の黒褐色土（11層）である。開口部からの流入土とみられる密に締まった土層である。この層の上面またはやや埋まった状態で、壁際から計５点の礫（径15～30cm）が出土した。投棄されたかあるいはしっかりと壁際に据え置かれたようにも見える。これらの上位はⅥ層やＶｂ層ｎブロックを多く含む締まりを欠いた土層（10層）が覆っている。壁崩落土か投棄土であろう。その後はＶａ層類似の流入土（３・６・８・９層）と締まりを欠くブロック層（４・５・７層）が交互に堆積してほぼ大半が埋まっている。
埋没の最終段階に至って、凹地となった開口部には多量の黄褐色土（Ⅵ層相当）が堆積している。土層断面に明らかなとおり、地山として遺構の周囲に堆積するⅥ層のレベルよりも高位にあり、他所から運んだⅥ層土を意図的に投入したものと考えられる。黄褐色土（Ⅵ層土）の意図的な埋め均し行為は、本遺跡では他の遺構においても複数確認されており、その意味するところを検討する必要がある。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代中期末葉が想定される。周辺の類似遺構の年代から縄文時代中期末～後期に帰属する可能性が高い。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ13土坑（第148図、写真図版108）
〔位置・検出状況〕東端部、ⅡＡ１ｕグリッドに位置する。Ｖａ～Ⅵ層上面において黒褐色土の不明瞭な略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面はやや内弯・内傾して立ち上がる。底面から60cmほどのところまで内傾する壁が残存するが、それ以上の部分は削平されており、また検出面付近では根攪乱も著しいことから本来の形状は明らかでない。現状での開口部は176×158cmの略円形、底面は約140cmの円形、底面までの残存深度は74cmである。
〔埋土と堆積状況〕底面直上に堆積するのは、Ⅵ層土ブロック層をやや多く含む土層（７・８層）である。他のフラスコ状土坑と同様、狭窄部の制約を受けて底面中央部に厚く堆積し、本層上面はわずかに高まりマウンド状を呈している。この面上から径30～40cmの大形礫３点が出土した。最大の１点がほぼ中央から、他の２点はそれぞれ北西壁際・東壁寄りに位置する。これらの上位はＶａ層類似の黒褐

色土層と、これにⅥ層土ブロックを含む土層によって埋没しているが、根攪乱が埋土全体に及び明瞭な層界を認められる部分は限定的であった。したがって堆積過程の詳細については不明である。
〔重複遺構〕なし。類似するRD66・RD67に近接している。
〔遺構の時期〕Ｖａ層土を主体とするが、周辺の類似遺構の年代から縄文時代中期末～後期に帰属する可能性が高い。
〔出土遺物〕円盤状土製品（1260）。

ＲＤ14土坑（第149図、写真図版108）
〔位置・検出状況〕北西部、ＩＡ25ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模･形状〕開口部は230×214cmの円形､底面までの残存深度は18cmである。底面はほぼ平坦に整い、壁は内弯外傾して立ち上がる。底面中央から径24cmの小ピットが検出されているが、本遺構に伴うか否かは不明。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層相当の黒色土を主体とする。下部にはⅥ層土ブロックがやや多く含まれる。自然の流入土によって埋没したものと見られ、埋土自体は近くに位置する縄文時代早期住居跡のRA16に良く似る。
〔重複遺構〕縄文時代後期住居跡とみられるRA06の下位から検出されたものである。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期の可能性が高い。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ15土坑（第148図、写真図版108）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｉグリッドに位置する。Ｖａ～Ⅵ層上面において黒褐色土の円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は134×124cmの円形、底面までの残存深度は26cmである。底面は平坦に整い、壁はわずかに外傾して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はⅣ層相当の暗褐色土。上部にのみわずかにⅢ層の橙色粒子が混入する。またⅥ層土ブロックをランダムに含むが、埋土は概ね一様であり人為的に埋められた可能性が高い。
〔重複遺構〕RA12を切っている。
〔遺構の時期〕主体土層の堆積時期は、縄文時代後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕石錘（2781）。

ＲＤ16土坑（第149図、写真図版108・109）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ8ｊグリッドに位置する。RA12の検出段階において南東壁から張り出す黒褐色土の略円形範囲として検出された。検出面はＶａ～Ⅵ層上面である。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、特に中央部付近がガッチリと硬化している。壁面は下部で直立し、その後内傾して立ち上がる。底面から約100cmのところでくびれて外傾に転じ、開口部は漏斗状に開く。開口部径は約160cm、狭窄部径は約120cm、底面径は約160cm、底面までの残存深度は172cmである。
〔埋土と堆積状況〕まず底面直上に流入土層の13層、壁際ではその上に崩落土層の12層、さらに上位に再び流入土層の11層が堆積し、底面から約20cmのところまでほぼ水平に埋没している。この時点の

底面上（12層上面～11層中）において、北壁際に小形鉢、南壁際に深鉢、東壁際には径20cmの礫が、それぞれ据え置かれたような状態で出土した。小形鉢はRA13配石遺構の北端礫下に埋納されたものに良く似ている。小形鉢の置かれた面には焼土の生成しており、また深鉢と礫にも被熱痕跡が認められた。周辺には焼土粒と炭化物の飛散もみられることから、下部の堆積が半埋没状態の土坑内において土器・礫の配置と共に、燃焼行為を伴う何らかの行為が行われたものと推測される。土層断面の焼土層（10層）は、一部再堆積とみられる部分も含むが、この行為に由来するものであろう。

このあと、土坑内は再び流入土によって埋没が進み、さらに崩落土の堆積もあってほぼ狭窄部付近まで埋没が進んでいる。開口部に近い上部壁面には広くRA12埋土が露出しており、付近にはRA12埋土が崩落・再堆積した部分もあって本土坑埋土とRA12埋土の境界が不明瞭となっている。埋没の最終段階には開口部付近は凹地となり、ここにⅥ層相当の黄褐色土ブロックの投入と、それに続く土器大形破片・ミニチュア土器・石皿等の投棄が行われている。

なお、重複するRA12においても埋没途上に黄褐色土の投入が行われたことがわかっている。本土坑埋土上部に見られる黄褐色土層には、RA12のそれと連続（同時堆積）するか、またはRA12の当該土層の崩落層が一部含まれている可能性があるが、この点について詳細な検討は行えなかった。

〔重複遺構〕RA12大形竪穴住居跡の南東壁際に重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕

土器（405～425）〈第223・224図、写真図版171・172〉。

ミニチュア土器（1148）。

円盤状土製品（1261～1265）。

石鏃（1578・1579・1808～1810・1964・1965）。

箆状石器（2118）。

石錘（2782）

石皿（2361）。

敲磨器類（2416・2657・2732）。

ＲＤ17土坑（第149図、写真図版109）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ7ｈグリッドに位置する。RA12大形竪穴住居跡の西壁に張り出す黄褐色土の円形範囲として検出された。当初はRD23と対になってRA12の出入口部を構成するものと想定し精査に着手したが、RA12の精査をすすめる過程でそれぞれ単独の土坑であることが判明したものである。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整う。壁面は下半でやや強く内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立に近くなる。本来はこの上に漏斗状に開く開口部を持っていたと思われるが、RA12の床面より上の部分は、RA12の埋土と共に掘り上げてしまったため記録できなかった。完掘状態での開口部径は120×88cm、狭窄部径は76cm、底面径は約120cm、底面までの残存深度は78cmである。

〔埋土と堆積状況〕底面中央には流入土と思われる黒褐色土がマウンド状に堆積し、壁際ではその上位にⅥ層土ブロック層が被っている。ここまで埋まった段階（３層下面）で、中央からやや東寄りに径18cmの礫が入れられている。この上はさらに流入土と思われる黒褐色土に覆われ、さらに壁の崩落

土とみられる１・２層の堆積によって最上部（本来の狭窄部付近か）まで埋没している（締まりを欠き炭粒・焼土粒をむ１層はRA12埋土の崩落再堆積層であろう）。

断面図に記録できたのは狭窄部付近までであるが、これより上位がRA12埋土に連続する黄褐色土（RA12の５層及び7層）で埋められていることが確認されている（上記の通り、RA12の西壁から張り出す黄褐色土の円形範囲として検出）。半埋没状態のRA12の壁際付近に掘り込まれた本土坑が、その後住居跡内部の埋め均しに伴い、同時的に黄褐色土を充填されたものと考えられる。

なお、埋土上部からは石皿片が出土しており、下部に土器や礫が納められる他の土坑が、開口部付近に石皿を伴う例と共通している。この石皿破片は、東に20m弱離れた地点から出土した別の破片（石皿2362b）と接合した。

〔重複遺構〕RA12大形竪穴住居跡の西壁に重複し、複式炉前庭部埋土を切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕石皿（2362a）。

ＲＤ18土坑（第150図、写真図版109）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ８ｋグリッドに位置する。Ｖｂ層上面において、Ｖａ層類似黒色土の円形範囲として検出された。

〔規模･形状〕開口部は186×176cmの略円形、底面までの残存深度は28cmである。皿状の断面形を呈し、壁は内弯外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層土の単層である。この黒褐色土を掘り上げたところ、底面にはⅥ層、壁面にはＶｂ層類似の暗褐色土があらわれた。

〔重複遺構〕RA32に重複しこれを切っている。ただし本土坑埋土が本来はRA32の埋土の一部であった可能性も否定できない。縄文時代早期竪穴住居跡の埋土最上部にスポット状に（中央部に限らず）Ｖａ層土が入る事例がのちの調査で複数確認されており、これに類するものと見なし得るからである。

〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代中期末葉が想定される。上述の理由から、本遺構は縄文時代早期に帰属する可能性がある。

〔出土遺物〕石鏃（1849）。

ＲＤ19土坑（第150図、写真図版109）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ８ｊグリッドに位置する。Ⅵ層上面まで掘り下げたトレンチの底面及び壁面において、黄褐色土とその周囲を同心円状にめぐる黒褐色土からなる円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整っている。壁面は底面から70cmほどのところまでほぼ直立し、それより上はやや内傾して立ち上がる。底面から約140cmのところで急激にくびれ、大きく外傾して漏斗状に開く開口部へと至る。開口部はトレンチによって西半を失っている。径は150cmほどと推定される。狭窄部径は約90cm、底面径は約130cm、底面までの残存深度は165cmである。他の同種遺構に比べて細身で狭窄部もより狭く、全体が徳利様を呈している。

なお、底面の中央に径20cm、深さ３cmの浅い小穴が検出されている。圧痕様の凹みに泥質土が堆積していたものであり、柱材の埋置・固定は無理であろう。

〔埋土と堆積状況〕西壁際の底面からは深鉢の大形破片が貼りついたような状態で出土した。この上

を流入土あるいは崩落土とみられる土層が交互に覆い、底面から30～40cm辺りまでほぼ水平に堆積が進んだようである。特記すべきは、これより上方、開口部付近までの厚さ約100cmにわたり、他の混入土を含まない地山黄褐色土（Ⅵ層土）がぎっしりと密に充填されていることである。とりわけ充填土の上半（３層）は実に緻密で、本来の地山層との差違を見いだすことが困難なほどである。この黄褐色土は堆積後次第に収縮して上部ほど緻密さを増したらしく、壁面との間には空隙が生じている。ここに上部から黒褐色土が流入して開口部付近は凹地となり、さらなる流入土の堆積によって埋没を終えている。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕土器（426）〈第225図、写真図版173〉。

ＲＤ20土坑（第150図、写真図版110）

〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ11ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において、黄褐色土とその周囲を同心円状にめぐる黒褐色土からなる、やや不明瞭な円形範囲として検出された。

〔規模・形状〕〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整っている。壁はやや内傾して立ち上がり、上半部から開口部にかけてはほぼ直立となる。開口部は径104cmの円形、底面までの残存深度は86cmである。

なお、底面の中央に径22cm、深さ２cmの浅い小穴が検出されている。圧痕様の凹みに泥質土が堆積していたものであり、柱材の埋置・固定は無理であろう。

〔埋土と堆積状況〕底面中央にマウンド上に堆積する暗褐色土（５層）は周囲に向かって薄くなっている。北東壁際ではこの層の上面において焼土の生成箇所が認められ、また東壁際からは径14cmの礫が据え置かれたかのような状態で出土した。これらを被覆する黒褐色土層（４層）･暗褐色土層（３層）は、Ｖｂ層及びⅥ層相当土ブロックを含み全体に締まりを欠くことから、人為的に入れられた土である可能性が高い。最上部に堆積する１層もまたⅥ層ブロックを多く含み、黄褐色土が充填される他例に共通する。

〔重複遺構〕RA21に重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。

〔出土遺物〕

土器（427）〈第225図、写真図版173〉。

削掻器（2230）。

敲磨器類（2606）。

ＲＤ21土坑（第151図、写真図版110）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ８ｉグリッドに位置する。RA12南壁際の土層断面に、不整合に重複する別遺構として確認された。

〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面は内傾して立ち上がる。底面から約130cmのところで急激にくびれ、大きく外傾して漏斗状に開く開口部へと至る。開口部は本来、RA12に堆積するいずれかの層の上面にあったはずであるが、土層断面に本土坑を確認する以前に多

くの部分を掘り下げてしまったため原形は不明となった。断面の南側に観察される立ち上がりから、径150cm程度の円形の開口部を有していたものと推測される。狭窄部の径は約60cm、底面径は約150cm、底面までの残存深度は200cmである。
〔埋土と堆積状況〕底面直上には黒褐色土（５層）がマウンド状に堆積するが、この上位には大量の地山黄褐色土（Ⅵ層土）が充填され、狭窄部付近まで厚さ120cmにわたり一気に埋められている。充填された黄褐色土は密に締まり混入物も全く認められないことから、壁面に現れるはずの地山層との識別は極めて困難だった。一部、壁面と埋土との間隙にごく薄い黒褐色土層が認められたので、これを元に壁を追跡し全形をあらわすことができた。この充填土はRA12内に埋め均されていた黄褐色土層（RA12の５層及び7層）に連続する可能性が高く、半埋没状態のRA12の壁際付近に掘り込まれた本土坑が、その後住居跡内部の埋め均しに伴い、同時的に黄褐色土を充填されたものと考えられる。この後、開口部付近は擂り鉢状の凹地となり上方からの流入土によってRA12とともに埋没したものとみられる。
　なお、黄褐色土充填の最終段階（あるいは直後）、狭窄部付近を底面とする凹地内に、大形礫が投げ込まれているのが確認されている。他の土坑において石皿や土器大形片などを投げ入れる例に類似する行為である。
〔重複遺構〕RA12の７層下面以下を切り、それ以上の層に被覆される。またRD40と下半部が重複しこれを切る。
〔遺構の時期〕埋土の様相および重複関係等、層位的事実から縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ22土坑（第150図、写真図版110）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ６ｈグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は108×94cmの略円形、底面までの残存深度は84cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はＶａ層土類似の黒褐色土である。下半部においては、壁崩落土と流入土が互層をなしてレンズ状に堆積した様子が観察される（４～10層）。これを上方から抉るように３層が切り込んでいる。一度埋没した土坑を上方から再度掘り返したようにも思われるが、その他の根拠に乏しく判断できない。上半部にのこった凹地は流入土によって埋没したとみられる。なお、本土坑はRA12の北壁側に並ぶ大形柱穴（PPA41・同43）の延長上に位置しており、これらとの間隔寸法や規模から、RA12に関連する柱穴等の可能性を考慮する必要がある（埋土の断面は「柱穴」のそれに良く類似している）。
〔重複遺構〕なし。RA12の北西に近接する。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕敲磨器類（2658）。

ＲＤ23土坑（第151図、写真図版111）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ７ｈグリッドに位置する。RA12大形竪穴住居跡の西壁に張り出す黄褐色土の円形範囲として検出された。当初はRD17と対になってRA12の出入口部を構成するものと想

定し精査に着手したが、RA12の精査をすすめる過程でそれぞれ単独の土坑であることが判明したものである。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整う。壁面は下半で内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立し、上端でわずかに開く。本来はこの上に漏斗状に大きく開く開口部を持っていたと思われるが、RA12の床面より上の部分は、検出以前にRA12の埋土と共に掘り上げてしまったため記録できなかった。完掘状態での開口部径は150×130cm、狭窄部径は110×94cm、底面径は約150cm、底面までの残存深度は136cmである。
　底面中央には径28cm、深さ６cmの小穴をもつ。また、小穴から壁側に向かって放射状にのびる５条の溝状痕跡も検出されている。棒状材が底面に圧着したような痕跡であり、小穴側が深く壁側で浅いため、壁に向かって先細りとなっている。
〔埋土と堆積状況〕底面直上への黒褐色土（８層）の流入に始まり、以後３層まで、壁崩落土と流入土が互層をなして下半部を埋めている。この段階で擂り鉢状の凹地となった内部に、緻密で混入物のない黄褐色土（Ⅵ層土）が充填されている。この上位には再び黒褐色土の堆積が見られるが、締まりを欠く黒褐色土であり、RA12埋土の崩落土層と見られる。以上、断面図に記録できたのは狭窄部付近までであるが、これより上位がRA12埋土に連続する黄褐色土（RA12の５層及び７層）で埋められていることが確認されている（上記の通り、RA12の西壁から張り出す黄褐色土の円形範囲として検出）。半埋没状態のRA12の壁際付近に掘り込まれた本土坑が、その後住居跡内部の埋め均しに伴い、同時的に黄褐色土を充填されたものと考えられる。
〔重複遺構〕RA12大形竪穴住居跡の西壁に重複し、これを切っている。
〔遺構の時期〕埋土の様相、出土遺物及び類似遺構の年代観から、縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。
〔出土遺物〕石匙（2008）、磨製石斧（2337）。

ＲＤ24土坑（第152図、写真図版111）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ９ｌグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は164×140cmの略円形、底面までの残存深度は10cmである。底面中央はほぼ平坦、壁に向かって緩やかに高くなり断面形が浅皿状を呈する。南西壁際には炉状の石組みを伴う隅丸方形の掘り込み（46×32cm）が付属する。床面から８cmほど掘り下げて底面を平坦に仕上げ、掘り込みの内壁に長さ10～20cmの礫を据えた構造となっている。礫にはいずれも被熱による赤変が認められる。だが掘り込み内部及びその周辺に、焼土の生成や炭化物の飛散等は認められなかった。このほか、北壁に径60cm強の浅い円形の掘り込みを伴うが、埋土が一様であり付属するものか否かは判断できなかった。
〔埋土と堆積状況〕Ⅳ～Ｖａ層相当の黒褐色土による単層である。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕箆状石器（2119）。

ＲＤ25土坑（第152図、写真図版111）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｋグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な楕

円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は156×146cmの略円形、底面までの残存深度は32cmである。底面は平坦に整い、壁は緩やかに内弯しながら立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はＶａ層土と見られる黒褐色土だが、これにＶｂ層土及びⅥ層土ブロックを含み全体にやや明るい。根攪乱等、後世の乱れが目立ち堆積過程の詳細な復元はできなかった。
〔重複遺構〕RA14・RA15（縄文時代中期末・後期初）に切られ、RA23・RA24（早期中葉？）を切る。
〔遺構の時期〕埋土の様相及び重複以降との切り合い関係から、縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ26土坑（第152図、写真図版112）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ９ｏグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色～暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は150×120cmの楕円形、底面までの残存深度は22cmである。底面は概ね平坦に整い、壁は内弯しながら立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土を主体とし、壁際ではＶｂ～Ⅵ層土のブロックを含む。全体的に根攪乱に侵されており、土層断面の詳細な観察はままならなかった。
〔重複遺構〕RA26を切り、PPB471に切られる。
（PPB471との先後関係は、精査の過程で、断面写真撮影時と解釈が逆転した。）
〔遺構の時期〕埋土の様相及び重複以降との切り合い関係から、縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕
　土器（428）〈第225図、写真図版173〉。
　尖頭器（1508）。

ＲＤ27土坑（第153図、写真図版112）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｊグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不整楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は190×128cmの不整楕円形、底面までの残存深度は16cmである。底面はやや凹凸が目立つが概ね平坦であり、壁は内弯しながらなだらかに立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層類似暗褐色土を主体とする単層である。ブロック状に入る黒褐色土（Ｖａ層土）は根攪乱によるものである。
〔重複遺構〕RA27を切り、PPB411に切られる。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕
　土器（429）〈第225図、写真図版173〉。
　石鏃（1580）。

ＲＤ28土坑（第153図、写真図版112）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｉグリッドに位置する。Ⅵ層上面において褐色土の不明瞭な不整

楕円形範囲として検出された。
〔規模･形状〕開口部は150×112cmの楕円形､底面までの残存深度は18cmである｡底面は概ね平坦に整い、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はＶｂ層類似の褐色土である。周辺の地山土に比して締まりを欠いている。下半部より上半部が黒味を帯びる印象だが、上半部がＶａ層土の入る根攪乱に侵されているためであり、本来は単層とみて差し支えないと思われる。
〔重複遺構〕RA27を切る。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ29土坑（第154図、写真図版112）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ11ｌグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模･形状〕開口部は98×58cmの楕円形､底面までの残存深度は38cmである。開口部から底部に向かって狭くなる、擂り鉢状の形状を呈する。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層類似の暗褐色土を主体とする。Ⅵ層土ブロックを多く含む層（２層）を間に挟んでいる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕自然礫（2823）。

ＲＤ30土坑（第154図、写真図版113）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｋグリッドに位置する。RA14（後期住居）の床面に検出された柱穴状ピット群の精査中、これらに切られている別の遺構埋土として認識された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑とみられる。底面は平坦に整う。壁面は下半で内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立し、上端でわずかに開く。さらに上には漏斗状に開く開口部を持っていたと思われるが、RA14に切られており本来の形状は不明となっている。完掘状態での開口部径は132×116cm、狭窄部径は122×112cm、底面径は130×122cm、底面までの残存深度は52cmである。なお底面には径30cmほどの小穴が見られるが、本土坑に付属するものではなく、本来はRA14に伴う柱穴であった可能性が高い（本土坑埋土を切っていたものを完掘時まで認識できなかった結果と思われる）。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土を主体とする。最下層の５層は流入土であろう。狭窄部の影響か、中央が盛り上がるマウンド状の堆積となっている。その上を覆う４層は、Ｖｂ類似の暗褐色土ブロックを多く含んでおり、壁の崩落を伴いながら徐々に埋没が進んだことを示唆している。
〔重複遺構〕RA14・RA15と重複し、RA14に切られている。RA15との先後関係は不明。このほか、RD33を切る。
〔遺構の時期〕埋土の様相及び重複遺構との関係から、縄文時代中期末～後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕土器（430・431）〈第225図、写真図版173〉。

ＲＤ31土坑（第154図、写真図版113）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ10ｊグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な不

整楕円形範囲として検出された。
〔規模･形状〕開口部は116×110cmの略円形､底面までの残存深度は32cmである｡底面は概ね平坦に整い、壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はＶｂ層土類似の暗褐色土であるが、Ｖａ層類似の黒色土をブロック状に含み全体にやや黒味を帯びる。埋土の上部にはⅥ層土ブロックが目立ち、下半部に比してやや明るい。
〔重複遺構〕RA25と重複するが、先後関係は不明である。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ32土坑（第155図、写真図版113）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｊグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は径100cmの略円形、底面までの残存深度は28cmである。底面は平坦に整い、壁はほぼ直立して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層相当の褐色土が主体で、Ｖａ層相当の黒褐色～暗褐色土ブロックが散見されるものの全体に一様である。埋土の最下部には径20cmほどの礫４点を含み、南壁際底面からは尖底土器の大形破片が出土した。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕出土遺物の年代観と埋土の様相から、縄文時代早期中葉と考えられる。
〔出土遺物〕
　土器（432）〈第225図、写真図版173〉。
　石皿（2363）。

ＲＤ33土坑（第154図、写真図版113）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｋグリッドに位置する。Ⅵ層上面（RA15床面）において、RD30に連続する黒褐色土の不明瞭な弧状範囲として検出された。
〔規模・形状〕大半をRD30に壊されているが、開口部は概ね径120cm程の楕円形を呈するものと推測される。底面までの残存深度は26cm。残存部では平坦な底面とほぼ直立して立ち上がる壁が観察される。
〔埋土と堆積状況〕埋土はＶａ～Ｖｂ層土に由来するとみられる赤味のある黒褐色土である。Ⅵ層土ブロックを含んで明るく、開口部から底部まで一様である。
〔重複遺構〕RA14、RA15、RD30に切られる。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕土器（433・434）〈第225図、写真図版173〉。

ＲＤ34土坑（第155図、写真図版114）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ９ｍグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は72×50cmの楕円形、底面までの残存深度は28cmである。断面形は椀形を呈し、

丸みをもった底部に連続して壁は内弯しながら立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層相当暗褐色土が主体の単層である。本来のＶｂ層よりやや暗い。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ35土坑（第155図、写真図版114）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｊグリッドに位置する。Ⅵ層上面において褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は84×66cmの楕円形、底面までの残存深度は26cmである。底面は平坦に整い、壁はやや外傾して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層土相当褐色土を主体した単層である。本来のＶｂ層土よりやや暗い。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ36土坑（第155図、写真図版114）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ8ｉグリッドに位置する。Ⅵ層上面において褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は82×58cmの楕円形、底面までの残存深度は42cmである。断面形は椀形を呈し、丸みをもった底部に連続して壁は内弯しながら立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層相当暗褐色土が主体の単層である。本来のＶｂ層よりやや暗い。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ37土坑（第156図、写真図版114）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ８ｊグリッドに位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において黒色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模･形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整えられている。壁面は下半で強く内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立、上端でわずかに開く。開口部径は120cm、狭窄部径は110cm、底面径は135cm、底面までの残存深度は76cmである。
〔埋土と堆積状況〕断面図及び写真ではまず壁際に崩落土層（８・９層）が堆積し、その後に黒色土が流入したよう表現しているが、他の同類遺構の例をもとに写真等を再検討したところ、やはり他例と同様、流入土（７層）が先にマウンド状に堆積し、その後に崩落層が堆積、さらに黒色土４層の流入があって凹地となったところに、黄褐色土（２層）が入れられ、最後に最上部にⅣ層相当層が堆積して埋没を終えているという過程が読み取れた。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相等から縄文時代中期末～後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ38土坑（第155図、写真図版115）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ７ｊグリッドに位置する。RA20の床面において黒褐色～暗褐色土の略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕西側をRA12に切られているが、開口部は径140㎝程度の円形と推測される。底面までの残存深度は28㎝である。底面は平坦に整い、壁はやや外傾して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ～Ｖｂ層土に相当する暗褐色土が主体である。上部の２層は黒味が強いが、ほかは地山Ⅵ層土が濁ったような明るい埋土である。
〔重複遺構〕RA12に切られる。RA20とも重複するが先後関係は不明（同時の可能性も有）。
〔遺構の時期〕出土遺物の年代観と埋土の様相から、縄文時代早期中葉と考えられる。
〔出土遺物〕土器（435）〈第225図、写真図版173〉。

ＲＤ39土坑（第156図、写真図版115）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ９ｈグリッドに位置する。Ⅵ層上面～Ⅵ層中において褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は156×94㎝の楕円形、底面までの残存深度は26㎝である。底面は概ね平坦に整い、壁はやや内弯して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はＶｂ層類似の褐色～灰褐色土である。断面図及び写真では遺構の上位をⅥ層上部に相当する黄褐色土が覆っている（掘り込み面がⅥ層下面となっている）ように表現しているが、周辺の別遺構の堆積状況等をもとに断面写真等を再検討したところ、Ｖｂ層土主体の１層の上位に、Ⅵ層土ブロックを多量に含む層が堆積している状況であることがわかった。つまり初めにＶｂ層土主体の褐色土（１層）が堆積し、その上部にⅥ層土ブロック層が堆積したということである。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ40土坑（第157図、写真図版115）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ８ｉグリッドに位置する。RA12南壁寄りの土層断面に、不整合に重複する別遺構として確認された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面は下半で強く内傾し、上半は傾斜を緩めてほぼ直立する。開口部は本来、RA12に堆積するいずれかの層の上面にあったはずであるが、土層断面に本土坑を確認する以前に多くの部分を掘り下げてしまったため原形は不明である。本来の狭窄部付近に相当する上端径は約60㎝、底面径は約120㎝、底面までの残存深度は96㎝である。
〔埋土と堆積状況〕遺憾ながら、不手際により図・写真等の埋土断面記録がない。精査時の所見によれば、近接するRD21によく似た堆積状況を示し、下部に自然流入土と見られる暗褐色土が堆積した後は、ほとんどが黄褐色土（Ⅵ層）で埋められていたことがわかっている。図はRA12床面での状況を示しているが、上述の通り、本遺構はRA12埋土を切って掘り込まれたものであり、本来はこの上位にも埋土がのびていた。RA12精査時の写真によれば、RA12の埋土を切る本遺構上部埋土もほとんどがⅥ層土で埋められていること、そしてこの層がRA12の埋土中位に広く埋め均された黄褐色土に連続するものであることがわかる。
　したがって、本土坑は半埋没状態のRA12内部（RA12：5層又は７層下面）に掘り込まれ、その後、

RA12への埋め均し行為に伴い、大量のⅥ層土で埋め戻されたものと考えられる。
〔重複遺構〕RA12の７層下面以下を切り、それ以上の層に被覆される。またRA12付属のPPA130・131を切っている。RD21に下半部が重複し切られている。
〔遺構の時期〕埋土の様相および重複関係等、層位的事実から縄文時代後期初頭に帰属するものと判断される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ41土坑（第156図、写真図版115）
〔位置・検出状あ況〕南西部、ⅡＡ８ｇグリッドに位置する。調査区西側境界のⅥ層上面において黒褐色土の比較的明瞭な半円状範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。西側の半分強が調査区外にあり本来の開口部形状は不明であるが、概ね150cm程度の円形を呈するものであろう。底面は平坦に整っている。壁はほぼ直立して立ち上がり、底面から約50cmのところで屈曲して強く内傾する。さらに、底面から約90cmのところで急激にくびれて外傾に転じ開口部が漏斗状に開く。全体的には徳利様の形状を呈する。狭窄部の径は約80cm、底面径は約150cm、底面までの残存深度は110cmである。
〔埋土と堆積状況〕埋土はＶａ層類似の黒褐色土を主体とする。全体的に崩落土層と流入土層によって埋没した様子が観察できる。埋没の最終段階には開口部付近がⅣ層に覆われている。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相及び基本土層との層位的関係性から縄文時代中期末～後期初頭に帰属するものと判断される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ42土坑（第157図、写真図版116）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ８ｋグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色～暗褐色土の楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は100×60cmの楕円形、底面までの残存深度は32cmである。底面は丸みをもち、内弯して立ち上がる壁に連続している。
〔埋土と堆積状況〕埋土はＶａ層類似の黒褐色土を主体とする。
〔重複遺構〕RA14に被覆され、PPB614に切られる。RA32と重複するが先後関係は不明（同時の可能性有）。
〔遺構の時期〕主体土層の堆積年代は縄文時代早期中葉～中期末葉とみられる。
〔出土遺物〕土器（436）〈第225図、写真図版173〉。

ＲＤ43土坑（第157図、写真図版116）
〔位置・検出状況〕北東部、ⅠＡ24ｔグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は140×130cmの略円形、底面までの残存深度は36cmである。底面は平坦に整う。壁は下端がわずかに外に張り、その後直立して立ち上がる。周辺の類似遺構に照らせば、本土坑もいわゆるフラスコ形土坑であった可能性が高く、後世に上部を大きく削平されたと考えられる。
〔埋土と堆積状況〕底面を覆う４・５層はⅥ層土ブロックを含む崩落土とみられ、４層が堆積した時

点で底面から約20cmまで埋まっている。この段階（４層上面）で、径25cmほどの礫１点が内部中央に入れられている。その後は黒褐色土（Ｖａ層相当）が流入し埋没が進んだと考えられる。本土坑は調査区内のほぼ最高地点にあたる尾根頂部に位置しており、表土の流出が激しかったと推測される。本土坑の上部埋土もこれにより失われたと考えられる。
〔重複遺構〕RG01に切られる。RD44とも重複するが先後関係は不明である。
〔遺構の時期〕埋土の様相及び類似遺構の年代観から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ44土坑（第157図、写真図版116）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ24ｔグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は112×80cmの楕円形、底面までの残存深度は22cmである。底面は丸みをもち、内弯する壁に連続して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の大半を根攪乱による暗褐色土に侵されている。わずかに壁面付近に、埋土と考えられるＶｂ層類似の褐色～暗褐色土が観察されるが、根攪乱によってⅥ層が濁った部分とも考えられる。
〔重複遺構〕RD43と重複するが先後関係は不明である。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃の可能性があるが、詳細は不明である。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ45土坑（第157図、写真図版116）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ23ｕグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は70×60cmの略円形、底面までの残存深度は16cmである。底面は丸みをもち、内弯する壁に連続して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕埋土の多くを根攪乱である暗褐色土に侵されている。底面付近に埋土と考えられるＶｂ層類似の褐色～暗褐色土が観察されるが、根攪乱によってⅥ層が濁った部分とも考えられる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃の可能性があるが、詳細は不明である。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ46土坑（第157図、写真図版117）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ23ｕグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は114×102cmの略円形、底面までの残存深度は12cmである。丸みを持った底面に連続してなだらかに立ち上がり、断面形が浅皿状を呈する。
〔埋土と堆積状況〕暗褐色土を主体とする。RD44・RD45の埋土に見られる根攪乱層によく似るが、全体形状も整っており、人為による遺構の可能性は否定できない。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃の可能性があるが、詳細は不明である。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ47土坑（第158図、写真図版117）
〔位置・検出状況〕南西部、ＩＡ23ｓグリッドに位置する。RG02の壁面（Ⅵ層）において黒褐色土の明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。狭窄部付近から上をRG02に切られている。底面は平坦に整い、壁はやや内傾して直線的に立ち上がる。現状での開口部は78×60cmの楕円形、底面は86×76cmの楕円形、底面までの残存深度は60cmである。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層相当の黒褐色土を主体とする。下部はⅥ層土ブロックを少量含む。全体に自然の流入土によって埋没したものと判断される。
〔重複遺構〕RG02に切られる。
〔遺構の時期〕埋土の様相等から縄文時代中期末～後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ48土坑（第158図、写真図版117）
〔位置･検出状況〕北東部、ＩＡ23ｓグリッドに位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において周囲より暗い不明瞭･不整形な範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、しっかりと締まっている。壁は下半部では内傾して立ちあがり、底面から30cm程のところで屈曲して急激に外反に転じている。埋没の過程においてやや大きな壁の崩落があったものとみられ、特に上半部は原形を大きく損ねている可能性が高い。現状の開口部は156×130cmの楕円形、狭窄部が128×108cmの楕円形、底面までの残存深度は58cmである。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土を主体とする。北側から落ち込んだようなⅥ層土を多く含む層（２～４層）が大半を埋めており、人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。特に、RA12の壁際付近に集中する複数のフラスコ形土坑に見られるように、仮に本土坑が（廃絶後の）RA77の壁際に設けられ、その後RA77内部への土砂の投棄が行われたとすれば、本土坑に北側から一気に土砂が流入した状況も理解できる。可能性の一つとして指摘しておきたい。
〔重複遺構〕北壁にRA77に帰属するPPB701が重複し、これを切っている。
〔遺構の時期〕埋土の様相及び重複遺構との関係から縄文時代後期初頭と考えられる。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ49土坑（第158図、写真図版117）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ23ｒグリッドに位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において暗褐色土のやや不明瞭な略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕全体形状は円筒形に近いが、壁下端がわずかに張り出す特徴を持つことから、本来はいわゆるフラスコ形土坑であったとみられる。開口部は径110cm、底面は径90cm、底面までの残存深度は56cmである。
〔埋土と堆積状況〕底面中央から径26cmの扁平な角礫が一点、据え置かれたように出土した。底面からは５cmほど浮いている。これを覆うのはⅣ層土に似た暗褐色土主体の単層で、Ⅵ層土の小ブロックを全体に一様に含んでいる。

〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相等から縄文時代後期初頭を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ50土坑（第159図、写真図版118）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ24ｑグリッドに位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において暗褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕現状の開口部径は約150㎝、底面径150㎝、底面までの残存深度は48㎝である。底面はほぼ平坦に整い壁際でわずかに高まる。壁下端が外側に張り出し、主に下半部では壁が内傾することから、いわゆるフラスコ形土坑であったとみられる。後世に上部（狭窄部～開口部）を大きく削平された可能性が高い。
〔埋土と堆積状況〕底面直上は崩落土ブロックを含む褐色土（５層）と、流入土と見られる暗褐色土（４層）によって薄く覆われている。底面上が10㎝ほど埋まった時点に当たるこの面の中央から、深鉢形土器１点が横位で潰れた状態で出土した。また土器の直上と周囲からは、径15～20㎝程度の礫が土器に添えられたような状態で計５点出土した。この上は壁崩落土とみられる褐色土（３層）によって厚く覆われ、その後もＶ層類似の黒褐色土（２層）が流入するなどして堆積が進んだものと見られる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕出土土器の年代観及び埋土の様相から縄文時代中期末と考えられる。
〔出土遺物〕
　土器（437・438）〈第226図、写真図版173〉。
　鐸形土製品？（1174）。
　敲磨器類（2607）。

ＲＤ51土坑〈RA13関連遺構〉（第159図、写真図版118）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ６ｎグリッドに位置する。RA13本体の環状配石列と張出部の礫群とが接する範囲の西端にあたる地点である。RA13の下部構造を精査するため配石を除去しながらＶａ層を面的に掘り下げたところ、Ｖａ層中において、Ｖｂ層土及びⅥ層土ブロックを多量に含んだ土による明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕平面形は楕円形。開口部径156×92㎝、底面径134×62㎝、底面までの残存深度は74㎝である。底面は壁際まで平坦に整えられ、壁はほぼ直立する。長軸を東西方向に持つ（RA13の長軸とは直交する）。RA13に関連する墓壙であると考えられる。RA13関係図（第42～48図）を併せて参照されたい。
〔埋土と堆積状況〕埋土はＶｂ～Ⅵ層土のブロックを一様に含み、開口部の西側から流し込まれたような堆積状況を示すことから、人為的な埋め戻しが行われたものと判断される。地山土の混入で埋土全体が明るみを帯びるため本来の主体土の判別は困難だが、底面付近にＶａ層相当の黒褐色土の堆積（７層）があることや、埋土最上部を除きⅢ層に含まれる橙色粒子が混入しないことなどから、掘り込み面（構築時期）はⅣ～Ｖａ層上面と推測される。
　埋土の最上部（２層下面から上）には、中央よりやや東に寄った位置に径50㎝前後の礫がまとめて入れられている。この集石はRA13の敷土面より上位に露出しており、また、本土坑の輪郭に沿って、RA13の敷土が断絶していることなどから、RA13への敷土・配石が行われた後に、構築されたものと

判断される。とはいえ、RA13内における位置を考慮すれば、本土坑とRA13の間に大きな時間差は想定し得ない。
〔重複遺構との先後関係〕上記のとおり、RA13の（一部の）礫設置及び黄褐色土敷き均し行為に後続するものと考えられるが、大きな時間差は想定できない。
〔遺構の時期〕層位的関係性から縄文時代後期初頭と考えられる。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ52土坑（第164図、写真図版118）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ６ｏグリッドに位置する。RA13の下部構造を精査するため配石を除去しながらＶａ層を面的に掘り下げたところ、Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は164×92cmの楕円形、底面までの残存深度は18cmである。底面はやや凹凸が目立ち、壁は概ね直立して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層土類似の暗褐色土を主体とする。底面や壁との境界は不明瞭である。
〔重複遺構〕Ｖａ層相当土を埋土とする柱穴状ピットに切られている。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期頃の可能性があるが、詳細は不明である。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ53土坑（第159図、写真図版119）
〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡＡ５ｍグリッドに位置する。Ｖａ～Ⅵ層上面において暗褐色土及び褐色土からなる同心円状範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整えられている。壁面は下部で強く内傾するが、底面より60cm程度のところから上はほぼ直立、上端ではごく緩く開いている。開口部径は136cm、狭窄部径は106cm、底面径は160cm、底面までの残存深度は165cmである。
〔埋土と堆積状況〕４層以下は地山土を比較的多く含む締まりを欠いた土層である。数度にわたる壁の崩落によって下半部が埋まり、その後は上方からの流入土（３層以上）によって埋没を終えたものと考えられる。２層はⅣ層土に顕著な褐色土ブロックにも似るが、同種遺構の最上部に複数例確認されているＶｂ～Ⅵ層土の埋め均しに共通するものと思われる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕出土土器の年代観及び埋土の様相から縄文時代後期初頭と考えられる。
〔出土遺物〕土器（439・440）〈第226図、写真図版173〉。

ＲＤ54土坑（第158図、写真図版119）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ７ｍグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は108×100cmの略円形、底面までの残存深度は14cmである。丸みを持った底面にはやや凹凸があり、壁は内弯して緩やかに立ち上がる。断面形は皿状を呈する。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層土類似の暗褐色土を主体とする。壁及び底面との境界に堆積する２層はⅥ層との区別が難しい褐色土だが、地山層に比してわずかに暗く締まりが弱い。本遺跡の早期遺構の多くに共通することであるが、埋土の掘削後、一定の時間を経ると壁面の周囲がわずかに暗く変化し、

さらに掘り広げるべきであることに気付かされる場合がままある。本土坑についても同様であった。
〔重複遺構〕RB05のPPB703に切られる。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕土器（441）〈第226図、写真図版174〉。

ＲＤ55土坑（第160図、写真図版119）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ８ｍグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土のやや不明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模･形状〕開口部径154×100㎝の楕円形､底面までの残存深度は32㎝である｡底面はやや丸みを持ち、壁は内弯しながら立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ～Ｖｂ層土が主体。壁際と床面付近に地山Ⅵ層土の再堆積層が観察される。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕土器（442・443）〈第226図、写真図版174〉。

ＲＤ56土坑（第160図、写真図版119）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ８ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁はやや内傾して直線的に立ち上がる。狭窄部付近から上を削平されているとみられる。現状での開口部径は78㎝、底面径は130㎝、底面までの残存深度は78㎝である。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層相当の黒褐色土を主体とする。流入土の堆積が底面中央付近から始まりマウンド状の土層が形成されたのち、漸次表土の流入が続き埋没が進んだものと見られる。Ⅵ層土の崩落がほとんど見られないことから、現存する壁面は相当程度原形をとどめていると考えられる。

〔重複遺構〕RB05のPPB702に切られる。
〔遺構の時期〕埋土の様相及び類似遺構の年代観から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕石鏃（1850）、石錘（2783）。

ＲＤ57土坑（第160図、写真図版120）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ７ｍグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土のやや不明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は118×88㎝の楕円形、底面までの残存深度は16㎝である。丸みを持った底面にはやや凹凸があり、壁は内弯して緩やかに立ち上がる。断面形は皿状を呈する。
〔埋土と堆積状況〕Ｖｂ層土に類似する暗褐色土が主体。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕土器（444）〈第226図、写真図版174〉。

ＲＤ58土坑（第160図、写真図版120）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ８ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模･形状〕開口部は136×86cmの楕円形、底面までの残存深度は16cmである。底面は凹凸が目立ち、壁は内弯しながら立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕図上ではＶａ～Ｖｂ層土主体の単層（１層）と解釈しているが、重複するRA40との先後関係は判然とせず、むしろ２～５層まで含めてRA40に帰属する可能性も否定できない。
〔重複遺構〕RA40と重複するが先後関係は不明。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ59土坑（第161図、写真図版120）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ５ｏグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土のやや不明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は156×70cmの長楕円形、底面までの残存深度は28cmである。丸みを持った底面にはやや凹凸があり、壁は内弯して緩やかに立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ～Ｖｂ層土に類似する黒褐色土が主体。Ⅵ層土ブロックを少量含む。
〔重複遺構〕RA49に重複するが、先後関係は不明である。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ60土坑（第161図、写真図版120）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ７ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土のやや不明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は124×58cmの長楕円形、底面までの残存深度は18cmである。丸みを持った底面にはやや凹凸があり、壁は内弯して緩やかに立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ～Ｖｂ層土に類似する黒褐色土が主体。Ｖｂ～Ⅵ層土ブロックを少量含む。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ61土坑（第161図、写真図版121）
〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡＡ５ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部が径110cmの円形、底面までの残存深度は18cmである。底面は平坦に整い、壁は内弯しながら立ち上がる。底面の形状・規模はフラスコ形土坑に良く似るが、RA13の配石面を掘り込み面と仮定すれば本来の深さは最大でも50cm程度であろう。隣接するフラスコ形土坑RD53に比して著しく浅いことから、本土坑がフラスコ形土坑である可能性は低いと考えられる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土を主体とする。壁際及び底面にⅥ層土の崩落層が観察される。
〔重複遺構〕RA13本体（円環状の石列）内部の西縁に位置している。RA13の下部構造精査のため付

近を面的に掘り下げた際に検出されたものであり、先後関係は不明である。
〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代後期前葉頃が想定される。帰属時期の詳細は不明である。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ62土坑〈RA13関連遺構〉（第161図、写真図版121）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ５ｎグリッドに位置する。RA13本体（環状配石列）内部における大形礫の集中箇所として認識され、その後下部構造精査時の土層断面において、これらの礫群を内包する掘り込みとして確認されたものである。
〔規模･形状〕土層断面で確認したものであり､記録できたのは畦幅約40cm分のみである。幅は約80cm、長さは110cm以上と推測され、おそらく楕円形に近い形状であったと思われる。掘り込み面と推定されるRA13内部上面（配石面）からの深さは30cmで、RD51など、RA13に伴う墓壙とみられる楕円形土坑に比較すれば浅い掘り込みである。RA13関係図（第42 ～ 48図）を併せて参照されたい。
〔埋土と堆積状況〕遺構の底面がⅥ層に達していないため、主にＶａ層が壁面と底面を構成している。埋土の主体はＶａ層相当の黒褐色土で、多量の褐色土ブロックを一様に含んでいる。人為による一括埋土であろう。掘り込みの最上部は､埋土に含まれるブロックによく似た褐色土層に被覆されている。この褐色土はRA13本体の内部に広がりを持って分布する、おそらく人為の堆積層であり、この層の堆積の直前又は同時に、土坑内部に礫がまとめて入れられたと考えられる。礫は上部を地表に露出するように埋置され、その後付近で行われた燃焼行為により上部に焼土が生成、礫の一部にも被熱痕跡がのこされたと考えられる。以上を整理すると、本土坑の掘削→埋め戻し→礫の設置・褐色土敷き均し、焼土生成（礫被熱）という流れを読み取ることができる。
　ただし、先述の通り、土坑の埋め戻し土に含まれる褐色土ブロックは上部を被覆する褐色土層によく似ており、両者が同一起源だとするとRA13内部への敷き均しと本土坑の掘削時期が前後してしまう（本土坑の埋め戻し以前に褐色土が堆積していなければならない)。①土坑内部の褐色土ブロックと上部の褐色土層が起源を異にする､あるいは､②先にRA13内への褐色土の堆積（敷き均し）があり、その後土坑を掘削、礫埋置の際に再度褐色土に覆われた、のいずれかということになろう。付近におけるＶａ層の上位には褐色土ブロックの混入を特徴とする基本土層Ⅳ層の堆積を想定しうることも問題を複雑にしている。RA13の形成過程における本土坑の位置付けにとって極めて重要な意味を持つ要素であるが、精査では明確な層位的事実として把握することができなかった。今後の検討に際してはこの点に十分な留意が求められる。
〔重複遺構〕RA13の主軸上、本体（円環状石列）の北縁寄りに位置する。RA13に関連（付属）すると見られるが、上記の通り掘削が行われた詳細な時期については明らかでない。
〔遺構の時期〕層位的事実等から縄文時代後期初頭と考えられる。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ63土坑（第162図、写真図版121）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ２ｓグリッドに位置する。Ⅵ層上面において褐色土と黒褐色土からなる明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。開口部は172×160cmの略円形、底面までの残存深度は65cm。底面は平坦に整えられ、壁はやや内傾して立ち上がり底面から35cm程のところで屈曲して外

傾に転じている。
〔埋土と堆積状況〕底面直上から下半部にかけては崩落土層とみられるやや締まりを欠いた土が堆積している（３～７層）。これらの崩落層に挟まれて、底面の上位約10cmから大形礫１点（46×22cm）が出土した。６層上面の段階で内部中央に据え置かれたものと見られる。その後この礫は壁上部の崩壊による３・４層に覆われ、さらに凹地となった上半部には流入土（２層）が堆積するなどして埋没が進んだらしい。
　なお、本土坑は北側でRB03方形柱穴列と重複している。RB03は堆積過程の最終段階に内部へ黄褐色土の敷き均しが行われたことが確認されているが、本土坑の埋土最上部にも同様の黄褐色土（１層）が観察されている。本土坑の黄褐色土層はRB03の位置する北側に偏在することからも、両者における黄褐色土の埋め均しが同時的に行われた可能性が高いと考えられる。
〔重複遺構〕RB03の南東部に重複している。RB03の完掘後に検出されたものであるが、先後関係を示す層位的事実は確認できていない。上記の通り、両者の埋土最上部に観察される黄褐色土は同時に埋め均されたものと見られる。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代中期末葉～後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕
　土器（873）〈第256図、写真図版198〉。
　石鏃（1581）。

ＲＤ64土坑（第162図、写真図版121）
〔位置・検出状況〕北東部、ⅡＡ１ｔグリッドに位置する。Ⅵ層上面において褐色土及び暗褐色土の比較的明瞭な円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は径112cmの円形、底面までの残存深度は34cmである。底面はやや丸みを帯び、内弯する壁に連続して立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ～Ｖｂ層土に類似の暗褐色土を主体とする。上部にはⅥ層土に似る褐色土が入り込んでいるが、人為か否かの区別は難しい。
〔重複遺構〕RA35と重複するが、先後関係を示す層位的事実は確認されていない。
〔遺構の時期〕主体土の堆積年代は縄文時代早期中葉～縄文時代後期中葉が想定される。帰属年代について詳細は不明である。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ65土坑（第162図、写真図版122）
〔位置・検出状況〕北東部、ⅡＡ１ｕグリッドに位置する。Ⅵ層上面において大形礫とその周囲に分布する暗褐色土の円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は72×64cmの略円形、底面までの残存深度は14cmである。底面はほぼ平坦、壁は内弯して緩やかに立ち上がる。相当程度上部を削平されているものと見られるが、本来の形状は不明である。
〔埋土と堆積状況〕Ⅳ～Ｖａ層土に類似する暗褐色土を主体とする。最上部の検出面付近、底面から約８cmのところに40×20cmの大形礫が入れられている。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕出土土器片の年代観及び主体土の堆積年代等から縄文時代後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕縄文時代後期初頭とみられる土器細片が出土している（不掲載）。

ＲＤ66土坑（第163図、写真図版122）
〔位置・検出状況〕北東部、ⅡＡ１ｕグリッドに位置する。Ⅵ層上面において比較的明瞭な暗褐色土の円形範囲として検出された。
〔規模･形状〕いわゆるフラスコ形土坑である。底面は平坦に整い、壁面はやや強く内傾して立ち上がる。壁は底面から約75cmのところで急激に屈曲し外傾に転ずる。本来はこの上に漏斗状の開口部を持っていたとみられるが、本土坑は調査区内においても高地点にあるため、上部をやや大きく削平・流失している可能性がある。完掘状態での開口部径は165×148cm、狭窄部径は110×94cm、底面径は約160cm、底面までの残存深度は86cmである。
〔埋土と堆積状況〕底面直上は広く流入土層の７層に覆われている。Ｖａ層類似の黒褐色土で、焼土粒・炭粒を含み全体に赤味を帯びる。この層の上面からは径20～50cmの大形礫、計９点が出土した。中央部のほか壁際に寄せ置かれたものもみられる。これらの礫には被熱による赤変が認められ、７層に含まれる焼土・炭化物との関連性がうかがわれる。またこれらの礫と同様、壁際に伏せ置かれたような状態で深鉢の大形破片が出土している。これらの遺物分布面は、崩落土とみられる締まりを欠く土層（３～５層）によって狭窄部付近まで厚く覆われ、結果的に開口部付近は凹地となったらしい。この凹地にはⅥ層土類似の褐色土（１～２層）が入れられている。このような埋没過程は、他のいくつかのフラスコ形土坑にも共通して認められるものである。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕出土土器の年代観及び埋土の様相から、縄文時代後期初頭が想定される。
〔出土遺物〕
　土器（445～447）〈第226・227図、写真図版174〉。
　石錘（2780）。
　敲磨器類（2659）。

ＲＤ67土坑（第163図、写真図版122）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ25ｕグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色・暗褐色土からなる明瞭な同心円状の範囲として検出された。
〔規模・形状〕底面は平坦に整い、壁の下端は抉れて内弯、内傾して立ち上がる。底面から約30cm程のところで屈曲して外傾に転じ、やや大きく開いて開口部へと至る。いわゆるフラスコ形土坑であったとみられ、本来はさらに上位に狭窄部と開口部を持つはずだが、本土坑は調査区内においても高地点にあり、上部をやや大きく削平・流失しているものとみられる。完掘状態での開口部径は194×176cm、底面径は134cm、底面までの残存深度は68cmである。
〔埋土と堆積状況〕南壁際の底面上から礫１点（径約20cm）が出土した。これを覆うように下半部には崩落土層とみられるやや締まりを欠く土が堆積している（４～６層）。凹地となった上部には流入土とみられる黒褐色土の堆積が進んだ様子が認められる。黄褐色土のブロック層である２層は、他のフラスコ形土坑にも見られる埋め均し土の可能性があるが、上部を大きく失ってとみられる本土坑においては、通常の崩落層と区別する根拠に乏しく判断することは難しい。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代後期初頭が想定される。

〔出土遺物〕
土器（448・449）〈第227図、写真図版174〉。
石皿（2364）。
敲磨器類（2418）。

ＲＤ68土坑〈RA13関連遺構〉（第164図、写真図版123）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ６ｎグリッドに位置する。RA13本体の南側に張り出す礫群の中央にあたる地点である。RA13の下部構造を精査するため敷土・配石を除去しながらＶａ層を面的に掘り下げたところ、Ｖｂ～Ⅵ層上面において、黒褐色土の明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕平面形は概ね楕円形だが、直線的な側辺が平行するように見えることから、小判形あるいは隅丸長方形に近い。開口部径132×88cm、底面径108×64cm、底面までの残存深度は34cmである。底面は平坦に整えられ、壁は下端部が内弯しそこからわずかに外傾しながら直線的に立ち上がる。長軸を南北方向に持つ（ほぼRA13主軸に沿う）。RA13に関連する墓壙であると考えられる。RA13に関連する墓壙であると考えられる。RA13関係図（第42～48図）を併せて参照されたい。
〔埋土と堆積状況〕埋土はＶａ層土類似の黒褐色土を主体とし、特に下半部にＶｂ及びⅥ層土とみられるいわゆる地山土が混入する。本土坑はⅥ層上面で検出されたが、本来はRA13の礫配置面付近に掘り込み面を持っていたと考えられ、本来は80cm近い深さをもっていたと推測される。
Ⅵ層上面より上位の堆積状況を記録したRA13張出部の断面図（第44図　②A-②A’）をみると、RA13の張出部に礫とともに敷き均された黄褐色土層（６ａ・６ｂ層）が本土坑の上位を広く覆い、さらに本土坑の上位でのみ、わずかに沈み込んでいる状況が見て取れる。このことから、本土坑の「掘削→埋没」はRA13張り出し部への礫配置や黄褐色土敷き均しに先行して完了したこと、そして、本土坑の埋没後、埋土の沈縮が完了しないうちに黄褐色土敷き均し等の行為が行われたこと、が理解される。
ところで、上述のとおり墓壙とみられる本土坑であるが、土層断面を見る限り、一度に全て埋め戻されたような様子は認められず、むしろ自然の流入土による埋没にも見える。このことは人為的な埋め戻しが明らかなRD51との相違点である一方、大形礫や土器が据え置かれたフラスコ形土坑において自然流入・自然崩落層によって下半部が埋没し、その後最上部を黄褐色土で塞がれる事例によく似ており、慎重な検討が必要である。
なお、底面からは副葬品とみられる石器類が出土した。南端部の底面直上からやや大形の石鏃１点、これに近接して底面上約４cmのところから異形石器１点が出土し、さらに北端部でも底面上約５cmのところで石鏃１点が確認された。埋土からはこのほかに２点の石鏃が出土しており、計４点の石鏃（有茎鏃）と１点の異形石器が副葬品として納められていたものとみられる。
〔重複遺構との先後関係〕上記の通り、本土坑の掘削～埋没は、RA13張出部の礫配置及び黄褐色土敷き均し行為よりも古いことが明らかである。ただし、埋没の後、黄褐色土敷き均し行為等がなされるまでに大きな時間的隔絶はなかったものと推測される。
〔遺構の時期〕層位的関係性等から縄文時代後期初頭と考えられる。
〔出土遺物〕
土器（848）〈第255図、写真図版196〉。
石鏃（1811～1814）。
異形石器（2799）。

ＲＤ69土坑〈RA13関連遺構〉（第162図、写真図版123）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ６ｎグリッドに位置する。RA13本体（円環状石列）の内側南縁、RA13張出部との接点に相当する地点である。RA13の下部構造を精査するため配石を除去しながらＶａ層を面的に掘り下げたところ、Ｖｂ～Ⅵ層上面において、黒褐色土の明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕平面形は長楕円形、開口部径128×62cm、底面径114×50cm、底面までの残存深度は18cmである。底面は平坦に整えられ、壁はわずかに外傾して直線的に立ち上がる。長軸を東西方向に持つ（RA13主軸と直交する）。RA13に関連する墓壙の可能性が高い。RA13に関連する墓壙であると考えられる。RA13関係図（第42～48図）を併せて参照されたい。
〔埋土と堆積状況〕埋土はＶａ層土類似の黒褐色土を主体とし、特に下半部にＶｂ及びⅥ層土とみられるいわゆる地山土が混入する。本土坑はⅥ層上面で検出されたが、本来はRA13の礫配置面付近に掘り込み面を持っていたと考えられ、本来は80cm近い深さをもっていたと推測される。
　Ⅵ層上面より上位の堆積状況を記録したRA13の断面図（第43図①Ａ－①Ａ’・第44図⑤Ａ－⑤Ａ’）には土坑上位での土層の落ち込みが明瞭に認められ、特に、①Ａ－①Ａ’では円環状石列の掘方に顕著な褐色土（７層）が土坑の開口部付近を埋め均し、同時に礫の配置がなされた様子が良く見て取れる（この褐色土は張出部に敷かれた純粋な黄褐色土に比して濁りがありやや暗く、両者に時間差が存在する可能性もあるが、用いられ方が共通している）。これらから、本土坑の「掘削→埋没」は開口部付近への礫配置や褐色土敷き均しに先行して完了したこと、そして、本土坑の埋没後、埋土の凝縮が完了しないうちに褐色土敷き均し等の行為が行われたこと、が理解される。
　ところで、上述のとおり墓壙である可能性をもつ本土坑であるが、土層断面を見る限り、一度に全て埋め戻されたような様子は認められず、むしろ自然の流入土による埋没にも見える。このことは人為的な埋め戻しが明らかなRD51との相違点である一方、RD68の埋土の状況や、大形礫や土器が据え置かれたフラスコ形土坑において自然流入・自然崩落層によって下半部が埋没し、その後最上部を黄褐色土で塞がれる事例によく似ており、慎重な検討が必要である。
〔重複遺構との先後関係〕上記の通り、本土坑の掘削～埋没は、開口部付近への礫配置及び褐色土埋め均し行為よりも古いことが明らかである。ただし、埋没の後、褐色土埋め均し行為等がなされるまで、大きな時間的な隔たりはなかったものと推測される。なお、本土坑の掘削・埋没・礫配置及び褐色土埋め均し行為が、RA13全体が最終形に至る過程のどの段階に位置づけられるのか、また、RA13に関連する他の土坑（墓壙）との時間的関係性について決定しうる層位的事実は確認できておらず、慎重な検討を要する。
〔遺構の時期〕層位的関係性等から縄文時代後期初頭と考えられる。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ70土坑（第162図、写真図版123）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ６ｎグリッドに位置する。Ⅵ層上面において暗褐色土の不明瞭な不整形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部径108×72cmの不整楕円形、底面までの残存深度は12cmである。底面はやや丸みを持ち凹凸がある。壁は内弯しながらなだらかに立ち上がる。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ～Ｖｂ層土が主体。壁際と床面付近に地山Ⅵ層土の再堆積層が観察される。
〔重複遺構〕RA13の下位に位置する。

〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期頃を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ71土坑（第163図、写真図版123）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ７ｑグリッドに位置する。Ⅵ層上面において褐色土のやや不明瞭な略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は168×156cmの略円形、底面までの残存深度は36cmである。底面は概ね平坦に整う。壁はわずかに外傾して立ち上がり底面から約20cmのところでやや急に外反して、上半部が一回り大きく開いている。
〔埋土と堆積状況〕埋土はＶｂ及びⅥ層の再堆積土からなると思われ全体に明るい印象だが、中位にＶａ層類似黒褐色土の薄層（３層）を挟んでいる。断面には北西方向から堆積が進んだ様子が認められる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期～前期を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ72土坑（第164図、写真図版142）
〔位置・検出状況〕北東部、ⅠＡ24ｒグリッドに位置する。Ｖｂ層上面において検出されたRZ10埋設土器の精査に際し、その下位に重複する土坑状の落ち込みとして認識された。
〔規模・形状〕重複するRD73・RZ10によって大きく破壊されているが、オーバーハングする壁面が認められることから、いわゆるフラスコ形土坑であったと考えられる。底面は中央部がやや低くなるが滑らかに整えられている。壁面は底面付近から側方に大きく抉り込んだように張り出し、すぐに急激に内傾に転じて立ち上がる。壁面は底面から20～30cm程度しか残存しておらず、これより上位の様相は不明となっている。残存状態において最も狭窄する部分の径は126×100cm、底面径は約130cm、検出面から底面までの残存深度は60cmである。
〔埋土と堆積状況〕遺構内の本来の堆積層は重複遺構によって大きく乱されており、詳細は不明となっている。壁際に崩落土層とみられるⅥ層土ブロック層（４ｂ層）、その上位にはＶａ層相当の流入土が堆積している。
〔重複遺構〕RD73・RZ10に切られている。
〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。
〔その他所見〕重複するRD73及びRZ10は、本土坑の埋没が完結する前、開口部付近が凹地となったところを選んで設置された可能性が高いと思われる。
〔出土遺物〕
　土器（450～452）〈第227図、写真図版174〉。
　鐸形土製品（1171）。
　円盤状土製品（1259）。
　箆状石器（2117）。
　※以上の遺物はRD73との重複部から出土したものである。

ＲＤ73土坑（第164図、写真図版142）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ24ｒグリッドに位置する。RD72の底面において重複する土坑状の落ち込みとして検出された。
〔規模・形状〕検出面はRD72底面だが、RD72の埋土（埋没途中か）を切って構築されたことが土層断面からわかっている（後述）。しかし重複部における本土坑の壁面は、一部でRD72のそれを共有するらしいことや、両遺構の埋土の境界が判然としないことなどから、RD72底面より上位における本土坑の形状はよくわかっていない。おそらくRD72の埋土を概ね円形に掘り下げ、底面に到達した後に、さらに下位へ楕円形の土坑を構築したものと考えられる。
　RD72の底面にみられる開口部は96×60cmの楕円形を呈し、概ね直立あるいは内傾する壁面を持つ。底面は114×66cmの楕円形。RD72底面からの深さは34cm、RD72の検出面（Ｖｂ層面）からの深さは100cm前後である。
〔埋土と堆積状況〕断面B-B'はRD72と本土坑の重複部の土層断面を示したものである。図に見る通り、RD72底面よりも上位に堆積する暗褐色土層（１層）が、本土坑底面付近まで連続して堆積している。したがって、B-B'を記録した中央部～南部においては、本土坑とRD72が壁面を共有していることがわかる。一方、RD72開口部北端を通る断面A-A'では、RD72のオーバーハング部に堆積した黒褐色土（４ａ層）を、本土坑及びRZ10埋設土器が切っている様子が確認された。
　このような土層断面から堆積過程を詳細に復元することは困難だが、完掘後の形状を立体的に観察した結果、本土坑は、半埋没の状態のRD72を再掘し、その底面をもう一段深く楕円形に掘り下げたものと判断した。本土坑の最低面からは長径40cmほどの大形礫がやや北東側に寄って出土している。墓壙である可能性高いとみられる。
〔重複遺構〕RD72を切り、RZ10に切られている。
〔遺構の時期〕埋土の様相から、縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。
〔出土遺物〕土器（453）〈第227図、写真図版174〉。

ＲＤ74土坑（第165図、写真図版124）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ２ｑグリッドに位置する。Ｖｂ層上面において黒褐色土の明瞭な略円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部径約80cmの略円形、底面までの残存深度は52cmである。底面は中央がわずかに低い皿状を呈し、滑らかに整っている。壁は直立～わずかに内傾する。いわゆるフラスコ形土坑と見られる。
　なお、作業指示の不徹底により、完掘時に開口部付近を甚だしく掘り広げてしまった。縄文時代早期遺構埋土によく似た、開口部周辺のＶｂ層（早期の埋土によく似る）を掘削対象土層と誤認したためである。
〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのは崩落土とみられるⅥ層土ブロック層（５層）で、その上位はＶａ層相当の黒色土とⅣ層相当の暗褐色土の混土層（３層）で一気に埋められている。底面中央の約10cm上位からは、径20cm弱の礫が置かれたような状態で出土している。
〔重複遺構〕RA75・79・83等を切っている。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代後期初頭か。
〔出土遺物〕土器（454 ～ 456）〈第227図、写真図版174〉。

ＲＤ75土坑（第165図、写真図版124）
〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ25rグリッドに位置する。Ｖｂ層上面において黒褐色土の明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は75×58cmの楕円形、底面までの残存深度は26cmである。断面形は椀形で底面から内弯しながら自然に壁が立ち上がっている。南東側の内外にそれぞれ径20 ～ 30cmのピットをもつ。
〔埋土と堆積状況〕底面直上を覆うのは崩落土とみられるⅥ層土ブロック層（４層）で、その上位はＶａ層相当の黒色土及びⅣ層相当の暗褐色土を主体とする土層によって埋没している。レンズ状の堆積をなすが、層界には凹凸が目立ち、底面直上と埋土上部からそれぞれ同一個体とみられる土器片が出土していることなどから、短時間のうちに人為的に埋められたものである可能性が高い。なお、南西壁際の小ピットにも土坑本体の埋土が連続している。同時に埋まったものと考えられる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土の様相と出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。
〔出土遺物〕土器（457）〈第227図、写真図版174〉

ＲＤ76土坑（第165図、写真図版124）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ２ｐグリッドに位置する。Ⅵ層上面において黒褐色土の不整な瓢箪形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は208×154cmの鶏卵形、底面までの残存深度は60cmである。丸底状の底面をもち、最深部を北東寄りに持つ丸底状の底部を持つ。壁は下半で直立に近く、上半部は漏斗状に外反する。特に最深部から東側の壁面にかけてスロープ状にかけあがっている。
〔埋土と堆積状況〕底面直上は崩落土とみられるⅥ層土ブロック層に覆われ、その上位にはＶａ層土を主体とする黒褐色土が堆積している。Ⅵ層土ブロックの多寡で分層しているが、人為的に埋め戻されている可能性が高い。埋土下部には赤変の弱い焼土ブロックが比較的多く含まれる。類似する焼土は底面～東側壁面に転々と残存することから、上記の焼土ブロックはこれらが下部に崩落したものと考えられる。
〔重複遺構〕直接的な重複関係にある他遺構はなし。周辺の縄文時代早期遺構のうちＶｂ層土を埋土の主体とする一群よりは新しいと考えられる。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期初頭か。
〔出土遺物〕
　土器（458）〈第227図、写真図版175〉。
　敲磨器類（2559）。

ＲＤ77土坑（第109図、写真図版124）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ３ｐグリッドに位置する。RA69の埋土上面で、褐色土円形範囲の周囲に同心円状に黒色土帯が巡る範囲として検出された。当初、風倒木根と考えていたが、底面付近に弱変焼土の生成が確認されたことから、RD76に類似する土坑の可能性があるものと判断し精査を行った。
〔規模･形状〕開口部は132×126cmの略円形､底面までの残存深度は54cmである｡底面は丸底状を呈する｡壁は下部で直立に近く、中～上部は弱く内弯しながら外傾して立ち上がる。

〔埋土と堆積状況〕底面には赤変の微弱な焼土の生成が認められる。同様の焼土は壁面にも斑状に残存している。この面はＶａ層相当の黒褐色土を主体とする土層に覆われており、この土層にも類似の焼土ブロックが含まれることから、上部からの土壌の流入等に伴って壁面焼土層が崩落したものとみられる。本層堆積の後、凹地となった本遺構内部は検出面まで一気にⅥ層相当土によって埋められている。
〔重複遺構〕RA69を切っている。
〔遺構の時期〕埋土の様相から縄文時代早期中葉～前期初頭か。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ78陥し穴（第166図、写真図版125）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ２ｏグリッドに位置する。Ⅵ層上面において橙色粒子を含む黒褐色土の明瞭な長楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は290×42㎝の細長い楕円形、底面までの残存深度は116㎝である。底面は長さ298㎝、幅は最大でも８㎝と極めて細く、両端から中央部までほぼ水平となっている。横断面はＹ字状を呈し、底面から90㎝ほどのところまではほぼ直立し、開口部でわずかに開く。長軸両端の壁はごくわずかに内傾し開口部にむかって直線的に立ち上がっている。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はⅣ層土とみられる暗褐色～黒褐色土である。下部に壁崩落土とみられる黄褐色土層を挟むほかは、概ね上方からの流入土によって埋没したものと推測される。埋土最上部には橙色粒子を含むⅢ層土の流入も認められる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土主体土の堆積年代から、縄文時代後期初頭以降に構築され後期中葉には埋没を終えたものと考えられる。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ79陥し穴（第166図、写真図版125）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ４ｑグリッドに位置する。Ⅵ層上面において橙色粒子を含む黒褐色土の明瞭な長楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は358×82㎝の細長い楕円形、底面までの残存深度は122㎝である。底面は長さ322㎝、幅は10㎝前後と極めて細く、両端から中央部までほぼ水平となっている。横断面はＶ～Ｙ字状を呈し、底面から100㎝ほどのところまではわずかに外傾して立ち上がり、開口部がやや大きく開いている。長軸両端の壁は直立あるいはごくわずかに外傾し開口部にむかって直線的に立ち上がっている。
〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はⅣ層土とみられる暗褐色～黒褐色土である。下部に壁崩落土とみられる黄褐色土層を挟むほかは、概ね上方からの流入土によって埋没したものと推測される。埋土上部は橙色粒子を含むⅢ層土によって埋没している。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕埋土主体土の堆積年代から、縄文時代後期初頭以降に構築され後期中葉には埋没を終えたものと考えられる。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＤ80陥し穴（第167図、写真図版125）

〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ４ｒグリッドに位置する。当初、RB02内部に敷き均された黄褐色土範囲の西縁部に重複する細長いⅢ層土範囲として認識された。これに似た根攪乱が周囲に点在していたため、この時点では遺構として扱わず、RB02の精査に先に着手したのだが、RB02の完掘後、Ⅵ層上面において橙色粒子を含む黒褐色土の明瞭な長楕円形範囲として検出されたため、精査に着手したものである。

〔規模・形状〕検出後に残存する開口部は300×38㎝の細長い楕円形、底面までの残存深度は146㎝である。本来の掘り込み面は周囲に堆積するⅤ層よりもさらに上位にあったと考えられるので、平面規模・深さともに残存値を大きく上回っていたものと推測される。底面は長さ276㎝、幅は８㎝前後と極めて細く、両端から中央部までほぼ水平となっている。横断面は細いⅤ字状を呈し、底面から現存の開口部まではわずかに外傾して直線的に立ち上がっている。長軸両端の壁はほぼ直立している。

〔埋土と堆積状況〕埋土の主体はⅣ層土とみられる暗褐色～黒褐色土である。下部に壁崩落土とみられる黄褐色土層を挟むほかは、概ね上方からの流入土によって埋没したものと推測される。埋土上部は橙色粒子を含むⅢ層土によって埋没している。

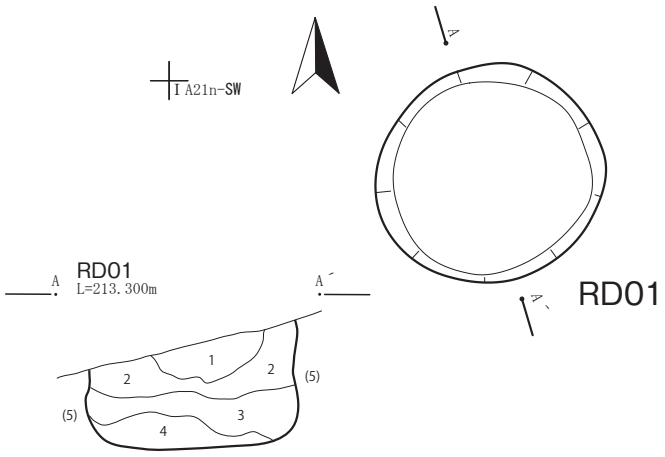
〔重複遺構〕RB02内に敷き均された黄褐色土層を切っている。

〔遺構の時期〕埋土主体土の堆積年代から、縄文時代後期初頭以降に構築され後期中葉には埋没を終えたものと考えられる。

〔出土遺物〕

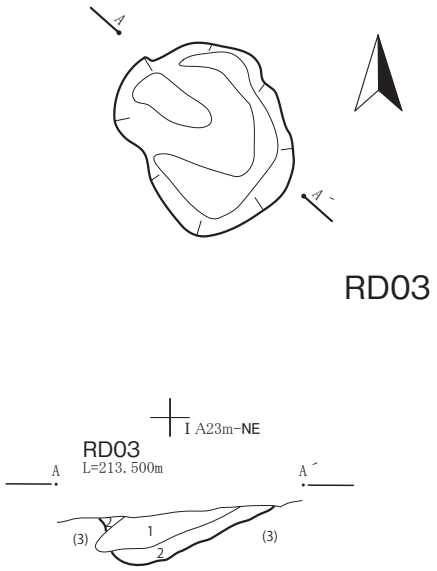
土器（736）〈第248図、写真図版191〉。

敲磨器類（2417・2608）。



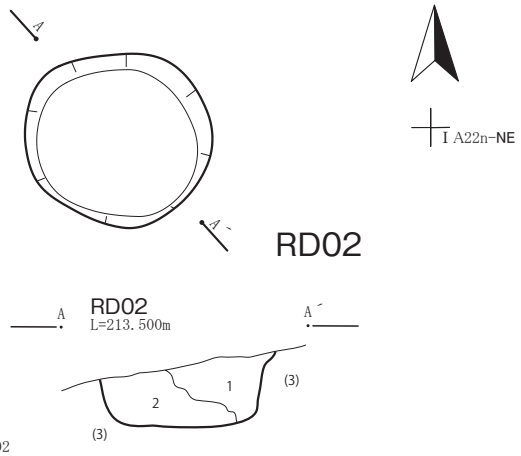
RD01
1．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや弱．しまりやや疎．地山ブロックやや多い．（オレンジパミス含むⅢa 層相当土）
2．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや弱．しまりやや疎．地山ブロック極微量．（オレンジパミス含むⅢa 層相当土）
3．1 層に似る．
4．10YR4/4-3/4 褐色 - 暗褐色．粘土質シルト．壁崩落土？ 地山ブロック層．
（5）．10YR5/6-4/6 黄褐色 - 褐色．粘土質シルト．地山（Ⅵ層相当）．

※Ⅵ層上面で検出．主体土Ⅲa 層．円筒形、底面平地、壁直立．RD02 と隣接



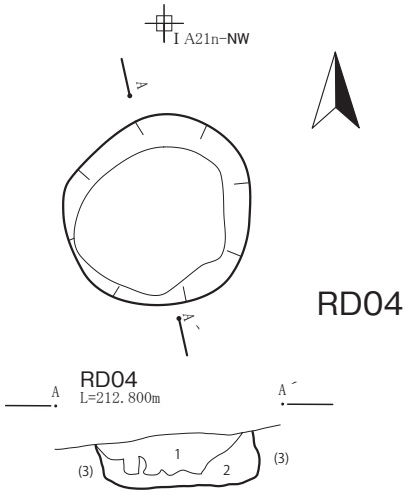
RD03
1．根撹乱．ボロボロ．パサパサ．（Ⅰ層相当）
2．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．（Ⅴa 層に似る）
（3）．10YR5/6-4/6 黄褐色 - 褐色．粘土質シルト．（Ⅵ層相当．地山）

※上部根撹乱に大きく壊される．不整形で堆積状況不明．新旧の根撹乱重複か．



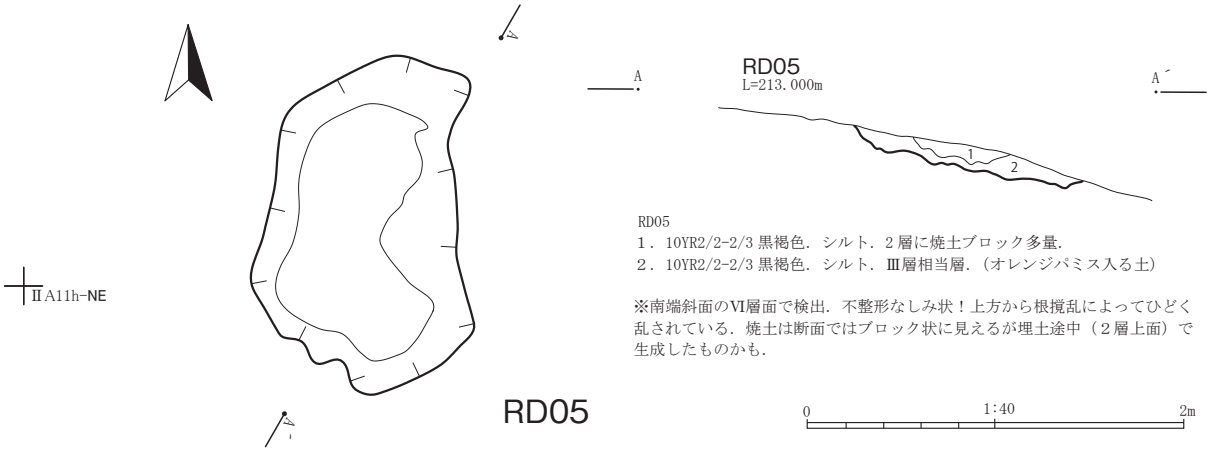
RD02
1．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや弱．しまりやや疎．地山ブロックやや多い．（Ⅲa 層相当土）
2．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや弱．しまりやや疎．地山土含み全体やや明るい．（Ⅲa 層相当土）
（3）．10YR5/6-4/6 黄褐色 - 褐色．粘質．シルト．（Ⅵ層相当）

※Ⅵ層上面で検出．主体土Ⅲa 層．円筒形、底面平地、壁直立．RD01 と隣接．



RD04
1．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．（Ⅳa 層に似る）
2．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．（Ⅳb 層に似る）地山ブロックやや多い．
(3)．10YR5/6-4/6 黄褐色 - 褐色．粘質．シルト．（Ⅵ層相当）

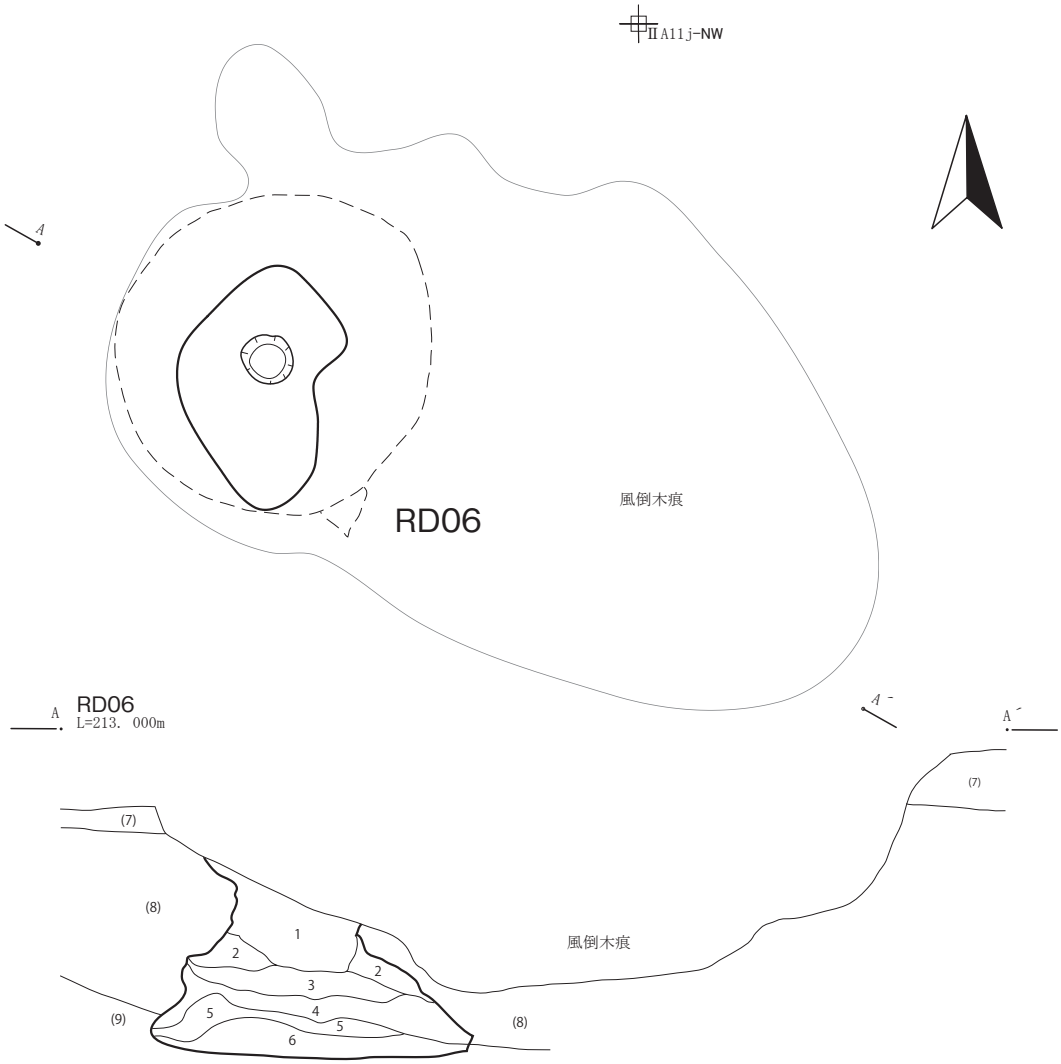
※上部根撹乱で壊されている．Ⅲ層に入るオレンジパミス入らない．土層は RD03 に似るが掘り方がしっかりしている．



RD05
1．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．2 層に焼土ブロック多量．
2．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．Ⅲ層相当層．（オレンジパミス入る土）

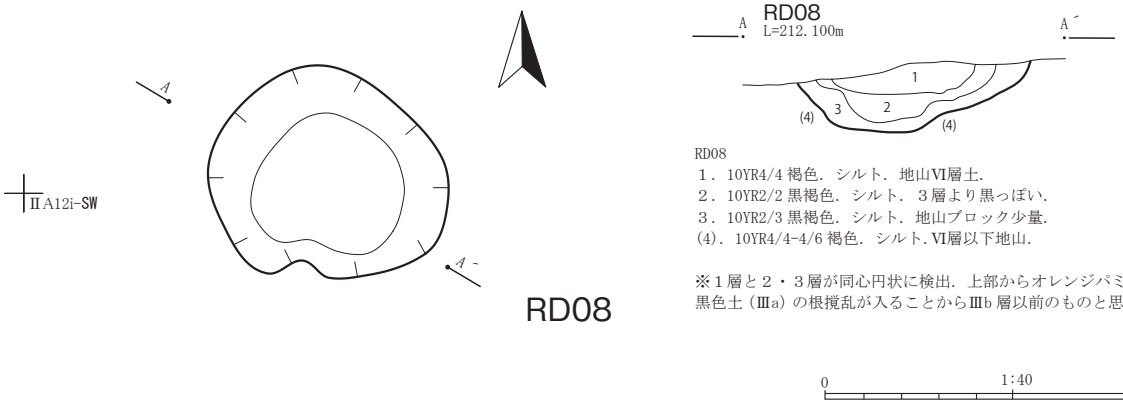
※南端斜面のⅥ層面で検出．不整形なしみ状！上方から根撹乱によってひどく乱されている．焼土は断面ではブロック状に見えるが埋土途中（2 層上面）で生成したものかも．

第145図　RD01 ～ 05



RD06
１．10YR3/2-3/3 黒褐色 - 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．炭化物（φ5-10 ㎜）少量．
２．10YR2/2 黒褐色．シルト．地山ブロック少量含む．(3 層に地山ブロック入る層)
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．炭化物（φ5-10 ㎜）微量．１層より黒っぽい．
４．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．地山ブロック多量．
５．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．地山ブロック少量．
６．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．地山ブロック多量．
(7)．10YR5/6-4/6 黄褐色 - 褐色．シルト．Ⅵ層上部に相当．以下地山．(8) より赤味がある．
(8)．10YR5/4-5/6 にぶい黄褐色 - 黄褐色．粘土質シルト．Ⅵ層下部に相当．
(7) よりしまり密．
(9)．7.5YR4/6-3/4 褐色 - 暗褐色．砂質シルト．φ5 ㎜強の小礫（軽石？）多量．酸化鉄集積し赤い．

※上部を風倒木に切られている．埋土にオレンジパミス含まない．Ⅲ層以前のもの．底面は平坦、壁面大きく内傾し断面は三角形．開口部は漏斗状を呈しいったん窄まったのち下半部が広がっている．検出面はⅥ層上面（南端斜面）．Ⅲ層土が大量に入る風倒木に切られている．

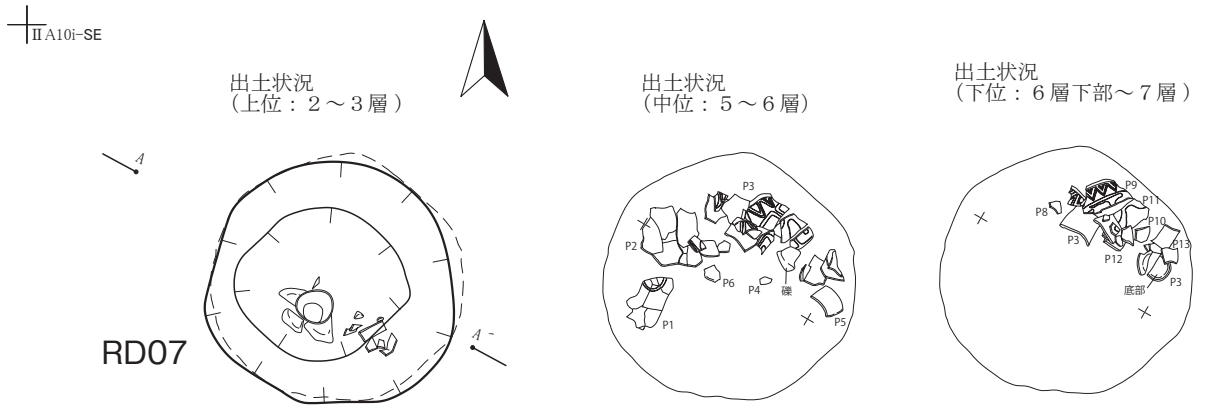


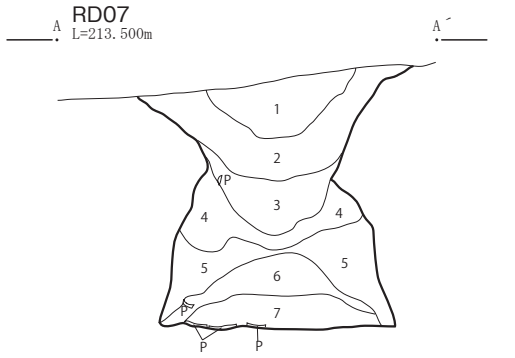
RD08
１．10YR4/4 褐色．シルト．地山Ⅵ層土．
２．10YR2/2 黒褐色．シルト．３層より黒っぽい．
３．10YR2/3 黒褐色．シルト．地山ブロック少量．
(4)．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．Ⅵ層以下地山．

※１層と２・３層が同心円状に検出．上部からオレンジパミス入る黒色土（Ⅲa）の根撹乱が入ることからⅢb 層以前のものと思われる．

0　1:40　2m

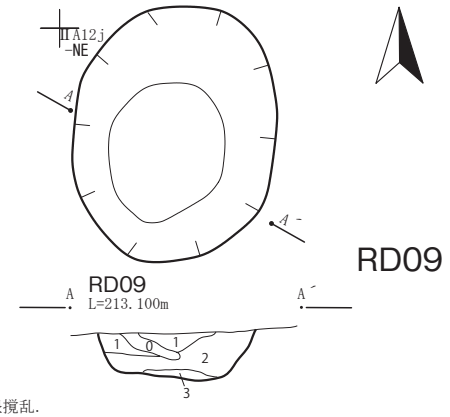
第146図　RD06・08



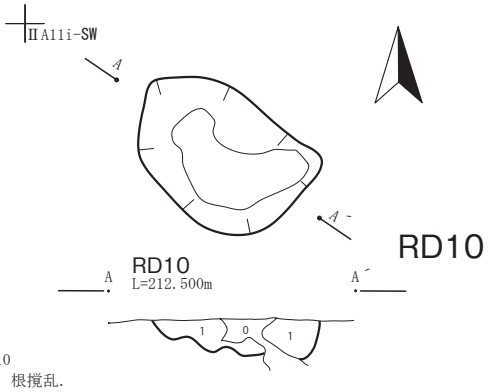


RD07
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや弱．しまり密．
２．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや弱．しまりやや密．粘性やや弱．しまりやや密．
３．10YR2/1 黒色．シルト．焼土粒・炭粒ともに微量．
４．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや弱．しまりやや疎．地山ブロックやや多量．
５．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや弱．しまりやや疎．地山ブロック多量．
６．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．橙色粒全体に少量混入．Ⅴ層に入る凝灰岩粒か？
７．10YR2/1 黒色．シルト．粘性有り．しまり密．炭粒（φ５㎜）微量．

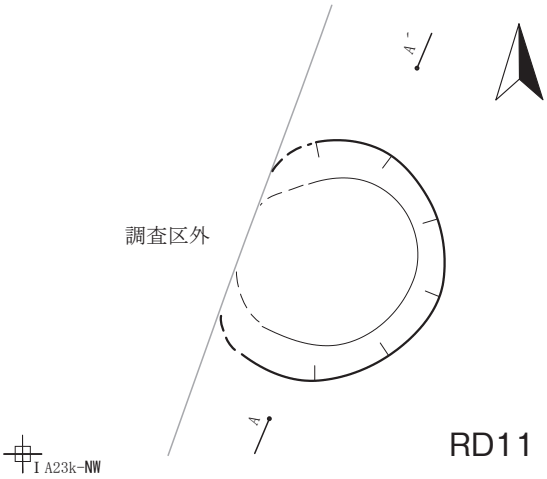
※底面直上に土器が潰れた状態で出土．６・７層はせまい開口部から流入して盛り上がったように堆積．４・５層は壁面崩落．その後１～３層が流入し埋没．埋土にはⅢ層に入るオレンジパミスは見られない．６層に入るのはⅤ層のＹＰ粒では？帰属年代はⅢ層以前．検出面はⅥ層上面（南端斜面）．

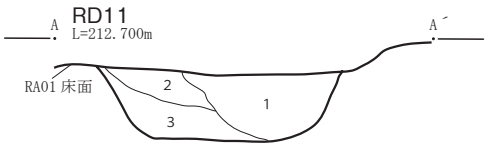


RD09
０．根撹乱．
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．
２．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．
３．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性有り．しまり密．黒っぽい．
※Ⅵ層上面で検出．地山に比してやや不明瞭なしみ．埋土からは土器片、剥片出土．Ⅲ層土は入らないようだ．



RD10
０．根撹乱．
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．
※Ⅵ層上面で検出．根撹乱に重複した状態で検出．全体に乱されているようだ．Ⅲ層土は入らない根撹乱には入る．



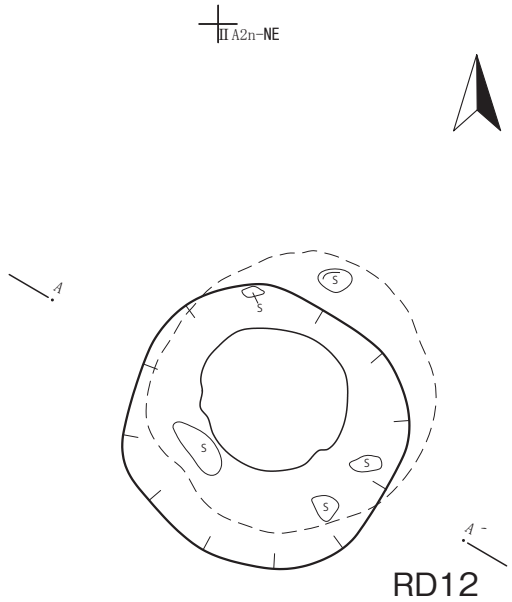


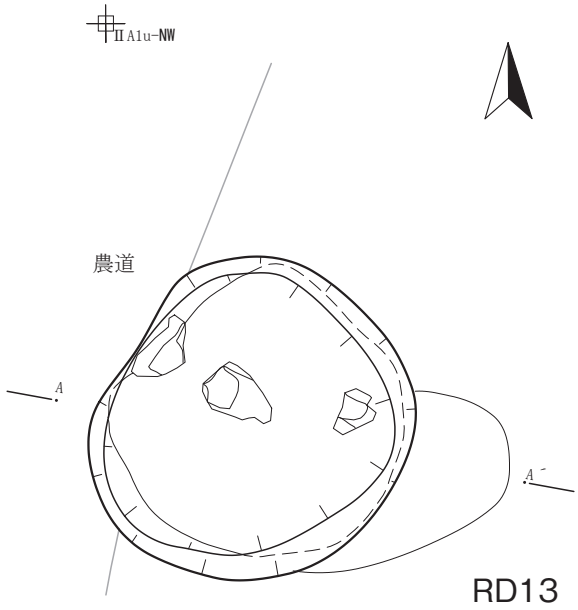
RD11（RA01 に伴う）
１．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．地山ブロック（φ10-50 ㎜）少量．
２．10YR2/1-2/2 黒 - 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．地山ブロック（φ5-20 ㎜）微量．焼土・炭粒微量．
３．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり疎．地山ブロック（φ5-50 ㎜）多量．

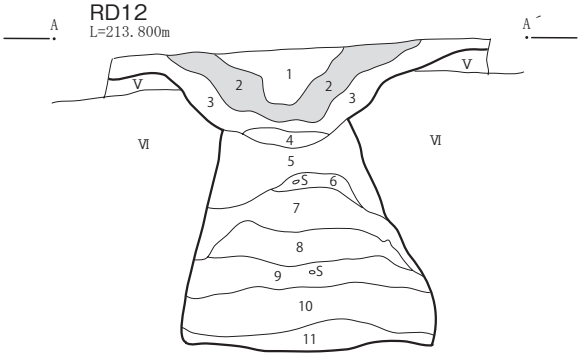
※RA01 床面で検出．RA01 床直埋土は本遺構埋土に落ち込んでいないことから、RA01 の廃絶時（埋没開始時）には、すでに埋まりきっていたと考えられる．半裁時点では埋土から土師器の出土はなし．住居の壁際に接して位置しており住居に伴う蓋然性は高いと思われるが、縄文の可能性がなくはない．
１～３の層界は、地山ブロックの混入比によるものであり、全体的に一度に埋められた（人為的により）ものと考えられる．

0　1:40　2m

第147図　RD07・09 ～ 11

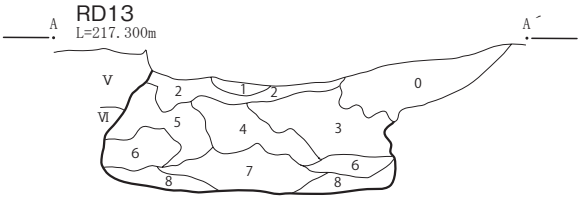






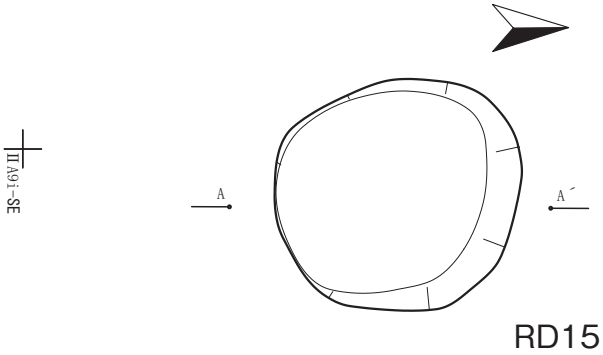
RD12
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性有り．しまりやや密.Ⅳ層土に似る.
２．10YR2/2 黒褐色．シルト.Ⅵ層土ブロック（大きな土塊）多量.
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性有り．しまり密.
４．２層に似る.
５.10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎.Ⅵ層ブロック少量.
６．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性有り．しまり密．ベターっとしている.
７．５層に似る.
８．６層に似る.
９．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．１層に似る.
10．５・７層に似る.
11．６・８層に似る.

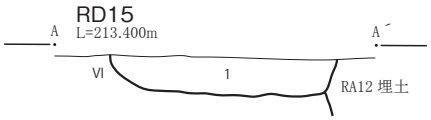
※２層はⅥ層大型ブロック．崩落土状に見えるがⅥ層上面より上位に位置することから、上部構造にⅥ層土が用いられていたのかも．底面からやや浮いたところで壁際に大型礫有り.



RD13
０．10YR3/4 暗褐色．シルト．地山（Ⅵ層）ブロック多量．根撹乱.
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密.
２．10YR3/3-2/3 暗褐色 - 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．１層より明るい.
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．炭粒極微量.
４.10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．地山（Ⅵ層）ブロック少量含み．明るい.
５．10YR2/2 黒褐色．シルト．３層に良く似る.
６．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．１層に似る.
７．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．地山（Ⅵ層）土全体に多量.
８.10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．地山（Ⅵ層）ブロック少量.

※上部を削平されたフラスコ状土坑と思われる．壁の崩落と流入土により漸次埋没したものと思われる.



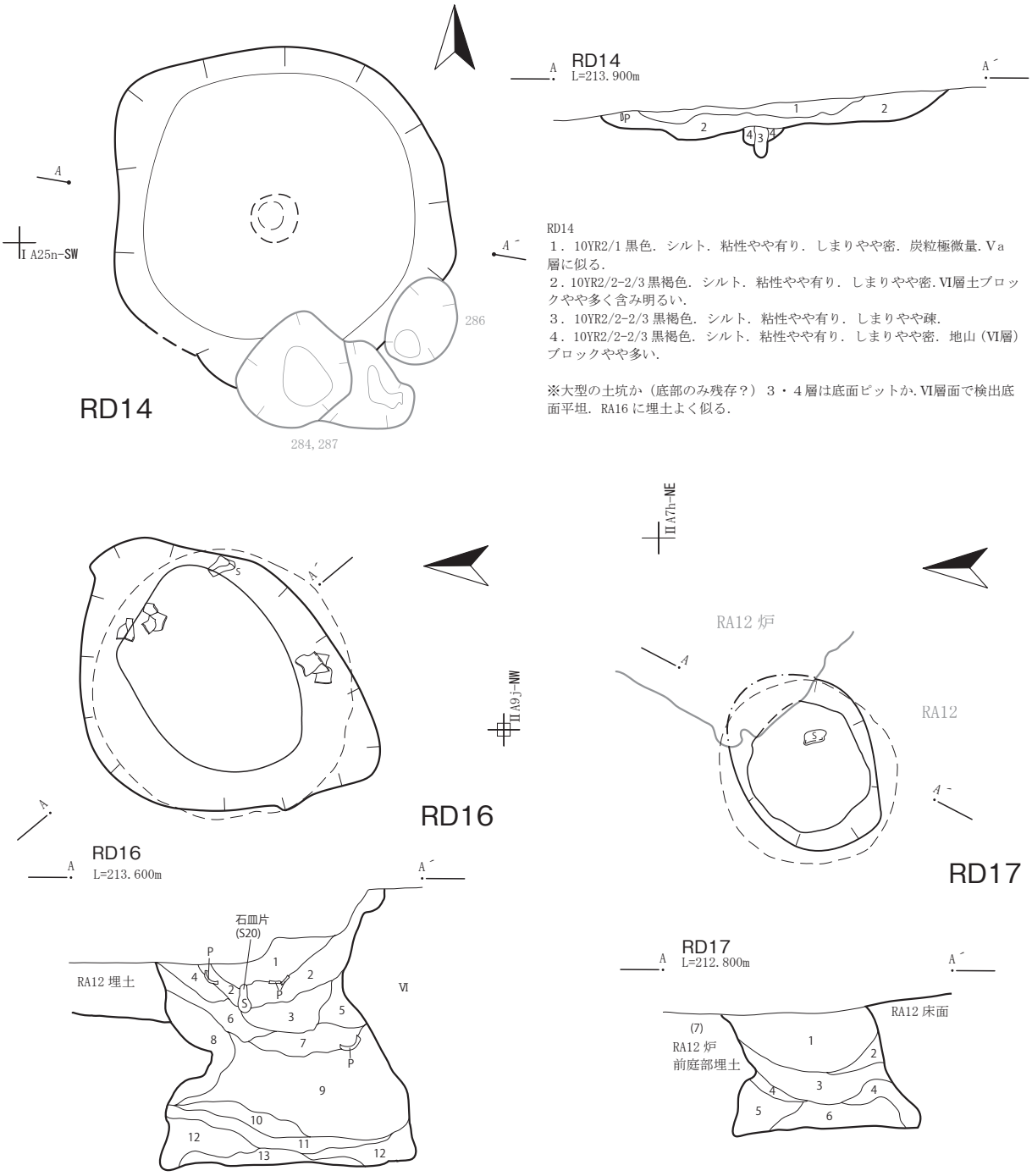


RD15
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎.Ⅵ層土ブロック微量.Ⅳ層土主体か？上部にⅣ層土のオレンジパミス含む.

※大形住居 RA12 の南側壁面にわずかに重複し、これをきっている．底面平坦で壁はしっかり立ち上がる埋土はⅣ層に似たやや明るい暗褐色シルト．上部にのみ部分的にⅢ層由来のオレンジ粒子含む．地山Ⅵ層の混入もあるがランダムな入り方で全体に一括．人為的埋土の可能性.

0　1:40　2m

第148図　RD12・13・15



RD14
１．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．炭粒極微量．Ⅴa 層に似る．
２．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．Ⅵ層土ブロックやや多く含み明るい．
３．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．
４．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．地山（Ⅵ層）ブロックやや多い．

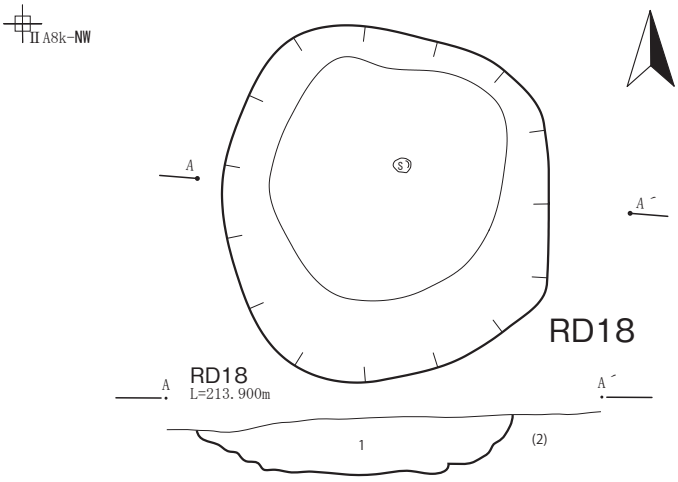
※大型の土坑か（底部のみ残存？）３・４層は底面ピットか．Ⅵ層面で検出底面平坦．RA16 に埋土よく似る．

RD16
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．Ⅵ層土小ブロックやや多い．
２．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．フカフカ．炭粒（φ5-10㎜）極微量．
３．10YR2/3 黒褐色．シルト．２層に似る．Ⅵ層土全体に微量含み．やや明るい．
４．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．Ⅵ層土多量．黄色い層．
５．10YR2/3 黒褐色．シルト．３層に似る．３層よりⅥ層土混入多い．
６．５層と同じ．
７．５層に焼土ブロック・炭粒・灰多量．粘性やや有り．しまりやや密．
８．10YR2/3 黒褐色．シルト．５・６層に似る．６層より炭粒やや多い．
９．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．
10．5YR4/6-4/8 赤褐色．シルト．焼土．上面及び下面近くはブロック状を呈するが現地性の可能性有り．
11．10YR2/2 黒褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまり密．炭粒（φ10㎜）ごく微量．
12．10YR2/3 黒褐色．シルト．Ⅵ層ブロック多量．粘性やや有り．しまりやや疎．崩壊落土．
13．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや有り．

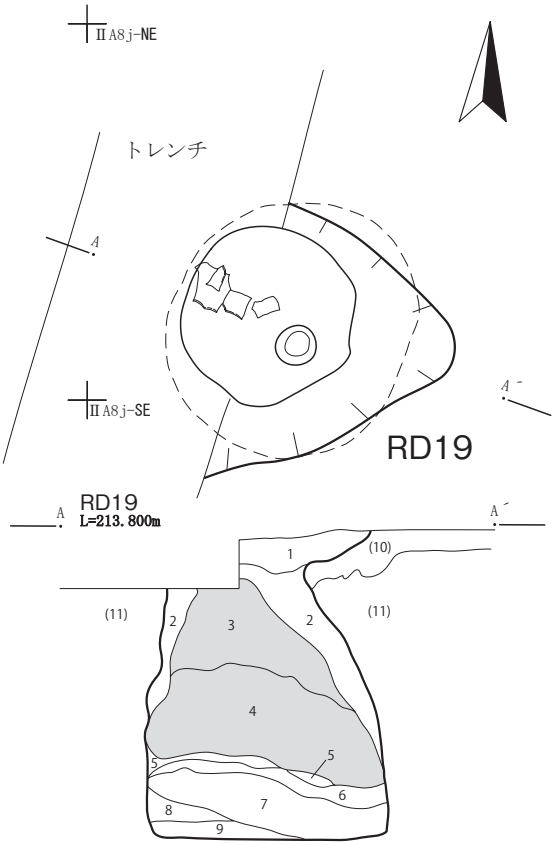
※RA12 南東壁に重複し、これを切る．RA12 埋土が壁に現れる部分では立ち上がり不明瞭．12 層上面から深鉢（大型破片）出土（南壁に寄る）．底面は平坦に整う中央付近のみがガッチリ硬化．壁面は下部がほぼ直立．中部は窄まり上部で外傾．

RD17
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．炭片（φ10 ～ 20 ㎜）微（目立つ）．
２．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．しまり疎．Ⅵ層ブロック多．（壁崩落）
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．
４．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．Ⅵ層ブロック多．（壁崩落）
５．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．Ⅵ層ブロック少．（ブロック細かい）
６．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性有り．しまりやや密．
(7)．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．RA12 出入口 pit- 埋土

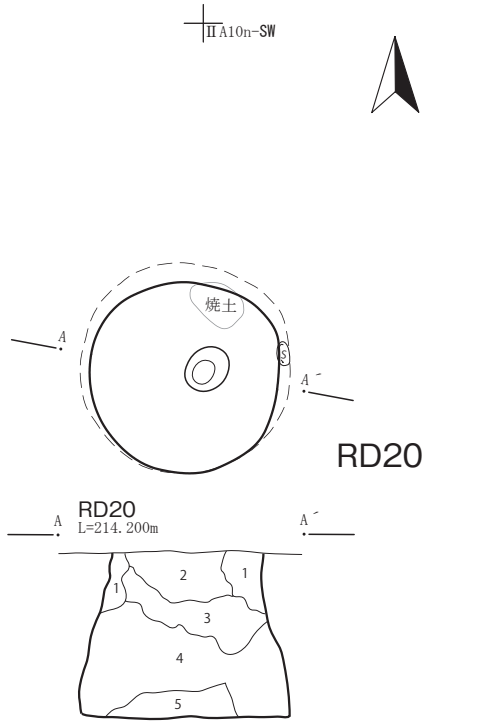
第149図　RD14・16・17



RD18
1．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．
(2).10YR2/3-3/3黒褐色-暗褐色．粘性やや有り．しまり密．重複の別遺構か？

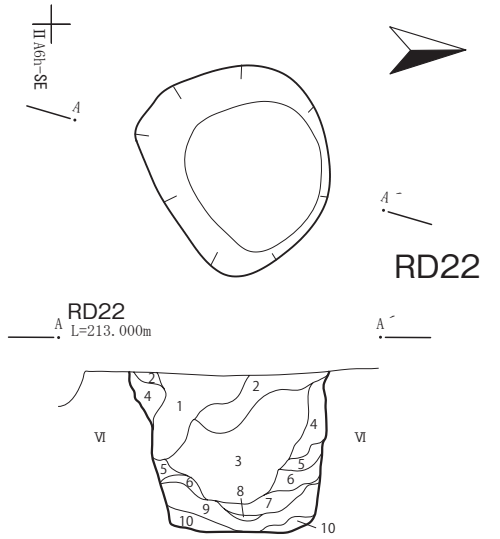


RD19
1．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや弱．しまりやや疎．炭化粒ごく微量．
2．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや弱．しまりやや疎.Ⅵ層土やや多く含み、黄色っぽい．
3.10YR4/6褐色．粘土質シルト．粘性やや有り．しまり極密．しっかりと固くしまっている．（みっちり）
4．10YR4/6 褐色．粘土質シルト．３よりわずかにボソボソし，しまり弱まる．（ザクザク）
5．10YR2/2 -2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．
6．４層に良く似ている．
7．５層に良く似ている．
8．４・６層に良く似ている．
9．７層に良く似ている．
(10)．10YR3/3-2/3 暗褐色 - 黒褐色．シルト．粘性やや弱．しまりやや密.Ⅵ上面の漸移層又は，重複別遺構埋土か？
(11)．10YR4/6 -5/8 褐色 - 黄褐色．シルト.Ⅵ層相当層．
※底面平滑．壁は直線的でわずかに内傾．埋土中～上部に混じりけのない黄褐色土充填．特に上部はみっちりと固くしまっている（堆積状況から明らかに人為的）．黄褐色土が自然にしまった後に流入か．



RD20
1．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密.Ⅵ層類似の黄褐土やや多．
2．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密.Ⅵ層類似の黄褐土大量．この層，重複する．早期住居埋土に似ている．
3．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性有り．しまりやや疎.Ⅵ層類似の黄褐土微量．
4．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや弱．しまり疎．10YR3/3 暗褐色．シルト．黄褐土ブロック少量．焼土粒・炭粒微量．
5.10YR3/4暗褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまり密．壁崩落土か．

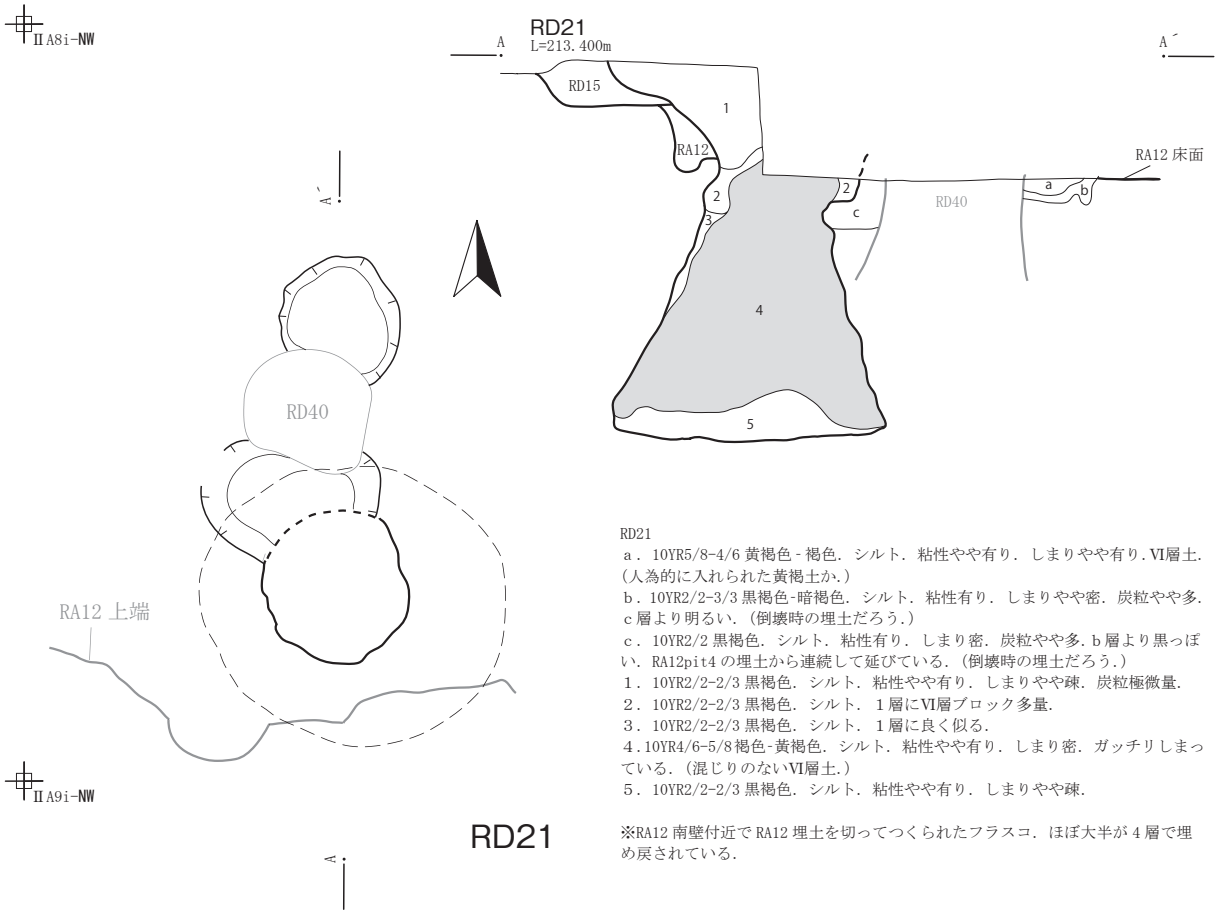
※壁は直線的に内傾．開口部付近（検出面）で直立．底面は平滑で緻密．



RD22
1.10YR2/1黒色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．ベタッと黒っぽい層．
2．10YR3/1 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．
3．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．
4.10YR2/2黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密.Ⅵ層ブロック少量．
5.10YR2/2黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密.Ⅵ層ブロック多量．
6.10YR2/2黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密.Ⅵ層ブロック少量．
7.10YR2/2黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密.Ⅵ層ブロック多量．
8．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや有り．
9.Ⅵ層ブロック層．
10.10YR2/2黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや有り.Ⅵ層ブロック少量．

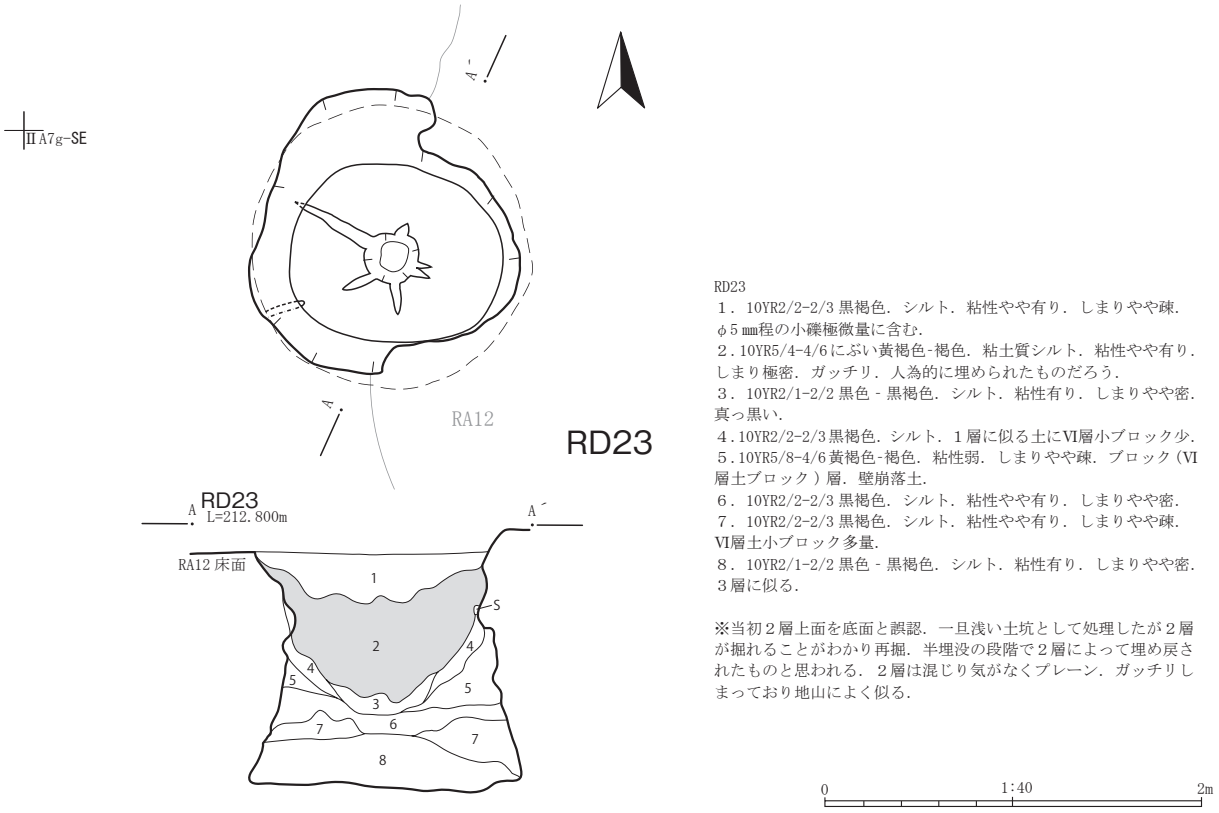
0　1:40　2m

第150図　RD18 ～ 20・22



RD21
ａ．10YR5/8-4/6 黄褐色 - 褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや有り．Ⅵ層土．（人為的に入れられた黄褐土か．）
ｂ．10YR2/2-3/3 黒褐色-暗褐色．シルト．粘性有り．しまりやや密．炭粒やや多．ｃ層より明るい．（倒壊時の埋土だろう．）
ｃ．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性有り．しまり密．炭粒やや多．ｂ層より黒っぽい．RA12pit4 の埋土から連続して延びている．（倒壊時の埋土だろう．）
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．炭粒極微量．
２．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．１層にⅥ層ブロック多量．
３．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．１層に良く似る．
４．10YR4/6-5/8 褐色-黄褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．ガッチリしまっている．（混じりのないⅥ層土．）
５．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．

※RA12 南壁付近で RA12 埋土を切ってつくられたフラスコ．ほぼ大半が４層で埋め戻されている．

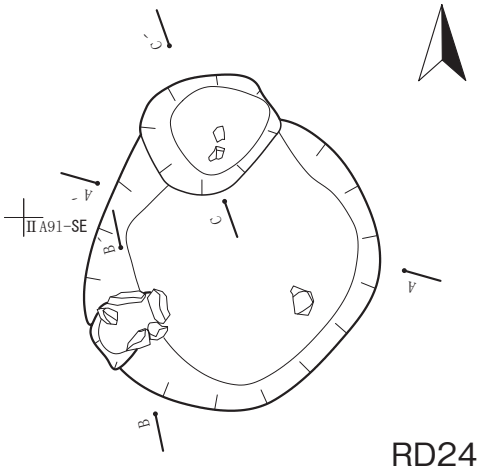


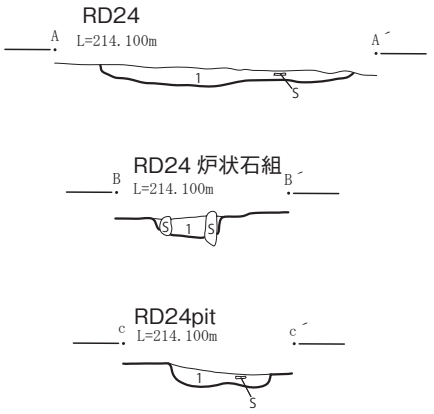
RD23
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．φ５㎜程の小礫極微量に含む．
２．10YR5/4-4/6 にぶい黄褐色-褐色．粘土質シルト．粘性やや有り．しまり極密．ガッチリ．人為的に埋められたものだろう．
３．10YR2/1-2/2 黒色 - 黒褐色．シルト．粘性有り．しまりやや密．真っ黒い．
４．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．１層に似る土にⅥ層小ブロック少．
５．10YR5/8-4/6 黄褐色-褐色．粘性弱．しまりやや疎．ブロック（Ⅵ層土ブロック）層．壁崩落土．
６．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．
７．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．Ⅵ層土小ブロック多量．
８．10YR2/1-2/2 黒色 - 黒褐色．シルト．粘性有り．しまりやや密．３層に似る．

※当初２層上面を底面と誤認．一旦浅い土坑として処理したが２層が掘れることがわかり再掘．半埋没の段階で２層によって埋め戻されたものと思われる．２層は混じり気がなくプレーン．ガッチリしまっており地山によく似る．

0　1:40　2m

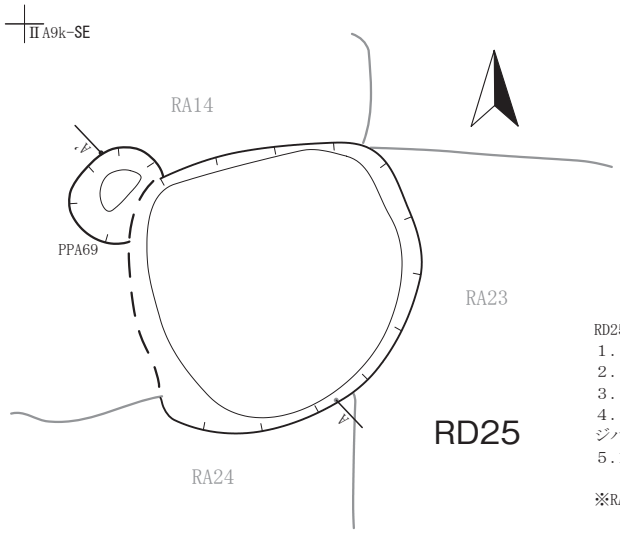
第151図　RD21・23

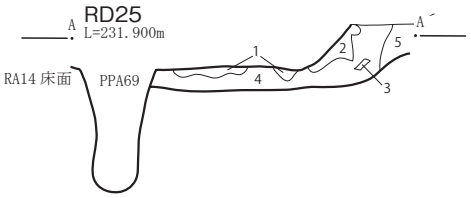




RD24 ・炉状石組・Pit
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．Ⅳ層に似る土．

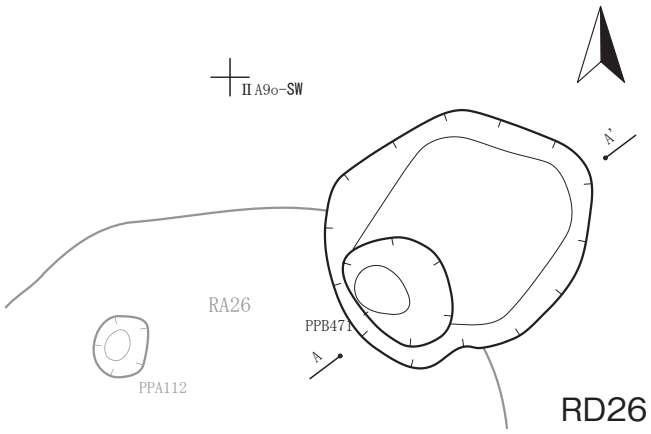
※浅い皿状の落ち込み．当初フラスコ状土坑等を想定したが深くならなかった．埋土は一括、自然堆積と思われる．内部は北壁に小土坑（浅い）と西端に炉状の石組部をもつ．石は５個で石囲い、いずれも被熱して赤変．しかし内部周囲の土に赤変なし．一見ミニチュア住居にも見える．

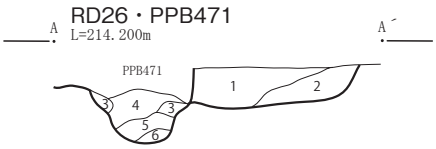




RD25
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや有り．黒味のぬけた色調．
２．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性有り．しまり有り．オレンジパミスまばら．
３．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまり有り．ブロック状でかたくしまる．
４．10YR2/2 黒褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまりやや有り．黄褐色土状，オレンジパミス含む．
５．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有り．しまり有り．RA24 或いは RA23 の埋土と思われる．

※RA23・24 いずれよりも新しい土坑．詳しい時期は不明．



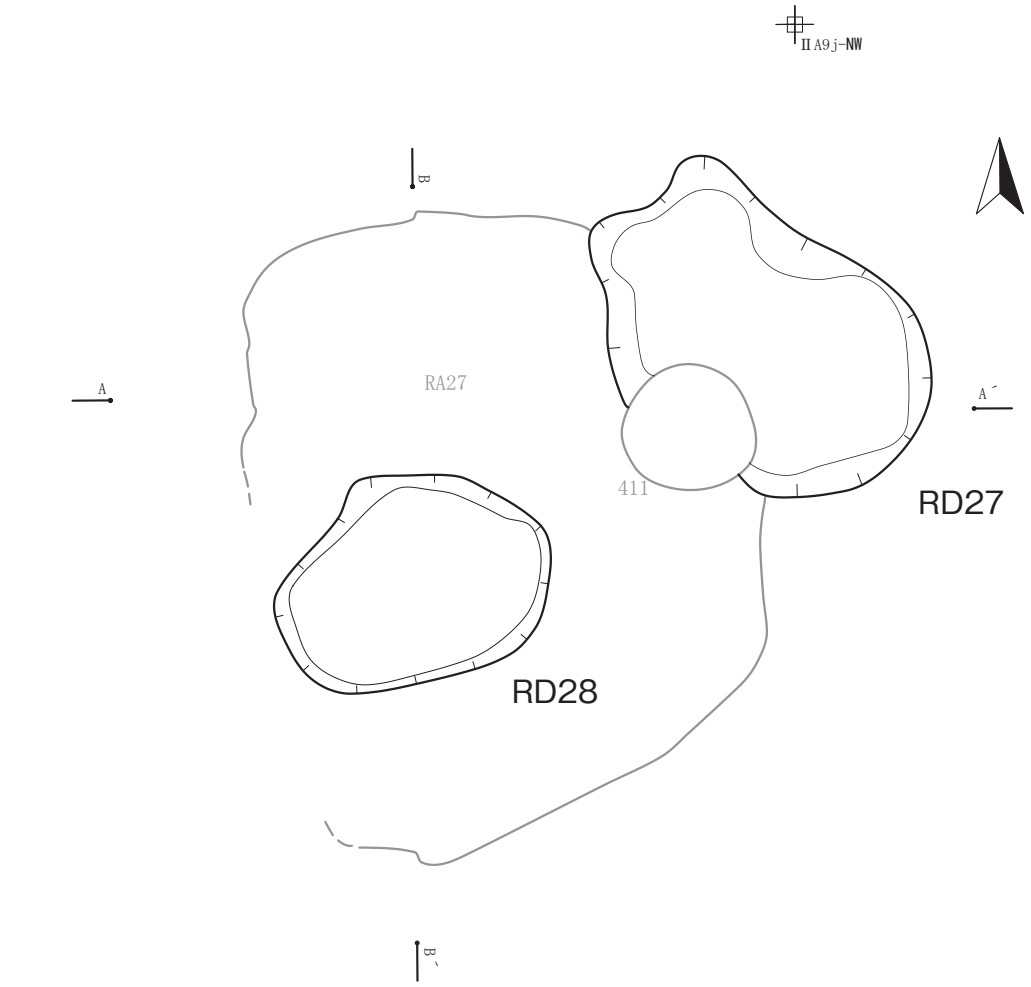


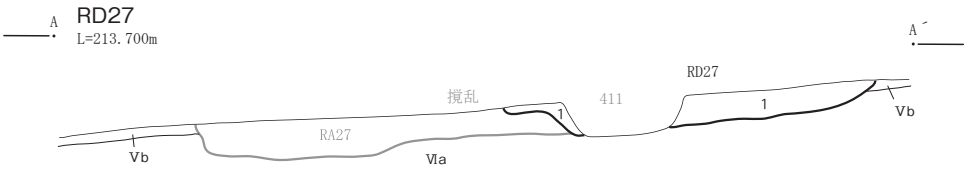
RD26・PPB471
１．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり有り．オレンジパミス微量．黄褐色土小ブロック含む．
２．10YR4/4 褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまり有り．暗褐色土との混合土．Vb 層起源の土か？
３．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまり有り．地山崩落ブロック（Ⅵ層起源）．
４．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまり有り．オレンジパミスまばら．かたくしまる．
５．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや有り．暗褐色土粒を全体に含む．
６．10YR4/4 褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまり有り．粘性強いブロック．

※RA26 を切る．

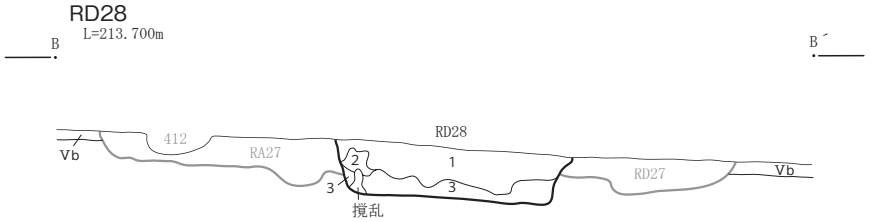
0　1:40　2m

第152図　RD24 ～ 26





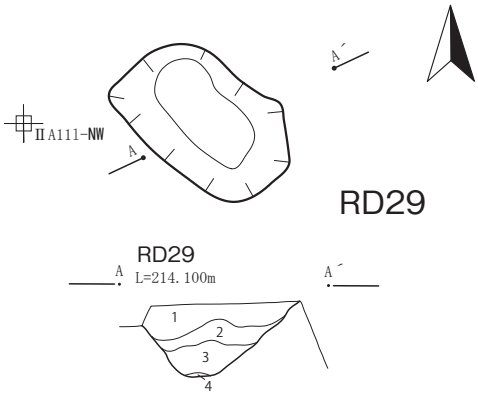
RD27
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性無し．しまりやや疎．黒褐色シルト塊 5%．φ3-5 ㎜の淡黄色軽石 2%．焼土塊 3%混入．



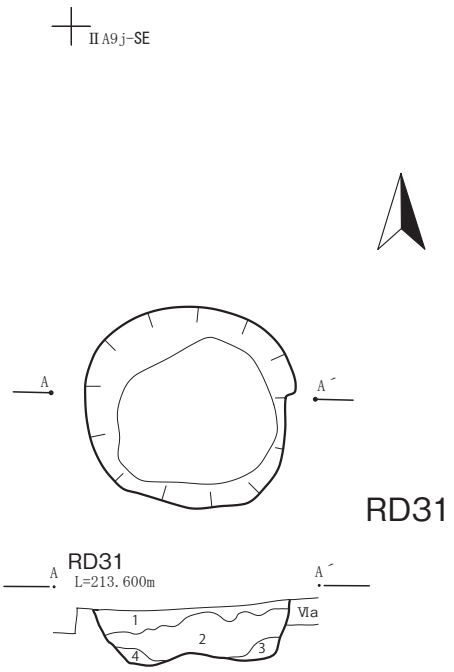
RD28
１．7.5YR4/4 褐色．シルト．粘性やや無し．しまり疎．黒褐色シルト塊 5%．黒色シルト塊 3%．φ3-5 ㎜の橙色軽石 1%，炭化物 1%混入．モソモソしており．黒褐色土でよごれている．
２．10YR5/8 黄褐色．砂質シルト．粘性やや有り．しまりやや密．φ1-2 ㎜の凝灰岩粒 1%混入．
３．7.5YR4/6 褐色．粘土質シルト．粘性やや有り．しまり疎．φ2-3 ㎜の赤褐色スコリア 1%混入．非常にモソモソしている．（渋民火山灰層起源か）

0　1:40　2m

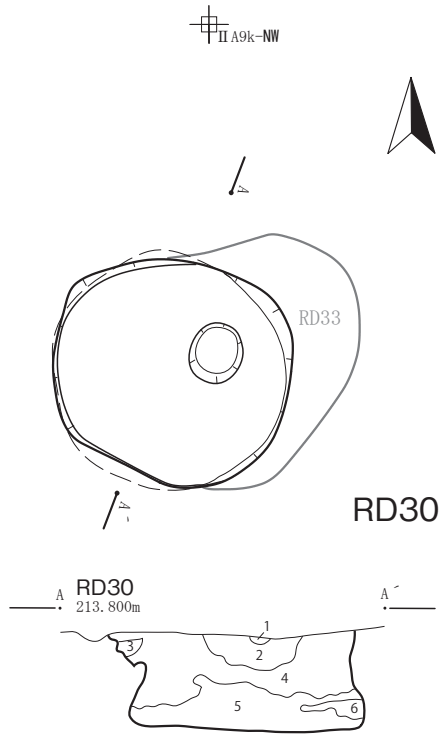
第153図　RD27・28



RD29
１.7.5YR3/4暗褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．YP2%,淡黄軽石1%混入．（Vb層に起因か）
２．7.5YR4/6-10YR4/6褐色．シルト．粘性無し．しまりやや疎．黄褐色土塊5%．YP1%混入．
３.10YR4/6褐色．シルト．粘性やや無し．しまりやや疎．黒褐色土塊10%・黄褐色土塊3%．YP3%混入．
４．7.5YR5/6明褐色．シルト．粘性やや有り．しまり疎．底面付近に塊状で散見される．

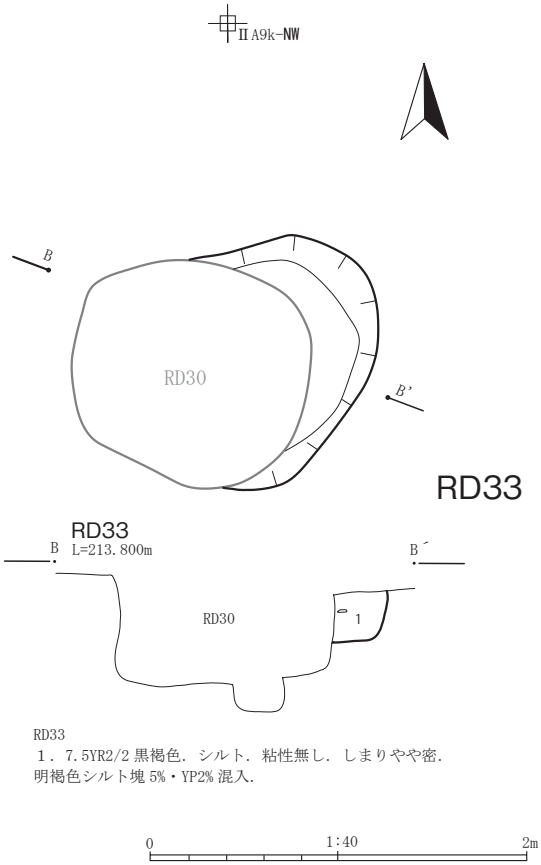


RD31
１.7.5YR4/4褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．黄褐色シルト塊5%.YP5%.
２.7.5YR2/2黒褐色．シルト．粘性無し．しまり密．褐色シルト塊7%.YP(φ5-10㎜)10%.
３.7.5YR5/6明褐色．シルト．粘性無し．しまりやや密．褐色シルト小塊3%.YP1%.（崩壊落土層か）
４．7.5YR5/6明褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．黒褐色シルト小塊2%.



RD3
１．10YR3/2黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや有り．木根撹乱．
２．10YR3/3暗褐色．シルト．粘性あまり無し．しまりやや有り．YPおよび白色のパミスを全体に含む．
３.10YR3/4暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりあまり無し．流入物無し．
４．7.5YR3/2黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり有り．YP、白色パミスをまばらに含む．固くしまる．
５．10YR3/3暗褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまり有り．YPの混じりが４層より多い．固くしまる．
６.10YR4/3にぶい黄褐色.シルト.粘性有り.しまり有り．５層に帯状に入る.YPの流入物少量.

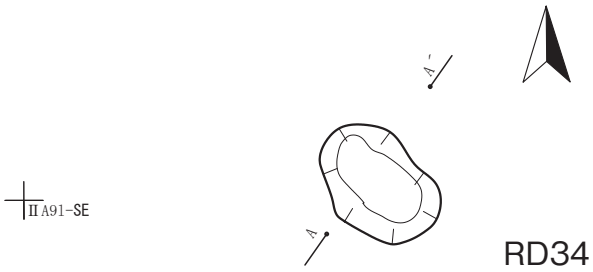
※上にあるRA15床面で検出．RA15の柱穴精査時に壁が広がることから土坑を確認した．

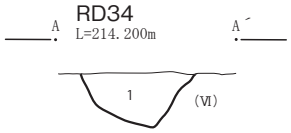


RD33
１．7.5YR2/2黒褐色．シルト．粘性無し．しまりやや密．明褐色シルト塊5%・YP2%混入．

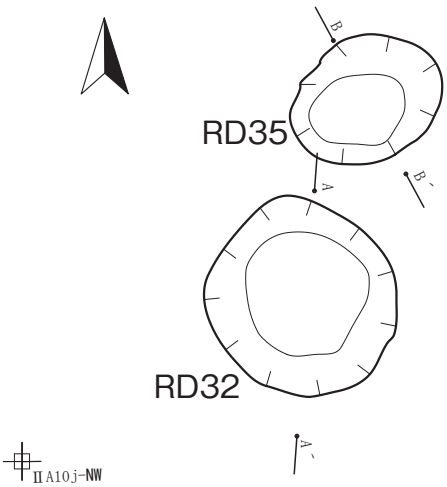
0　1:40　2m

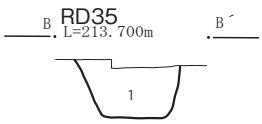
第154図　RD29～31・33



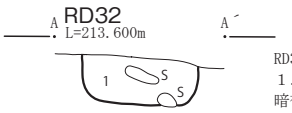


RD34
１.10YR3/3暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまり有り．
YPをまばらに含む．



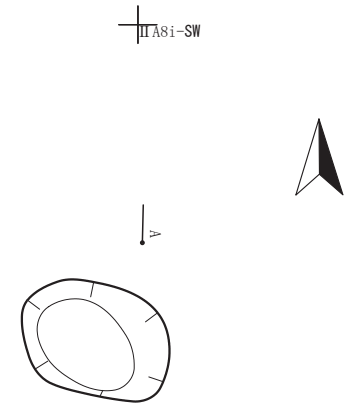


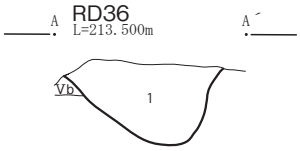
RD35
１．7.5YR4/4褐色．シルト．粘性無し．しまりやや密．
暗褐色シルト塊7%，黄褐色シルト塊3%，YP3%混入．



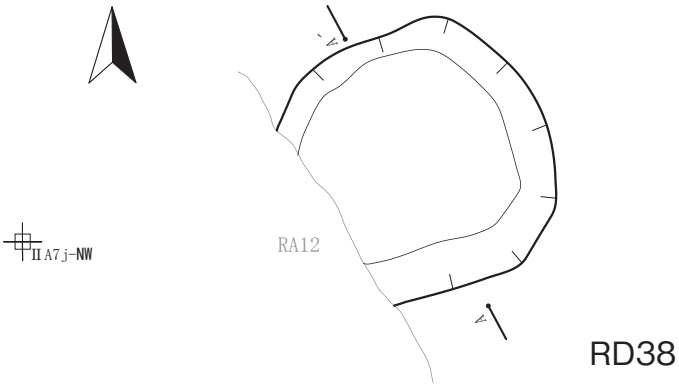
RD32
１．7.5YR4/4褐色．シルト．粘性無し．しまりやや密．
暗褐色シルト塊10%．炭化物粒1%．YP3%．石の周辺は
少々柔らかい．

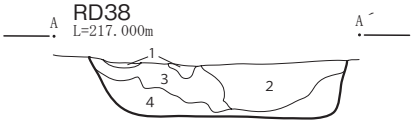
※完掘時に大きく掘り広がった．





RD36
１．10YR3/3暗褐色．シルト．粘性やや無し．しまり疎．
褐色シルト塊15%．淡黄色軽石1%．凝灰岩小粒2%混入．



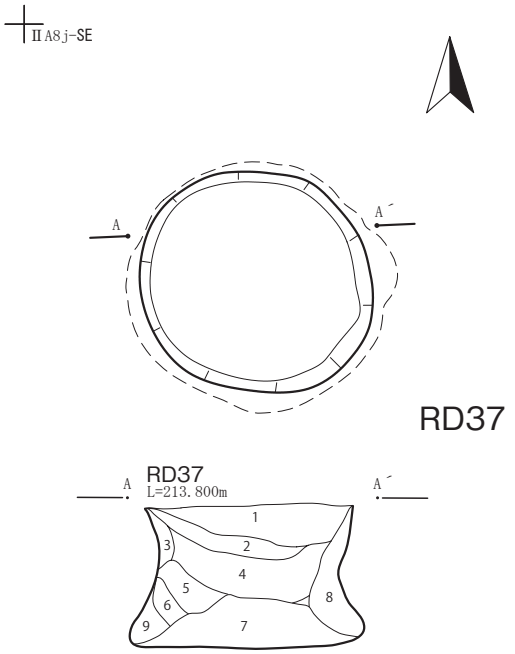


RD38
１．10YR3/2黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりあまり無し．YPをわずかに含む撹乱層．
２．10YR3/4暗褐色．粘土質シルト．粘性やや有り．しまり有り．YPわずか．３・４層より
黒味強い．
３．10YR4/4褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまりやや有り．YPわずか．
４．10YR4/6褐色．粘土質シルト．粘性有り．しまりやや有り．YP含まず．しまりも弱い．

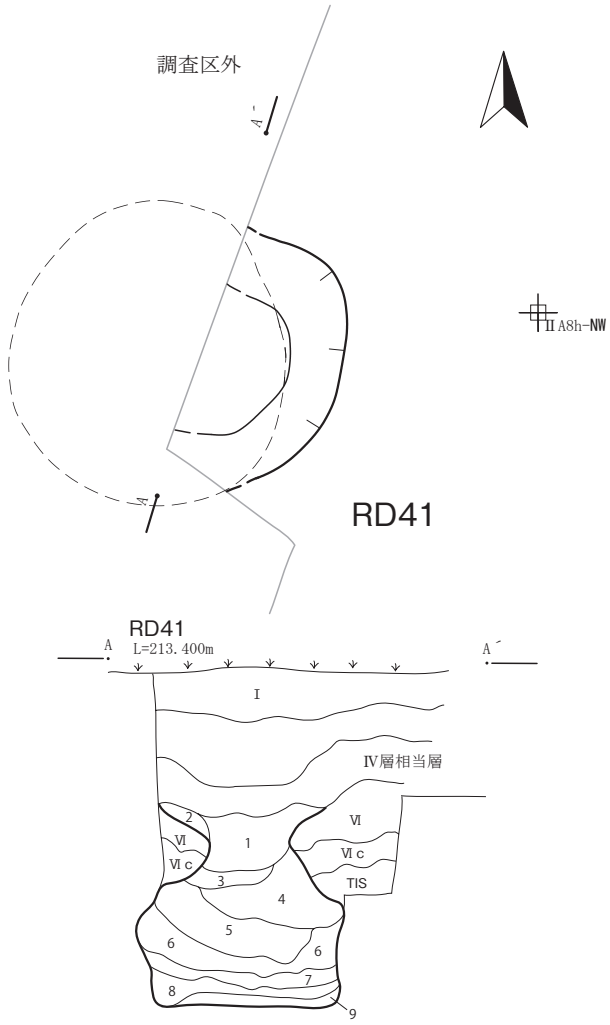
※RA20の床面で円形の輪郭で検出．床面が丸く下がった範囲で掘り上がり．遺物は金雲母
入り．早期土器片．

0　1:40　2m

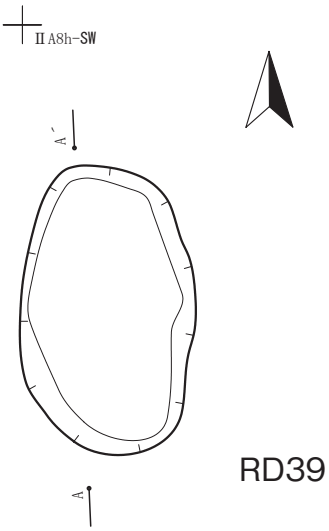
第155図　RD32・34～36・38

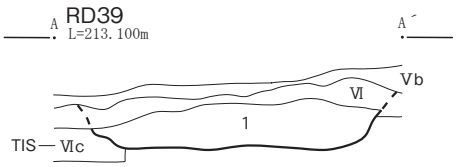


RD37
１．10YR1.7/1 黒色．シルト．粘性無し．しまり疎．出生スコリア 10%．炭化物粒 1%混入．褐色シルト小塊 3%．
２．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや無し．しまり疎．赤褐色スコリア 2%，黒褐色シルト小塊 5%，淡黄色スコリア 1%混入．
３．7.5YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや無し．しまり疎．非常にモソモソしている．黄褐色シルト小塊 3%．（壁崩落土層）
４．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや有り．しまり疎．赤褐色スコリア 1%，褐色シルト塊 3%，炭化物粒 1%
５．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．黒色シルト塊 10%淡黄色軽石 1%．
６．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．黒色シルト塊 7%．（壁崩落土層）
７．10YR1.7/1 黒色．シルト．粘性やや有り．しまり疎．暗褐シルト塊 5%．褐色シルト塊 3%．
８．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．褐色シルト塊 5%，黒褐色シルト小塊 3%．（壁崩落土層）
９．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．壁崩落土層．



RD41
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．褐色シルト塊 10%混入．暗褐色シルトしみ状にみられる．＜Ⅳ層起因＞
２．10YR4/6 褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．暗褐色シルト塊 2%・橙色軽石 2%混入．
３．10YR1.7/1 黒色．シルト．粘性無し．しまり疎．暗褐シルト塊 7%混入．
４．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまり疎．褐色シルト塊 7%，黒褐色シルト塊 3%混入．
５．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．褐色シルト塊 10%混入．
６．10YR5/8 黄褐色．シルト．粘性やや無し．しまり疎．非常にモソモソしている．赤色スコリア 2%，黒褐色シルト塊 3%混入．
７．7.5YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有り．しまりやや疎．黄褐色シルト粒 2%混入．
８．7.5YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．
９．10YR 3/2 黒褐．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．黄褐色シルト粒 3%混入．

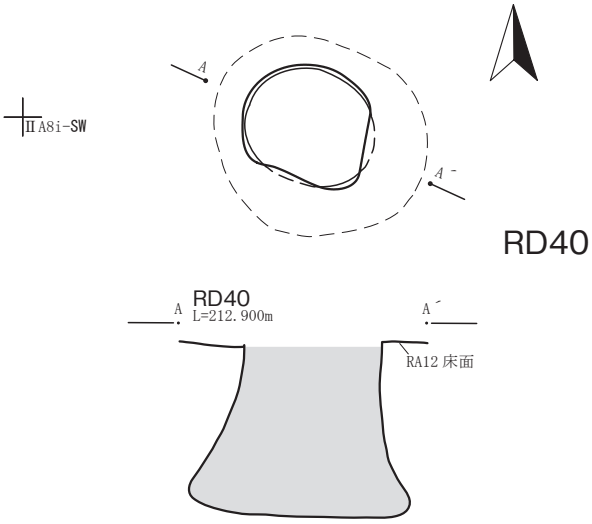




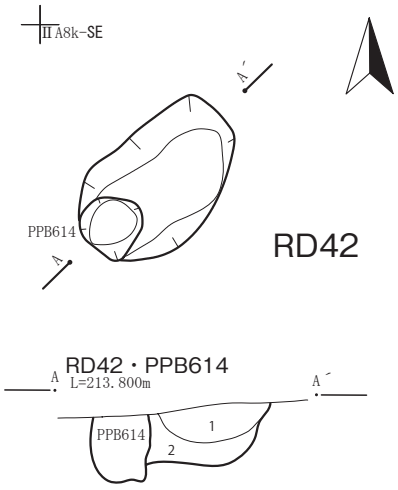
RD39
１．10YR4/6 褐色．シルト．粘性無し．しまりやや密．褐灰色シルト塊 25%，YP10%，凝灰岩小粒 1%混入．

0　1:40　2m

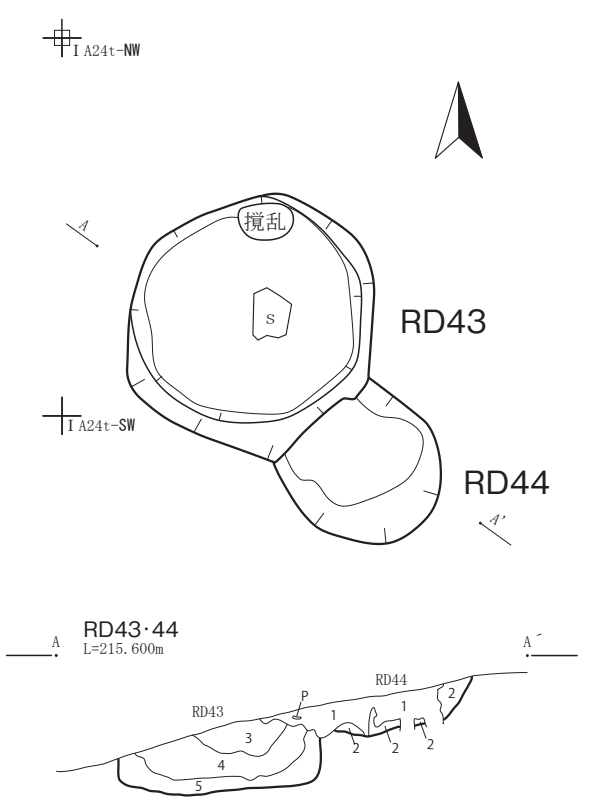
第156図　RD37・39・41



RD40
※土層断面図化記録なし．
埋土はⅥ層土類似の黄褐色土．RD21 の埋土に良く似る．

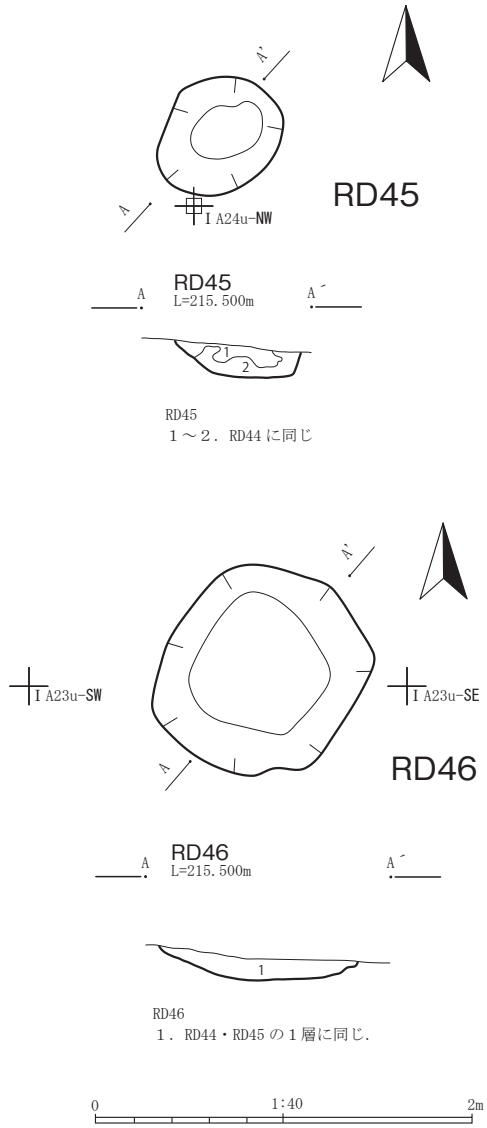


RD42
１．7.5YR3/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．暗褐色シルト塊 5%，YP5%，淡黄色軽石 1%混入．
２．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有り．しまり疎．黒褐色シルト塊 3%．YP2% 混入．



RD43・44
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵ層土ブロック・黒色土ブロック含む．木根多．根攪乱だろう．
２．10YR4/4-3/4 褐－暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．炭化物粒極微．
４．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵ層土ブロック少量．全体やや黄味．
５．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵ層土全体にやや多く含み黄味強い．

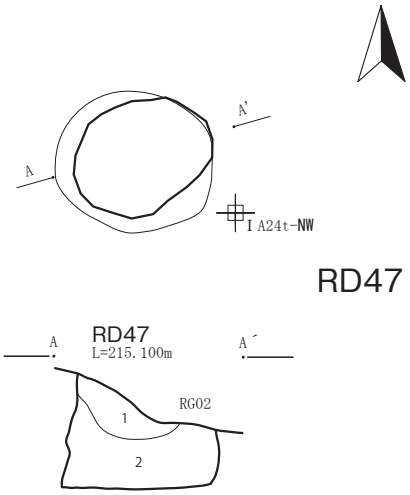
※１～２：RD44．３～５：RD43．RD44 は根攪乱の可能性高い．RD43 は円筒形あるいはフラスコ形土坑．底面は平坦に整っている．埋土は壁崩落の５・４層、流入土の３層の順に堆積．主体土の暗褐色シルトはⅤ層ベースだろう．上部にわずかに含まれる橙色粒子（生出スコリア）は上位層からの混入だろう．



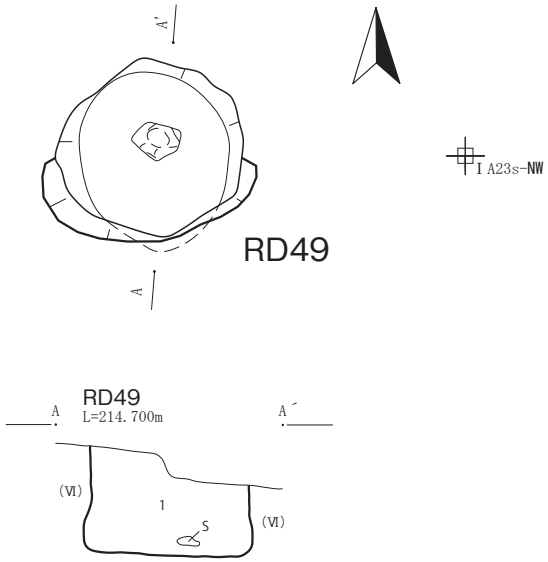
RD45
１～２．RD44 に同じ

RD46
１．RD44・RD45 の１層に同じ．

第157図　RD40・42～46

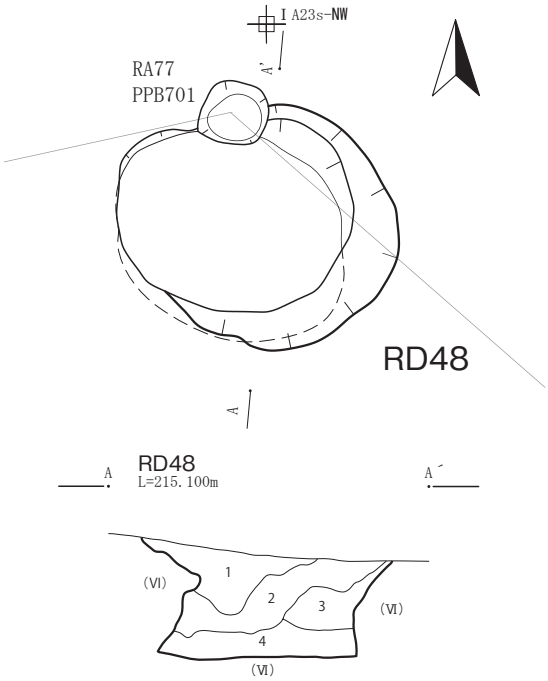


RD47
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まり密．
２．10YR3/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．
Ⅵ層土小ブロック（径２～ 10 ㎜）少量．１より明るい．



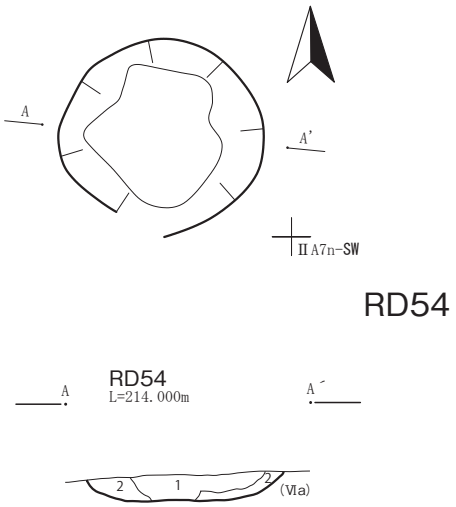
RD49
１．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．
全体にⅥ層土ブロック（径５～ 10 ㎜）少量含む．

※Ⅵ層土ブロックの入り方は全体に一様であり、一度に埋まったものとみられる．人為の可能性大．埋土の主体の暗褐色土はⅣ層土によく似る．Ⅲ・Ⅴ層土が入る他の遺構に比して明るい印象．



RD48
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや疎．埋土中、最も黒っぽい．
２．10YR3/2-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．Ⅵ層土含み、１より明るい．
３．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．Ⅵ層土含み、２より明るい．
４．10YR3/2-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．２に似る．

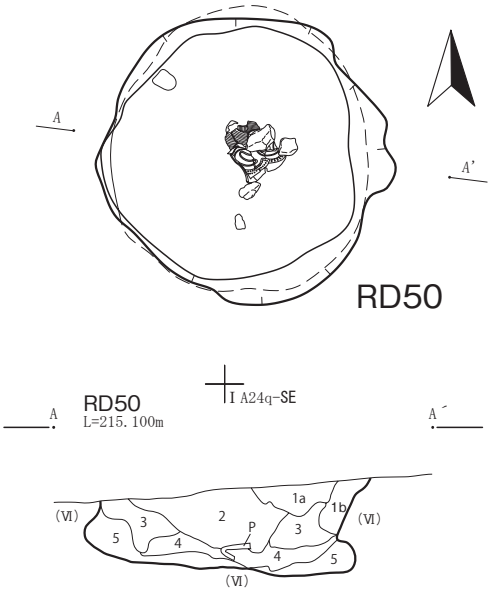
※底面は平坦に整い、全体がやや硬化したようにしっかりしている．



RD54
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．黒褐色シルト塊７％．Ⅴb 層主体（YP1%）．
２．10YR4/4 褐色．シルト．粘性無．締まり密．Ⅵa 層主体の地山流入土層（YP2 ～ 3%）．早期の土坑．２層は一見地山のようだが、少し時間をおくと暗くなり、掘れる土であることが判明できる．

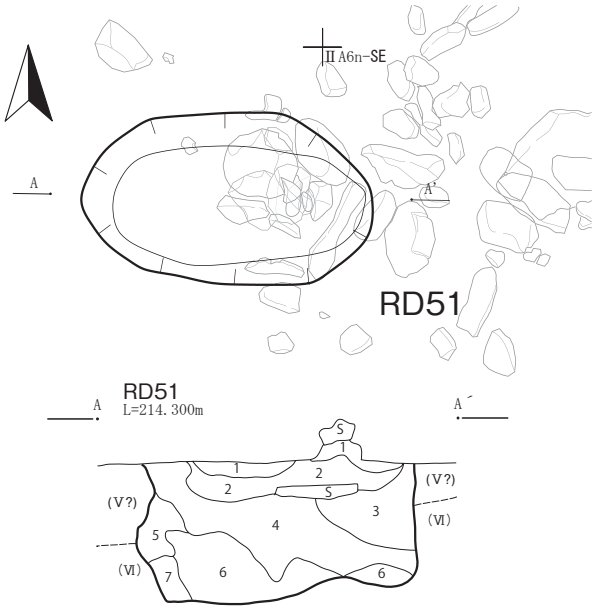
0　1:40　2m

第158図　RD47 ～ 49・54



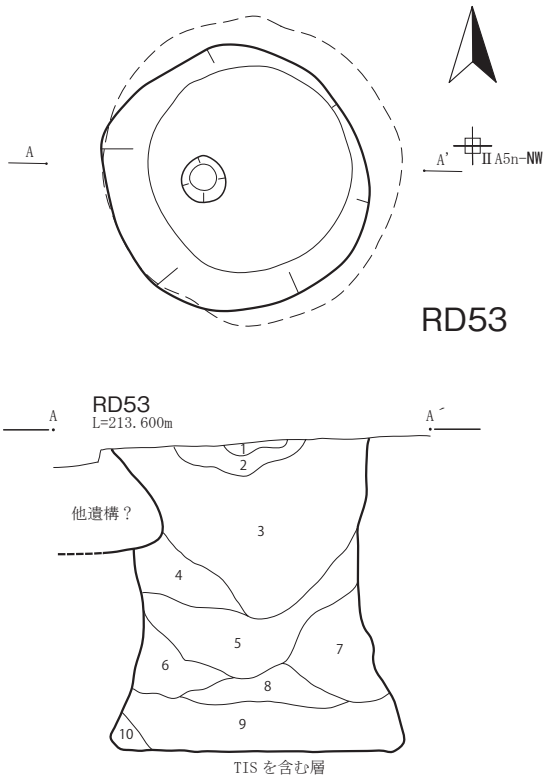
RD50
1a．7.5YR3/2-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．炭片微量．全体に焼土含み赤味．
1b．10YR4/4-3/4 褐－暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵ層土ブロック多量．５層に似る．壁崩落土だろう．
２．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．炭化粒極微．Ⅲ層の橙色粒微量（上方からの攪乱によるか）．
３．10YR4/4-3/4 褐－暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．褐色土ブロック多く含み全体明るい．
４．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．本層上面に土器等の遺物分布．流入土だろう．
５．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．底面直上を覆う壁崩落土．

※底面は平坦．全体にやや硬化ししっかりと締まっている．



RD51
１．10YR3/3-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．２層より明るい．RA13 内部に広がる暗褐色土に似る．
２．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．全体に褐色土(Ⅵ層土）ブロックを微量含む．
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．混入物ほとんどなく２・４より黒味強い．
４．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．２によく似るが褐色土の混入多い．
５．10YR3/4-4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．褐色土ブロック多．
６．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅴb ～Ⅵの崩落層か．
７．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．

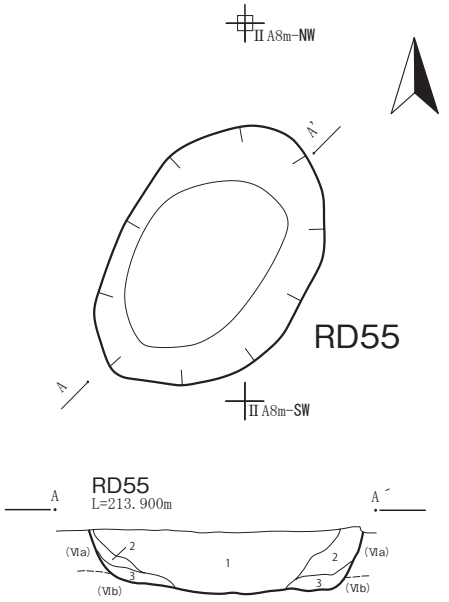
※東西長軸の楕円形土坑．底面は比較的平坦．壁はほぼ直立．しっかりと整った楕円形土坑．RA13 の環状配石南端付近の礫の下位から検出（重複関係は RA13 の礫＞RD51）．埋土上部に径 60 ㎝以上の扁平礫出土（２層下面に置いたような状態）．埋土は全体に地山(Ⅵ層)ブロックを含む．人為的な一括埋土とみられる．埋土は西側から流し込まれている．内部からはほとんど出土遺物なし．底面からも皆無．検出面より上位にも、本土坑に伴うとみられる礫が出土している．これらは RA13 の黄色土より下位から出土しているため、本土坑は RA13 の構築より古いものと考えられる．



RD53
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性なし．締まりやや密．Ⅳ～Ⅴ主体か．
２．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性中～やや有．締まりやや密．黒褐色シルト小ブロック７～ 10%．Ⅳ層に含まれる褐色ブロックの純層かも．火山灰？（サンプル採取）．
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや無．締まりやや密．褐色・淡黄スコリア（径 10 ㎜）1 ～ 2%．褐色スコリア（径２～３㎜）10 ～ 15%．Ⅴa 主体．
４．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性中～やや有．締まりやや疎．黒色シルト小塊 5%．Ⅵa 層土粉状に 10 ～ 15%．Ⅴa ～Ⅴb 主体．
５．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり疎．Ⅵ層土 15 ～ 20%．黒色シルト塊 15 ～ 20%．４に似る．
６．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり疎．Ⅵ層土塊５～ 7%．黒色シルト小塊 1%．Ⅴb 層土主体．壁崩落土層．
７．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや無．締まりやや疎．黒色シルト塊 20%．Ⅵ層土の崩落層．
８．10YR2/2-2/3 黒褐－極暗赤褐色．シルト．粘性やや有．締まり疎．黄褐色シルト（粉状）5%．Ⅴb 層主体．
９．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．Ⅵ層土(粉状・小塊）7-10%．黒色シルト塊７%．炭化物粒３～ 5%．橙スコリア 1%．後期初頭の土器片出土．
10．10YR5/6 黄褐色　シルト粘性やや有．締まりやや密．壁崩落土．

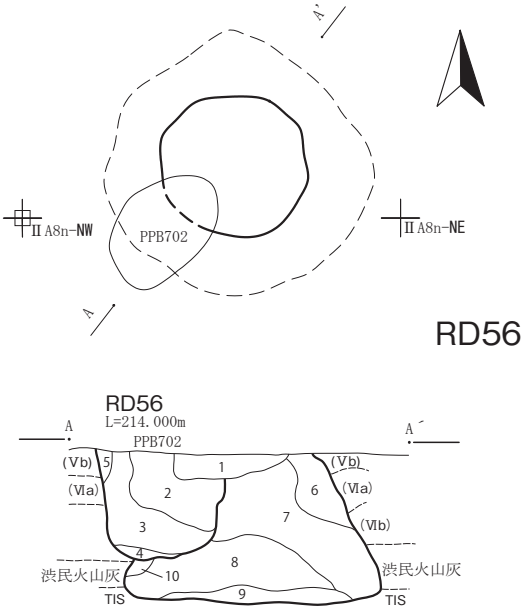
0　1:40　2m

第159図　RD50・51・53

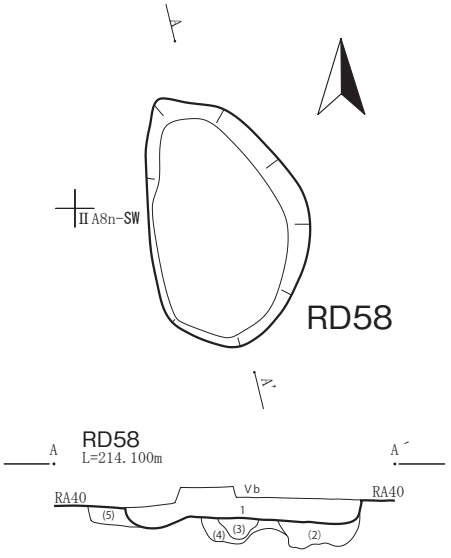


RD55
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．（Ⅴ～Ⅴb 層主体）．Ⅵa 層塊 20%（YP を多く含む）．凝灰岩小粒 7 ～ 10%.
２．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．（Ⅵa 層主体）．Ⅴb 層塊 10%．凝灰岩小粒 5 ～ 7%.
３．10YR5/8 黄褐色．シルト．粘性やや無．締まりやや密．Ⅵa 層主体の地山流入土層（YP ほとんど含まない）．

※掘りすぎか．北側の２層はかなりしまっており、ガリガリする．凝灰岩小粒．

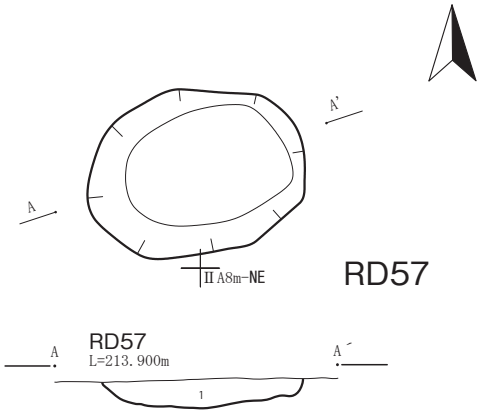


RD56
１．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや無．締まりやや密．橙色粒子（生出スコリア）7-10%.
２．7.5YR2/1 黒色．シルト．粘性中～やや有．締まり中～やや疎．橙色軽石 3 ～ 5%．褐色シルト塊 10 ～ 15%.
３．7.5YR2/1 黒色．シルト．粘性中．締まりやや疎．炭化物粒 1 ～ 2%．褐灰色粘土塊 5 ～ 7%（ pp703 の 1 層に共通）．橙色軽石 15 ～ 20%.
４．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．黒色シルト塊 3 ～ 5%.
５．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性やや無．締まりやや密．黒色シルト塊 30%.
６．10YR2/1 黒色．シルト．粘性無．締まりやや疎～中．褐色シルト塊 10 ～ 15%．橙色軽石 1 ～ 3%.
７．10YR1.7/1 黒色．シルト．粘性中．締まりやや疎．橙色軽石（YP?径 5 ～ 15㎜）10 ～ 15%.
８．7.5YR1.7/1 黒色．シルト．粘性やや有．締まり中～やや疎．橙色軽石 3 ～ 5%（7 より少ない）．褐色小粒 1 ～ 2%.
９．7.5YR2/1 黒色．シルト．粘性・締まりとも 8 より強い．橙色軽石 5%．褐色シルト小塊 3%.
10.10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性中．締まりやや密．Ⅵ層土の二次堆積（崩落土）．



RD58
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性中～やや無．締まりやや密．橙色軽石（径 3 ～ 5 ㎜）10%．褐色シルト塊 10 ～ 15%．Ⅳ層主体．一括埋没だろう．
(2)．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性中．締まり中～やや密．YP1 ～ 2%．Ⅴa ～ Ⅴb 主体．
(3)．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性中．締まりやや密．YP5%.
(4)．10YR4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．
(5)．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや無．締まりやや密．YP2 ～ 3%.

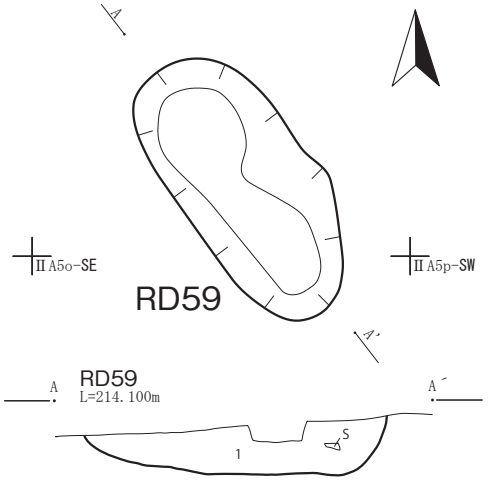
※単層（1 のみ）．2 ～ 3 は RA40 関連か．



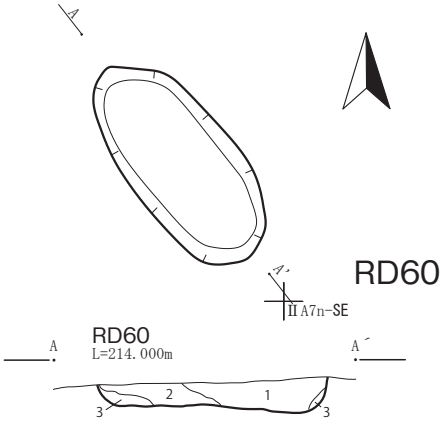
RD57
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無．締まり中～やや疎．炭化物粒 1%．Ⅵa 層塊 15%．Ⅴb 層主体の単層．形状は RD54 に似る．浅い皿状の土坑（早期？）．

0　1:40　2m

第160図　RD55 ～ 58

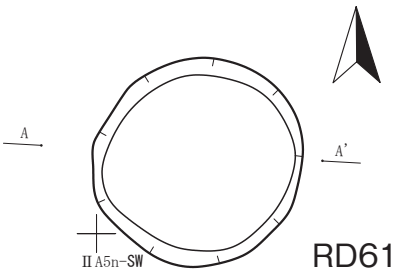


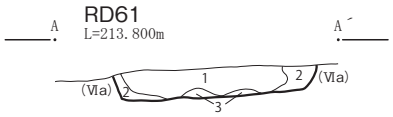
RD59
１．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性無．締まり密．Ⅴ層主体で YP7 ～ 10% 含む．VIa 層塊 10%．一括埋没．



RD60
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや無．締まりやや密．黒味の強いⅤb 層主体．VIa 層塊 7 ～ 10%．SI84 の 4 層に似る．
２．7.5 YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．VIa 層塊 10%．（Ⅴb 層主体）．
３．10YR4/6 褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．VIa 層主体の地山流入土層．黒褐色シルト塊 15 ～ 20%．

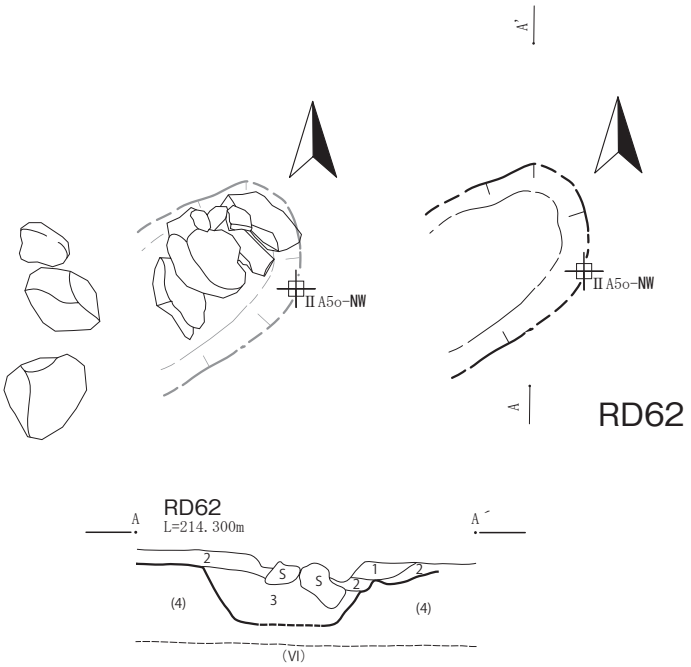
※全体的に早期の竪穴の堆積状況と似る．





RD61
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．VIa 層小塊 7%．（Ⅴ層起源）．橙色軽石 1%．
２．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性中．締まりやや密．壁崩落土層．（Ⅴb 層起源）．
３．10YR4/6 褐色．シルト．粘性中．締まり中．（VIa 層起源）．黒褐色シルト塊 10 ～ 15%．

※フラスコの下部か？

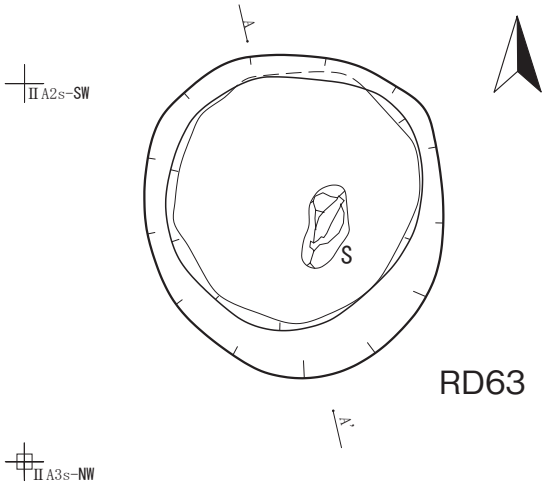


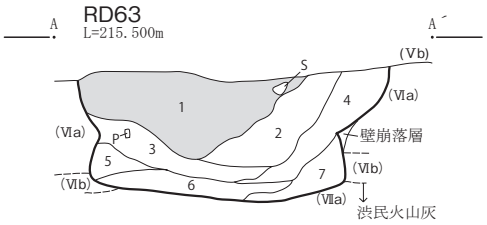
RD62
１．7.5YR4/6 褐色．シルト．焼土．粘性有．締まり密．２の被熱部．
２．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．RA13 内部に広がる暗褐色土．
３．４に２のブロックをやや多量に含む．人為による一括埋土だろう．
（4）．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．褐色土ブロックを全体に含む（結果的にⅤa 層土～早期住居群の埋土となった）．

※本土坑は RD51 に類似の楕円形土坑（墓坑）か．
土坑の「掘り込み～埋め戻し」は、RA13 内の暗褐色土堆積（本断面２層）より古い．１層の焼土生成はさらに後．本土坑上部の大形礫には北側（焼土側）に赤変が認められる．土坑（RD62）掘削→埋め戻し（礫設置）→RA13 内部に暗褐色土堆積（敷き均し？）→焼土生成（礫被熱）の順．

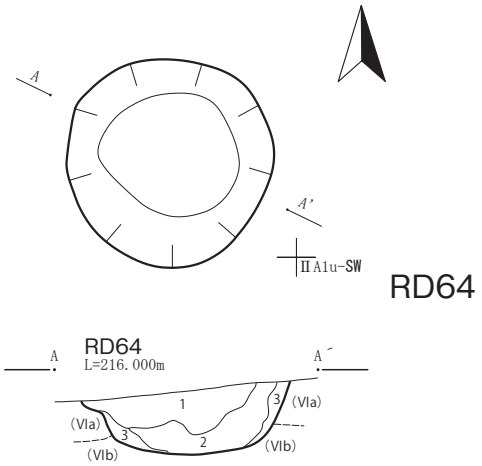
0　1:40　2m

第161図　RD59 ～ 62



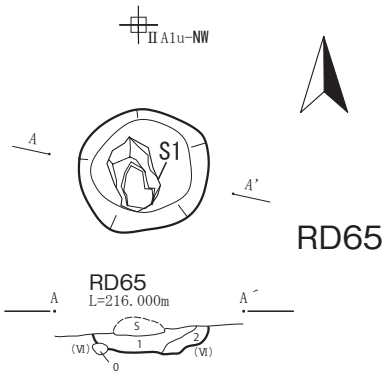


RD63
１．10YR4/6 褐色．シルト．粘性中．締まりやや密．（黄色土層）．層の中央部ほど黄色がきれいで周囲ほど黒色土で汚れている．黒褐色シルト 10 ～ 15%.
２．7.5YR2/2 黒褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．（Ⅳ～Ⅴ層起源）．黄色土塊 5 ～ 7%．炭化物粒 2 ～ 3%.
３．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性中．締まりやや疎．炭化物粒 1 ～ 2%．（Ⅴ～Ⅴb 層主体）.Ⅵ層塊 2 ～ 3%．明黄褐色シルト塊 20 ～ 25%．土器片含む（早）.
４．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性無．締まり疎．明黄褐色シルト塊 30 ～ 40%．壁上部（VIa 層）をまきこんだⅤ層主体の崩落土層.
５．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性中．締まりやや疎．明黄褐色シルト塊 5%．（Ⅴ層主体）.
６．10YR5/8 黄褐色．シルト．粘性無．締まり中．壁(オーバーハング部分にVIa 層)崩落土層．黒褐色シルト小塊 10 ～ 15%.
７．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性中．締まりやや疎．黒褐色シルト小塊 7%．褐色シルト塊 15%．（Ⅳ～Ⅴ層起源）.
８．10YR5/6 黄褐色．シルト．壁崩落土層.



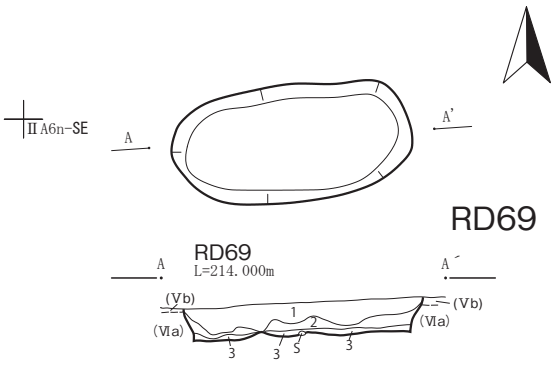
RD64
１．7.5YR4/4 褐色．シルト．粘性無し．締まりやや密．暗褐色シルト塊 10 ～ 15%．炭化物粒 1%．小礫（径 5 ～ 10 ㎜）1 ～ 2%.
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性中．締まりやや密．Va ～Vb 層に似る．VIa 層土小塊 7 ～ 10%.
３．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性無し．締まり中～やや密．暗褐色シルト塊 5%．壁崩落土か.

※１は RB02 の黄色土に似るが、やや赤味を帯びる.



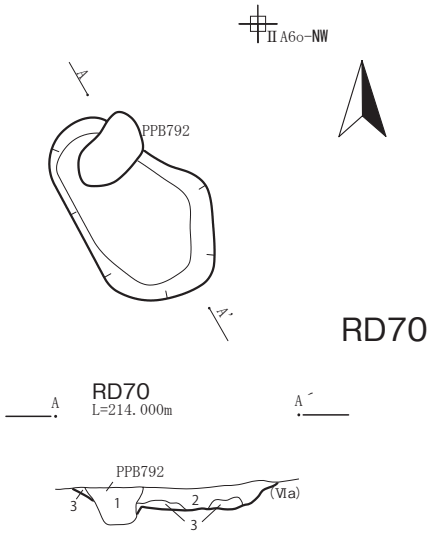
RD65
０．根撹乱.
１．10YR3/3-3/4 暗褐色．シルト(Ⅳベース？)．粘性やや有．締まりやや疎.
２．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎.Ⅵ層土を少量含み黄色味.

※検出面で大形礫（40×20 ㎝）出土．上部が削平されている可能性高い．後期初土器の破片出土.



RD69
１．RD68 の１層と同じ．粘性無．締まりやや疎．褐色軽石（径 5 ㎜）2 ～ 3%.Ⅳ～Ⅴ層主体.
２．RD68 の２層と同じ．粘性中．締まりやや疎.Ⅳ層主体？
３．RD68 の４層と同じ．淡黄色軽石 1 ～ 2%.

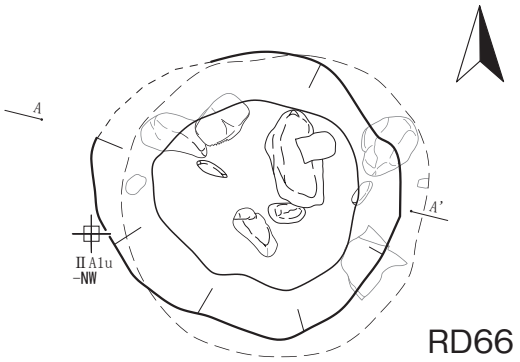
※再葬？

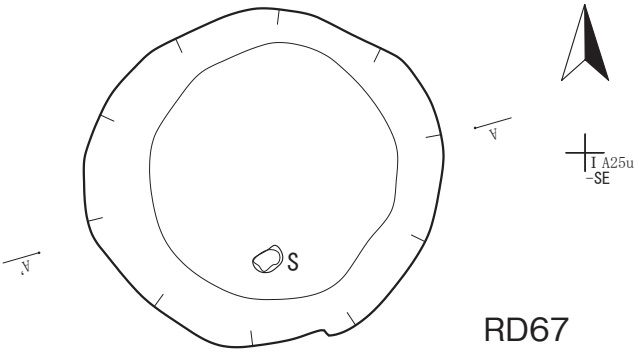


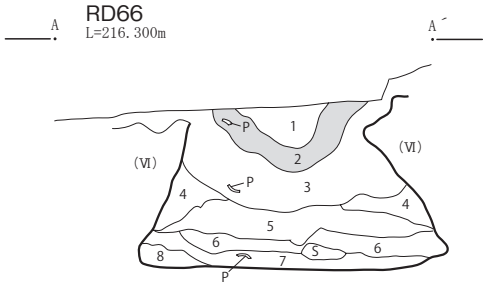
RD70
１．10YR2/2.5　シルト．粘性無．締まり中．柱穴埋土．（Vb 層主体）.
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．褐色シルト塊 10 ～ 15%.Vb 層主体.
３．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性無．締まりやや密.VIa 層塊 5%.Vb 層主体．（地山流入土層）.

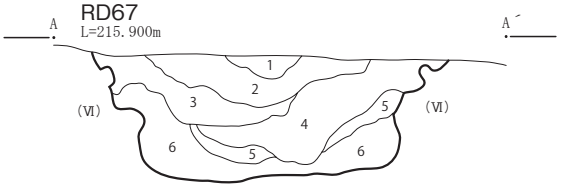
0　1:40　2m

第162図　RD63 ～ 65・69・70







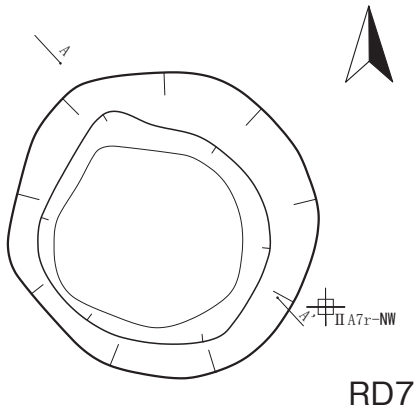


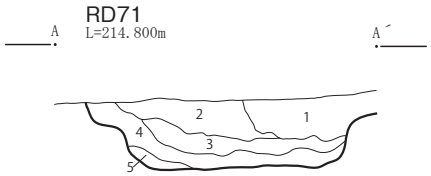
RD66
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まり密．２のにごったものか．
２．10YR4/6 褐色．シルト．粘性有．締まり密.VIに似る．
３．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．１に似た褐色土ブロック少．炭化物粒（径５㎜）微量．
４．10YR3/3 暗褐色．シルト．３にVI層ブロックやや多量．
５．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.VI層土ブロック多量（ほぼブロック層）．
６.10YR2/3黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．炭化物粒(径2～5㎜)微量．本層下面に礫、土器集中．
７．7.5 YR3/2-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．全体に焼土．炭含み．赤味持つ．
８．10YR3/4 暗褐色．シルト.VI層土ブロック層．

※Vb～VI層上面で検出．褐色、黄色、暗褐色土が同心円状に現れたもの．底面は平坦にととのっている．三角フラスコ形に内傾する直線的な立ち上がり．底面は全面焼土を多く含む赤味の強い土層に覆われ、その上面に土器、礫が分布．礫は表面が赤変．中心部に集中して出土（開口部からそのまま下に落下したよう）．東壁部に接して深鉢が潰れている（オーバーハングした壁の陰にあたる）．

RD67
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まり密．やや赤味もつ．
２．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密.VI層ブロックやや多量．全体黄色味．炭化物粒（径２～５㎜）極微量．
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．炭化物粒（径２～５㎜）極微量．
４.10YR3/3-3/4暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎.VI層土ブロック少量．炭化物粒（径２～５㎜）微量．
５．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．
６．10YR3/4 暗褐色．シルト.VI土ブロック多量に含む．５に似るがVI層土ブロック多い．

※検出面VI層上面．１・２・３～４層が同心円状に見えた．
底面平坦で緻密．壁は底が 30 ㎝程まで内傾し、屈曲して外傾に転ずる．
本来はフラスコ形だろう．埋土の下部には繊維の比較的明瞭な炭片が混入する．埋土全体がやや赤味を帯びることから、焼土が混入しているものとみられる．

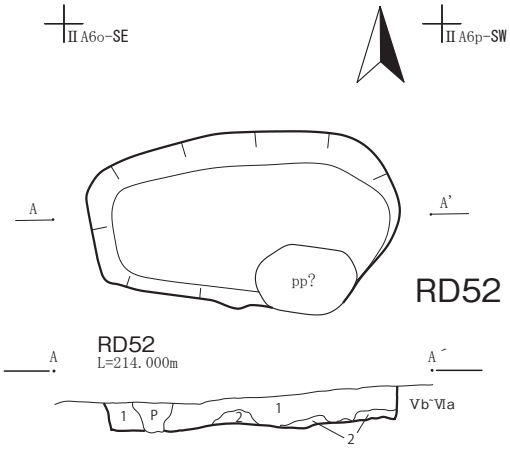




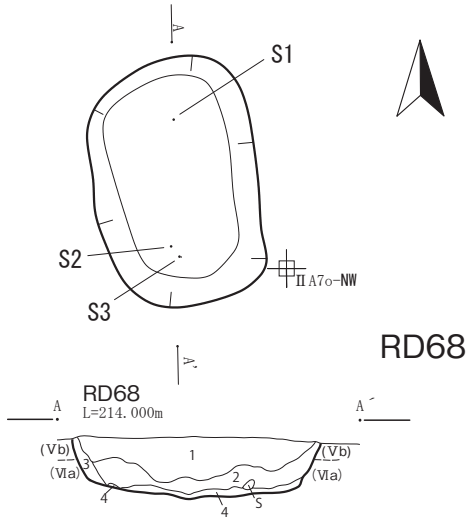
RD71
１．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性無．締まり疎．YP（1～2%）少量含む．炭化物粒 1%．（Vb～VIa 層主体）．別遺構か？
２．10YR4/4 褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．暗褐色シルト塊７～10%．Vb 層主体．YP3～5%．
３．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性無．締まり密．非常に固くしまっている．炭化物粒３～5%．
４．10YR5/8 黄褐色．シルト．粘性無．締まりやや密.VIa 層主体（肩口の崩落土層か？）．凝灰岩小片２～3%．YP1%．黒褐色シルト塊３～5%．
５．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．渋民火山灰主体（TIS 含む）．西側（斜面下方）主体に見られる．

0　1:40　2m

第163図　RD66・67・71

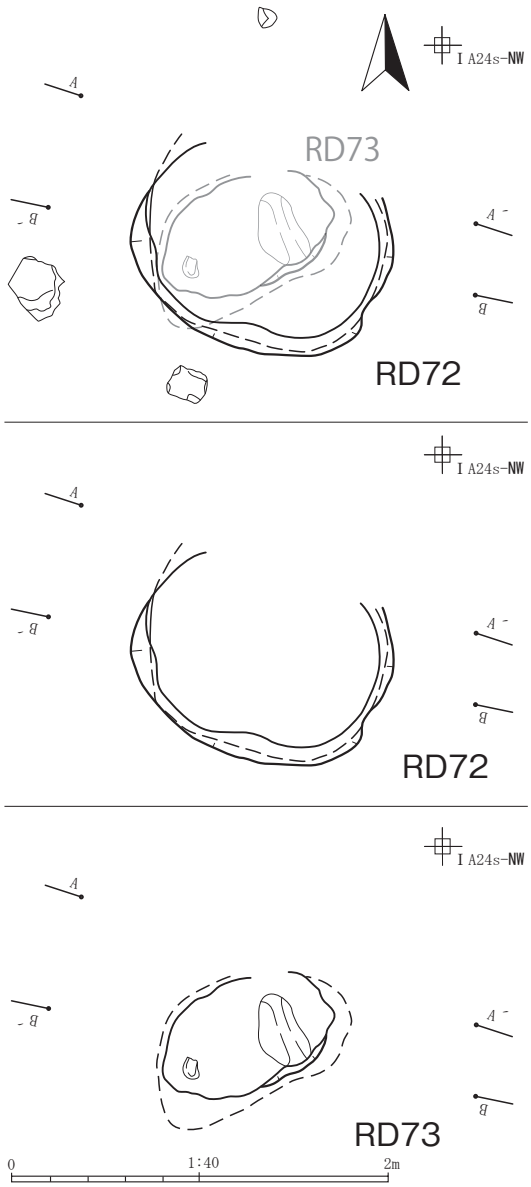


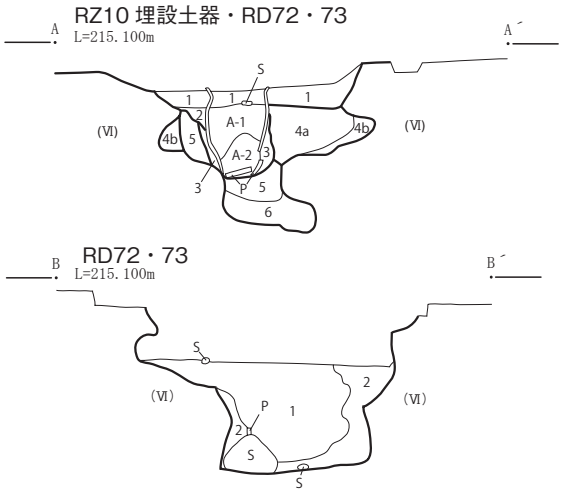
RD52
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．VIa 層塊 5 ～ 7%（YP3 ～ 5%）．（Vb 層主体）．
２．10YR4/6 褐色．シルト．粘性中．締まりやや密．（VIa 層）地山流入土（YP1 ～ 2%）．墓壙というよりは早期の土坑か？



RD68
１．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性無．締まりやや疎．褐色軽石（径 5 ㎜）1%．Ⅳ～Ⅴ層主体か？
２．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．褐色軽石（径 5 ㎜）1%．VI層主体か？（再葬か？）
３．10YR4/4 褐色．シルト．粘性無．締まり密．Vb 層主体．VIa 層小塊 5 ～ 7%．
４．10YR4/6 褐色．シルト．粘性無．締まり中．淡黄色軽石 1%．

※本層上面で凸基（平基）有茎鏃．北側と南側に各 1 はりつくように出土している．墓としての最初の堆積土（再葬か？）．2 基とも配石に関係する墓坑と考えられるが RD68 より浅く、規模も小さい．RD51 で石鏃出土．





RD72・73・RZ10 埋設土器
１．10YR3/2-3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．４より明るい．
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．VI層土ブロック少量．
３．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．VI層土ブロックやや多．
4a．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Va に似る．
4b．4a にVI層土ブロック少量．
５．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．VI層土ブロックやや多．
６．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．VI層土ブロックやや多．

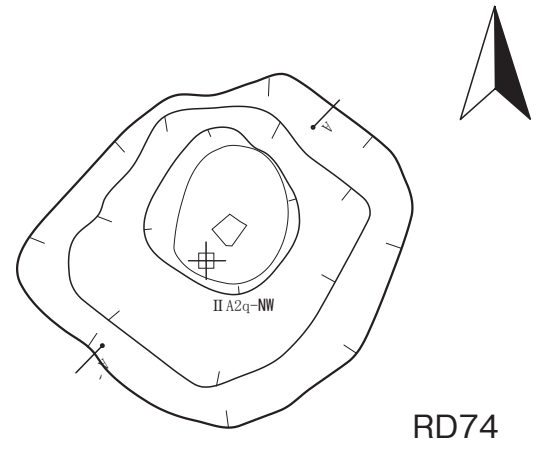
A1．10YR2/3　シルト．4a に似るがやや明るい．粘性やや有．締まりやや密．
A2．10YR2/3　シルト．VI層土小ブロック微量．粘性やや有．締まりやや密．

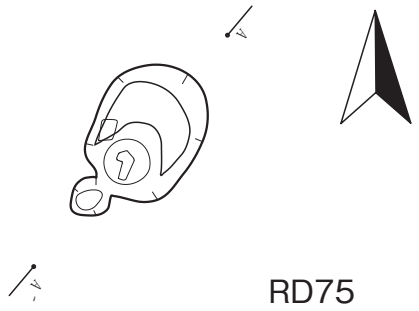
※新旧関係　RZ10＞RD73＞RD72

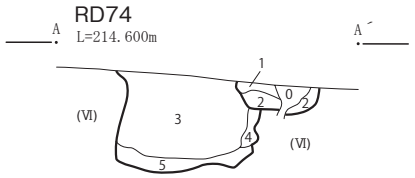
RD72
重複遺構の中で最も古い．壁が大きくオーバーハングするフラスコ状．北西側壁を RD73 に壊されている．

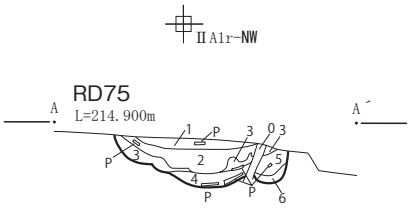
RD73
RD72 の北西壁の一部を壊して重複する（再掘した？）円形土坑．いったん RD72 と底面を共有した後、南東側をさらに一段、長楕円形に掘り下げている．下部土坑の壁はオーバーハングし、底面中央部に径50×30㎝程度の大形礫が置かれる．墓坑であろう．

第164図　RD52・68・72・73







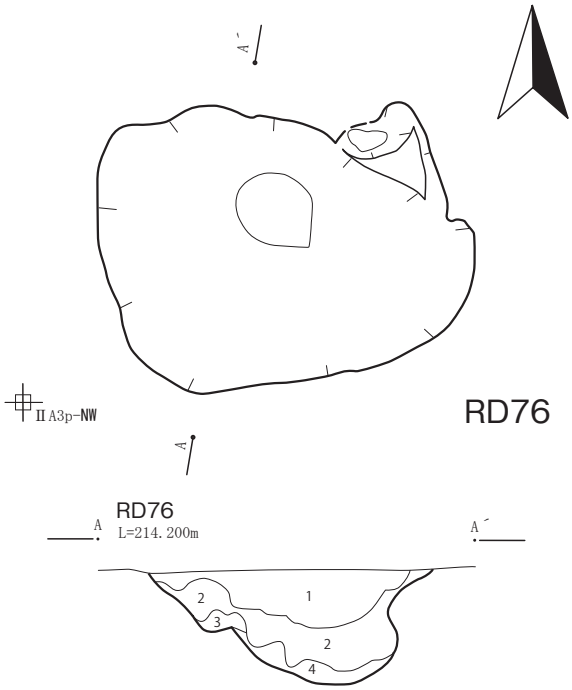


RD74
０．根撹乱.
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．３よりやや明るい.
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密.⌀10mm 炭片ごく微.
10YR3/3　シルトブロック少（というよりⅤa2/2 とⅣ？ 3/3 の混層）.
４.10YR3/3暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.Ⅵブロック多(崩落層？).
５．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密.Ⅵ土ブロックやや多.
４に似る.

※１・２：別 Pit ？３～５：RD74 埋土．ほぼ円筒に近いフラスコ状．底面皿状に整う．壁は直立～わずかに直線内傾．底面直上にⅥブロック入るほかは、黒褐土主体の埋土．３層は上～下部まで一様．旧表土のⅣ・Ⅴa で一気に埋められたか.

RD75
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有．締まりやや密.
２．10YR2/3 褐色．シルト．粘性有．締まり密.
３．10YR3/4 暗褐色．シルト．１層のブロック層．粘性有．締まり密.
４．10YR4/6 褐色．シルト.Ⅵ層土ブロック（再堆積層）.
５．10YR3/4 暗褐色．シルト．１層に良く似るがやや暗い.
６．10YR4/6 褐色．シルト.Ⅵ層土ブロック層.

※埋土上部から土器片多．底面にも土器片あることから、土とともに投げ入れられたものと見られる．レンズ状堆積に見られるが、層界に凹凸あり．人為的と見られる．南部に重複の小ピットとの新旧は不明.

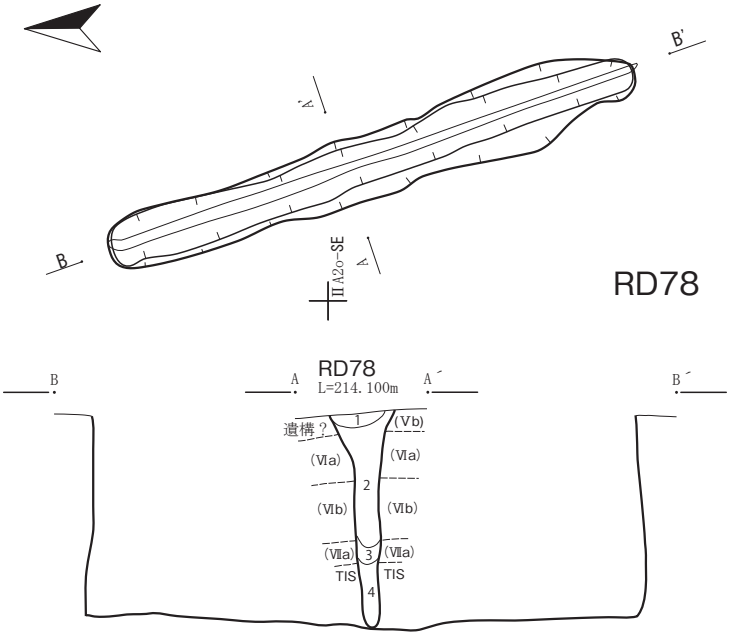


RD76
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性有．締まりやや密．YP 細片ごく微.
２.10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密.Ⅵブロック微.
YP 細片ごく微、人為か.
３．10YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有．締まり密.
４．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性有．締まりやや密.Ⅵの再堆積.

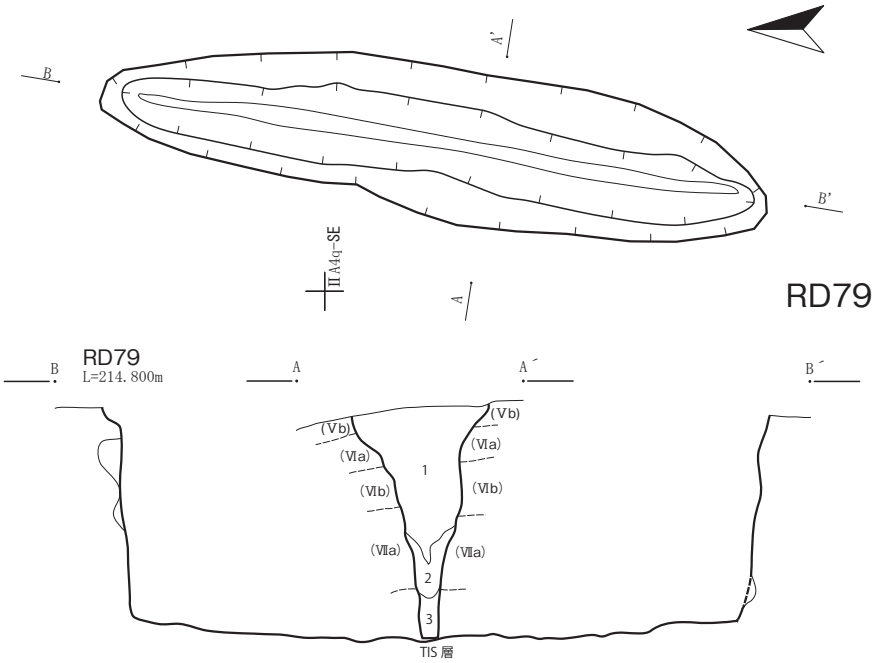
※検出状況はひょうたん形に近い不整形．本来は円形か．２層にはⅥ層土ブロック（⌀5 ～ 10cm）が目立ち、人為埋土の可能性大．床面東寄りに⌀40cm 程の一段深い落ち込みも？柱痕跡のよう・・・．埋土に後記土偶片あるかも．要確認．形状は下半部が円形土坑．上半部が上端崩落のように、漏斗状に広がっている．東側を上にしたひょうたん形で、東壁がやや急なスロープ状にかけあがっている．焼成部分は主に底面から東壁にかけて点在するが、完掘のため濁った土をすべて取り除くと痕跡残らない．人為埋積と見られることから廃絶時に壊され埋められたか？RA66 の南東部に重複する．埋土は RA66 のそれを切っている．連鎖状柱穴の埋土（真黒い土、Ⅴa 層のベース）に良く似ている．完掘時、壁面に部分的、弱変焼土の生成が認められる．２・３層には焼土ブロック微量含む.

0　1:40　2m

第165図　RD74 ～ 76



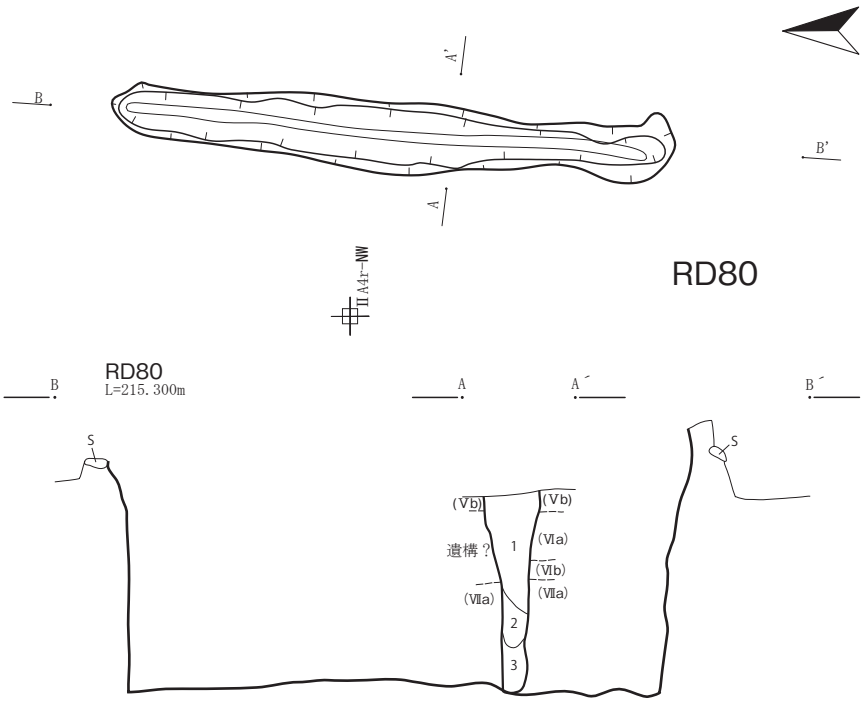
RD78
1．10YR1.7/1 黒色．シルト．粘性無．締まり疎．生出スコリア 15 ～ 20%（Ⅲ層起源）.
2．10YR2/1 黒色．シルト．粘性無．締まりやや疎．褐色シルト塊 5 ～ 7%.Ⅳ層主体.
3．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性中．締まりやや密．黒褐色シルト小塊 10 ～ 15%．Ⅵ層壁崩落土層.
4．10YR2/2-2/3 黒褐 - 極暗赤褐色．シルト．粘性中．締まり疎．褐色小粒 10%.Ⅳ層主体の初期埋土.



RD79
1．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性無．締まり疎．褐色シルト塊 5 ～ 7%．生出スコリア 5 ～ 7%.Ⅲ～Ⅳ層主体.
2．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性中～やや有．締まりやや疎.Ⅵ層を主体とする壁崩落土層.
3．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無．締まり疎．黒褐色シルト塊 5%．褐色シルト塊 20%.Ⅳ層を主体とする初期堆積土.

0　1:40　2m

第166図　RD78・79



RD80
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性無．締まりやや疎．褐色シルト小塊 3 ～ 5%．生出スコリア 7 ～ 10%.
２．10YR5/6 黄褐色．シルト．粘性やや無．締まり疎. VI層を主体とする壁崩落土層.
３．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性無．締まり疎. VI層粒 10%. IV層を主体とする初期埋土層.

0　1:40　2m

第167図　RD80

（４）　炉跡・焼土遺構（第３表、第168 ～ 183図、写真図版126 ～ 137）

検出された焼土遺構の多くは、本来、住居跡等に付属するものと考えられるが、ここでは帰属先不明の焼土遺構、計47基をまとめて報告する。第３表にはこれらの位置・規模・出土遺物等をまとめて示した。

これらのうち、縄文時代後期初頭の可能性が高いと考えられるものを抽出してみたい。時期推定の根拠として、①該期土器を燃焼面またはそれと同面の隣接地点に伴うもの、②Ｖａ層上面において検出されたもの、③該期住居に付属する炉として石囲部を持つ（可能性が高い）ものを対象とする。

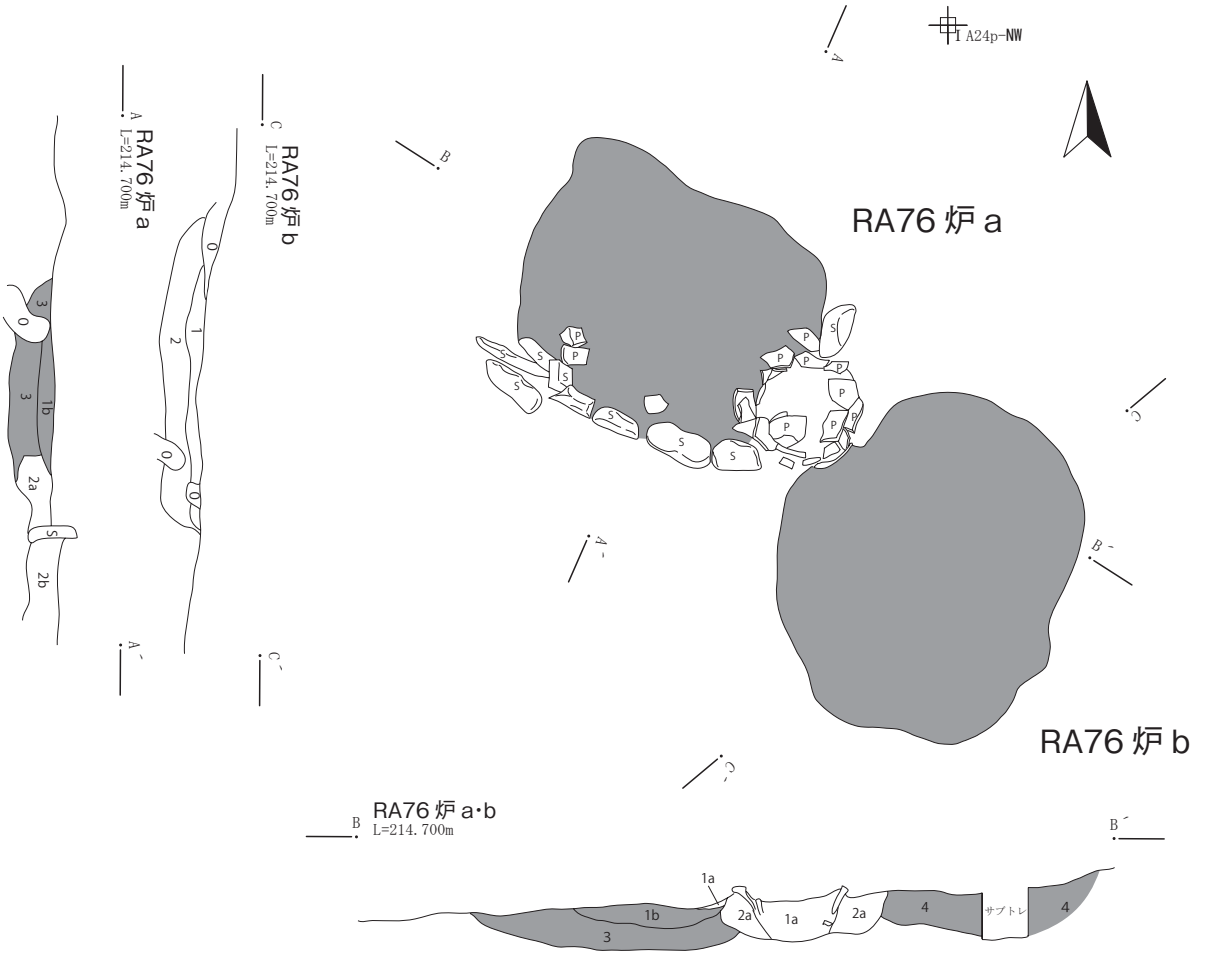
この結果、47基中33基がこの条件に該当した（RF01 ～ 04・06・10 ～ 12・14 ～ 25・28・30 ～ 34・37・38・40 ～ 43・45）。これらは、北半部ではＩＡ25ｑ付近・ＩＡ25ｎ付近・ⅡＡ２ｍ付近・ⅡＡ２ｕ付近、ⅡＡ３ｒ等に、南半部ではⅡＡ６ｌ・ⅡＡ９ｊ・ⅡＡ10m付近・ⅡＡ９ｏ付近に分布している。このように縄文時代後期初頭を中心とした時期に位置づけられる炉跡は、調査区中央部（ⅡＡ２ｐグリッド付近）を取り囲むように概ね環状に分布する該期の他遺構と、同様の分布傾向を示すことが看取される。

なお、炉跡に伴う土器は、第228図・写真図版175に掲載した。

※第168図上段に掲載の「RA76炉ａ・炉ｂ」は、平成21年度調査で検出され、当初帰属先不明の炉跡として取り扱っていたが、平成23年度調査の結果、RA76に伴うことが判明したものである。編集の都合により、他の帰属不明炉跡とともに図示することをご容赦いただきたい。

第３表　RF炉跡（焼土）一覧

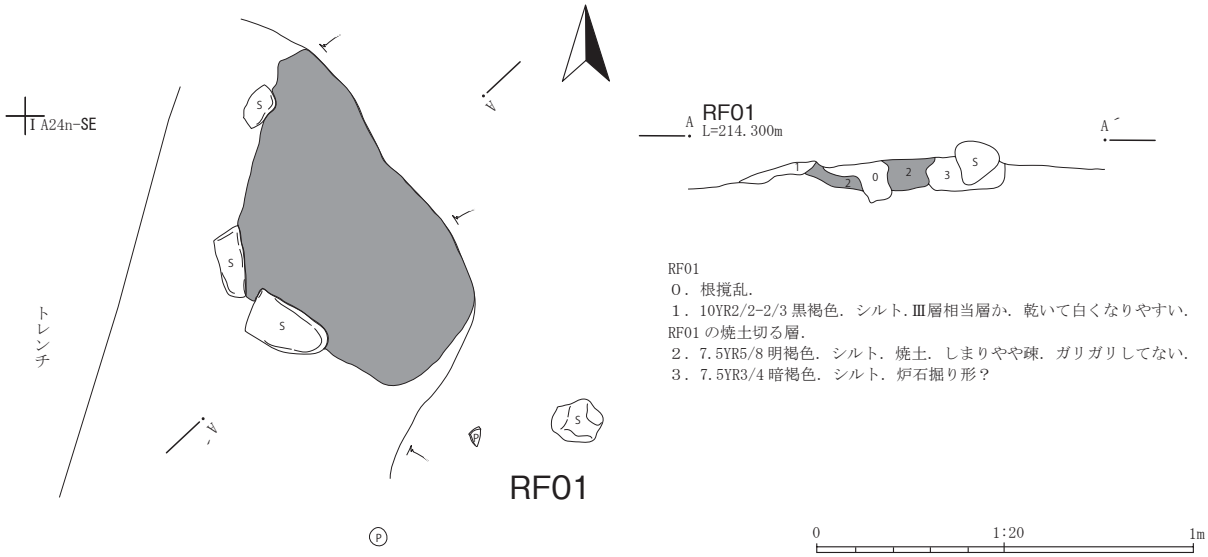
遺構名	旧名	位置	長径（cm）	短径（cm）	焼土厚（cm）	出土遺物	後期初頭	石囲	所見
RA76炉a	SN01	ⅠA24o	86	67	6				
RA76炉b	SN02	ⅠA24p	93	83	8				
RF01	SN03	ⅠA24n	84	57	8		△	○	
RF02	SN04	ⅠA24l	65	56	12		△	○	
RF03	SN05	ⅠA25n	82	76	10		△	○	
RF04	SN06	ⅡA2m	62	59	7	土器（459）・敲磨器類（2661）	○	○	
RF05	SN11	ⅡA3i	63	55	7				
RF06	SN13	ⅡA8m	60	49	8		○	○	RA14炉に類似（大形礫）
RF07	SN14	ⅡA10k	65	55	7				
RF08	SN15	ⅡA10i	118	45	10				
RF09	SN16	ⅠA24l	60	39	4				
RF10	SN17	ⅠA25o	74	61	11		△	○	
RF11	SN22	ⅡA6l	82	75	12		○	○	
RF12	SN23	ⅡA9j	97	63	12			△	
RF13	SN24	ⅡA9h	62	53	9				
RF14	SN25	ⅡA2n	76	64	11	土器（461）・石鏃（1583）	○	○	
RF15	SN26	ⅡA2n	56	55	8			○	
RF16	SN27	ⅡA2v	75	72	8		△	△	
RF17	SN28	ⅡA2u	117	100	5	土器（462）・石皿（2367）	○	○	
RF18	SN29	ⅡA3u	89	68	15			○	
RF19	SN33	ⅡA10l	82	72	12	土器（463）	○		
RF20	SN34	ⅡA10m	75	38	14	土器（464）	○	△	
RF21	SN35	ⅡA11m	51	50	8	土器（465）	○	○	
RF22	SN36	ⅡA10m	64	59	7	土器（466）	△		
RF23	SN37	ⅡA9o	92	76	14		△	○	
RF24	SN38	ⅡA9o	60	50	9		△	△	
RF25	SN39	ⅡA10m	96	65	24	土器（467 ～ 469）	△		
RF26	SN41	ⅡA10l	53	48	11	石鏃（1584）・石匙（2010）			
RF27	SN42	ⅡA10o	73	67	10	土器（470）・篦状石器（2120）			
RF28	SN43	ⅡA9l	57	52	6		△	△	
RF29	SN44	ⅡA9m	55	20	12	石鏃（1907）・敲磨器類（2560）			
RF30	SN45	ⅡA9o	78	59	14		△	○	
RF31	SN46	ⅡA8p	70	65	13		△	○	
RF32	SN55	ⅡA5r	54	47	7		△	△	
RF33	SN59	ⅠA25q	65	46	6		△	△	
RF34	SN60	ⅠA25q	50	40	5		△	○	
RF35	SN62	ⅡA2p	63	44	不明				
RF36	SN63	ⅡA3p	71	57	7				
RF37	SN64	ⅡA3r	42	40	11		△	○	
RF38	SN66	ⅡA4o	55	52	7		△	△	
RF39	SN67	ⅡA1p	75	57	10				
RF40	SN68	ⅡA6p	50	46	6		△	△	
RF41	SN69	ⅡA7n	31	30	5		△		
RF42	SN70	ⅡA3m	72	50	7		△	△	
RF43	SN71	ⅡA3n	29	15	10		△		
RF44	SN72	ⅡA7n	40	32	9				
RF45	SN73	ⅡA4o	43	34	7		△	△	
RF46	SN74	ⅡA5p	94	45	7	石鏃（1585）			
RF47	SN75	ⅡA5q	46	31	6				



RA76 炉 a・b（A-A´・B-B´）
０．根撹乱.
1a．7.5YR4/4 褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．焼土粒（φ5㎜）極微量.
1b．7.5YR5/6 明褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまりやや密.
2a．7.5YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．焼土粒（φ5㎜）極微量.
2b．10YR3/4 暗褐色．シルト.
３．5YR5/8-4/8 明赤褐 - 赤褐色．シルト．強変焼土．上面が燃焼面か.
４．RA07 炉 b 焼土.

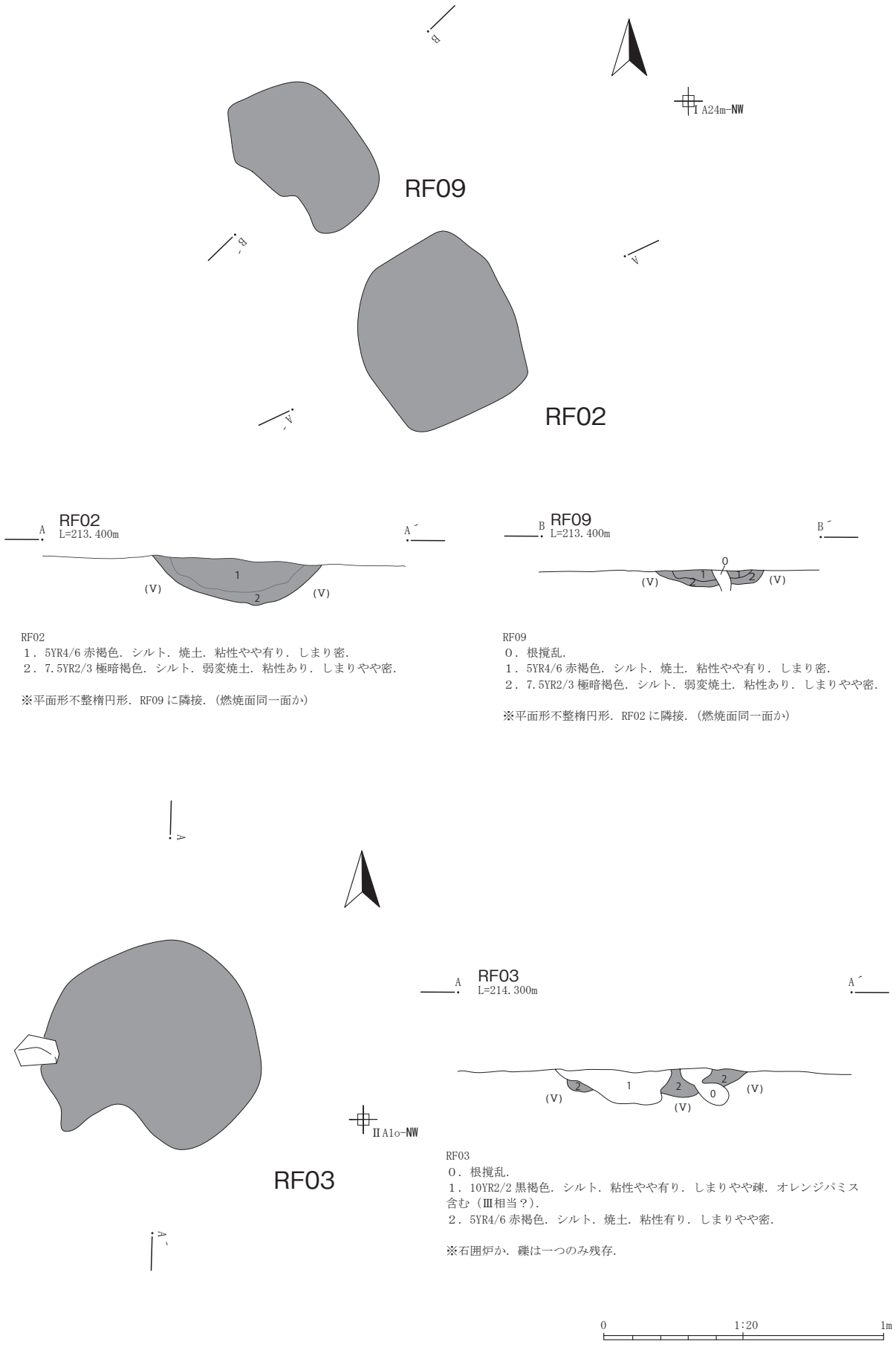
※石囲炉．東端に土器埋設．礫の残存は南辺のみ．土器埋設部掘形が重複する RA07 炉 a の焼土を切っている.

RA76 炉 b（C-C´）
０．根撹乱.
１．5YR5/8 明赤褐色．シルト．ガリガリの焼土ヒビがあってブロック状．上面が燃焼面か？
２．5YR5/8-4/8 明赤褐 - 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまり密.



RF01
０．根撹乱.
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．Ⅲ層相当層か．乾いて白くなりやすい．RF01 の焼土切る層.
２．7.5YR5/8 明褐色．シルト．焼土．しまりやや疎．ガリガリしてない.
３．7.5YR3/4 暗褐色．シルト．炉石掘り形？

第168図　RA76炉・RF01



RF02
１．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまり密．
２．7.5YR2/3 極暗褐色．シルト．弱変焼土．粘性あり．しまりやや密．

※平面形不整楕円形．RF09 に隣接．（燃焼面同一面か）

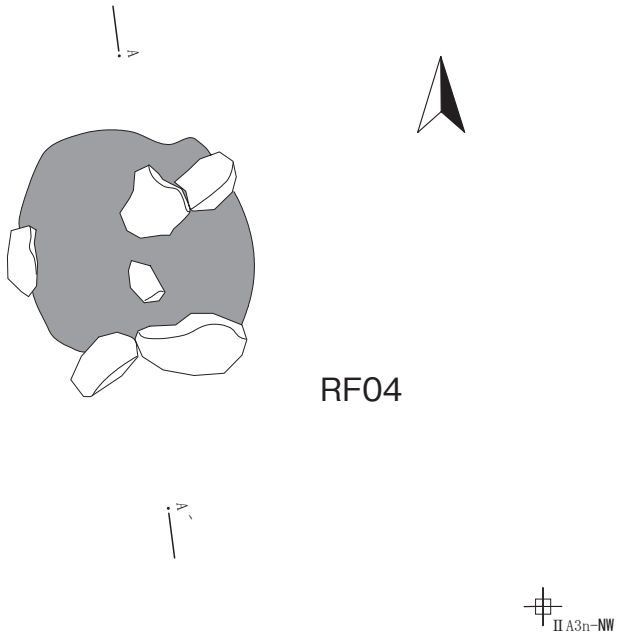
RF09
０．根撹乱．
１．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまり密．
２．7.5YR2/3 極暗褐色．シルト．弱変焼土．粘性あり．しまりやや密．

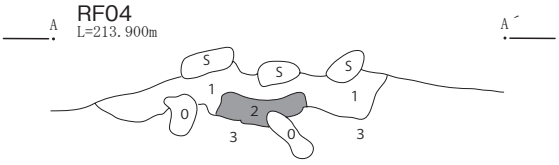
※平面形不整楕円形．RF02 に隣接．（燃焼面同一面か）

RF03
０．根撹乱．
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．オレンジパミス含む（Ⅲ相当？）．
２．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．粘性有り．しまりやや密．

※石囲炉か．礫は一つのみ残存．

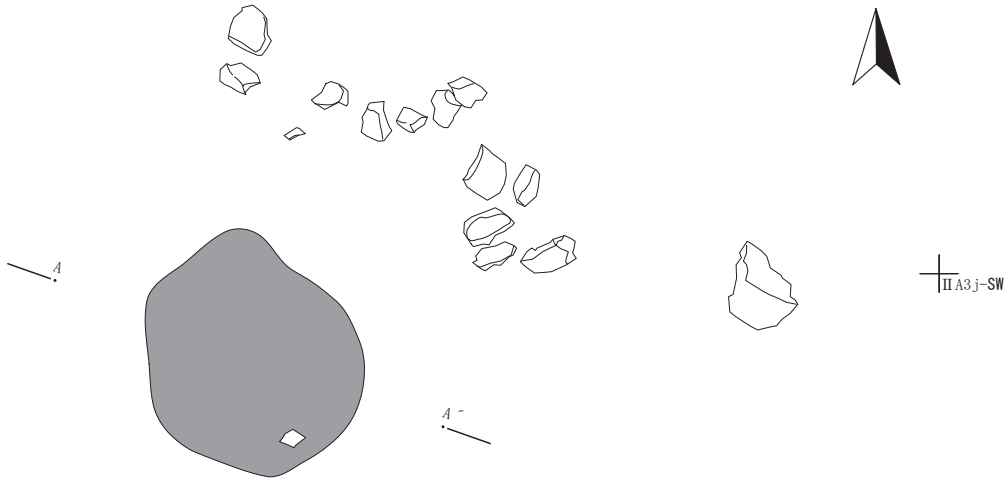
第169図　RF02・03・09

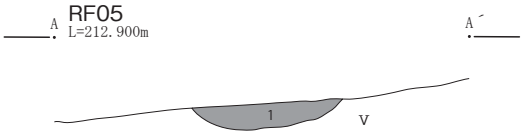




RF04
０．根撹乱．
１．7.5YR3/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．焼土粒（φ2-5 ㎜）微量．
２．7.5YR4/4 褐色．粘土質シルト．焼土．粘性有り．しまりやや密．
３．10YR2/1 黒色．シルト．Ⅴ層土．

※石囲炉．石は焼土付近にあるが動いている．帰属住居プランは不明．



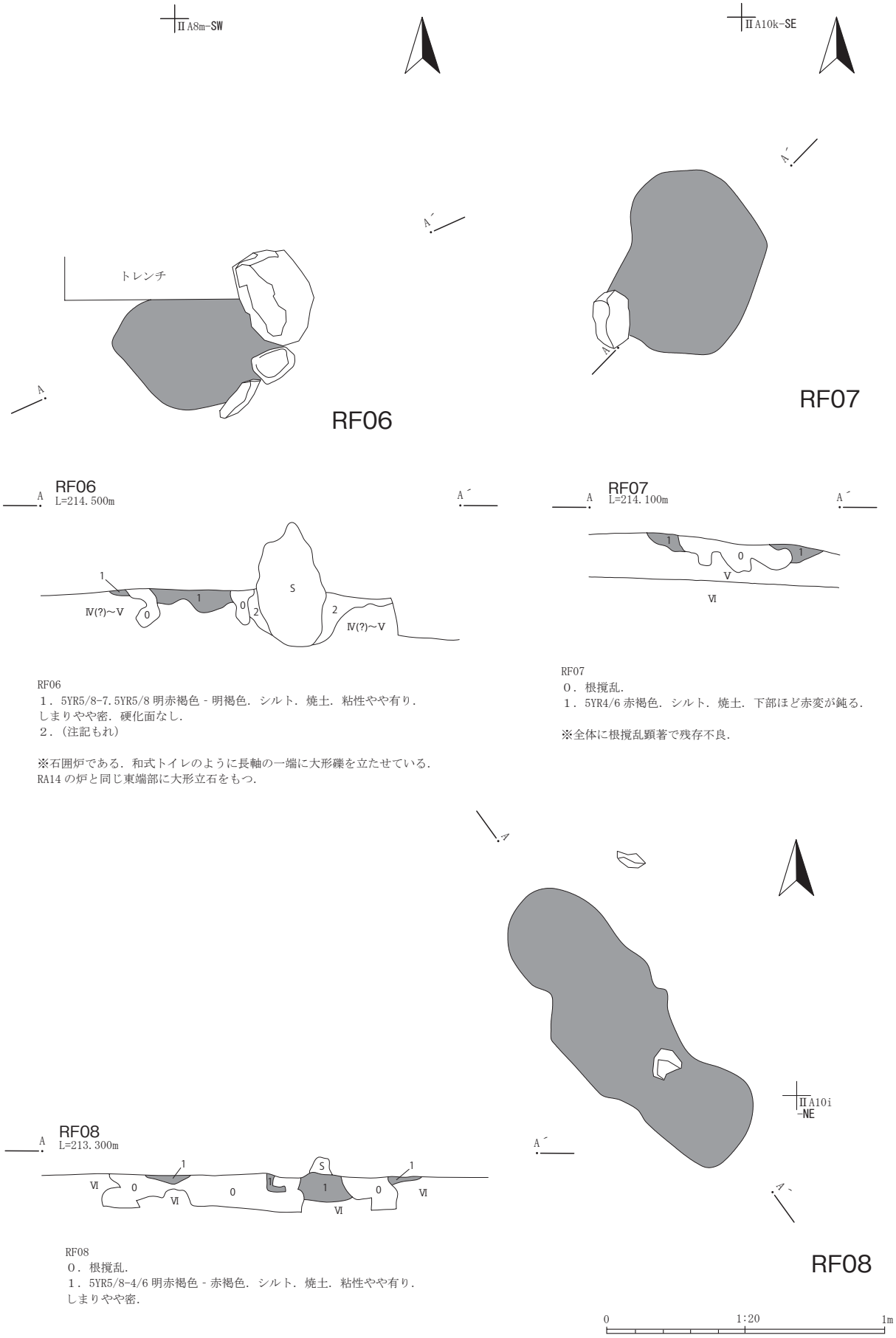


RF05
１．7.5YR4/6 褐色．シルト．焼土．根撹乱目立つ．粘性やや有り．しまりやや密．

※Ⅴ層面で検出．本来は住居に伴うだろう．北隅に列状に並ぶ河原石（φ1～15cm）関係するか．

0　1:20　1m

第170図　RF04・05



RF06
１．5YR5/8-7.5YR5/8 明赤褐色 - 明褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．
しまりやや密．硬化面なし．
２．（注記もれ）

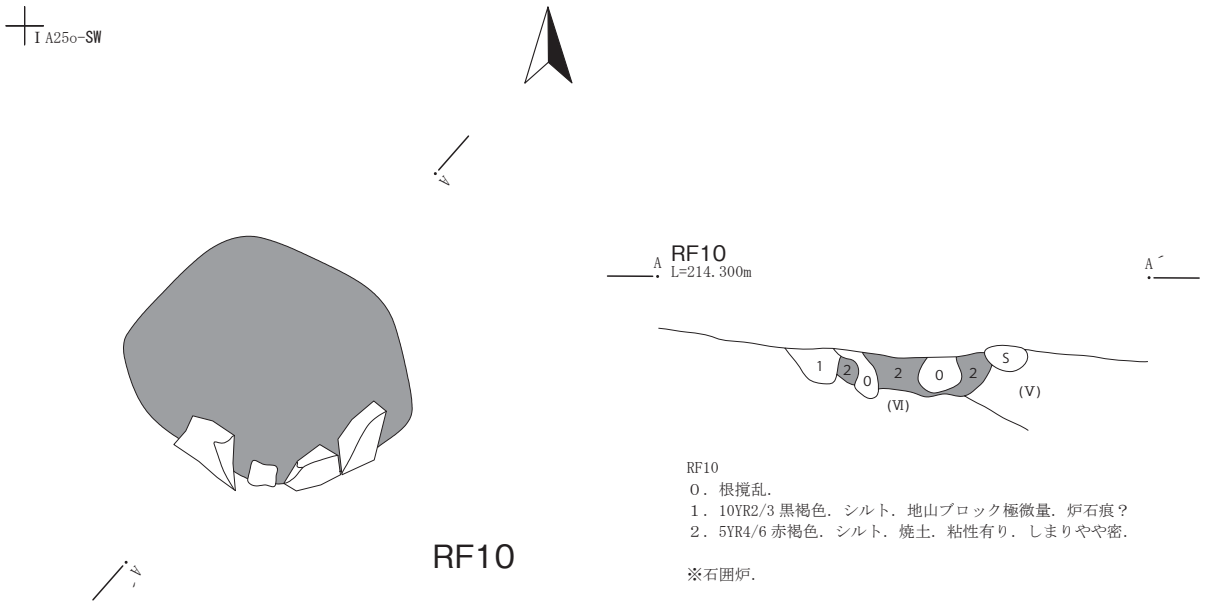
※石囲炉である．和式トイレのように長軸の一端に大形礫を立たせている．
RA14 の炉と同じ東端部に大形立石をもつ．

RF07
０．根撹乱．
１．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．下部ほど赤変が鈍る．

※全体に根撹乱顕著で残存不良．

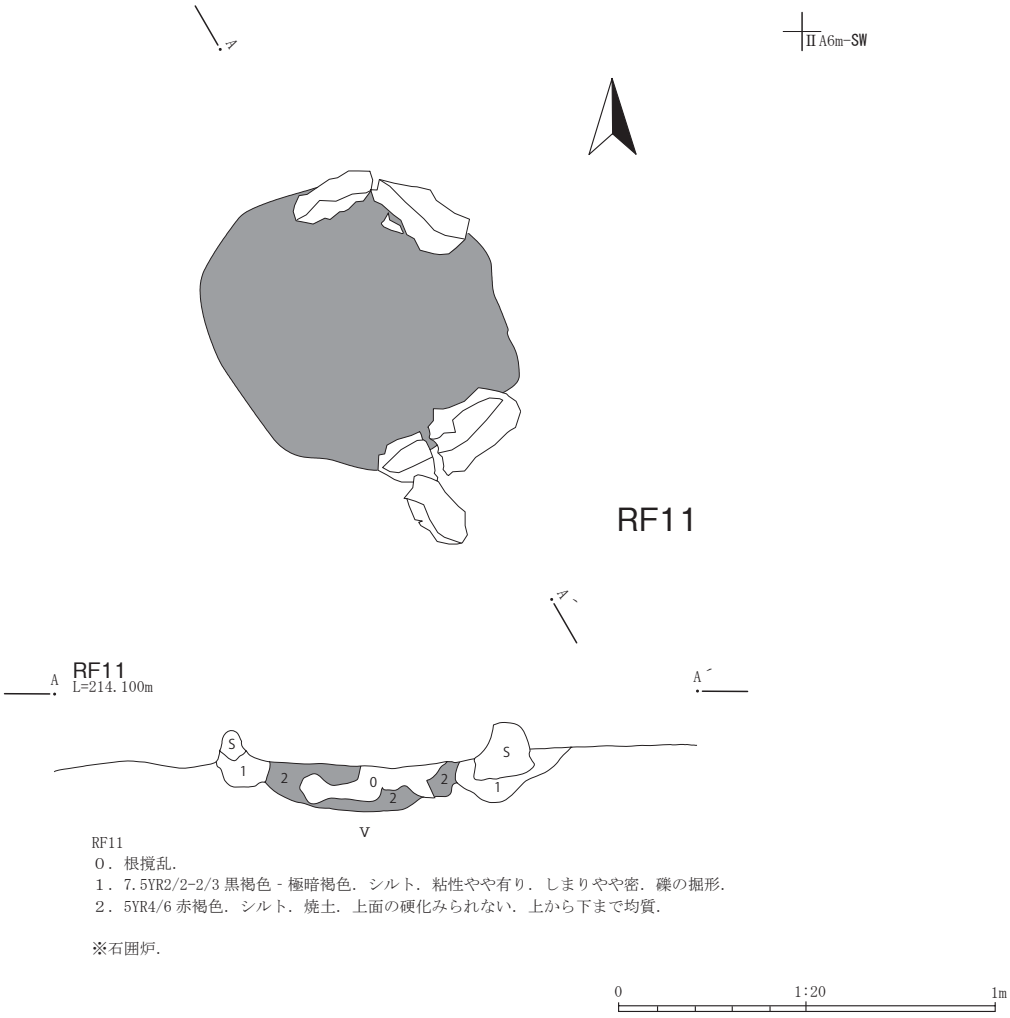
RF08
０．根撹乱．
１．5YR5/8-4/6 明赤褐色 - 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．
しまりやや密．

第171図　RF06 ～ 08



RF10
０．根撹乱.
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．地山ブロック極微量．炉石痕？
２．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．粘性有り．しまりやや密.

※石囲炉.

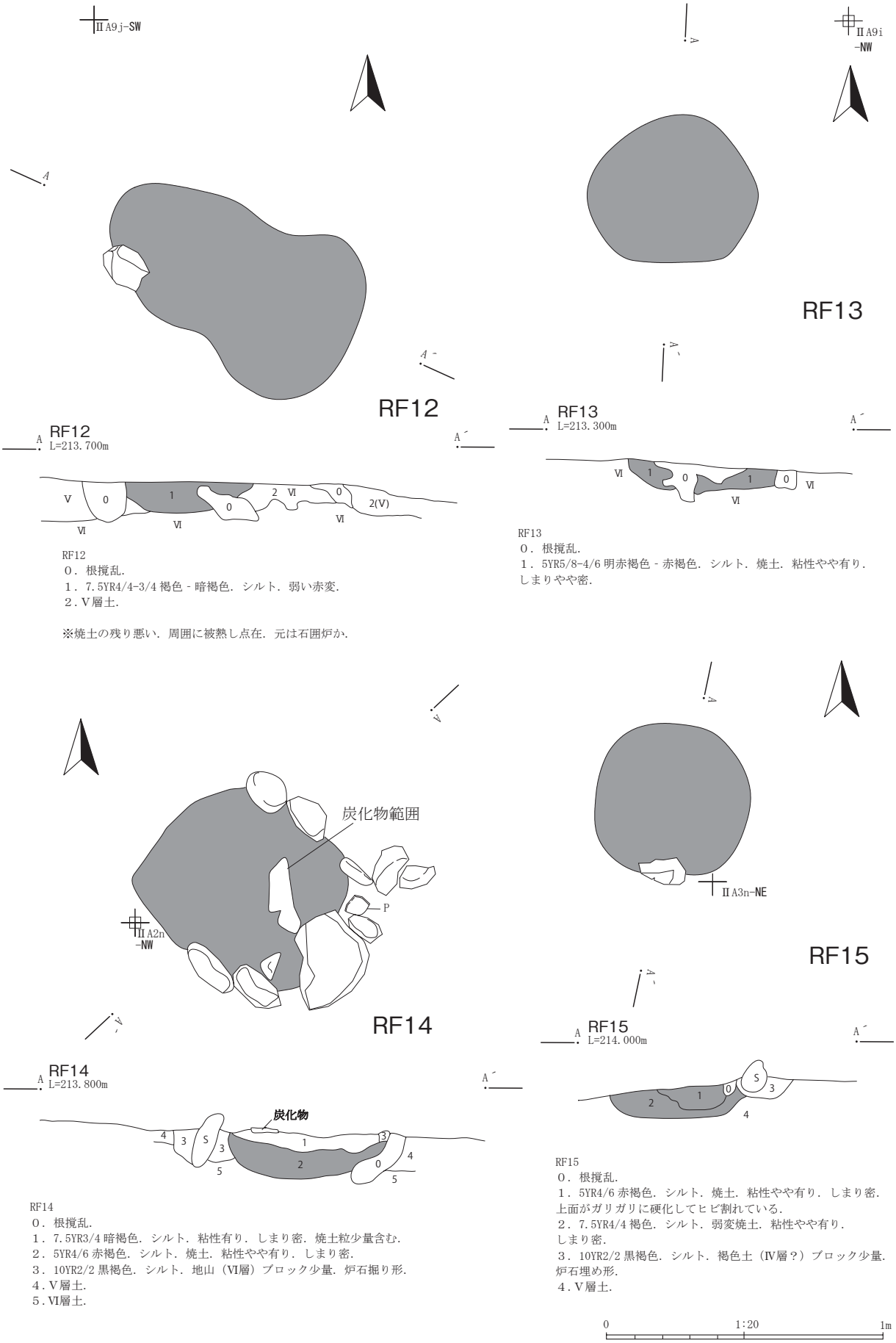


RF11
０．根撹乱.
１．7.5YR2/2-2/3 黒褐色 - 極暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．礫の掘形.
２．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．上面の硬化みられない．上から下まで均質.

※石囲炉.

0　1:20　1m

第172図　RF10・11



RF12
０．根撹乱.
１．7.5YR4/4-3/4 褐色 - 暗褐色．シルト．弱い赤変.
２．Ⅴ層土.

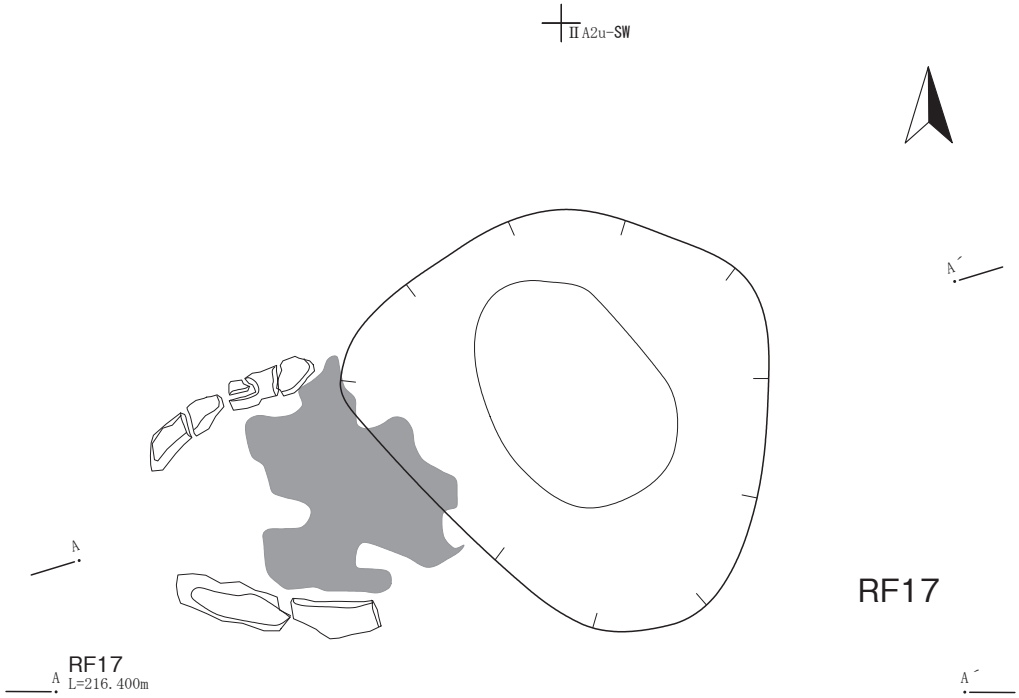
※焼土の残り悪い．周囲に被熱し点在．元は石囲炉か.

RF13
０．根撹乱.
１．5YR5/8-4/6 明赤褐色 - 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまりやや密.

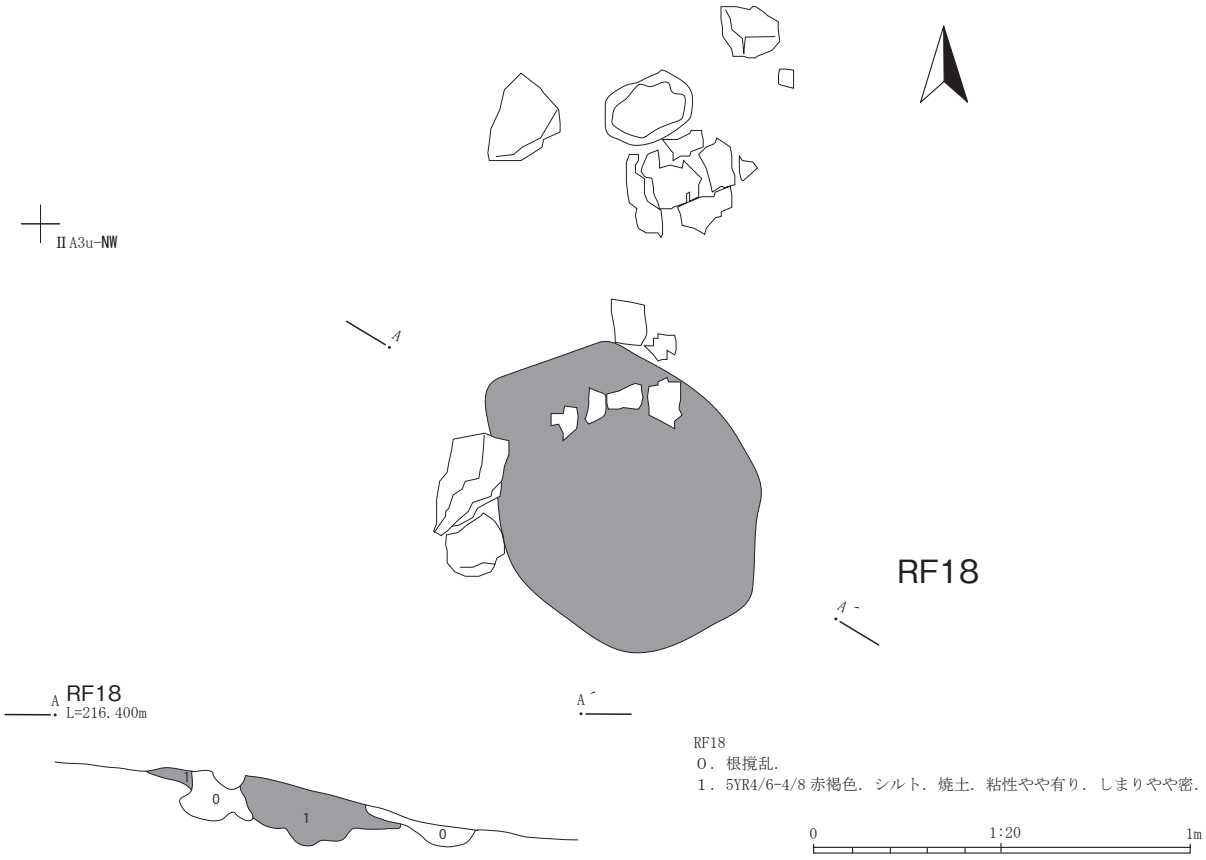
RF14
０．根撹乱.
１．7.5YR3/4 暗褐色．シルト．粘性有り．しまり密．焼土粒少量含む.
２．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまり密.
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．地山（Ⅵ層）ブロック少量．炉石掘り形.
４．Ⅴ層土.
５．Ⅵ層土.

RF15
０．根撹乱.
１．5YR4/6 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまり密．上面がガリガリに硬化してヒビ割れている.
２．7.5YR4/4 褐色．シルト．弱変焼土．粘性やや有り．しまり密.
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．褐色土（Ⅳ層？）ブロック少量．炉石埋め形.
４．Ⅴ層土.

第173図　RF12 ～ 15

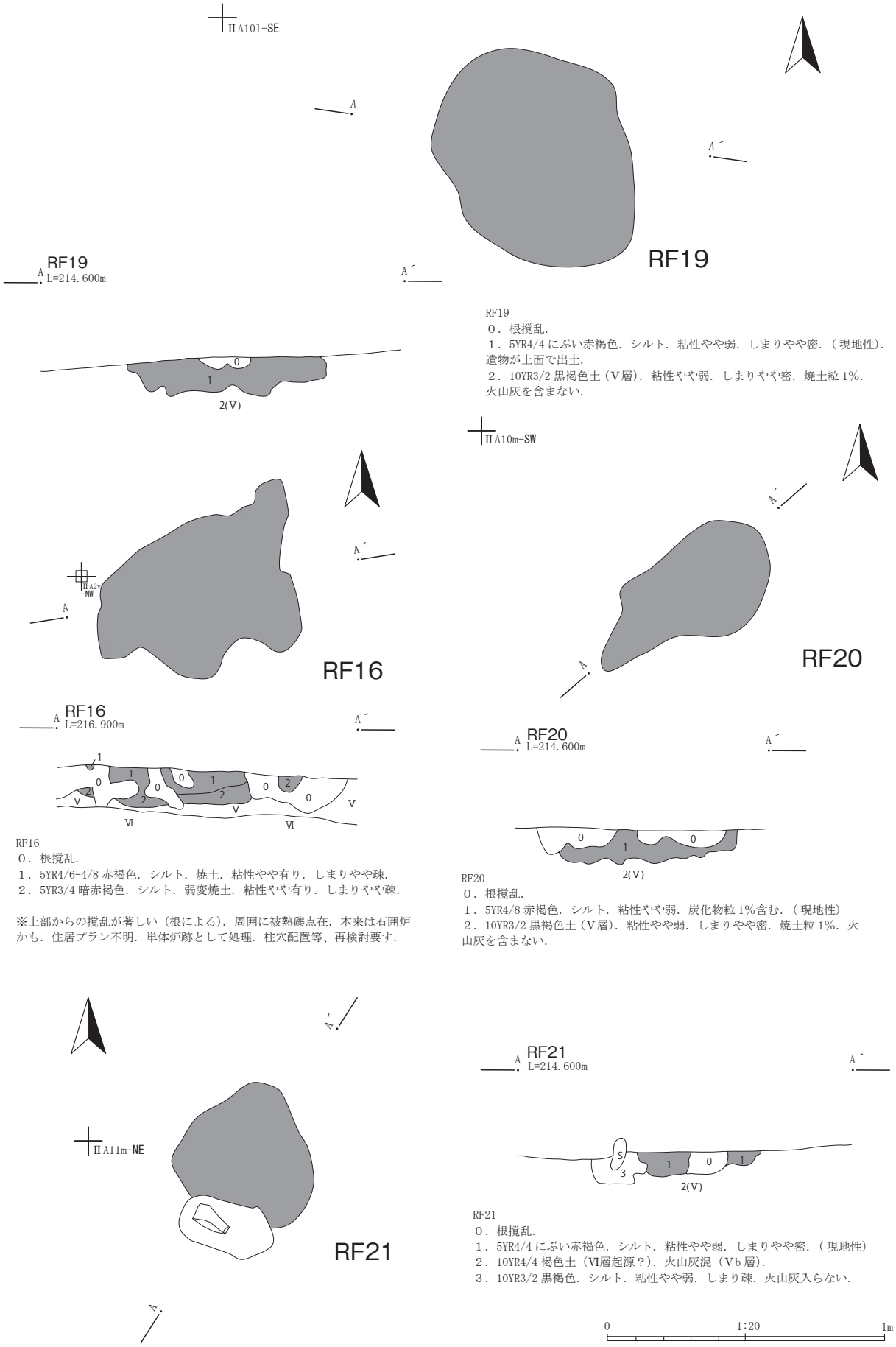


RF17
1．10YR3/1 黒褐色．しまり有り．農道の土と同じ．
2．10YR3/2 黒褐色．
3．7.5YR4/3-6/4 褐色 - にぶい橙色．焼土卓越．
4．10YR3/2 黒褐色．炭化物微量．
5．10YR2/1 黒色．全体に炭化物散在．大きめな材片も含む．軟らかい．
6．10YR5/3 にぶい黄褐色．地山直上の汚れ火山灰．



RF18
0．根撹乱．
1．5YR4/6-4/8 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまりやや密．

第174図　RF17・18



RF19
０．根撹乱．
１．5YR4/4 にぶい赤褐色．シルト．粘性やや弱．しまりやや密．（現地性）．遺物が上面で出土．
２．10YR3/2 黒褐色土（Ⅴ層）．粘性やや弱．しまりやや密．焼土粒 1%．火山灰を含まない．

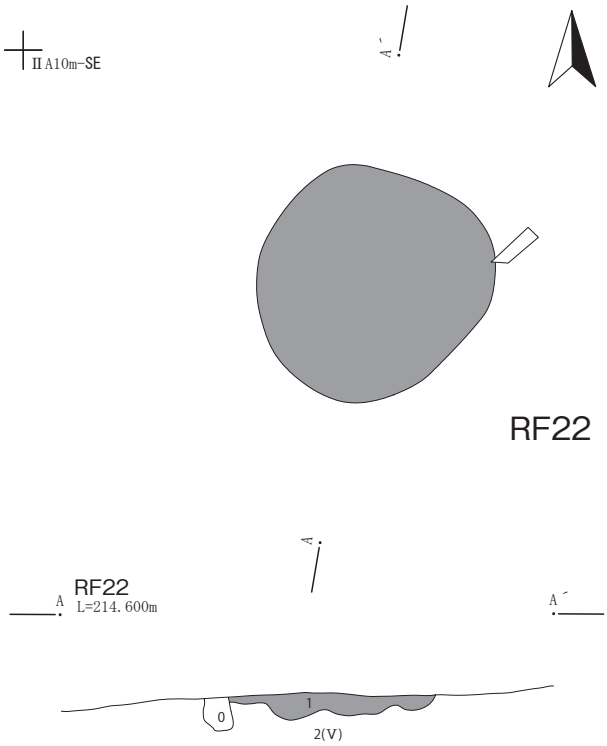
RF16
０．根撹乱．
１．5YR4/6-4/8 赤褐色．シルト．焼土．粘性やや有り．しまりやや疎．
２．5YR3/4 暗赤褐色．シルト．弱変焼土．粘性やや有り．しまりやや疎．

※上部からの撹乱が著しい（根による）．周囲に被熱礫点在．本来は石囲炉かも．住居プラン不明．単体炉跡として処理．柱穴配置等、再検討要す．

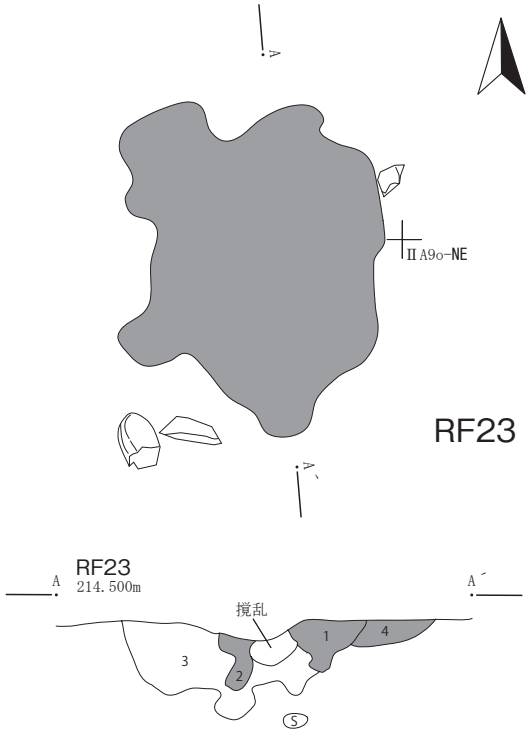
RF20
０．根撹乱．
１．5YR4/8 赤褐色．シルト．粘性やや弱．炭化物粒 1%含む．（現地性）
２．10YR3/2 黒褐色土（Ⅴ層）．粘性やや弱．しまりやや密．焼土粒 1%．火山灰を含まない．

RF21
０．根撹乱．
１．5YR4/4 にぶい赤褐色．シルト．粘性やや弱．しまりやや密．（現地性）
２．10YR4/4 褐色土（Ⅵ層起源？）．火山灰混（Ⅴb 層）．
３．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性やや弱．しまり疎．火山灰入らない．

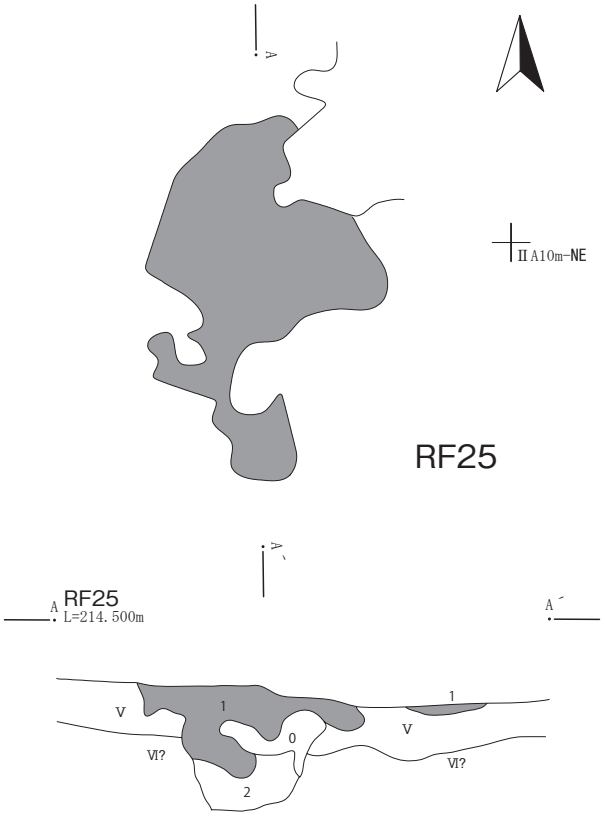
第175図　RF16・19～21



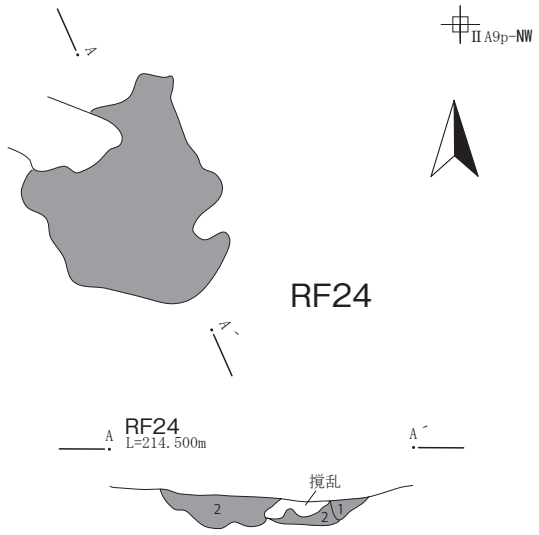
RF22
０．根撹乱.
１．5YR3/6 暗赤褐色．シルト．粘性やや弱．しまりやや密．（現地性）
２．10YR3/2 黒褐色土．（Ⅴ層）粘性やや弱．しまりやや密．焼土粒 1%．
火山灰を含まない．



RF23
１．5YR6/6 橙色．シルト．焼土．しまりやや有り．上面若干硬化.
２．2.5YR5/6 明赤褐色．シルト．焼土．１層よりもしまり強く，混和物のほとんどない焼土層.
３．2.5YR5/6 明赤褐色．しまりやや疎．焼土と 2.5YR4/3 にぶい赤褐色土の混合，焼土はブロック状で２色が斑状に混じる．下位ほど焼土が多い.
４.7.5YR4/3 褐色．シルト．しまり有り．粘性有り.Ⅳ層の被熱による変色層.



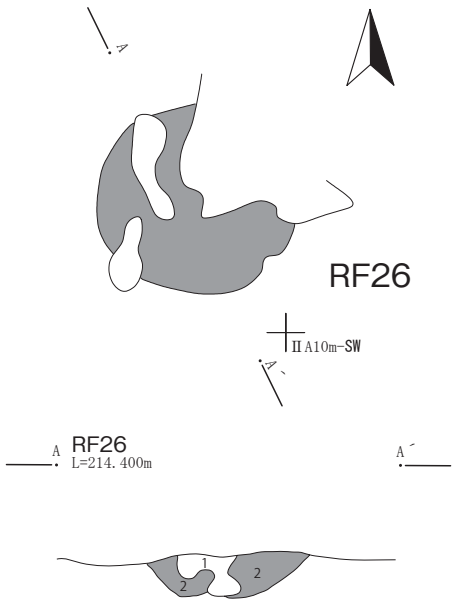
RF25
１．5YR7/6 橙色．シルト．焼土．しまりやや疎．φ1-2 ㎜焼土ブロック 3%．
上面ほとんど硬化なし.
２．7.5YR6/4 にぶい橙色．シルト．しまりやや疎.Ⅵ層上面で検出される
柱穴？焼土ブロック極微量（3%以下）.



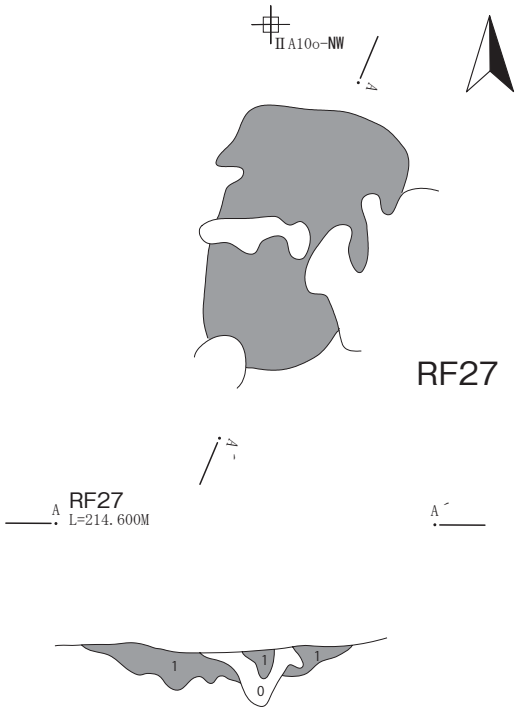
RF24
１．7.5YR4/3 褐色．シルト．しまりやや疎.Ⅳ層の変色層.
２．2.5YR6/8 橙色．シルト．焼土．しまりやや疎．上面やや硬化.
下位ほど色調が褐色化する.

0　1:20　1m

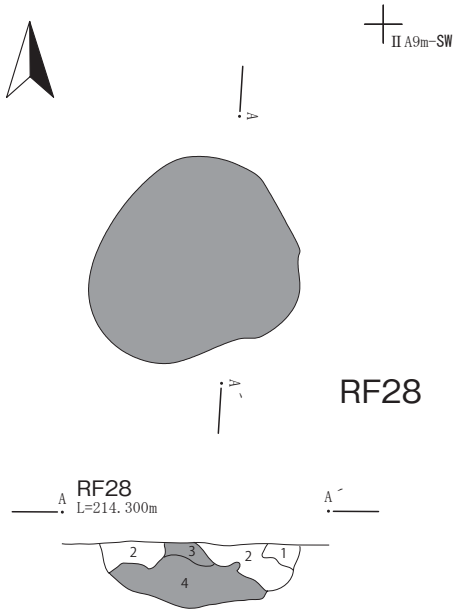
第176図　RF22 ～ 25



RF26
１．7.5YR5/2 灰褐色．シルト．しまりやや疎．オレンジパミス3%含む．焼土範囲の中にあるが焼土ではない（撹乱？）．
２．5YR6/4 にぶい橙色．シルト．焼土．しまりやや疎．燃焼面より下位の赤色変色層．

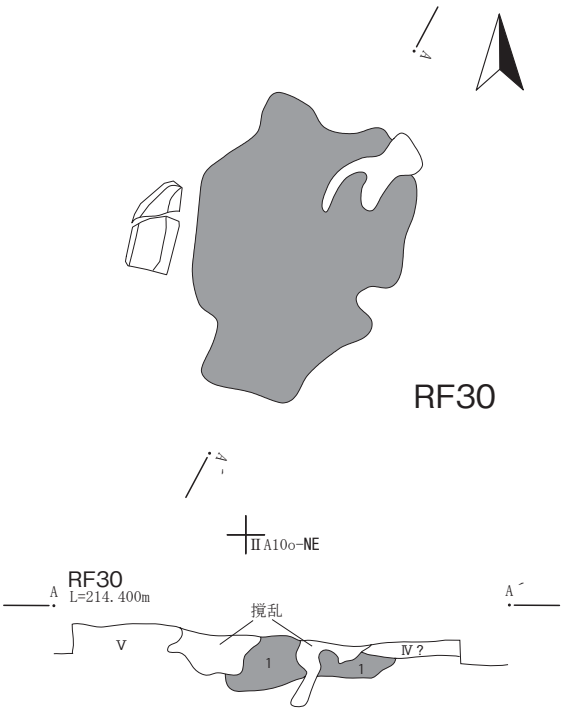


RF27
０．根撹乱．
１．5YR6/8-6/4 橙色 - にぶい橙色．シルト．焼土．しまりやや疎．



RF28
１．5YR4/2 灰褐色．シルト．しまり有り．焼土の極小粒（φ１㎜程度）を含むためやや赤みがかる．
２．5YR6/2 灰褐色．シルト．粘性有り．しまり有り．１層より焼土粒の割合が多い（40%）ためより赤く見える．
３．5YR7/6 橙色．シルト．焼土．しまりやや疎．焼土の上位層であるが上面の硬化はみられない．
４．2.5YR6/8 橙色．シルト．焼土．３層よりしまりのある燃焼部本体．混和物も無く均質．

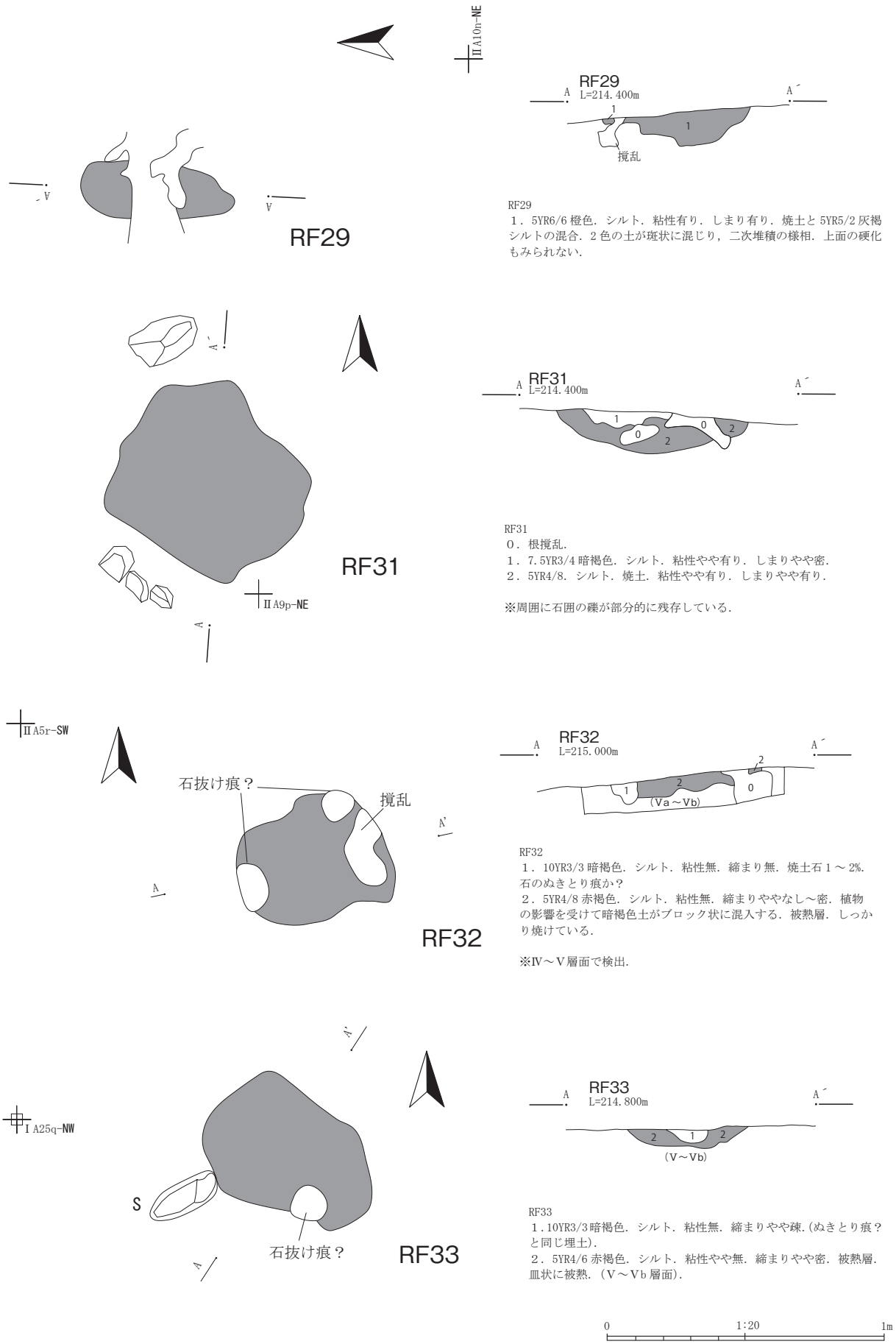
※３・４層が焼土の燃焼部に関する土層．



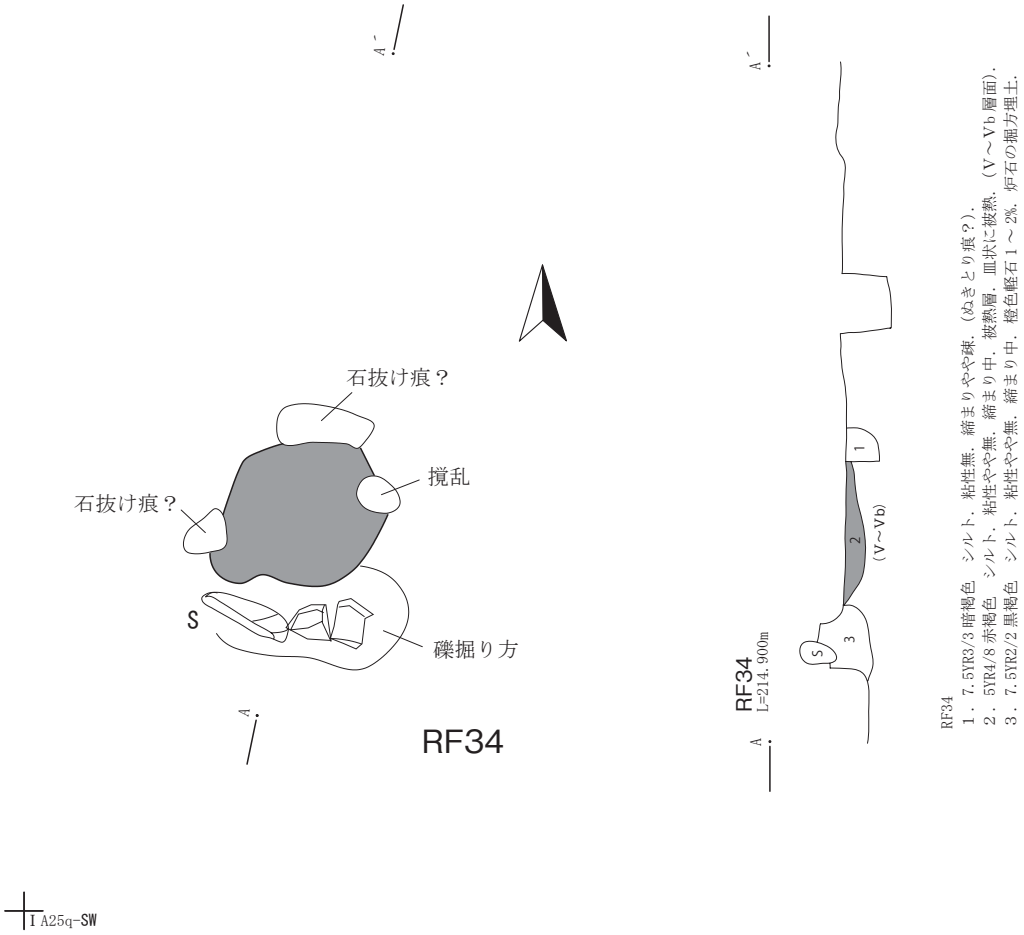
RF30
１．2.5YR5/8 明赤褐色．シルト．焼土．粘性弱．しまりやや有り．上面は若干硬いが全体的にサラサラ．下位及び南側ほど色調が褐色に近くなる．

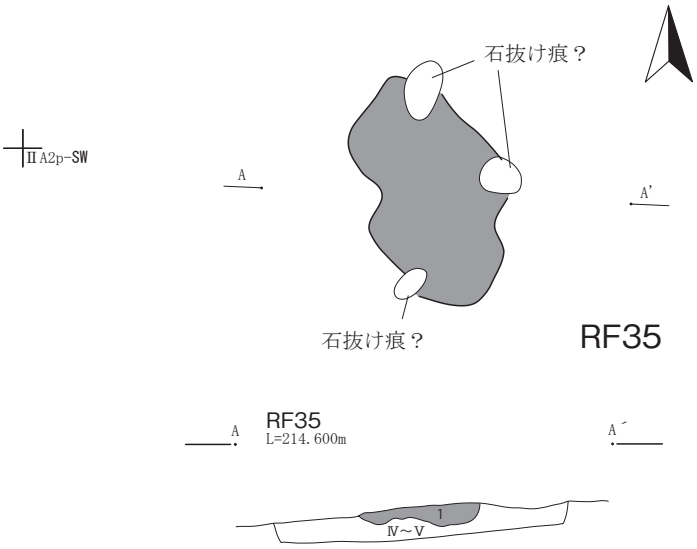
0　1:20　1m

第177図　RF26 ～ 28・30



第178図　RF29・31 ～ 33

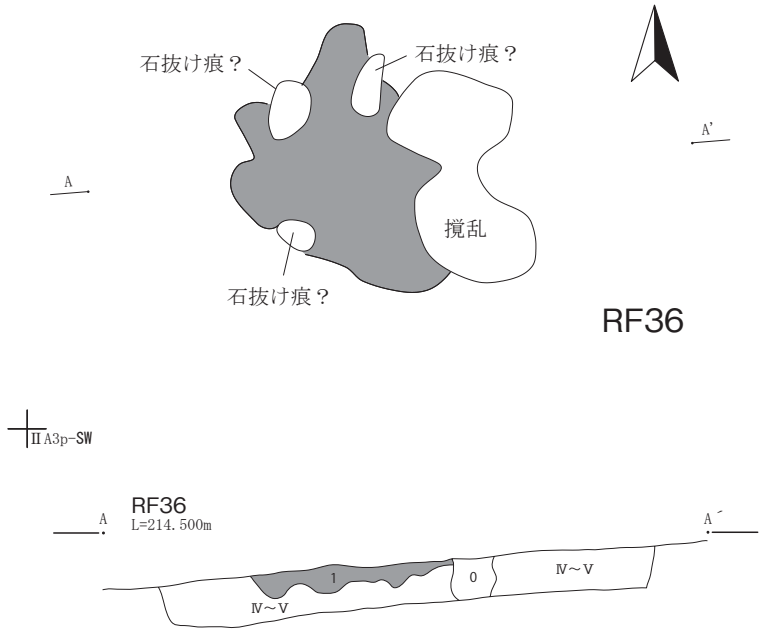




RF35 検出面：Ⅳ～Ⅴ層面上部
１．10YR5/6 黄褐色シルト　粘性無、締まりやや密　淡黄軽石２～３％・焼土粒１％混入．被熱層ではない．
西側には１×３㎜程の炭化物が 20 ㎝四方に散在している．配石周辺の黄褐色シルトに類似する．

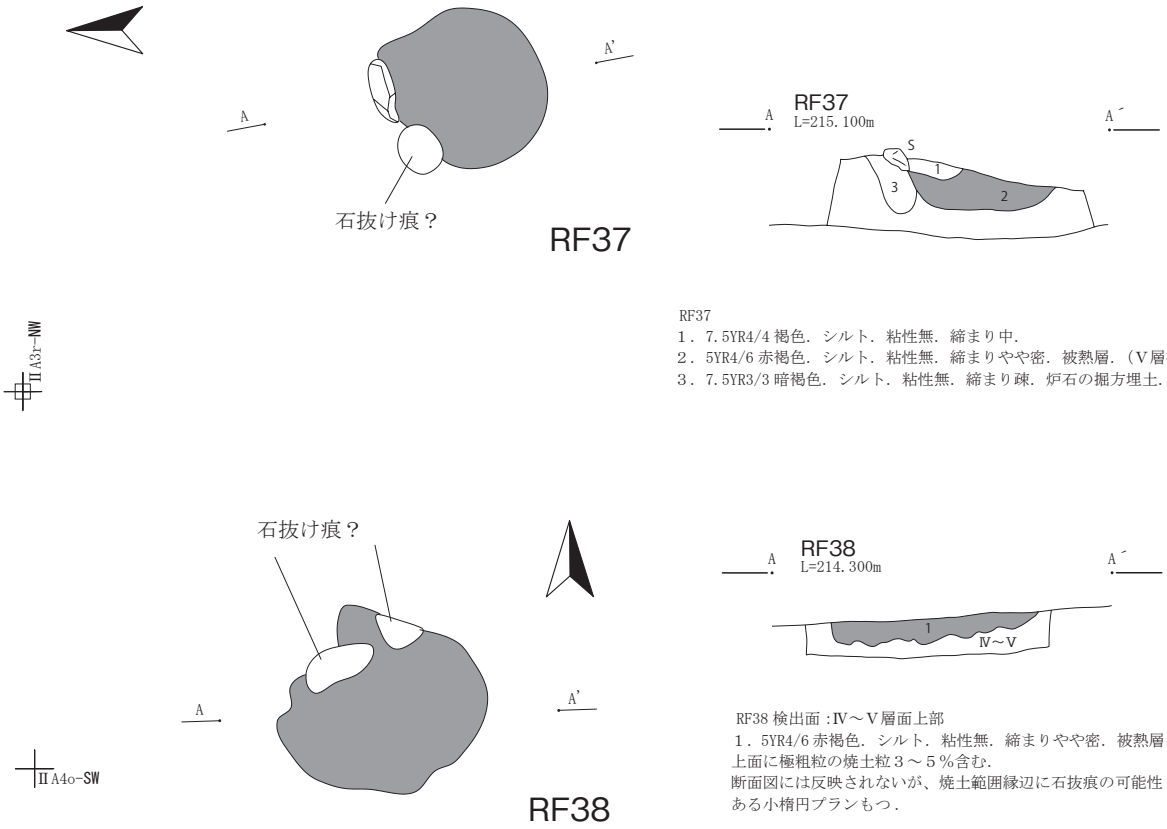
0　1:20　1m

第179図　RF34・35



RF36 検出面 :Ⅳ～Ⅴ層面上部
１．5YR4/8 赤褐色シルト．粘性無．締まりやや密．被熱層．上面には極細粒の焼土粒 10 ～ 15%・土器小片含む．断面図には反映されないが、小形円形のプランが三ヶ所あり、石の抜き取り痕の可能性がある．西側はやや黄色みが強い（土色帖では差がみられないが）．

※周囲に炭化物粒（１×３㎜）が散在している．



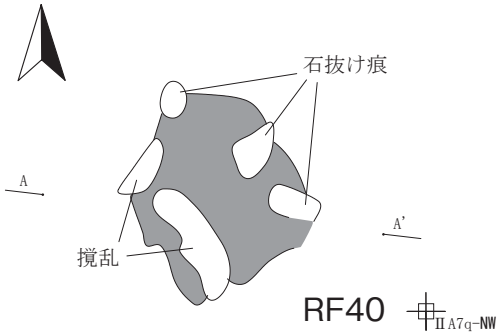
RF37
１．7.5YR4/4 褐色．シルト．粘性無．締まり中．
２．5YR4/6 赤褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．被熱層．（Ⅴ層被熱）．
３．7.5YR3/3 暗褐色．シルト．粘性無．締まり疎．炉石の掘方埋土．

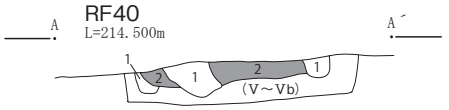
RF38 検出面 :Ⅳ～Ⅴ層面上部
１．5YR4/6 赤褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．被熱層．上面に極粗粒の焼土粒３～５％含む．
断面図には反映されないが、焼土範囲縁辺に石抜痕の可能性ある小楕円プランもつ．

第180図　RF36 ～ 38

RF39
１．5YR4/6 赤褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．Ⅴb 層が被熱．（被熱層）．
２．7.5YR3/3 暗褐色．シルト．粘性無．締まりやや疎．焼土層より古い．Ⅴb 層起源．Ⅵa 層小塊を含む．

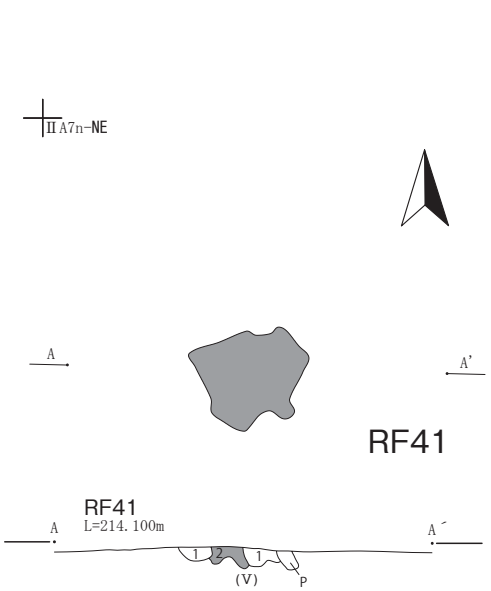
※Ⅴb 層上面で検出．



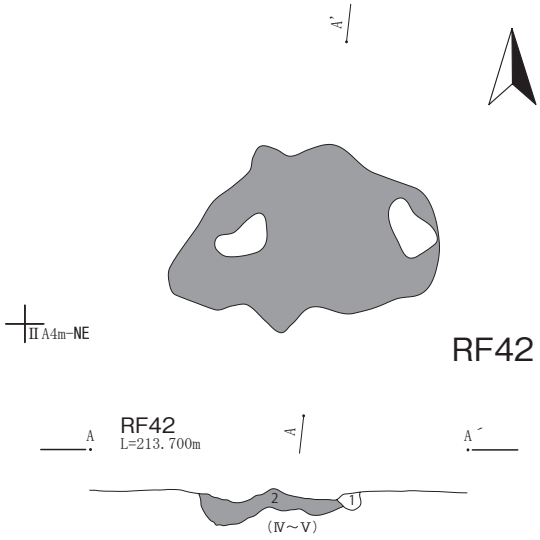


RF40
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性中．締まりややなし．黄褐色土粒１～２%．焼土石 1% 未混入．石のぬきとり痕か？
２．5YR3/4 暗赤褐色．シルト．粘性ややなし．締まりやや密．被熱層（Ⅴ層面）が焼けている．

※Ⅴ層面で検出．



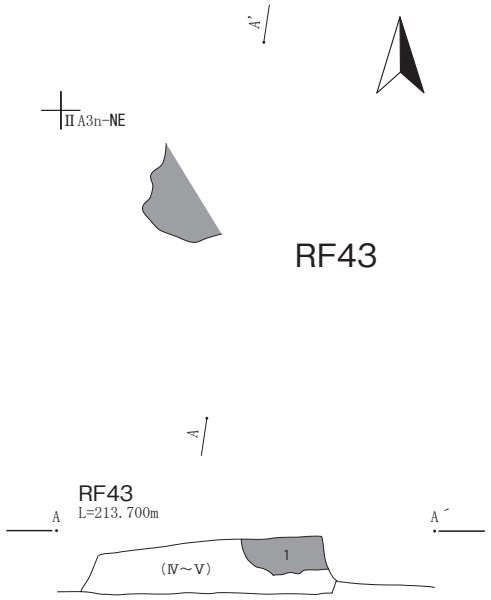
RF41 検出面：Ⅴ層上面
１．5YR2/4 極暗赤褐色シルト．粘性無．締まり中．焼土粒２～３％混入．
２．5YR4/6 赤褐色シルト．粘性無．締まりやや密．被熱層．



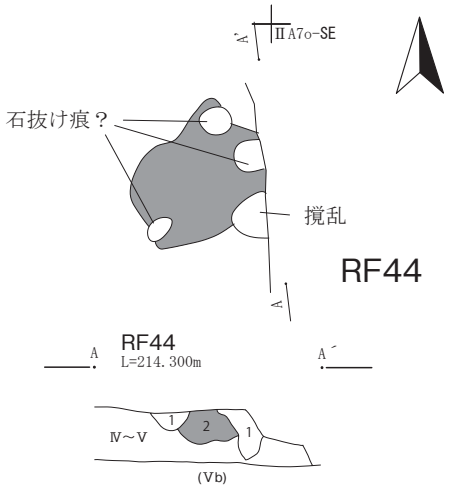
RF42 検出面：Ⅳ～Ⅴ層面上部
１．7.5 YR3/4 暗褐色シルト．粘性無．締まりやや疎．石の抜き取り痕か．
２．5YR4/6 赤褐色シルト．粘性無．締まりやや密．被熱層　（黒褐色シルト細粒２～３％・淡黄軽石１％混入）
焼成面に明瞭な凹凸がある．小形円形のプラン（１層の土が入るもの）が四ヶ所あり、石の抜き取り痕の可能性がある．

0　1:20　1m

第181図　RF39 ～ 42

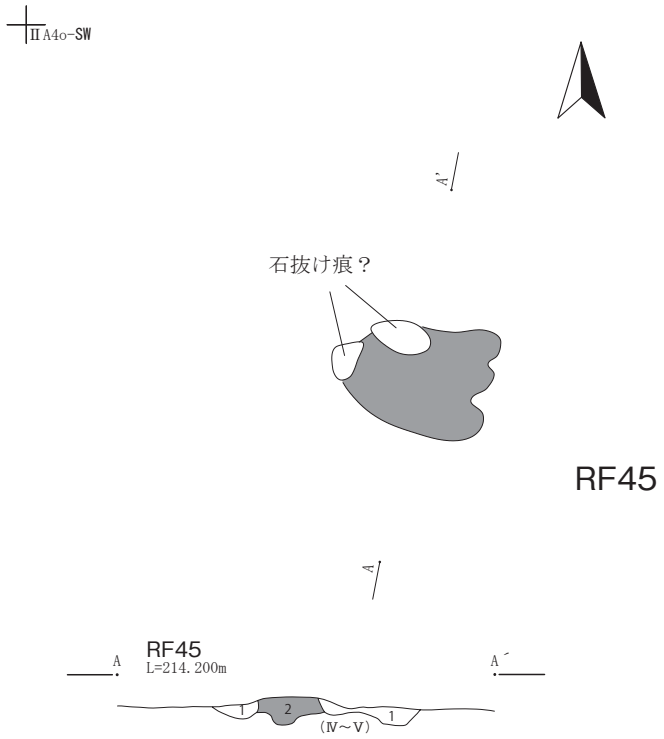


RF43 検出面：Ⅳ～Ⅴ層上面
１．5YR2.5/4 極暗赤褐色－暗赤褐色．シルト．粘性無．締まり中．被熱層（淡黄軽石１％混入）．



RF44
１．10YR2/1 黒色．シルト．粘性無．締まり無．焼土石１～2% 混入．石の抜き取り痕か？
２．5YR3/3 暗赤褐色．シルト．粘性無．締まりやや疎．面的に被熱しているが、黄褐色土塊 7% の混入が見られ、廃棄焼土の可能性が高い．モソモソしている．

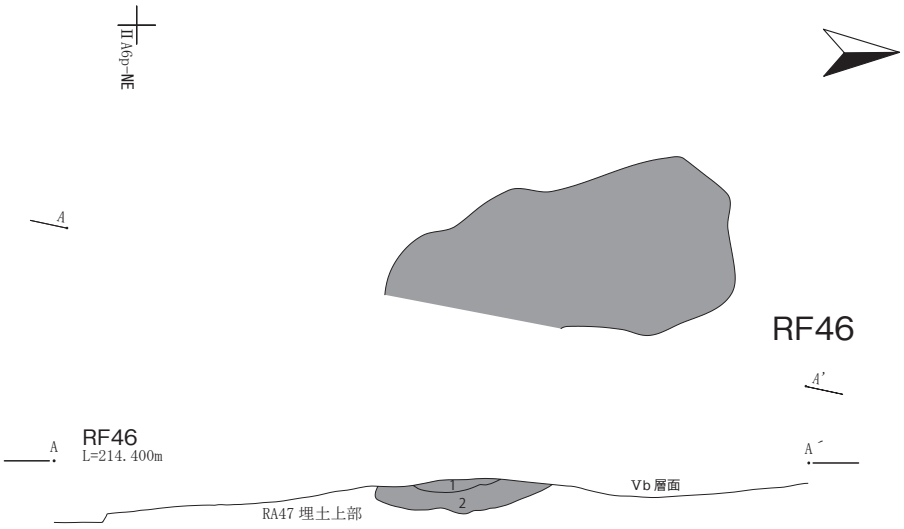
※Ⅳ～Ⅴ層で検出．



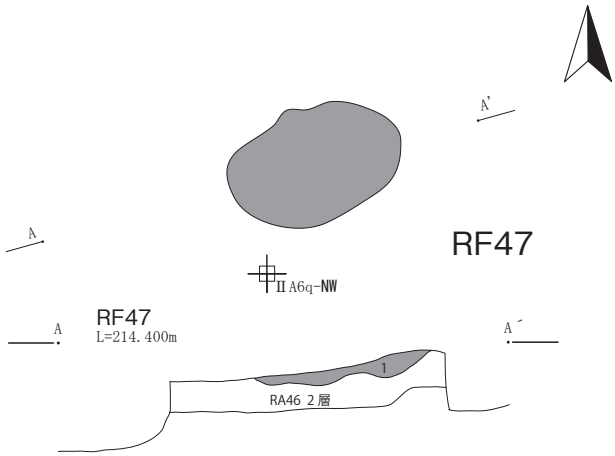
RF45
１．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性無．締まりやや密．配石の掘方埋土．黒褐色土小塊 3%．
２．5YR4/6 赤褐色．シルト．粘性やや無．締まり中．被熱層．

0　1:20　1m

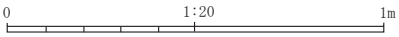
第182図　RF43 ～ 45



RF46
１．7.5YR5/6 明褐色　シルト．粘性無．締まり密．
２．5YR4/6 赤褐色　シルト．粘性無．締まり密．被熱層．Vb 層が被熱．



RF47
１．5YR4/6 赤褐色　シルト．粘性無．締まりやや密．



第183図　RF46・47

（5） 土器埋設遺構

ＲＺ01土器埋設遺構（第184図、写真図版138）

〔位置・検出状況〕中央西部、ⅡＡ１ｎグリッドに位置する。Ｖａ層上面において深鉢形土器の一部を検出し精査に着手した。

〔規模・形状〕深鉢形土器をほぼ正位に埋設した遺構である。皿状の掘り込みの底面に口縁部が表れるよう、胴上部～底部が埋められている。本来は完形個体であったと思われるが、口縁部付近が潰れ土器の内外に破片が沈み込んだ状態となっていた。底部の穿孔・打ち欠きはない。口縁部周囲の掘り込みの径は75㎝程と推定される。土器の上端から掘り込み底面までの深さは38㎝である。

〔埋土と堆積状況〕埋設土器の掘方にはＶａ層土とⅥ層土のブロックからなる土（２層）が埋め戻され、土器の下半部が固定されている。浅い掘り込みの底面に埋め込まれた状態となった土器の内部には、流入土とみられるⅣ～Ｖａ層主体の黒褐色土（１層）の堆積が進み、さらにそのまま口縁部周囲の掘り込みも連続して埋めている。土器内の埋土下部に口縁部破片の出土も認められることから、埋設後の土器内部は埋められることなく、空間を維持した状態であったと推測される。なお、土器内埋土には灰のような白色粒子が斑状に点在していた。骨片等の可能性を視野に土壌分析を実施したが、岩石又はそれを構成する鉱物等の一部であるとの結果を得ている（→附編１⑶、試料No.1）。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器（482）〈第229図、写真図版176〉。

石錐（2084）。

ＲＺ02土器埋設遺構（第184図、写真図版138）

〔位置・検出状況〕北西部、ＩＡ23ｋグリッドに位置する。Ｖａ層中において深鉢形土器の一部を検出し精査に着手した。

〔規模・形状〕椀形の掘り込みに深鉢形土器をほぼ正位に埋設した遺構である。土器はほぼ完形に近いが、口縁部付近を水平に削りとられており本来の姿は不明である。底部の穿孔・打ち欠きはない。掘り込みの上端径は75㎝ほどと推定される。土器の上端から掘り込み底面までの深さは45㎝である。

〔埋土と堆積状況〕掘り込みの下部にはＶａ層土及びⅥ層土のブロックからなる土（３層）が埋め戻され、土器の下半部が固定されている。土器の内部にはＶａ層主体の黒褐色土（１ａ・１ｂ層）が堆積し、土器上半部の外側にもこれに良く類似する黒褐色土（２層）が連続して堆積していることから、埋設後の土器内部は埋められることなく、空間を維持された状態であったと推測される。なお、土器内埋土の下部には灰のような白色粒子が斑状に点在していた。骨片等の可能性を視野に土壌分析を実施したが、岩石又はそれを構成する鉱物等の一部であるとの結果を得ている（→附編１⑶、試料No.2）。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代中期末葉の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器（483）〈第229図、写真図版176〉。

ＲＺ03土器埋設遺構（第184図、写真図版139）

〔位置･検出状況〕南西部、ⅡＡ7ｉグリッドに位置する。RA12大形竪穴住居が埋没する過程において、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12の埋土のうちⅣ層相当の堆積層下面から深鉢形土器の一部が現れたことから精査着手した。

〔規模・形状〕擂鉢状の掘り込みに深鉢形土器を正位に埋設した遺構である。土器はほぼ完形である。底部の穿孔・打ち欠きはない。掘り込みの上端径は60cm前後、土器の上端から掘り込み底面までの深さは42cmである。

〔埋土と堆積状況〕RA12の床面直上に堆積している黒色土層（７層）の上面から掘り込まれた擂り鉢状の掘方に深鉢形土器が正位に据えられたのち、土器の周囲には掘り上げた黒色土と地山Ⅵ層土のブロックからなる土（６層）が埋め戻され、土器の下半部が固定されている。その後、土器の内部にはＶａ層主体の黒褐色土にⅥ層土を含むやや明るい土（４層）が堆積し、土器上半部の外側にもこれに良く類似する土（５層）が連続して堆積していることから、埋設後の土器内部は埋められることなく空間を維持された状態にあり、その後土器内部と口縁部外周が同時的に埋没したものと推測できる。掘り込みが埋没した後は、RA12の壁際から流入したⅣ層相当層（３層）に厚く覆われ、その上位も順次Ⅲ層相当層（１層）に覆われていった過程が理解できた。なお、本遺構の東側には近接して２点の大形礫が出土している。いずれも径50cm前後の花崗岩で、本遺構の掘り込み面である７層（Ｖ層相当）上面に据え置かれたようだ。いずれも火を受け表面に赤変が認められる。またこれらの大形礫に添えられたかのように、径８cmほどの球状礫も出土した。これらの礫と本遺構との関連性については明らかでない。

〔重複遺構〕RA12埋土最下部（Ｖ層相当）を切り、埋土中部以上（Ⅳ・Ⅲ層相当）に被覆される。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

　土器（484）〈第230図、写真図版177〉。

ＲＺ04土器埋設遺構（第185図、写真図版139・140）

〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ６ｉグリッドに位置する。RA12大形竪穴住居が埋没する過程において、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12の埋土のうちⅣ層相当の堆積層下面から深鉢形土器の一部が現れたことから精査着手した。

〔規模・形状〕擂鉢状の掘り込みに深鉢形土器を埋設した遺構である。南側（RA12の内側）にわずかに傾くが、レンズ状堆積による凹地の内部上面（掘り込み面）の傾斜に口縁をあわせて埋設した結果のようにも思われる。土器は完形に近いが底面部分を丸々失っている。掘り込みの上端径は55cm前後、土器の上端から掘り込み底面までの深さは46cmである。

〔埋土と堆積状況〕RA12大形竪穴住居跡の内部は壁際からの土壌の流入によってレンズ状の堆積が進み、本遺構が設置された時点においては、中央部が低く壁際が高い皿状の凹地となっていたと考えられる。本遺構はRA12の北西壁際付近に位置しており、本遺構の掘り込み面からRA12の床面までには約30cmの土壌の堆積があった。Ⅳ層相当層の下面から掘り込まれた擂り鉢状の掘方には深鉢形土器が据えられ、その後、土器の周囲には掘り上げたRA12埋土（２層）が埋め戻されている。その後、土器の内部にはＶａ層主体とみられる黒褐色土が（１層）が堆積している。堆積の様相から流入土と見られ、埋設後の土器内部は埋められることなく空間を維持された状態にあったものと推測される。土器内が流入土壌で満たされた後は、RA12の凹地内はⅣ層相当土によって広く覆われたものとみられ

る。なお、埋設土器の内部からは径８㎝の楕円形礫１点が出土している。底面から10㎝弱のところであり、礫が置かれた面より下位の埋土には斑状に点在する灰のような白色粒子が認められた。骨片等の可能性を視野に土壌分析を実施したが、岩石又はそれを構成する鉱物等の一部であるとの結果を得ている（→附編１⑶、試料No.3）。
〔重複遺構〕RA12埋土下部を切り、埋土中部以上（Ⅳ層相当）に被覆される。
〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。
〔出土遺物〕
　土器（485）〈第230図、写真図版177〉。
　自然礫（2815）。

ＲＺ05土器埋設遺構（第185図、写真図版139・140）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ６ｉグリッドに位置する。RA12大形竪穴住居が埋没する過程において、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12壁際の埋土中から深鉢形土器の一部が現れたことから精査着手した。
〔規模・形状〕擂鉢状の掘り込みに深鉢形土器を埋設した遺構である。南側（RA12の内側）に傾いているが、レンズ状堆積による凹地の内部上面（掘り込み面）の傾斜に口縁をあわせて埋設した結果のようにも思われる。土器は口縁と底部の一部を欠損している。口縁の欠損は後世の削平、底部については打ち欠きの痕跡等が認められないことから取り上げの際に見落とした可能性があり、本来はほぼ完形に近かったと考えられる。掘り込みの上端径は65㎝前後、土器の上端から掘り込み底面までの深さは35㎝である。
〔埋土と堆積状況〕RA12大形竪穴住居跡の内部は壁際からの土壌流入によってレンズ状の堆積が進み、本遺構が設置された時点においては、中央部が低く壁際が高い皿状の凹地となっていたと考えられる。本遺構の位置するRA12の北西壁際はすでに厚い堆積層に覆われており、本遺構の掘り込み面はRA12の検出面とほぼ同じ高さとなっている。擂り鉢状の掘方に据えられた深鉢形土器はその周囲をRA12の埋土とみられる黒褐色土（２層）によって埋め戻されている。その後、土器の内部にはＶａ層主体とみられる黒褐色土（１ａ層）が堆積している。堆積の様相から流入土と見られ、埋設後の土器内部は埋められることなく空間を維持された状態にあったものと推測される。なお、埋設土器の内部からは径５㎝の礫１点が出土している。底面から12㎝程のところであり、礫が置かれた面より下位の埋土（１ｂ層）には斑状に点在する灰のような白色粒子が認められた。土壌分析は実施していないが、RZ01・RZ02・RZ04等で検出の同種粒子の分析では岩石又はそれを構成する鉱物等の一部であるという結果が得られている。なお、土器の北側上部に接するようにして２点の礫（径24㎝程）が出土している。意図するところは不明であるが、本遺構に添え置かれたものと考えられる。
〔重複遺構〕RA12の壁上端と埋土の一部を切っている。
〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。
〔出土遺物〕
　土器（486）〈第230図、写真図版177〉。
　円盤状土製品（1267）。

ＲＺ06土器埋設遺構（第185図、写真図版139・140）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ６ｉグリッドに位置する。RA12大形竪穴住居が埋没する過程におい

て、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12の埋土中から深鉢形土器の一部が現れたことから精査着手した。
〔規模・形状〕擂鉢状の掘り込みに深鉢形土器を埋設した遺構である。土器は胴下部のみが残存し、破片が内側に落ち込んだような状態で出土した。本来は完形に近かった可能性もあるが定かではない。残存する掘り込みの上端径は38㎝、土器の上端から掘り込み底面までの深さは28㎝である。
〔埋土と堆積状況〕RZ04・RZ05と同様、RA12大形竪穴住居跡の埋没過程に生じた凹地内に土器を埋設したものである。本遺構の位置を考慮すれば、掘り込み面はRZ04と同程度の高さにあったものと推測されるが、RA12の精査時に検出されたものであり、上部の状態は確認できなかった。掘方に据えられた深鉢形土器はその周囲をRA12の埋土とみられる黒褐色土（２層）によって埋め戻されており、その後、土器の内部には流入土と思われる黒褐色土（１層：Ⅳ～Ⅴａ層相当）が堆積している。上部の破片が内部に落ち込んでいることも考慮すれば、埋設後の土器内部は埋められることなく空間が維持された状態にあったものと推測される。
〔重複遺構〕RA12の床面及び埋土の最下部を切っている。
〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。
〔出土遺物〕
　土器（487）〈第230図、写真図版177〉。

ＲＺ07土器埋設遺構（第186図、写真図版140）
〔位置・検出状況〕南西部、ⅡＡ７ｈグリッドに位置する。RA12大形竪穴住居が埋没する過程において、凹地となった内部に土器を埋設したものである。RA12に付属する複式炉の埋土上部から深鉢形土器の一部が現れたことから、埋設土器の可能性があるものと認識し精査に着手した。
〔規模・形状〕擂鉢状の掘り込みに深鉢形土器を埋設した遺構である。土器はほぼ完形で、正位に据えられている。底面に打ち欠き・穿孔等はない。掘り込みの上端径は50㎝前後、土器の上端から掘り込み底面までの深さは26㎝である。
〔埋土と堆積状況〕RA12大形竪穴住居跡に付属する複式炉は、平面規模が3.5×2.1ｍ、住居床面からの最大深度が62㎝と極めて大きなものである。RA12の廃絶後、床面に開口する炉内には土壌等の堆積物が真っ先に流入したものとみられる。本遺構は、この複式炉内が流入土等により住居床面レベル付近まで埋没した時点において、この埋土を切って設置されたものとみられる。複式炉の一部を構成する石囲部の南壁上部に重複する地点に位置するが、炉跡が埋没した後の設置であり、土器の埋設行為と炉との直接的な因果関係はないと考えられる。ただし、埋没が完了する前、内部が凹地状を落ち込みとなっていた段階の行為だとすれば、凹地の「落ち際」を選んで設置したものと捉えることもでき、RA12内で検出されている他の埋設土器に共通する特徴といえる。掘方に正位に据えられた土器の周囲は、Ⅴａ層類似の黒褐色土とⅥ層土のブロック（２層）によって埋め戻されている。特記すべきは、土器の内部に黄褐色粘土が充填されていたことである。底部から口縁に至るまで、団子状の小塊が密に詰められていた。小塊ごとに酸化・白色化の度合いが異なるため両者が斑状に混在し、空隙にはわずかに黒色土の浸透も認められるが、粘土塊そのものに不純物の混入はない。粘土の充填と土器の埋設行為の先後関係については不明とせざるを得ない。
〔重複遺構〕RA12の炉跡の壁上端と埋土の一部を切っている。
〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。
〔出土遺物〕

土器（488）〈第231図、写真図版178〉。

※土器本体は完形の状態で埋設されていたが、器壁が薄く脆弱であったため、取り上げ時に分解した後、接合不能となった破片が生じた。復元できた一部のみを掲載している。

ＲＺ08土器埋設遺構（第186図、写真図版141）

〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ８ｐグリッドに位置する。Ｖｂ～Ⅵ層上面において、暗褐色土の円形範囲とその西縁に露出した深鉢形土器の一部として検出された。

〔規模・形状〕土坑状の掘り込みに深鉢形土器を据え下部を埋めた遺構である。土器は掘り込みの西壁に寄せて置かれている。口縁部を欠損しており、破片が内側に落ち込んだような状態で出土した。本来は完形に近かった可能性もあるが定かではない。底面に打ち欠き・穿孔等はない。掘り込みの上端径は65㎝、深さは22㎝、土器の上端から掘り込み底面までの深さは34㎝である。

〔埋土と堆積状況〕土坑状の掘り込みには地山ブロックを多く含む土が埋め戻され、西壁に寄せられた土器が固定されている。土器は胴上部から上を削平されているが、土器内部に口縁部破片が落ち込んでいることから、本来は完形であった可能性があり、また、土器内部は埋められることなく一定期間、空間が維持された状態にあったものと推測される。その後、土器の内部にも堆積がすすみ、埋土上部にはⅥ層土類似の黄褐色土が堆積するなど、人為的な埋め戻しを示唆する状況も認められる。土器東側上部から掘り込みの上部にかけては、流入土と見られる黒褐色土が連続して堆積している。最終段階には土器の上部を一部破壊しながら自然堆積が進み、埋没を終えたものとみられる。なお、土器内の最上部から凹石１点が出土している。埋設土器に伴う礫の可能性も否定できないが、層位的には土器の埋没後に位置づけられることなど、他例とは異なる点に注意が必要である。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器（489）〈第231図、写真図版178〉。

敲磨器類（2662）。

ＲＺ09土器埋設遺構（第187図、写真図版141）

〔位置・検出状況〕北東部、ⅠＡ25ｒグリッドに位置する。Ｖａ～Ｖｂ層上面において深鉢形土器の一部を検出し精査に着手した。

〔規模・形状〕土器より一回り大きな円筒形の掘方に、深鉢形土器をほぼ正位に埋設した遺構である。本来は完形個体であった可能性があるが、口縁部付近が削平されている。底面に打ち欠き・穿孔等はない。掘方の径は38㎝、土器の上端から掘り込み底面までの深さは32㎝である。

〔埋土と堆積状況〕埋設土器の掘方にはＶａ層土とⅥ層土のブロックからなる土（４層）が埋め戻され、土器の周囲が固定されている。その後、土器の内部にも堆積がすすみ、埋土上部にはⅥ層土類似の黄褐色土が堆積するなど、人為的な埋め戻しを示唆する状況も認められる。黄褐色土の堆積はRZ08に共通している。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器（490）〈第231図、写真図版178〉。

ＲＺ10土器埋設遺構（第187図、写真図版141・142）

〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ24ｒグリッドに位置する。Ｖｂ層上面において概ね円形を呈する明瞭な黒色土範囲として検出。土坑と判断し精査を進めたところ、底面から環状に露出した土器口縁が確認されたことから、埋設土器と判断した。

〔規模・形状〕土坑状の掘り込みの底面に深鉢形土器（491）を埋設した遺構である。土器は掘り込み内のやや北寄りに設置されている。ほぼ完形で、口縁部が掘り込み底面から10cm近く突出するよう正位に据えられている。底面に打ち欠き・穿孔等はない。掘り込みの開口部径は約130cm、深さは22cm、土器口縁から掘方底面までの深さは45cmである。

〔埋土と堆積状況〕掘方には地山ブロックを多く含む土が埋め戻され、土器の固定がなされている。土器の内部にはＶａ層相当の黒褐色土が堆積し、下部にはわずかにⅥ層の小ブロックがみられるが、ほぼ一様の様相を呈する。自然堆積か否かについては判然としない。土器内は土坑状の掘り込みの底面と同レベルまで埋まった後、最後は土坑状の掘り込みとともに口縁部付近が埋没している。

なお、土器内の最上部から径10cm弱の礫と石鏃が出土している。埋設土器に伴う礫の可能性も否定できないが、層位的には土器の埋没後に位置づけられることなど、他例とは異なる点に注意が必要である。また、土坑状掘り込みの北東壁上部から石皿が出土している。

〔重複遺構〕RD73・74を切っている。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭～前葉の遺構と判断される。

〔その他の所見〕土坑状の掘り込みの内部に埋設される点や、口縁部付近に石皿（板状礫）を伴う点は、後掲、RZ11に共通の特徴である。本例の場合は下位にRD72・73も存在することから、埋設地点は凹地となっていた可能性が高いと考えられる。

〔出土遺物〕

土器（491・492）〈第232図、写真図版179〉。

石鏃（1815）。

石皿（2368）。

敲磨器類（2609）

ＲＺ11土器埋設遺構（第188図、写真図版142）

〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ24ｓグリッドに位置する。Ｖｂ層上面において、被熱痕跡の認められる板状礫と正位の深鉢が近接して出土したことから、土器埋設遺構の可能性があるものと判断し、精査に着手した。

〔規模・形状〕土坑状の掘り込みの内部に深鉢形土器（493）を埋設した遺構である。土器は掘り込み内の北東寄りに設置されている。胴部上半を欠き、下半部が正位に据えられている。底面に打ち欠き・穿孔等はない。上部は部分的に削平を受けている可能性があるが、土器上端と板状礫が近接して同面にあることから、ほぼ原形をとどめているものと推測される。掘り込みの開口部径は約80cm、深さは20cm、土器口縁から掘方底面までの深さは26cmである。

〔埋土と堆積状況〕掘り込みの内部はＶｂ～Ⅵ層土を全体に含んで明るみを持つ暗褐色土が堆積している。底面から上部まで一様の埋土である。土器はこの埋土を上方から掘り込んで埋設されている。土器埋設の掘方の底面は、土坑状掘り込みの底面より約８cm深く掘り下げられている。

土器内部には、下半にＶａ層土を主体とする黒褐色土（４層）、上半部にはⅥ層土ブロックの多い土層（３層）が堆積している。この上位の２層は土器の内外に連続していることから、おそらく２層

下面が埋設当時の本遺構上面であったと推測される（土器の上端が若干露出する位置となる）。

なお、埋設土器掘方上端の南西側からは、これに近接して据えられたように板状の礫が出土している。

〔重複遺構〕RA82を切っている。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭～前葉の遺構と判断される。

〔その他の所見〕土坑状の掘り込みの内部に埋設される点や、埋設土器上端付近に板状礫を伴う点は、前掲、RZ10に共通する特徴である。

〔出土遺物〕

土器（493・494）〈第232図、写真図版179〉。

ＲＺ12土器埋設遺構〈RA13関連遺構〉（第42・45・47・48図、写真図版143）

〔位置・検出状況〕中央西部と中央東部の境界（調査区のほぼ中央）、ⅡＡ４ｎグリッドに位置する。RA13（敷土・配石を伴う住居状遺構）の下部構造精査のため、礫の掘方の断ち割りを行ったところ、礫の下位に埋設された土器が検出された。

〔規模・形状〕RA13を構成する環状配石列のうち、配石遺構全体の主軸上において最も北に位置する板状礫（Ｓ２）の下位に小形の鉢形土器を埋設した遺構である。礫Ｓ２の掘方底面のさらに下位に、径25㎝、深さ26㎝の小穴を設け、その中に小形の鉢形土器を正位に設置している。土器は完形であり、底面への打ち欠き・穿孔等はない。

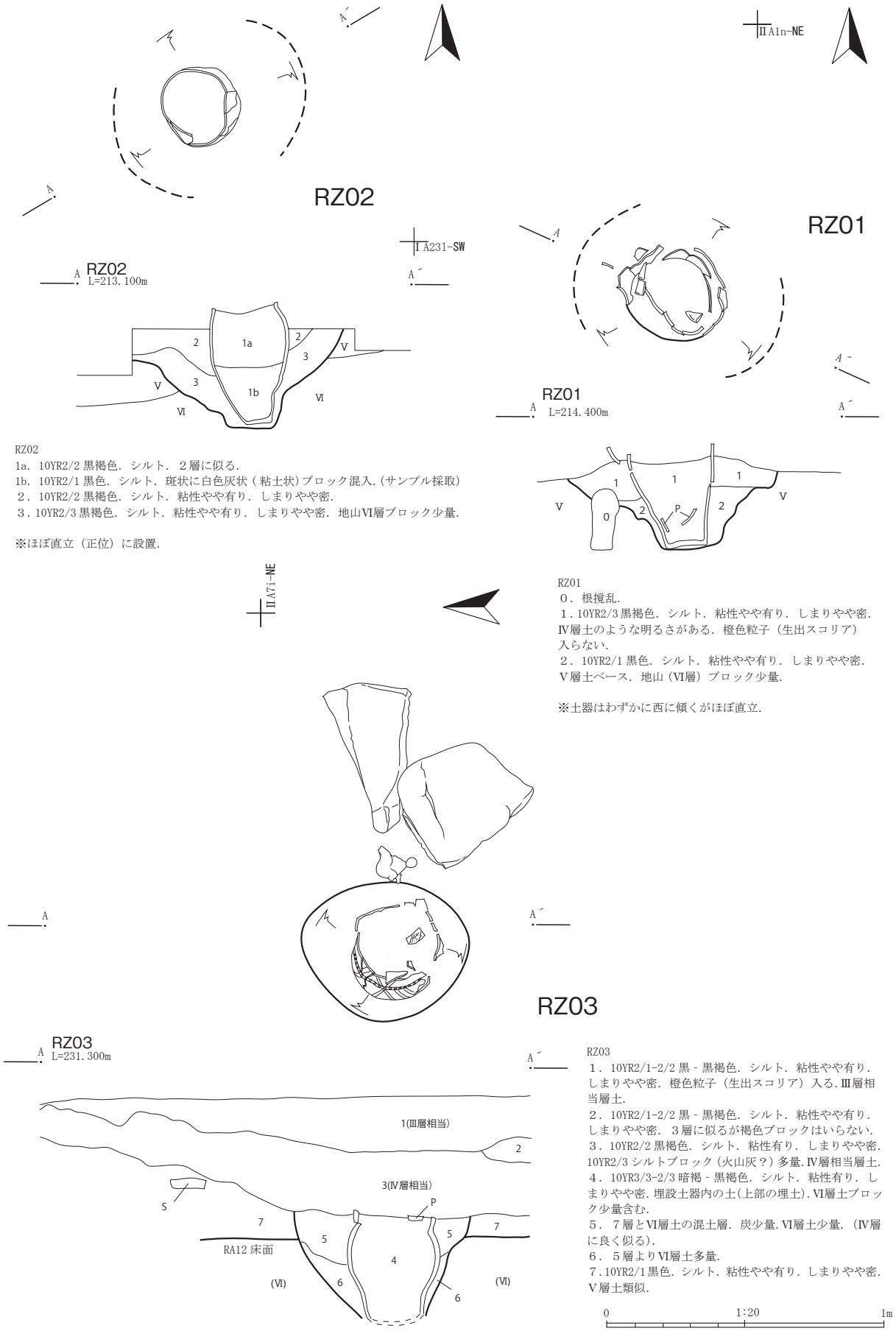
〔埋土と堆積状況〕断面にも明らかなように、土器の埋設は上位の配石構築に先行して行われている。土器が設置された穴は、径10～15㎜の小礫と粗砂によって満たされていた。土器の外部だけでなく内部にも密に充填され、さらにその上も約10㎝の厚さで覆っている。他の埋設土器が掘方に土を充填して設置・固定されているのに対し、明らかに様相を異にしている。この砂礫は遺構周辺の堆積層にはないものであり、本遺構へ充填するためわざわざ運ばれたものと考えられる。なお、土器内部からは砂礫以外の出土物はなかった。残存し得なかったと考えるべきであろう。埋設よりも「埋納」された土器と呼ぶ方がふさわしく思われる。この上にRA13の主軸上北端に位置する礫が据えられ、この土器はRA13を構成する要素の一つとなったものと思われる。RA13関係図（第42～48図）を併せて参照されたい。

〔重複遺構〕RA13の環状配石列の礫配置よりも古い。

〔遺構の時期〕埋設土器本体の年代観から、縄文時代後期初頭～前葉の遺構と判断される。

〔出土遺物〕

土器（495）〈第232図、写真図版179〉。



RZ02
1a．10YR2/2 黒褐色．シルト．２層に似る．
1b．10YR2/1 黒色．シルト．斑状に白色灰状（粘土状）ブロック混入.（サンプル採取）
２．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．
３．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．地山Ⅵ層ブロック少量．

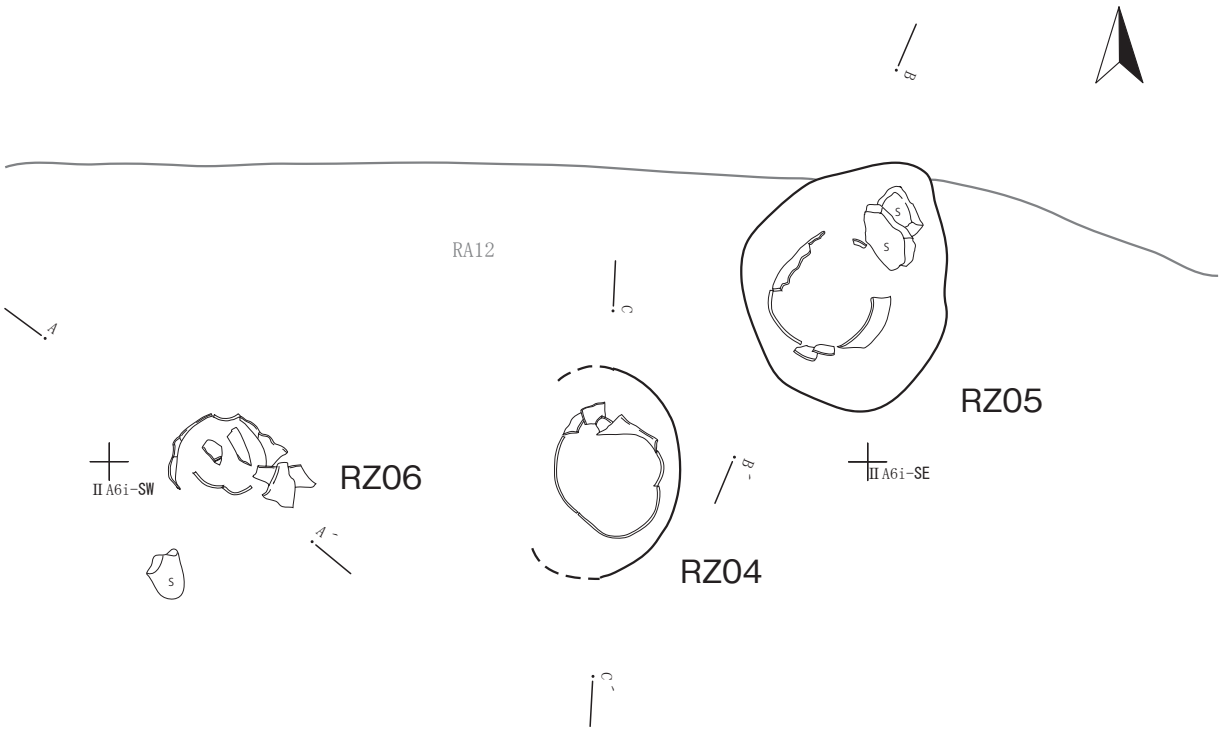
※ほぼ直立（正位）に設置．

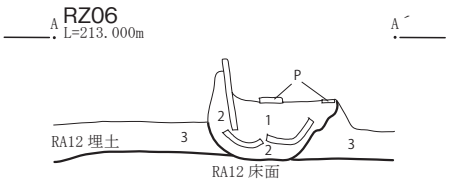
RZ01
０．根撹乱．
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．Ⅳ層土のような明るさがある．橙色粒子（生出スコリア）入らない．
２．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．Ⅴ層土ベース．地山（Ⅵ層）ブロック少量．

※土器はわずかに西に傾くがほぼ直立．

RZ03
１．10YR2/1-2/2 黒 - 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．橙色粒子（生出スコリア）入る．Ⅲ層相当層土．
２．10YR2/1-2/2 黒 - 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．３層に似るが褐色ブロックはいらない．
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性有り．しまりやや密．10YR2/3 シルトブロック（火山灰？）多量．Ⅳ層相当層土．
４．10YR3/3-2/3 暗褐 - 黒褐色．シルト．粘性有り．しまりやや密．埋設土器内の土（上部の埋土）．Ⅵ層土ブロック少量含む．
５．７層とⅥ層土の混土層．炭少量．Ⅵ層土少量．（Ⅳ層に良く似る）．
６．５層よりⅥ層土多量．
７．10YR2/1 黒色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．Ⅴ層土類似．

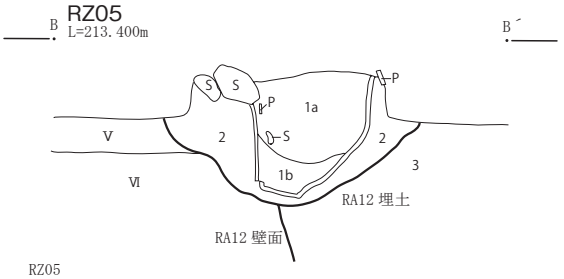
第184図　RZ01 ～ 03





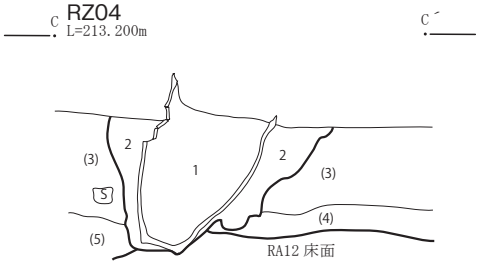
RZ06
１．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．褐色土ブロック含み，２層よりやや明るい．
２．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト粘性やや有り．しまりやや疎．３層に比べてしまり弱く．炭化物等の混入がない．
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．炭粒・炭片多．焼土粒微．RA12 埋土最下部．

※当初 RA12 床直遺物かと思ったが断面観察から掘り方を確認．ほぼ正位に埋設されたものだろう．胴部上半は欠損．土器内の１層は RA12 埋土上部の２層（Ⅳ相当層）に似る（褐色土含む）．周囲の他の埋設土器もこのⅣ相当層に被覆されていることから同時期の埋設と思われる．



RZ05
1a．10YR2/2 黒褐色．シルト．２層に似るが，しまりやや疎．
1b．1a 層に灰白色粉状粒子を微量含む．
２．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．掘り方埋土．３層に比して混入物なし．
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．炭粒・焼土粒微．RA12 埋土．

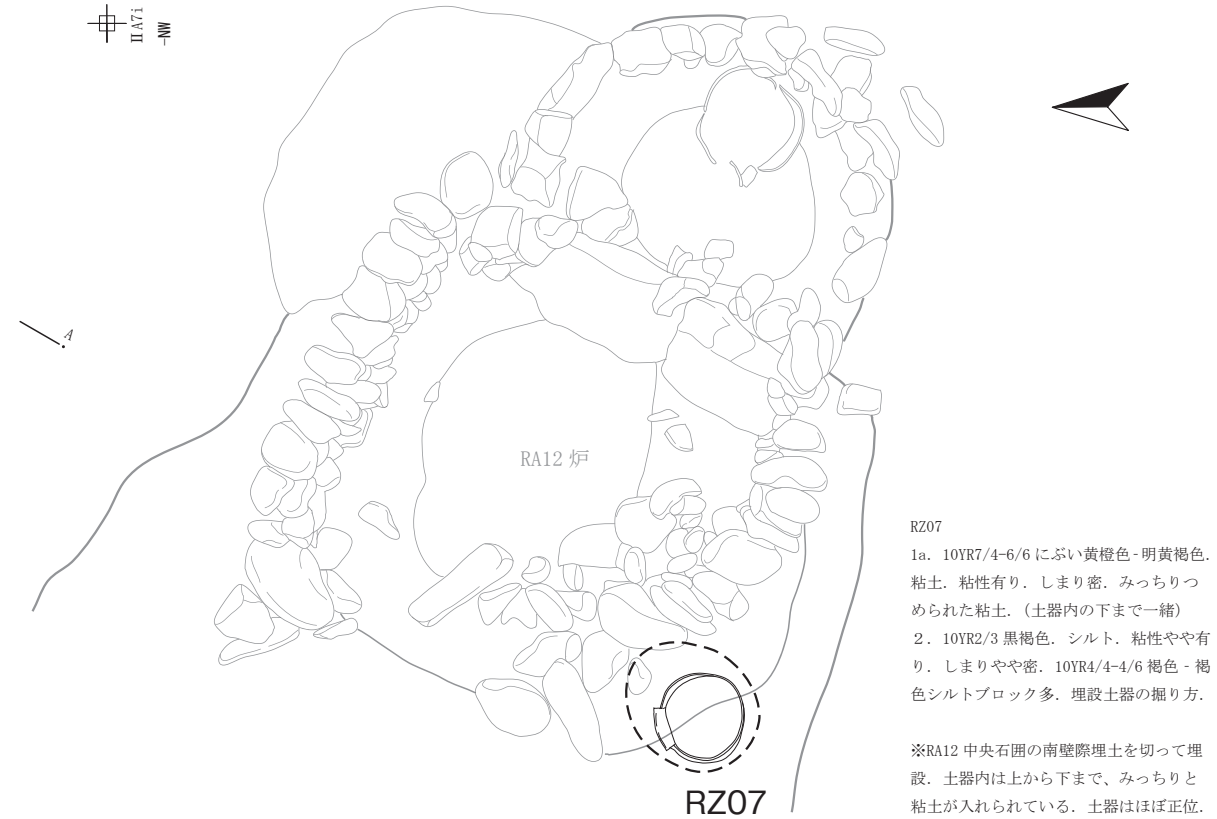
※土器内は黒色土が堆積し、自然か人為的かは不明．下部にはごく少量の灰白粒子入る．骨片あるいは灰かもしれないが判断できない．1b 層上面に小礫．偶然かも．



RZ04
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．
２．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．(3) 層より混入物少ない．
(3)．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや疎．Ⅵ層小ブロックごく微．炭粒ごく微．
(4)．10YR2/3 黒褐色．シルト．しまりやや疎．炭粒・焼土粒やや多量．
(5)．10YR2/2 黒褐色．シルト．Ⅵ層小ブロック少．
※(3) ～ (5) 層は、RA12 埋土．

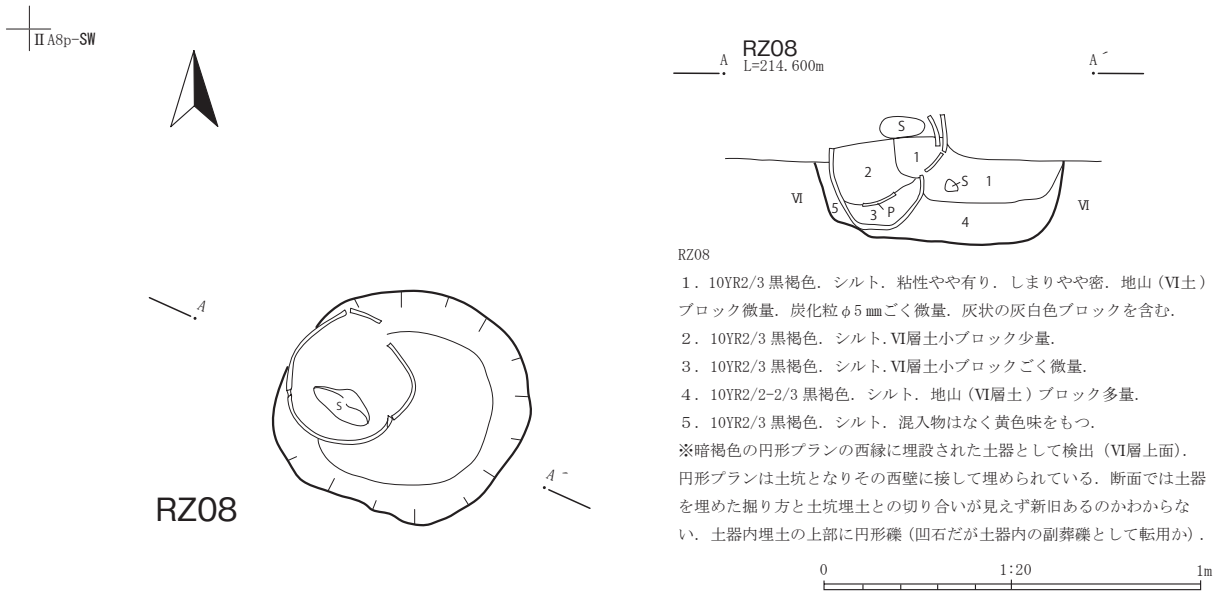
0　1:20　1m

第185図　RZ04 ～ 06



RZ07
1a．10YR7/4-6/6 にぶい黄橙色 - 明黄褐色．粘土．粘性有り．しまり密．みっちりつめられた粘土．（土器内の下まで一緒）
２．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．10YR4/4-4/6 褐色 - 褐色シルトブロック多．埋設土器の掘り方．

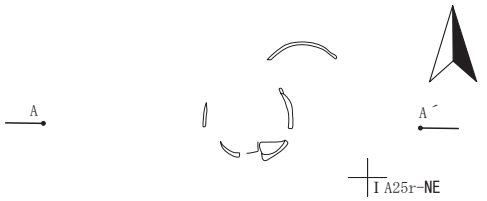
※RA12 中央石囲の南壁際埋土を切って埋設．土器内は上から下まで、みっちりと粘土が入れられている．土器はほぼ正位．



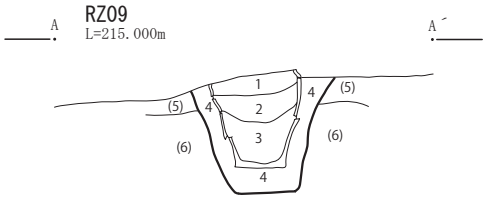
RZ08
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまりやや密．地山（Ⅵ土）ブロック微量．炭化粒φ5㎜ごく微量．灰状の灰白色ブロックを含む．
２．10YR2/3 黒褐色．シルト．Ⅵ層土小ブロック少量．
３．10YR2/3 黒褐色．シルト．Ⅵ層土小ブロックごく微量．
４．10YR2/2-2/3 黒褐色．シルト．地山（Ⅵ層土）ブロック多量．
５．10YR2/3 黒褐色．シルト．混入物はなく黄色味をもつ．
※暗褐色の円形プランの西縁に埋設された土器として検出（Ⅵ層上面）．円形プランは土坑となりその西壁に接して埋められている．断面では土器を埋めた掘り方と土坑埋土との切り合いが見えず新旧あるのかわからない．土器内埋土の上部に円形礫（凹石だが土器内の副葬礫として転用か）．

0　1:20　1m

第186図　RZ07・08

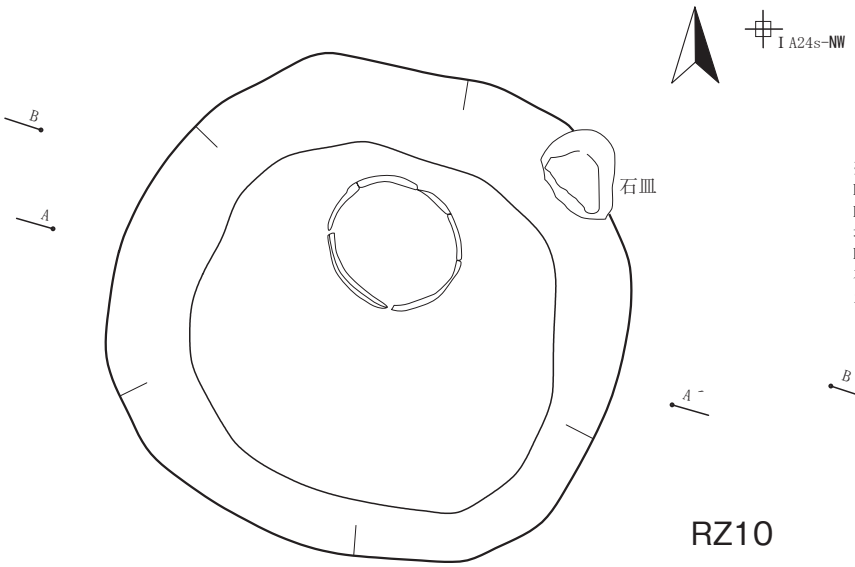


RZ09



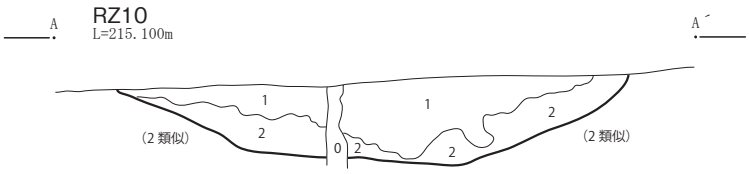
RZ09
１．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．
２．10YR4/4-4/6 褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．黄色土．
３．10YR3/4 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．２に似た黄色土ブロック極微量．
４．10YR3/2-2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅵ層土ブロック少．掘方埋土．
(5)．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．→別遺構埋土かも．
(6)．Ⅵ層．

※深鉢正立位の埋設土器．土器内埋土は上部にⅥ層土類似の黄色土が入れられている．



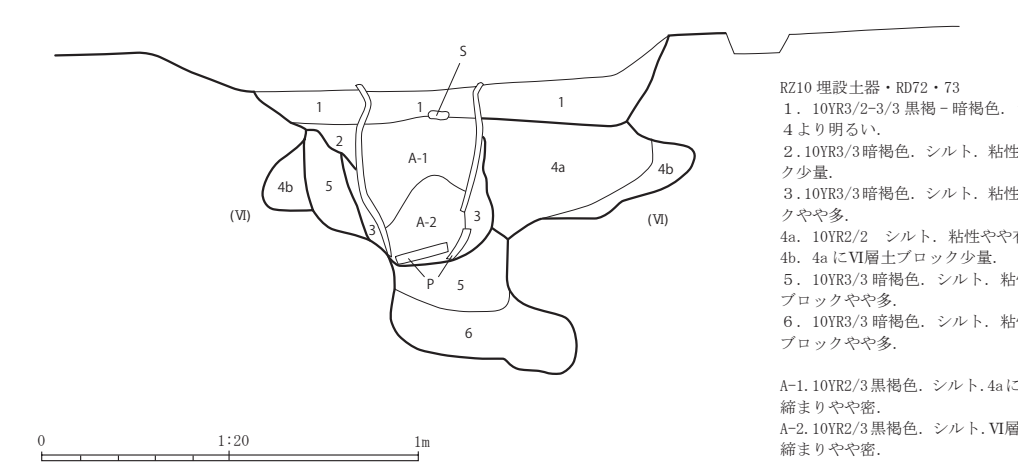
※新旧関係　RZ10＞RD73＞RD72
RZ10 埋設土器
RD72・73 の底面中央に口縁がくるように正位に深鉢を埋設している．
RD72・73 上端の肩から内部に落ち込んだような状態で石皿出土．
土器内埋土の上部から一握大の小レキと石鏃一点出土．

RZ10



RZ10
０．根攪乱．
１．10YR2/1 黒色．シルト．粘性有．締まり密．混入物少なくベターっと均質な黒色土．Ⅱ層？
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅴb 層に似る．

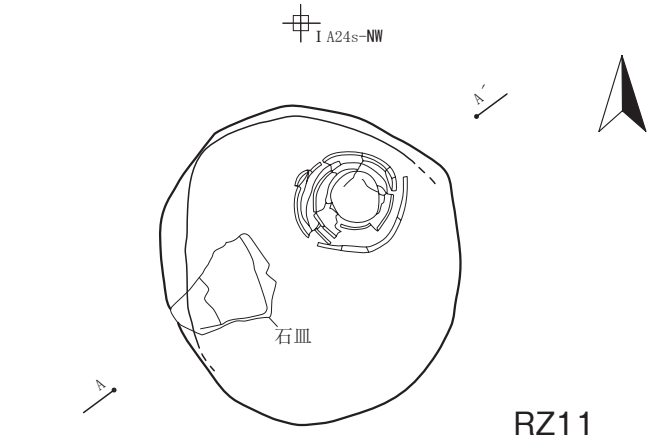
RZ10 埋設土器・RD72・73

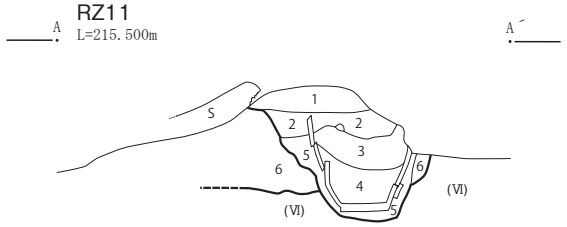


RZ10 埋設土器・RD72・73
１．10YR3/2-3/3 黒褐－暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．４より明るい．
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Ⅵ層土ブロック少量．
３．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．Ⅵ層土ブロックやや多．
4a．10YR2/2　シルト．粘性やや有．締まりやや密．Ⅴa に似る．
4b．4a にⅥ層土ブロック少量．
５．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．Ⅵ層土ブロックやや多．
６．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．Ⅵ層土ブロックやや多．

A-1．10YR2/3 黒褐色．シルト．4a に似るがやや明るい．粘性やや有．締まりやや密．
A-2．10YR2/3 黒褐色．シルト．Ⅵ層土小ブロック微量．粘性やや有．締まりやや密．

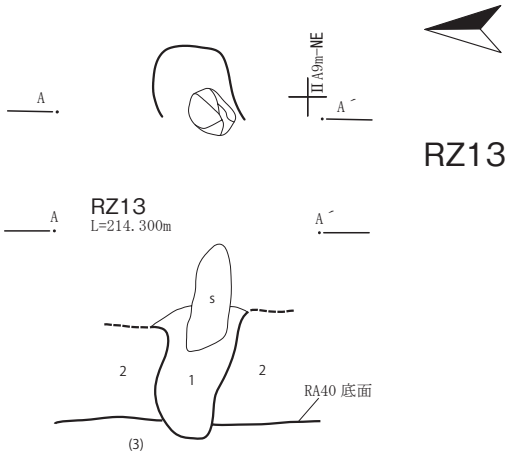
第187図　RZ09・10





RZ11 埋設土器
１．10YR3/2-3/3 黒褐色．シルト．根攪乱多く乾きやすい．上方からⅠ・Ⅱ層土が部分的に混入．粘性弱．締まり疎．
２．10YR3/3 黒褐色．シルト．粘性やや弱．締まりやや密．
３．10YR3/2 黒褐色．シルト．炭化物径５～10㎜微量.Ⅵ層土ブロック少量．粘性やや有．締まり密．
４．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．
５．10YR3/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．掘り方埋土．
６．10YR3/4 暗褐色．シルト．炭化物径５～10㎜極微量．粘性やや有．締まり密．（土坑状）

※土坑状掘り込みの埋土を切って設置された埋設土器．正位、底部穿孔無し．口縁脇に被熱した石皿出土．土坑埋土を切る（重複させる）点、石皿を伴う点で、RZ10 に共通．



RZ13
１．10YR2/2 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まりやや疎．炭化物粒（径２～５㎜）微量．
２．RA40 埋土．１層に同じ．
(3).Ⅵ層土．

0　1:20　1m

第188図　RZ11・13

（６）溝　　跡

ＲＧ01溝跡（第189～190図、写真図版144・145）

〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ22ｕ～ＩＡ25ｓグリッドに位置する。北側に下る斜面のⅢ～Ⅵ層上面において、黒褐色土の明瞭な帯状範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は14.8m、幅は60～250cm前後、底面までの残存深度は50cmである。走行方向はN-32°-Eである。底面には径40cm前後の不整円形の凹みがほぼ等間隔に連続している。

〔埋土と堆積状況〕Ⅱ～Ⅲ層土に類似する黒色土を主体とする。埋土には暗灰色粒子（刈屋スコリア）をやや多く含む部分が認められる。流水等によって二次的に流れ込んだものと見られる。底面の凹みは極めて堅く締まった灰色の粘土質シルトで埋まっており、凹みの埋土の上面が溝本体の底面となっているようである。この連続凹部は何らかの掘方などではなく、自然（水成）堆積によって埋没したものと思われる。底面の形態や埋土はRG06によく似ている。

〔重複遺構〕RG02に併走・重複し、これを切っている。

〔遺構の時期〕刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。

〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＧ02溝跡（第189～191図、写真図版144・145）

〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ22ｔ～ＩＡ24ｓグリッドに位置する。北側に下る斜面のⅢ～Ⅵ層上面において、黒褐色土の明瞭な帯状範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は9.6m、幅は60～270cm、底面までの残存深度は70cmである。走行方向はN-23°-Eである。底面には径40cm前後の不整円形の凹みがほぼ等間隔に連続している。

〔埋土と堆積状況〕Ⅱ～Ⅲ層土に類似する黒色土を主体とする。埋土上部には刈屋スコリアと見られる暗灰色スコリア層（２ａ層）とその下位に灰黄色火山灰層（２ｂ層）の堆積が認められる。この下の黒色土層（３層）にも暗灰色スコリアの混入が認められることから、これらは流水等による二次的堆積と考えられる。底面の凹みは極めて堅く締まった灰色の粘土質シルトで埋まっており、凹みの埋土の上面が溝本体の底面となっているようである。この連続凹部は何らかの掘方などではなく、自然（水成）堆積によって埋没したものと思われる。

〔重複遺構〕RG01に併走・重複し、これに切られている。

〔遺構の時期〕刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。

〔出土遺物〕

土器（473）〈第229図、写真図版175〉。

箆状石器（2122）。

ＲＧ03溝跡（第189～191図、写真図版145）

〔位置・検出状況〕北東部、ＩＡ21ｒ～ＩＡ23ｑグリッドに位置する。北側に下る斜面のⅢ層上面において、黒褐色土の不明瞭な帯状範囲として検出された。

〔規模・形状〕検出した全長は10.4m、幅は150cm前後、底面までの残存深度は68cmである。走行方向はN-13°～27°-Eである。

〔埋土と堆積状況〕Ⅱ～Ⅲ層土に類似する黒色土を主体とする。埋土最上部に暗灰色スコリア（刈屋スコリア）を多量に含む土層（B-B'：１層）の堆積が認められる。隣接するRG01・RG02に比して壁

面が壁や底面がはっきりせず、自然の流水による痕跡（雨裂）の可能性がある。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕層位的関係性から、10世紀以降に構築され、刈屋スコリアの降下時（1686年）にはほぼ埋没を終えていたものと考えられる。
〔出土遺物〕
　土器（474 ～ 480）〈第229図、写真図版175〉。
　円盤状土製品（1268）。
　箆状石器（2123）。
　敲磨器類（2704）。

ＲＧ04溝跡（第189・191 ～ 193図、写真図版146）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ１ｔ～ⅡＡ４ｓグリッドに位置する。Ｖａ層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。
〔規模・形状〕検出した全長は15.4m、幅は90 ～ 210㎝、底面までの残存深度は26㎝である。走行方向はN-26°-Eである。東壁に段を持ち、これに対応する堆積層の不整合が観察されることから、２条が重複していると考えられる。
〔埋土と堆積状況〕埋土はⅡ～Ⅲ層土に類似する黒色土を主体とする。断面A-A'の４・５層は底面直上から検出面まで厚く堆積した刈屋スコリアである。断面の様相から降下時に堆積したものと判断される。東側には同位置へ再構築されたと思われる新期の溝跡（２・３層）が併走し、４・５層を切っている。
〔重複遺構〕無し。RG07に併走している。
〔遺構の時期〕新期（２・３層）が刈屋スコリアの降下後、旧期（４・５層）が降下前と考えられる。
〔出土遺物〕
　土器（481）〈第229図、写真図版175〉。

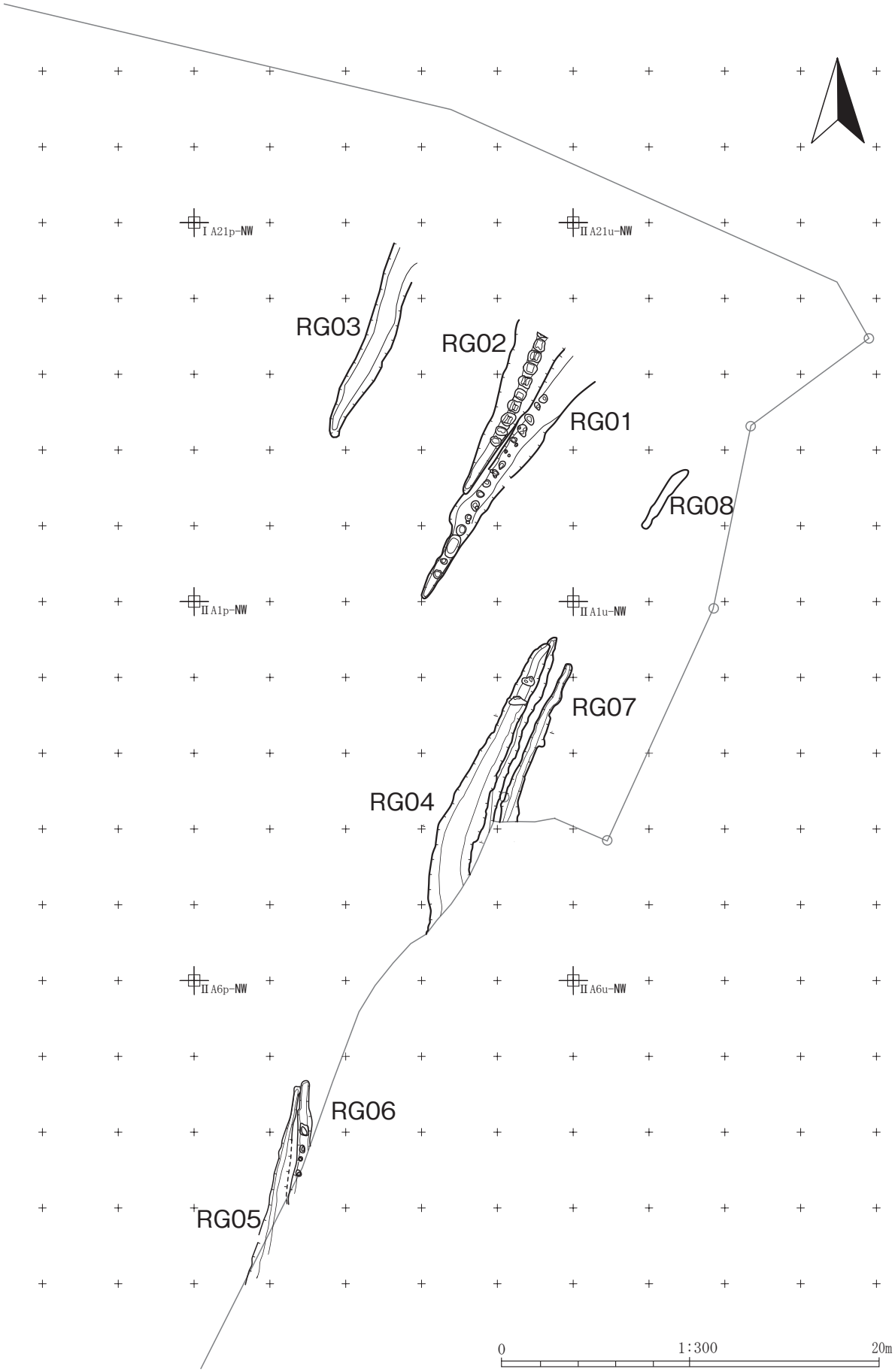
ＲＧ05溝跡（第189・193図、写真図版147）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ７ｑ～ⅡＡ９ｐグリッドに位置する。Ｖａ～Ⅵ層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。
〔規模・形状〕検出した全長は11.4m、幅は25 ～ 110㎝、底面までの残存深度は44㎝である。走行方向はN-12°-Eである。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土を主体とする。上部は下部の埋土のみ残存しているものと思われる。
〔重複遺構〕なし。RG06に併走している。
〔遺構の時期〕類似・関連遺構の年代観から、刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。
〔出土遺物〕
　磨製石斧（2313）

ＲＧ06溝跡（第189・193図、写真図版147）
〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ７ｑ～ⅡＡ８ｑグリッドに位置する。Ｖａ～Ⅵ層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。

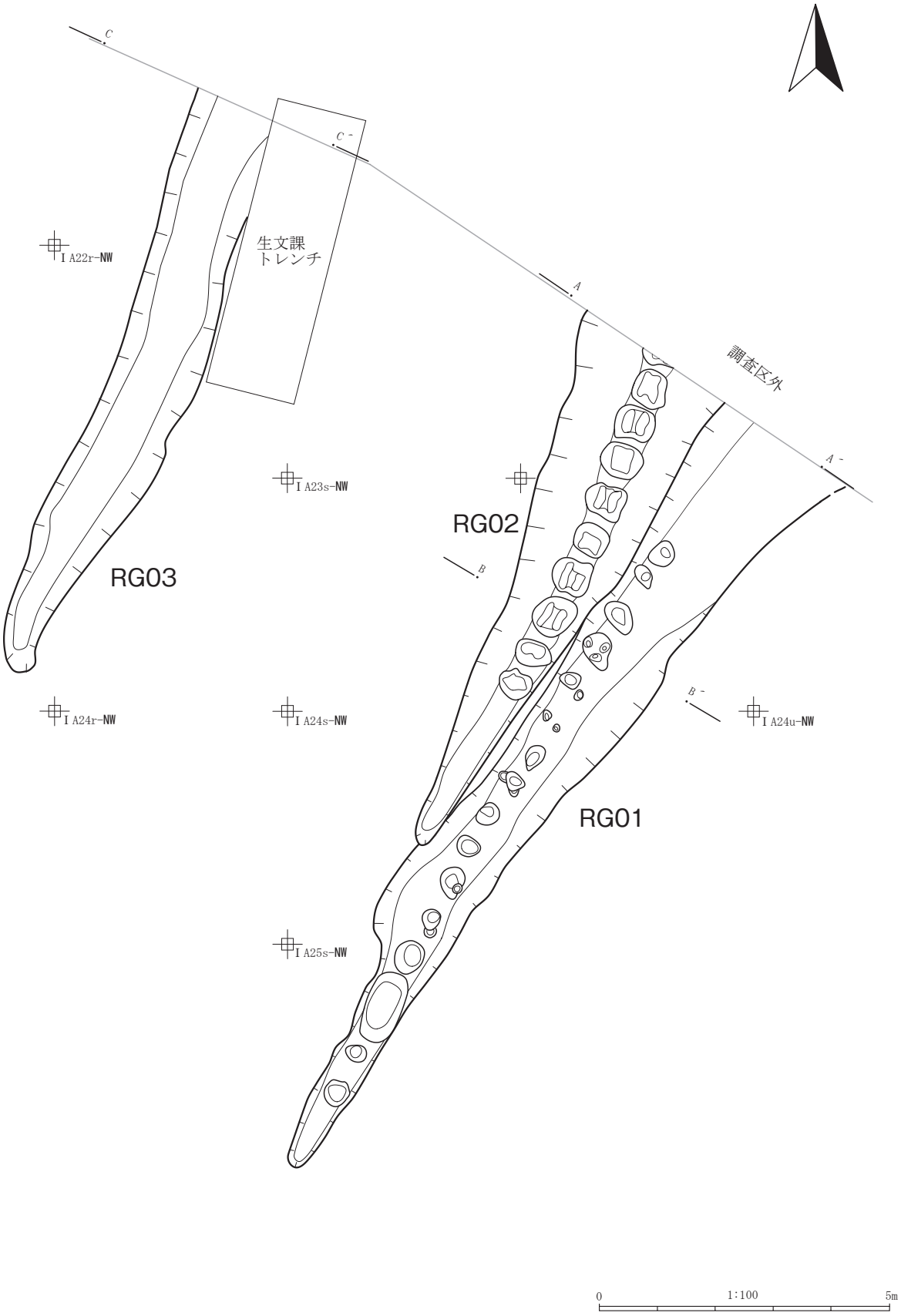
〔規模・形状〕検出した全長は6.9m、幅は45～80cm、底面までの残存深度は14cmである。走行方向はN-２°－Eである。底面には径30～40cmの不整円形な浅い凹みが連続している。
〔埋土と堆積状況〕上部を削平され埋土の最下部のみ残存しているものと思われる。断面に記録したのは底面の凹みの部分で、極めて堅く締まった灰色の粘土質シルトで埋まっており、RG01の底面に良く似ている。
〔重複遺構〕なし。RG06に併走している。
〔遺構の時期〕類似・関連遺構の年代観から、刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

ＲＧ07溝跡（第189・191・192図、写真図版146）
〔位置・検出状況〕中央東部、ⅡＡ１ｔ～ⅡＡ３ｔグリッドに位置する。Ｖａ層上面において明瞭な帯状の範囲として検出された。
〔規模・形状〕検出した全長は9.1m、幅は35～95cm、底面までの残存深度は22cmである。走行方向はN-23°-Eである。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土を主体とする。上部は下部の埋土のみ残存しているものと思われる。
〔重複遺構〕無し。RG04に併走している。
〔遺構の時期〕類似・関連遺構の年代観から、刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。

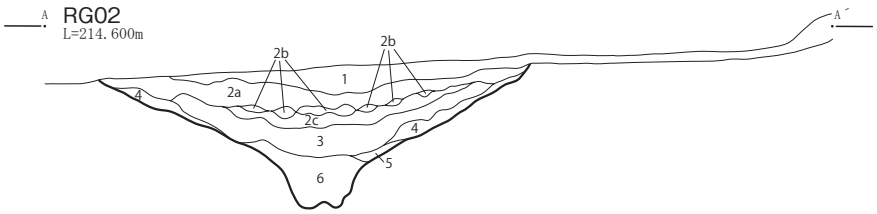
ＲＧ08溝跡（第189・192図）
〔位置・検出状況〕東端部、ＩＡ24ｖ～ＩＡ25ｕグリッドに位置する。Ⅵ層上面において不連続で不明瞭な帯状範囲として検出された。
〔規模・形状〕検出した全長は3.8m、幅は50cm、残存震度は５cm弱である。走行方向はN-36°-Eである。溝跡の最低部が痕跡的に残存したものとみられる。下端を把握できなかったため、範囲のみ図示した。
〔埋土と堆積状況〕Ｖａ層類似の黒褐色土を主体とする。上部は下部の埋土のみ残存しているものと思われる。
〔重複遺構〕なし。
〔遺構の時期〕類似・関連遺構の年代観から、刈屋スコリア降下（1686年）前後を想定したい。
〔出土遺物〕掲載可能な遺物は出土しなかった。



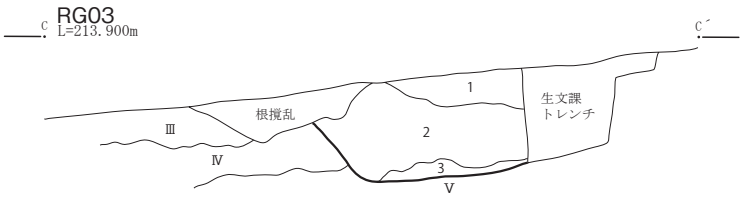
第189図　RG溝跡全体図（RG01 ～ 08）



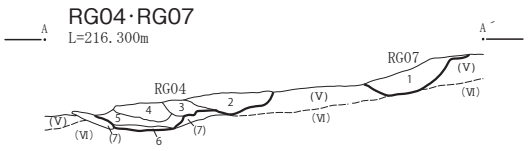
第190図　RG01 ～ 03平面



RG02
１．10YR3/2 黒褐色．砂質シルト．粘性無し．しまりやや密．にぶい黄褐色土塊 5%混入.
2a．7.5YR3/1 黒褐色．火山灰．粘性無し．しまり疎．黒褐色土 (7.5YR3/2)50%混入 (スコリア).
2b．2.5Y4/2 暗灰黄色．火山灰．粘性無し．しまり疎．粉状のテフラが塊状で散在している.
2c．10YR2/1 黒色．火山灰．粘性無し．しまり疎．φ2-3 ㎜のスコリアで削るとシャリシャリしている.
３．10YR1.7/1 黒色．砂質シルト．粘性無し．しまりやや密．黄褐色土塊 5%混入．(2c ほどではないがシャリシャリしている)
４．10YR3.5/3 暗褐色 - にぶい黄褐色．シルト．粘性無し．しまり疎．黄褐色土塊 10%，黒褐色土塊 5%混入.
５．10YR4/6 褐色．粘土質シルト．粘性やや有り．しまりやや密．暗褐色土でよごれている.
６．10YR3/1.5 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり密．黄褐色土塊 5%，酸化鉄塊 3%混入．(基本層序には見られないやや灰色の土層)

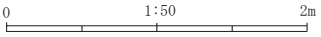


RG03
１．10YR2/2 黒褐色．火山灰．粘性無し．しまり疎．φ2-3 ㎜のスコリア層．10YR3/2 黒褐色火山灰塊 (粉状)20%混入.
２．7.5YR2/1 黒色．シルト．粘性無し．しまりやや密．にぶい黄褐色土塊 3%，φ3-5 ㎜の黄橙軽石 1%，φ1 ㎜の橙軽石 3%混入．上部の一部には植物の影響を受けてモソモソしている部分がみられる.
３．10YR2/2 黒褐色．シルト．2 層よりは粘性有るがほとんど無い．しまりやや密．にぶい黄褐色土塊 7%，φ2-3 ㎜の橙軽石 1%混入.

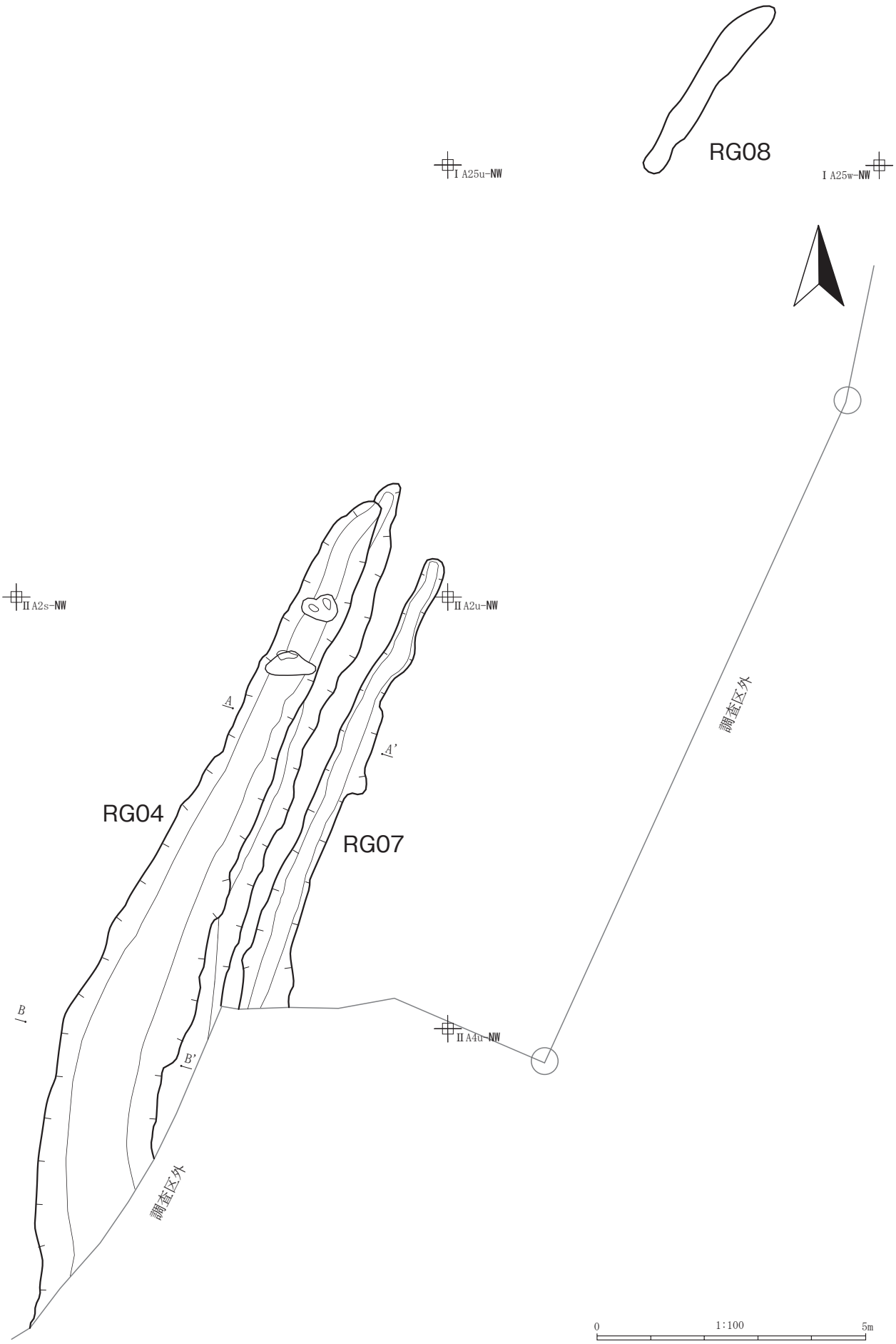


RG04・RG07
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有．締まり密．上部に橙色粒子微量含む．全体にⅤb 層類似の褐色土ブロック含む.
２．10YR3/2-2/3 黒褐色．シルト．刈屋スコリア（暗灰色スコリア）やや多．５層に似た粗粒のものが主体．締まりやや密.
３．10YR3/2 黒褐色．シルト．刈屋スコリアやや多．4 層に似た細粒のものが主体．やや黄味帯びる．締まりやや密．４・５層の崩落土？
４．10YR4/2-3/3 灰黄褐 - 暗褐色．刈屋スコリア (細粒) の層．締まり密．ガッチリと固結全体に黄味.
５．10YR2/1 黒色．刈屋スコリア（粗粒）の層．乾きやすく 10YR4/1 褐灰色となる．固結しているが、ザラザラと容易に崩れる.
６．10YR2/2 黒褐色．シルト．底面直上のガリガリの硬化部.
(7)．10YR2/2 黒褐色．シルト．６層に似るが硬化していない．溝の側縁にのみみられる.

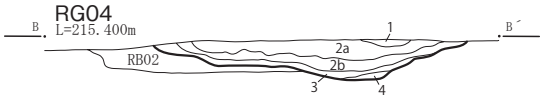
※１:RG07 埋土．２～７：RG04 埋土．RG04 は、他の溝跡（浪板状遺構）によく似るが、底面の凹凸がみられない.
RG07 は当初現道の轍かと思ったが、RG04 に平行しており、同種の遺構の可能性有.



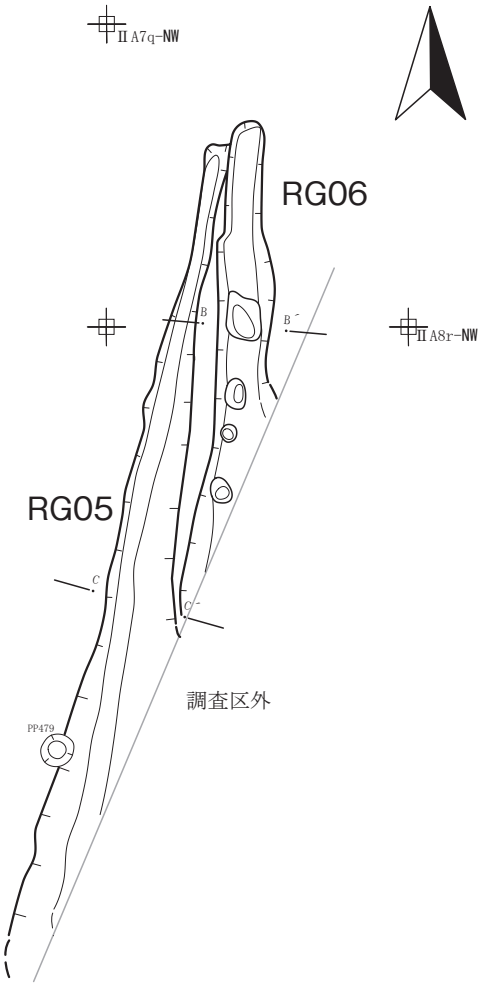
第191図　RG02 ～ 04・07断面

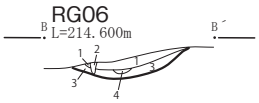


第192図　RG04・07・08平面

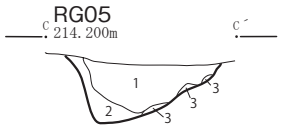


RG04
１．10YR2/1 黒色．シルト．粘性無し．しまり疎．φ2-3 ㎜の黒色スコリア 20%混入．
2a．10YR3/2 黒褐色．火山灰．粘性無し．しまり疎．粉状のテフラがラミナ状に堆積している（水成堆積か）．一部では褐灰色を呈す．
2b．10YR2/1 黒色．火山灰．粘性無し．しまり疎．黒褐色（10YR2/3）土塊 10%混入．φ2-3 ㎜のスコリアで乾燥すると褐灰色を呈す．
３．10YR2.5/3 黒褐色 - 暗褐色．シルト．粘性無し．しまりやや密．橙色軽石 1%混入．
４．10YR4/6 褐色．シルト．粘性無し．しまり密．焼土粒 1%，明黄褐色軽石 1%混入．最下部に黒褐色土が薄く層状に堆積している．





RG06
１．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性無し．しまり強．ガチガチにかたい．黄褐色土粒をまばらに含む．
２．10YR2/3 黒褐色．シルト．粘性やや有り．しまり無し．木根痕．
３．10YR4/4 褐色．粘土質シルト．粘性やや有り．しまり有り．かたくしまる．
４．10YR3/2 黒褐色．シルト．粘性無し．しまり有り．１層よりも黒味ぬける．



RG05
１．7.5YR3/2 黒褐色．シルト．粘性無し．しまりやや密．黒褐色（10YR2/2）土塊 5%，黒色（7.5YR2/1）土塊 3%，褐色（10YR4/6）土塊 2%，φ1-2 ㎜の橙色軽石 1%混入．
２．10YR3/3 暗褐色．シルト．粘性やや有り．しまり疎．褐色（10YR4/6）土小塊 30%，黒色（10YR2/1）小塊 5%混入．
３．7.5YR5/6 明褐色．ローム．粘性やや有り．しまり疎．モソモソしている．壁崩落土層．

平面：0　1:100　5m　　断面：0　1:50　2m

第193図　RG04（断面）・05・06

（7） その他の遺構

ＲＺ13立石（第188図、写真図版143）

〔位置・検出状況〕南東部、ⅡＡ８ｍグリッドに位置する。住居跡RA40の検出面において、この埋土を上方から切って立ち上がる礫として検出された。

〔規模・形状〕柱穴状ピットの上部に棒状（長楕円形）の礫を立てて据えたものである。ピットの開口部径は25cm前後、残存深度は35cmである。礫の大きさは長さ30cm・太さ12cmほどである。

〔埋土と堆積状況〕ピットの内部にはＶａ層土と見られる黒褐色土が堆積している。礫はこの埋土上部に下半部を埋められ、直立するように据えられている。礫の基底部がピット底面から大きく浮いている状況から、礫の設置を目的にピットが掘削されたのではなく、半埋没状態のピットに礫が据えられたように思われる。このような礫の設置状況は、住居跡RA86に伴う溝状掘り込みの埋土最上部に据えられた礫とよく似ている。

〔重複遺構〕RA40を切っている。

〔遺構の時期〕埋土の様相等から、縄文時代後期初頭～前葉を想定したい。

〔出土遺物〕

自然礫（2838）